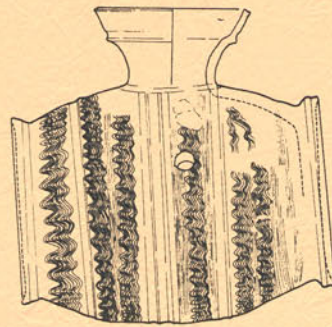


近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 7 分 冊 ——

落 合 古 墳 群



1992・12

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

————— 第 7 分 冊 —————



3号墳埋葬施設近景（南から）



落合古墳群出土遺物

序

近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内にかかる遺跡の現地発掘調査は昭和63年度後半期から開始し、平成3年度内に終了いたしました。近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）の道路建設は、平成5年に予定されている伊勢神宮の式年遷宮、翌年の世界祝祭博覧会などを契機とした伊勢・志摩地方の経済と観光の基幹として実施されたものです。第9次区間で発掘調査の対象となったのは、伊勢市・多気郡多気町・度会郡玉城町の1市2町に所在する30遺跡であります。

調査後やむなく破壊された多くの遺跡について、わたくしどもに課せられた重要な責務のひとつは、その膨大な記録を整理し、報告書という目に見える形で一日でも早く世に公開することであると考えます。

近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）にかかる遺跡の発掘調査報告書は第1分冊から第8分冊までの計8冊に分けて刊行する計画をたて、平成3年度に現地調査と並行して本格的な整理・報告書作成業務を開始いたしました。そして、既に第1分冊から第5分冊までの計5冊の報告書を刊行しております。

今回は第7分冊ということで、平成2年度に発掘調査を実施しました落合古墳群の報告をいたします。この報告書が地域の歴史と文化に対する理解の深まりの一助となるとともに、古墳時代の研究の進展に役立つことを期待しております。

なお、調査に際しましては、日本道路公団、県土木部近畿道対策室、伊勢市・多気町・玉城町の各関係機関はもとより三重県土地開発公社及び地元の多くの方々にご多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からのお礼を申し上げます。

平成4（1992）年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

例 言

1. 本書は、平成4年度に三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第6～8分冊）のうち、落合古墳群（第7分冊）の報告書である。

2. 当古墳群は伊勢市津村町字口山田に所在し、平成2年2月に試掘調査を、同年5月から9月に本調査を実施した。調査にかかる費用は日本道路公団の全額負担による。

3. 調査は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

[平成2年度]

次長兼調査第2課長 山 澤 義 貴 主査 新 田 洋

第1係

主事 河 北 秀 実 主事 増 田 安 生

主事 齋 藤 直 樹 主事 伊 藤 裕 偉

技師 大 川 勝 宏

主事 角 谷 泰 弘（伊勢市教育委員会より派遣）

主事 稲 本 賢 治（多気町教育委員会より派遣）

主事 前 川 嘉 宏（玉城町教育委員会より派遣）

臨時調査員 川 崎 正 幸

調査補助員 森 田 幸 伸（皇學館大学学生）

調査補助員 近 藤 大 典（皇學館大学学生）

（室内整理員）

反 町 瑩 子 谷久保 美知代 采 野 妙 子 吉 村 道 子

白 石 みよ子 山 分 孝 子 乾 ひとみ 上 村 かおり

竹 内 由 美 反 町 有 子 中 山 学

[平成4年度]

調査第2課長 新 田 洋

第1係

主事 齋 藤 直 樹

主事 小 谷 定 男（伊勢市教育委員会より派遣）

主事 前 川 嘉 宏（玉城町教育委員会より派遣）

4. 現地調査については、試掘調査を角谷泰弘・前川嘉宏が、本調査を伊藤裕偉が担当した。

5. 本書作成にあたっては、川西宏幸（古代学研究所）、西山要一（奈良大学）、植野浩三（奈良大学）、藤原学（吹田市教育委員会）、田中晋作（池田市教育委員会）、一瀬和夫（大阪府教育委員会）、伊藤雅文（石川県埋蔵文化財センター）、岩中淳之（伊勢市教育委員会）、小玉道明（県学事文書課）、竹内英昭（上野市教育委員会）

の各氏をはじめ、多くの方々の助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。〈順不同・敬称略〉

6. 本書の執筆者は目次に示した。三辻利一（奈良教育大学）、広瀬和久・原正之（三重県農業技術センター）の各氏には科学分析結果の報文をいただいた。また、石器の報告に関しては久保勝正氏（斎宮歴史博物館）にお願いした。本書に掲載した遺構写真は伊藤が、遺物写真は江尻健・伊藤がそれぞれ撮影した。挿図の作成および全体の編集は伊藤が担当した。
7. 本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
8. 当古墳群の位置は国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。真北は座標北のN 0° 21′ W、磁北は座標北のN 6° 41′ Wである。
9. 本書では、用語を次のように統一した。
 - どこう……………用語としては「土壙」「土坑」「土坑」がある。墓と認識できるものについては「土壙墓」や「墓壙」を用い、それ以外のものないしは墓と確定・推定できないものは「土坑」とした。
 - つ き……………用語としては「坏」「杯」がある。須恵器および土師器が多く、文字の意味を鑑みて「高坏」「坏身」などの表現を用いた。
 - わ ん……………用語としては「埴」「碗」「椀」があるが、「椀」を用いている。
10. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I. 前 言	1
1. 近畿自動車道第9次区間の調査経過	(新田) 1
2. 落合古墳群の調査経過と調査方法	(伊藤) 1
II. 位置と環境	(伊藤) 7
III. 調査の成果—遺構と出土遺物	(伊藤) 14
1. 1号墳の調査	14
2. 1号墳下部遺構の調査	18
3. 2号墳の調査	22
4. 3号墳の調査	27
5. 4号墳の調査	35
6. 5号墳の調査	38
7. 6号墳の調査	44
8. 7号墳の調査	44
9. 8号墳の調査	47
10. 9号墳の調査	49
11. 10号墳の調査	51
12. その他の埋葬施設の調査	56
13. 出土土器の観察	59
IV. 縄文時代の遺物	(伊藤・久保) 61
V. 調査試料の科学分析	(三辻) 62
1. 落合古墳群他出土須恵器の胎土分析	62
2. 落合古墳群における遺構内土壌のリン・カルシウム分析	(原) 64
VI. 調査のまとめと検討	(伊藤) 67
1. 出土遺物に関する若干の検討	67
2. 落合古墳群の展開と初期群集墳	71

図 版 目 次

P L . 1	調査前風景	P L . 23	8・9・10号墳
P L . 2	調査後風景	P L . 24	9号墳 埋葬施設
P L . 3	1号墳 墳丘・周溝	P L . 25	10号墳 墳丘・埋葬施設 1
P L . 4	1号墳 埋葬施設	P L . 26	10号墳 埋葬施設 1
P L . 5	1号墳下部遺構(1)	P L . 27	10号墳 埋葬施設 2・3
P L . 6	1号墳下部遺構(2)	P L . 28	石組墓 3・土器棺墓
P L . 7	2号墳 墳丘	P L . 29	石組墓 1・2
P L . 8	2号墳 埋葬施設	P L . 30	1号墳出土土器および1・2・8号墳出土鉄器
P L . 9	3号墳 墳丘	P L . 31	1号墳下部および2号墳出土土器
P L . 10	3号墳 周溝他	P L . 32	2号墳出土土器・鉄鏃
P L . 11	3号墳 埋葬施設(1)	P L . 33	3号墳出土土器
P L . 12	3号墳 埋葬施設(2)	P L . 34	3号墳出土玉類および2・3号墳出土鉄器
P L . 13	3号墳 埋葬施設(3)	P L . 35	3号墳出土鉄鏃
P L . 14	3号墳 埋葬施設(4)	P L . 36	4・5号墳出土土器および5・8・10号墳出土鉄器
P L . 15	3号墳 埋葬施設(5)	P L . 37	5号墳出土鉄鏃
P L . 16	4号墳 墳丘	P L . 38	5号墳出土鉄器・土器
P L . 17	4号墳 周溝・埋葬施設	P L . 39	7～10号墳出土土器および10号墳出土玉類
P L . 18	5号墳 墳丘・埋葬施設	P L . 40	10号墳埋葬施設 1 出土鉄鏃
P L . 19	5号墳 埋葬施設 1	P L . 41	10号墳埋葬施設 1 出土鉄鏃他
P L . 20	6号墳	P L . 42	10号墳埋葬施設 3 出土鉄鏃
P L . 21	7号墳		
P L . 22	8号墳		

挿 図 目 次

fig. 1	近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢） 内調査遺跡位置図	fig. 10	1号墳埋葬施設平面・断面・立面図
fig. 2	調査区内小地区割り図	fig. 11	1号墳埋葬施設関連出土遺物
fig. 3	遺跡位置図	fig. 12	1号墳下部遺構および周辺平面図
fig. 4	落合古墳群周辺地形図	fig. 13	土壙墓 1 平面・断面図
fig. 5	調査区周辺地形図	fig. 14	石組墓 4 平面・断面図
fig. 6	調査区周辺調査前地形測量図	fig. 15	1号墳下部遺構他出土土器
fig. 7	調査区全体図	fig. 16	2号墳平面図
fig. 8	1号墳平面図	fig. 17	2号墳墳丘・周溝土層断面および2・4号墳間土層断面図
fig. 9	1号墳墳丘・周溝土層断面および1・3号墳間土層断面図	fig. 18	2号墳埋葬施設平面・立面図
		fig. 19	2号墳下部 土壙・焼土・木炭・土器検

	出状況	fig. 41	7号墳平面図
fig. 20	2号墳出土遺物	fig. 42	7号墳土層断面図
fig. 21	3号墳平面図	fig. 43	7号墳周溝内礫出土状況
fig. 22	3号墳墳丘・周溝土層断面図	fig. 44	7号墳出土土器
fig. 23	3号墳西周溝内樽形甕出土状況	fig. 45	8～10号墳および周辺土坑群平面図
fig. 24	3号墳埋葬施設平面図	fig. 46	8号墳土層断面図
fig. 25	3号墳埋葬施設土層断面図	fig. 47	8号墳埋葬施設平面・立面図
fig. 26	3号墳出土武器・工具その他	fig. 48	9号墳埋葬施設平面・立面図
fig. 27	3号墳出土鉄鏃	fig. 49	8・9号墳出土遺物
fig. 28	3号墳出土玉類	fig. 50	10号墳埋葬施設1～3平面・断面図
fig. 29	3号墳出土土器	fig. 51	10号墳埋葬施設1および周溝出土遺物
fig. 30	4号墳平面図	fig. 52	10号墳埋葬施設1棺外出土鉄鏃
fig. 31	4号墳墳丘・周溝土層断面図	fig. 53	10号墳埋葬施設2・3出土武器類
fig. 32	4号墳西周溝内土器出土状況	fig. 54	石組墓1～3平面・立面・断面図
fig. 33	4号墳埋葬施設他平面・土層断面図	fig. 55	土器棺墓平面・断面図
fig. 34	4号墳出土遺物	fig. 56	土器棺実測図
fig. 35	5・6号墳平面図	fig. 57	出土石器実測図
fig. 36	5号墳埋葬施設平面図	fig. 58	土壌サンプル採集地点概念図
fig. 37	5・6号墳墳丘・周溝断面および5号墳埋葬施設1土層断面図	fig. 59	高猿6号墳出土刀子実測図
fig. 38	5号墳埋葬施設1出土鉄鏃	fig. 60	落合古墳群出土の鉄鏃分類図
fig. 39	5号墳埋葬施設1・2他出土遺物	fig. 61	古墳および無墳丘墓の変遷(1)
fig. 40	6号墳埋葬施設平面・断面図	fig. 62	古墳および無墳丘墓の変遷(2)

表 目 次

tab. 1	近畿自動車道第9次区間(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査計画	度分布	
tab. 2	出土土器観察表(1)	tab. 13	2号墳下部土壙2の分析結果
tab. 3	出土土器観察表(2)	tab. 14	2号墳下部土壙2におけるP・Caの濃度分布
tab. 4	胎土分析値	tab. 15	3号墳埋葬施設の分析結果
tab. 5	産地推定の結果	tab. 16	3号墳埋葬施設におけるP・Caの濃度分布
tab. 6	Rb-Srの分布	tab. 17	4号墳埋葬施設2の分析結果
tab. 7	土壙墓1の分析結果	tab. 18	4号墳埋葬施設2におけるP・Caの濃度分布
tab. 8	土壙墓1におけるP・Caの濃度分布	tab. 19	落合古墳群出土鉄鏃計測表
tab. 9	2号墳埋葬施設の分析結果	tab. 20	落合古墳群他の古墳に伴う遺物一覧
tab. 10	2号墳埋葬施設におけるP・Caの濃度分布	tab. 21	寺沢氏・伊藤氏の副葬品類型
tab. 11	2号墳下部土壙1の分析結果		
tab. 12	2号墳下部土壙1におけるP・Caの濃度分布		

I. 前 言

1. 近畿自動車道第9次区間の調査経過

近畿自動車道関・伊勢線（伊勢自動車道）の第9次区間（勢和～伊勢）の建設区間については、昭和47年に基本計画、同57年に整備計画が、そして同60年2月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出されている。また、翌3月には実施計画認可と路線発表がなされている。

この第9次区間は、第8次区間（久居～勢和）の延長路線として、勢和・多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画である。行政区間としては勢和村・多気町・玉城町・伊勢市をほぼ東西に横断するかたちをとっている。

この路線は、三重県の中・南伊勢地域と近畿および中部経済圏とを結ぶ幹線道路として、一般国道23・42号線の交通緩和とともに伊勢湾岸と内陸部の産業、あるいは伊勢志摩・紀伊への観光ルートとしての大きな使命をもつものといわれている。このうち第8次区間（久居～勢和）については、平成2年12月に供用開始されている。

さて、第9次区間建設にかかる埋蔵文化財の保護、調整協議については、昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県土木部道路建設課と県教育委員会文化課との協議と現地立会い調査というかたちで開始された。また、事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については、県教育委員会文化課が県文化財調査員等の協力のもと昭和53・55・56年度に3回にわたって実施し、昭和56年3月14日付の教文第429号文書で県道路建設課長あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として公文書通知を行っている。

その後については、第8次区間の埋蔵文化財発掘調査の体制作りと諸準備に追われたかたちとなり、昭和59年度末には第8次区間の現地発掘調査を実施するに至った。この第8次区間に現地発掘調査は昭和59年度を皮切りに開始され、昭和63年度前半までの足かけ5年余りの期間が費やされた。

第9次区間の遺跡取扱いについては、昭和61年度になって具体的に浮上し、試掘計画等について日本道路公団と調整・協議するに至った。また、昭和62年度初めには、再度第9次区間建設予定地についての遺跡確認と分布調査を実施した。この段階で公団あてに提示した遺跡は合計26件、面積にして114,200㎡である。

なお、この第9次区間については、その後の新発見遺跡等についての協議を経て、多気町で1件（佐奈水銀鉱山跡）、玉城町で1件（泉貢窯跡）、伊勢市で2件（大谷「古墳」、古市・中之地蔵町遺跡）の合計4件の遺跡が追加された。

以上のような経過を経て、第9次区間の現地における埋蔵文化財発掘調査は、昭和63年度の後半から開始することとなった。

なお、調査の円滑推進にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市建設部近畿自動車道対策室他、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、現地にあたっては各地元自治会をはじめ、多くの方々のご援助・ご協力を得ました。加えて、発掘調査業務については三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末となりましたが、ここに記して厚くお礼申し上げます。

（新田 洋）

2. 落合古墳群の調査経過と調査方法

調査の経過

落合古墳群は近畿自動車道の建設に伴う事前分布調査に際して新たに確認された古墳群である。その

時点では2基の古墳（1・2号墳）が確認され、事業地内確認面積は約1,200㎡であった。

第1次調査（試掘調査）の前の現地確認を平成元



fig. 近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢）内遺跡位置図（1：100,000） ※番号はtab. 1, 2と対応する

番号	遺 跡 名	所 在 地	調査面積 (㎡)		調 査 期 間	担当者	概 要	所収分冊	
1	王子谷遺跡	多気町前村	48	計 192	1989. 2. 6～ 2. 7	小坂 宜広 山崎 恒哉	(試掘) 遺構なし、遺物細片	1	
			144		1990. 1.12～ 1.18	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構なし、遺物細片		
2	桃谷(古墳)	多気町前村 五桂	27	27	1990. 1.18～ 1.22	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
3	ツツジ(古墳)	多気町五桂	20	20	1990. 1.22～ 1.23	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構・遺物なし		
4	牛バサマA遺跡	多気町野中	304	3,304	1989. 1. 9～ 2. 7	山崎 恒哉	(試掘)		
			3,000		1989.11.17～1990. 1.11	山崎 恒哉	縄文時代以降の土器出土		
5	牛バサマB遺跡	多気町野中	336	5,836	1988.12.12～1989. 1.19	山崎 恒哉	(試掘)		
			5,500		1989. 5.22～ 8. 8	江尻 健	鎌倉時代の掘立柱建物検出		
6	ヒジャロ遺跡	玉城町原	288	288	1988.11.28～12. 1	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
7	のせんじ遺跡	玉城町積良	96	96	1988.12. 2～12. 7	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		2
8	浦ノ内遺跡	玉城町積良	192	2,692	1989. 2.22～ 3. 3	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)		
			2,500		1990. 2. 8～ 3.22	江尻 健	縄文時代以降の土器出土		
9	上ノ垣内遺跡	玉城町山神	208	208	1988.12.20～12.26	小坂 宜広 野田 修久	(試掘) 遺構なし、遺物少量		
10	山神城跡西老谷地区 (富ヶ城跡)	玉城町山神	286	2,466	1990. 5.15～ 6. 1	稲本 賢治	(試掘)		
			2,180		1990. 7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切・墓など検出		
11	山神城跡ベト谷地区 (山神東城跡)	玉城町山神	441	4,363	1990. 5.15～ 6. 1	稲本 賢治	(試掘)		
			3,922		1990. 7.20～12.27	稲本 賢治 大川 勝宏	中世の堀切・墓など検出		
12	里山(古墳)	玉城町山神	30	30	1990. 2.13～ 2.14	江尻 健	(試掘) 遺構・遺物なし		
13	楠ノ木遺跡	玉城町勝田	2,032	8,922	1990. 5.16～ 6. 5	田村 陽一	(試掘)	3	
			6,890		1990. 6.29～11.17	伊藤 裕偉	平安時代末～室町時代後半の屋敷地や墓地を検出		
14	矢倉戸前(古墳)	玉城町宮古	20	20	1989. 9. 1～ 9. 6	伊藤 裕偉	遺構・遺物なし(試掘)	1	
15	蚊山遺跡左郡地区 (蚊山遺跡)	玉城町岩出	587	12,087	1989. 1. 6～ 2. 7	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	6	
			11,500		1989. 5.16～1990. 3.20	小坂 宜広 稲本 賢治 角谷 泰弘 前川 嘉宏	古墳の周溝、中世の掘立柱建物・墓など多数検出		
16	蚊山遺跡所り垣地区 (宮地遺跡)	玉城町岩出	144	3,344	1989. 1.26 ～ 2. 2	小坂 宜広 野田 修久	(試掘)	4	
			3,200		1989. 5.22～ 9.21	山崎 恒哉 稲本 賢治	平安時代末の墓、鎌倉時代の掘立柱建物など検出		

tab. 1 発掘調査遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間	担当者	概要	所収分冊
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	400	2,500	1989. 9.18~10. 3	田村 陽一	(試掘)	5
			2,100		1989.11.13~12.23	前川 嘉宏	平安時代末葉の掘立柱建物検出	
18	寺原B遺跡	伊勢市佐八町	224	724	1989. 8.18~10. 3	田村 陽一	(試掘)	5
			500		1989.11.14~1990. 1.14	角谷 泰弘	鎌倉時代前半の掘立柱建物検出	
19	ハノカ遺跡	伊勢市津村町	208	3,739	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘	(試掘)	5
			147		1990. 5.31~ 6.11	前川 嘉宏	(試掘)	
	2,100	1990. 5.31~ 8. 1	角谷 泰弘		縄文時代・鎌倉時代の土器出土			
	584	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘		(試掘)			
口山田遺跡	伊勢市津村町 佐八町	700	1990. 5.31~ 8. 1	角谷 泰弘	集石遺構検出			
20	落合古墳群	伊勢市津村町	151	3,316	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘	(試掘)	7
			3,165		1990. 5.11~ 9.21	前川 嘉宏	4世紀末頃~6世紀前葉の群集墳	
21	井戸谷遺跡	伊勢市前山町	336	336	1990. 3.14~ 3.27	角谷 泰弘 前川 嘉宏	(試掘) 明確な遺構なし	8
22	河原谷遺跡	伊勢市前山町	100	100	1990.10.11~10.17	角谷 泰弘 川崎 正幸	遺物少量出土	
23	亀谷郡C遺跡 (世義寺跡)	伊勢市前山町	312	2,507	1990. 2.14~ 3.27	角谷 泰弘	(試掘)	8
			2,195		1990. 5. 7~ 7. 9	前川 嘉宏 斎藤 直樹 前川 嘉宏	経文が記された陶経筒片出土	
24	中起遺跡	伊勢市勢田町	257	257	1990.10.16~10.23	伊藤 裕偉	(試掘) 遺構なし	8
25	蝮尾遺跡	伊勢市久世戸町	32	32	1991. 8.19	河瀬 信幸	(試掘) 遺構・遺物なし	
26	奥遺跡	伊勢市桶部町	494	494	1990.10.23~11. 1 1991. 1.14~ 1.16	斎藤 直樹	(試掘) 遺構なし、遺物少量	
27	泉貢窯跡	玉城町積良	330	2,886	1989. 5.22~ 5.31	伊藤 裕偉	(試掘)	2
			2,556		1990. 8.28~11.20	前川 嘉宏 川崎 正幸	10世紀前半頃の須恵器窯1基検出	
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村	400	400	1990. 1.16~ 3.30	田村 陽一	2基の採掘坑口周辺を調査	1
29	大谷(古墳)	伊勢市佐八町	120	120	1990. 7. 2~ 7. 7	前川 嘉宏	(試掘) 遺構・遺物なし	8
30	古市・中之地藏町遺跡	伊勢市中之町 桜木町	127	2,287	1990.10.22~11. 5	角谷 泰弘	(試掘)	
			850		1991. 6.22~ 8.31	角谷 泰弘 河北 秀実 稲本 賢治	近世以降の町並みの遺構を検出	
			420		1991. 8.20~ 9.16	前川 嘉宏 角谷 泰弘		
			220		1991.11.18~12. 8	角谷 泰弘		
670	1992. 1.10~ 3.31	河北 秀実						

tab. 2 発掘調査遺跡一覧(2)

年初冬に行ったところ、既に知られていた2基の古墳以外に3基の墳丘状高まりを確認した(3～5号墳)。このため、現在肉眼で確認できる古墳以外にもさらにいくつかの古墳が存在している可能性を考える必要が生じたのである。

このことをもとに、1990年3月に主事角谷泰弘・主事前川嘉宏を担当者として第1次調査を行った。調査は既に確認できる古墳を避け、事業地の幅杭沿いにトレンチを設定して行った。この結果、古墳群を中心とした約3,600㎡が第2次調査(本調査)の必要対象域となった。

第2次調査は主事伊藤裕偉を担当者とし、1991年5月11日から同年9月21日にかけて行った。最終調査面積は約3,165㎡であった。

当古墳群は肉眼で確認されていた1～5号墳を中心とした区域については墳丘を保護する意味で全て人力掘削を行った。その周囲については遺構の破壊を行わない程度の掘削をバックフォーにて行った。したがって、7～10号墳はその存在をバックフォーの掘削によって確認することとなり、若干悔いが残ることとなった。

調査にあたっては、三重県土地開発公社、工事受託の(株)森組、度会町上久具・棚橋地区の方々、および地元津村・佐八地区の方々に多大なご援助とご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

調査の方法

調査区は近畿自動車道本線部分についてのみであ

る。調査区内の小地区割りは道路センター杭のSTA 617+00とSTA617+80を結んだラインを基準軸(gライン)とした。そしてSTA617+00の点をg20とし、南北方向にアルファベットを、東西方向に数字を設定した(fig. 2参照)。このメッシュが交差する4m×4mを1小地区とし、北西隅のポイント名を与えている。したがって、調査区内の遺構および遺物の取上げは、この小地区名を基準としている。

なお、この小地区割りは、座標軸とは全く関係がないので注意されたい。

遺構の名称および実測方法について

遺構名は、分布調査段階で確認されていた1・2号墳、試掘調査段階で確認した3～5号墳以外は、調査の進展に伴って与えたものである。土壇墓・石組墓の類もそうである。遺構名は、調査段階で用いていたものを基本的に踏襲している。

埋葬施設は、1/10で実測をしている。また、調査前後の墳丘は平板を用いて1/100で測量した。なお、埋葬施設に石を伴っていたもの(3・5・6号墳および石組墓)は、主な石を部分的にサンプリングしているが、今回は分析を行わなかった。

整理方法について

近畿自動車道9次区間内にある遺跡の通し番号では、落合古墳群は「20」である。遺構に関連した実測図面は20-0001～20-0064までが存在する。これらの図面はA2版のファイルに収納し、図面番号・

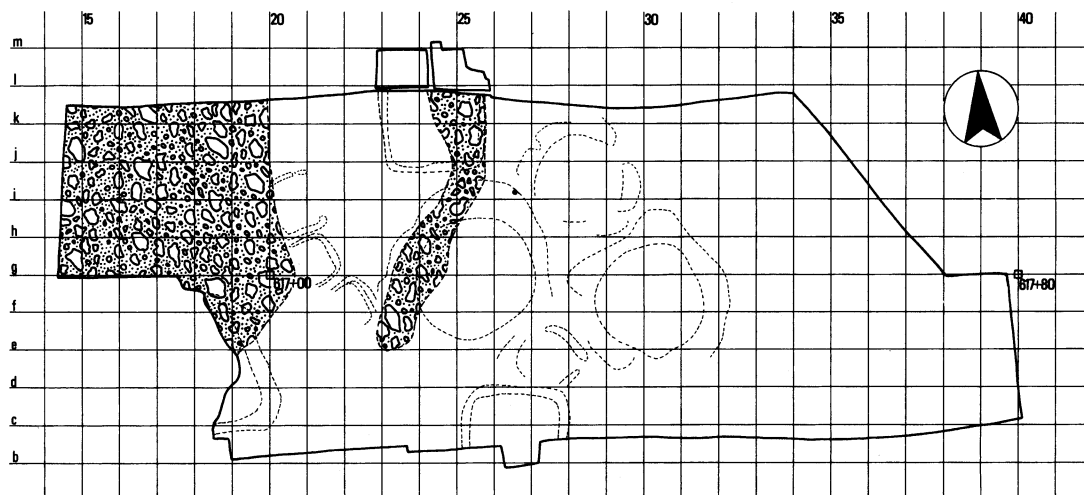


fig. 2 調査区内小地区割り図 (scale=1:800) ※トーンは礫層基盤部分

内容・縮尺を記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺物は遺構の登録とは異なり、各古墳毎の通し番号としている。登録はそれぞれの番号の頭に「20」を付け、1号墳の20番目の遺物の場合、「20-1-20」としている。遺構図と同様、これらの図面はA2版のファイルに収納し、番号・種類・名称・出土地などを記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺構写真はスライド・モノクロを撮影した。遺物写真は6×7のモノクロを用いた。遺構写真のスライドは地区・遺構・方向を記入した台帳を作成している。

調査日誌抄

5月11日 調査前地形測量の開始（～16日）
5月15日 調査前の写真撮影をリフト車にて行う。
5月21日 発掘調査の開始。墳丘土層図作成地点を設定し、1号墳西斜面から行う。
5月22日 1号墳裾から波状文のある須恵器出土。
5月24日 調査区西側の斜面部の表土を重機にて掘削する。
5月31日 1号墳の埋葬施設は確認しにくい。墳頂部よりさらに10cmほど下げて観察を行う。
6月1日 1号墳北側周溝埋土の上層から山茶碗出土する。関連遺構なし。
6月4日 3号墳周溝を確認。
6月5日 3号墳南側周溝埋土から鉄鉾出土。
6月7日 3号墳は方墳と確定。
6月8日 1号墳埋葬施設上あたりから丸底壺出土。
4号墳西側周溝内から土師器壺出土。
6月11日 3号墳からTK216型式かと思われる須恵器甕出土。
6月14日 3号墳の埋葬施設確認。
6月18日 3号墳周溝内から樽形甕出土。
6月20日 3号墳の測量と土層図作成。
6月21日 ようやく1号墳の埋葬施設を確認した。
6月22日 4号墳の墳丘裾部の調査。
6月27日 4号墳の周溝はところどころが途切れることが判明。
7月2日 3号墳の埋葬施設掘形は明瞭な長方形を

呈するものであることが判明。

7月5日 3号墳の木棺痕跡を検出。4号墳周溝から須恵器坏出土
7月9日 3号墳木棺外掘形内から鉄剣出土。
7月10日 3号墳木棺内から鉄刀出土。2号墳の周溝から須恵器片多く出土。
7月17日 3号墳埋葬施設の礫を検出。4号墳の墳丘測量。6号墳の存在を確認。礫床状のものがある。
7月20日 2号墳周溝の掘削。
7月23日 3号墳埋葬施設内から鉄剣2本・刀子2本出土する。
7月25日 1号墳西で鋤先を出土。後に10号墳周溝であることを確認。
7月26日 3号墳拡張区の調査。周溝の北辺を確認した。
7月27日 5号墳周溝内から須恵器壺片出土。
7月30日 1号墳盛土内からチャート片や土器片出土。2号墳の墳丘測量。土器棺および石組墓3検出。8・9号墳の存在を確認。
7月31日 3号墳埋葬施設の遺物取上げ。鉄剣のうち1本は蛇行剣であることが判明。
8月1日 7号墳を確認する。周溝内から二重口縁壺出土。
8月3日 3号墳埋葬施設のフルイがけをし、白玉4個みつけるものの不注意で1個失う。5号墳の主体部検出。
8月6日 5号墳の埋葬施設は2基並列しているものかと思われた。10号墳埋葬施設内棺外から鉄鎌がまとまって出土。
8月7日 5号墳の木棺痕跡確認。
8月8日 5号墳埋葬施設から鉄剣・鉄鎌出土。2号墳の埋葬施設は未だ判明しない。10号墳埋葬施設から白玉10数個出土。
8月10日 1号墳の墳丘掘削中、北側に埋葬施設らしきものを確認（土壙墓1）。4号墳埋葬施設から刀子出土。
8月16日 記者発表。各報道機関多数現地に来る。
8月18日 現地説明会。約150人の参加があった。
8月20日 3号墳掘形部分の掘削。東側から鉄鎌群出土する。1号墳下部から石組墓4を検

出し、調査する。

8月21日 5号墳拡張区の調査。埋葬施設は判然としないが、鉄刀と鉄鎌が出土した。

8月23日 2号墳の埋葬施設を確認。

8月28日 リフト車にて調査区全景を撮影。

8月29日 5号墳掘形内棺外から鉄鎌3本出土。

8月30日 3号墳墳丘の掘削。

8月31日 8号墳の埋葬施設に設定した土層図作成用のアゼ内から鉄剣が出土。皆、啞然とする。

9月3日 10号墳埋葬施設の調査。棺内北側から勾玉出土。1号墳下部からピット検出。

9月4日 2号墳の盛土下に須恵器甕片が散乱している状況と焼土・炭があることを確認。

9月6日 7～10号墳の墳丘測量。

9月11日 10号墳埋葬施設は3基ほど重なっていることが判明した。

9月21日 大型台風一過で、立木がかなり倒れており、そのいくつかは調査区内に倒れこんでいる。無残な状況である。なぜかプレハブは無事であった。10号墳の遺物取上げ。本日に現場作業は終了した。

9月22日 7号墳南の調査区外の補足測量を行う。

II. 位置と環境

1. 地理・地質的環境

落合古墳群は、行政的には伊勢市津村町字口山田に所在する。位置としては伊勢市佐八町との境界付近である。巨視的に地形をみると、宮川右岸に形成された丘陵（前山を含む）が、川口断層（豊受大神宮（外宮）から津村町へと至る）によって分断された小丘陵にあたる⁽¹⁾。落合古墳群から宮川までは直線距離でわずか900mであり、川口断層によって形成された谷の入口に相当するといえる。古墳群はこの小丘陵の南斜面に形成されており、津村町方向への眺望はよい。

地質的には、この一帯は大きくは三波川変成帯によって形成された結晶片岩を基盤としているが、古墳群の西には洪積段丘礫層を主体とする地質域がある。このような2者の地質が落合古墳群あたりで交わっているものと考えられ、当調査区は結晶片岩基盤を主体としながら、部分的に礫層が認められた（fig. 2）。

2. 歴史的環境（fig. 4・5）

落合古墳群の周辺を中心に、古墳時代の遺跡の動向を見てみよう⁽²⁾。

当古墳群の北西方向には玉田山古墳⁽³⁾がある。また、中新田遺跡（fig. 4 参照）から円筒埴輪の破片が出土していることから、古墳の存在が想定されている。佐八藤波遺跡からは円墳の残骸が確認されている⁽⁴⁾（藤波古墳群：12）。これらの古墳は全て6世

紀代以降のものと考えられ、それ以前に遡る古墳群の存在は今まで確認されることはなかった。すなわち、落合古墳群の周辺（宮川右岸地域）では、これまで当該時期の顕著な遺跡・古墳群はほとんど確認されていない状況にある。

南勢地域の古墳時代を検討した下村登良男氏は、宮川流域の古墳文化について、「4、5世紀代の前期古墳は1基もない」ことから、「南勢地方でもっとも古墳文化の展開の遅れたところ」とされた⁽⁵⁾。現在でも宮川流域では、前方後円墳はおろか50mを越えるような円墳ないしは方墳も確認されていない。したがって、「大形古墳」の動向という点では、下村氏の指摘は現在もなお一定の有効性を持つといえる。

しかし、群集墳の動向という観点に立つと、落合古墳群の事例も含めて近年かなりの変化が窺える。前川嘉宏氏らの精力的な踏査によって、宮川左岸の玉城町内では矢塚古墳群⁽¹⁾や朝久田古墳群など、比較的古相の群集墳と考えられるものの存在が明らかになりつつある⁽⁶⁾。同じ近畿自動車道に伴う調査によって、5世紀末以降に形成される蚊山古墳群⁽⁶⁾の存在も確認された⁽⁷⁾。また近年伊勢市朝熊町・昼河古墳群が調査され、6世紀前半以降の古墳群の実態が明らかになりつつある⁽⁸⁾。これらの事例からは、宮川流域の古墳文化は決して立ち遅れたものではなく、「大形古墳」のみが欠落するに過ぎないといえる。玉城町小社地区（fig. 4 参照）からは石釧が採集されて

おり、今後当該地域に前期に至る古墳・古墳群が発見される可能性は極めて高いとせねばならない。下村氏の業績を有効に受け継いだ新たな検討を行う時期に来たといえよう。

3. 落合古墳群の構成

近畿自動車道は落合古墳群の中央を縦断して施工された。そのため、当調査によって落合古墳群に関したかなり多くの情報を得ることとなった。しかし、当調査区に落合古墳群を構成する全ての古墳がある

のではない。

調査とはほぼ併行して実施した調査前の地形測量によって、5号墳の南西方向・標高約30mのあたりに若干の高まりを観察することができた (fig. 6)。また、そのたかまりと5号墳との間にも古墳の存在が想定できる。しかし、3号墳を頂点として北西方向に派生する丘陵上には、古墳らしいものは確認することができなかった。また、調査区の東方にある標高約52mの丘陵頂部にも古墳の存在はなかった。

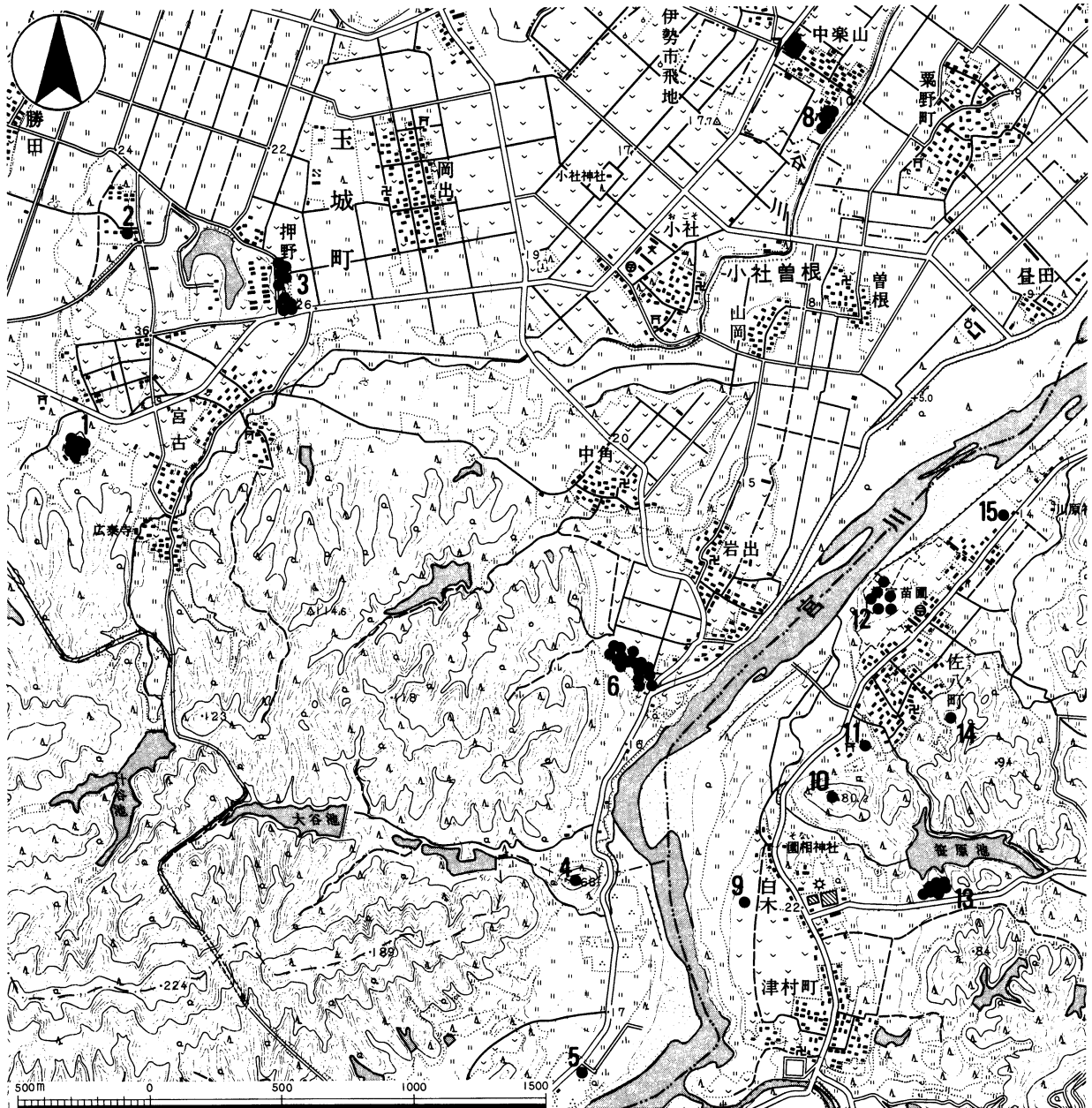


fig. 3 落合古墳群と周辺の古墳位置図 (1:25,000 国土地理院『伊勢』から)

1. 矢塚古墳群 2. 浜塚古墳 3. 鉄砲塚A・B古墳群 4. 瀬ノ山古墳 5. 新田古墳
6. 蚊山古墳群 7. 林前古墳群 8. まこも古墳群 9. 元新田古墳 10. 玉田山古墳 11. 寺原古墳
12. 藤波古墳群 13. 落合古墳群 14. 高殿山古墳 15. 中瀬古墳

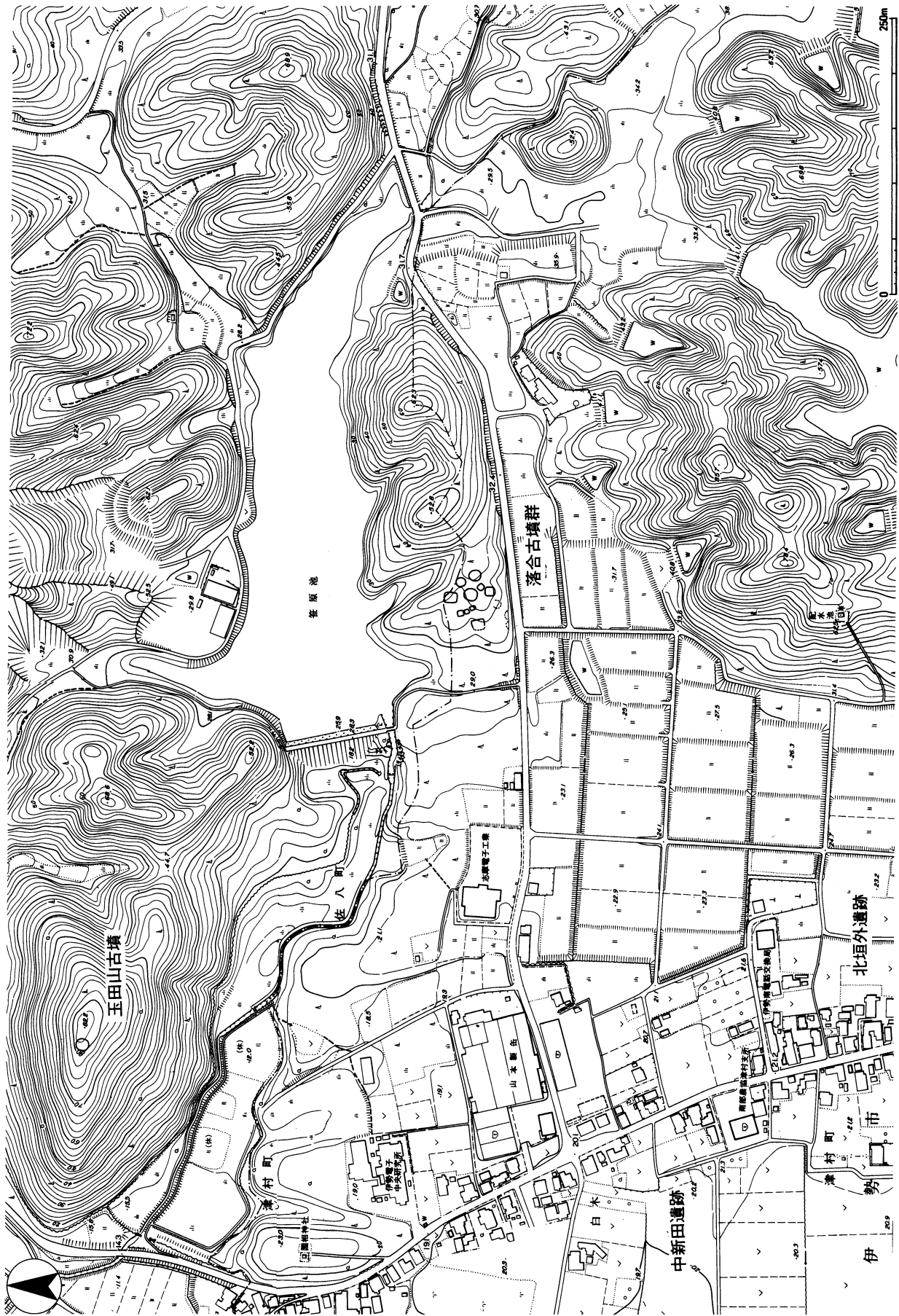


fig. 4 落合古墳群周辺地形図 (1 : 5,000)

これらのことから、落合古墳群は今回調査された10基以外にさらに数基存在することが想定されたとともに、丘陵の南斜面部に限って古墳が築造されていることがわかるのである。古墳群の南を東西に走る道路が整備された時点で、若干数の古墳が破壊されている可能性もある。

4. 落合古墳群形成集団の居住地

落合古墳群は南方を意識して構築されている。このことから、当古墳群を形成した集団の居住地は現津村町に所在する元新田・中新田・西垣外・北垣外の各遺跡のうちいずれかを想定するのが妥当であろう。先述のように中新田遺跡からは円筒埴輪片が採集されており、最も可能性の高いのがこの遺跡かも知れない。
(伊藤)

(註)

- (1) 地質学的なことについては以下の文献に拠った。日本道路公団・(株)利根コンサルタント「伊勢自動車道伊勢橋他3橋第2次基礎地盤調査報告書」(1988)
- (2) 伊勢市内の遺跡については以下の文献に拠った。岩中淳之「三重県伊勢市遺跡分布地図」(伊勢市教育委員会 1981)
- (3) 岩中淳之・高見宜雄「伊勢市佐八町中ノ垣外遺跡」(『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1984)
- (4) 岩中淳之「佐八波遺跡発掘調査報告」(伊勢市教育委員会 1990)
- (5) 下村登良男「南勢地方の大形古墳」(『八重田古墳群発掘調査

- 報告書』松阪市教育委員会 1981)
- (6) 前川嘉宏氏のご教示による。ただし、古墳群の時期的認識は筆者の責である。なお、朝久田古墳群については、下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」(『河田古墳群』Ⅲ 多気町教育委員会 1986)で群構成が触れられている。
- (7) 小坂宜広・前川嘉宏・稲本賢治「度会郡玉城町蚊山遺跡」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ 三重県埋蔵文化財センター 1990)
- (8) 岩中淳之「昼河古墳群」(『伊勢を掘る—近年の発掘調査成果展—』伊勢市立郷土資料館 1992)
- (9) 皇学館大学考古学研究会「玉城町南部の遺跡」(1982)

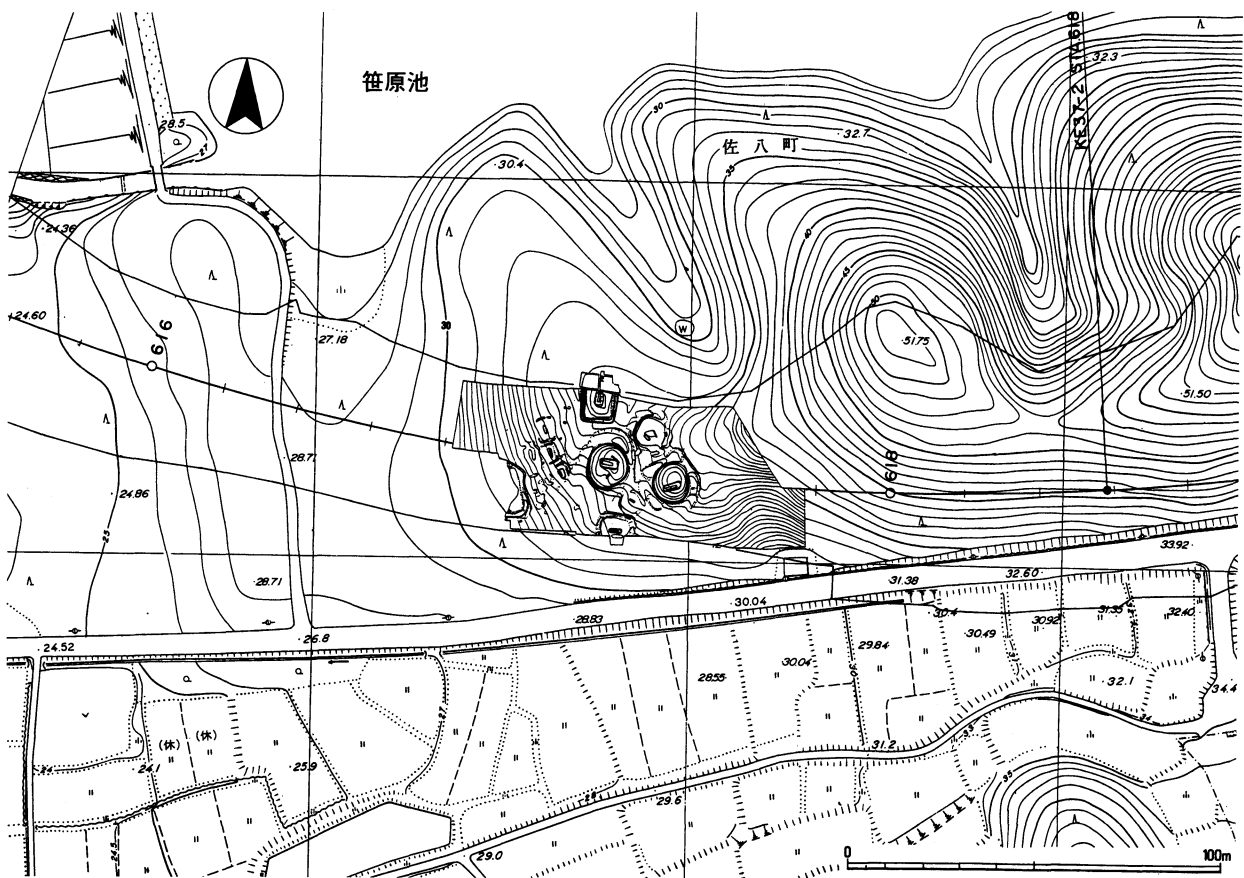


fig. 5 調査区周辺地形図 (1 : 2,000)

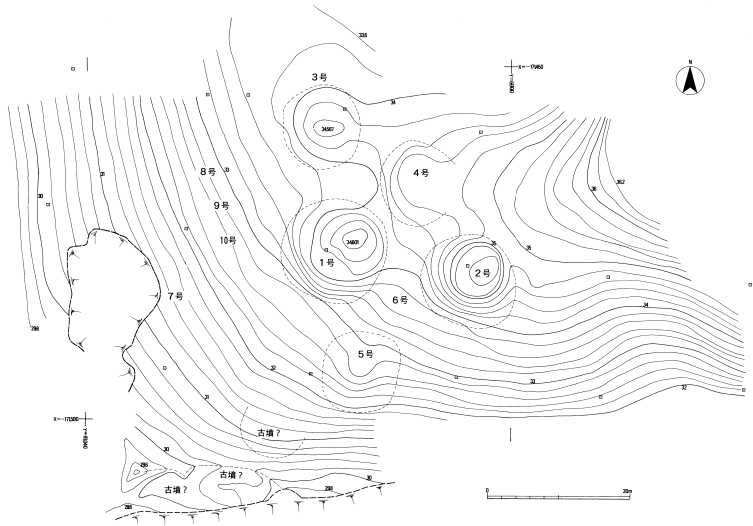


fig. 6 調査区周辺調査前地形測量図 (1 : 400)

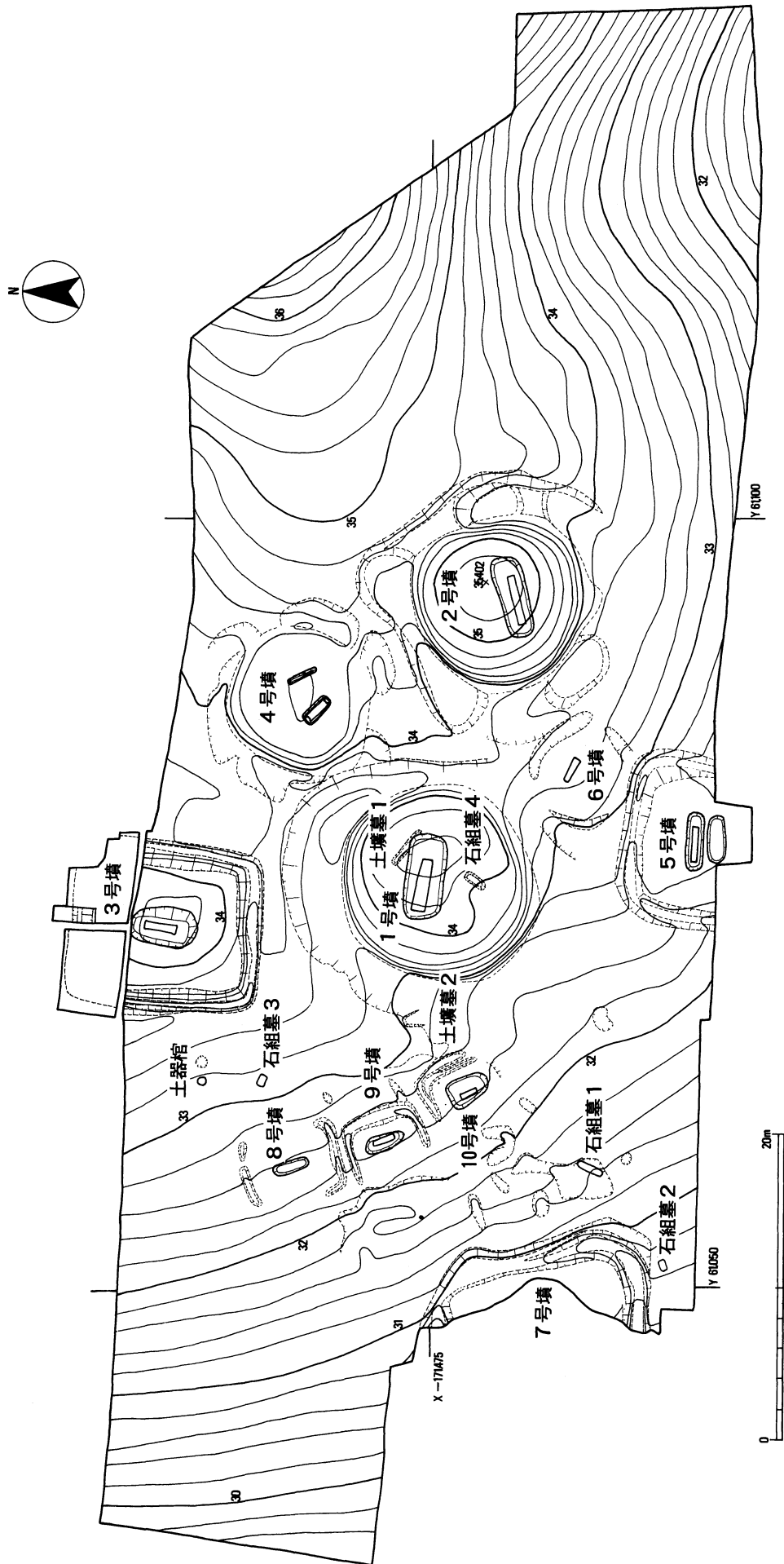


fig. 7 調査区全体図 (1 : 400)

Ⅲ. 調査の成果－遺構と出土遺物－

1. 1号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

墳丘 1号墳は尾根稜線上からやや下がった地点に築造されている。墳頂部の標高はおよそ34.5mである。調査前の測量時点では直径約15mの円墳かと思定されたが、調査の結果、直径約13mの円墳であ

ることが判明した。また、調査以前から墳頂部には後世に開墾のための削平に伴うものと見られる不自然な地形が認められる。

墳丘は下部約1mが遺構基盤である赤褐色系結晶片岩（地山）の削り出しで、その上に同質の土を用

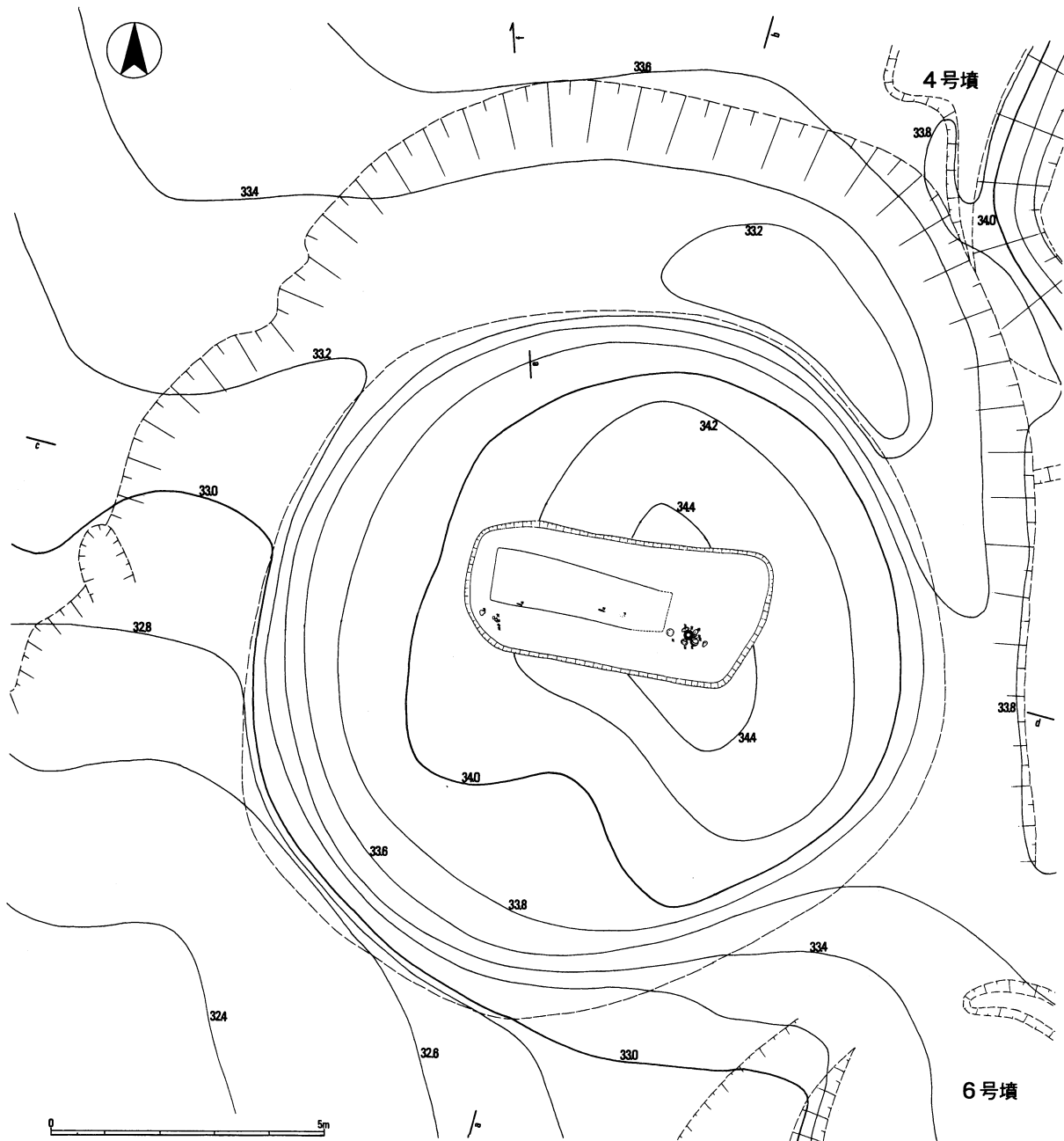


fig. 8 1号墳平面図 (1:120)

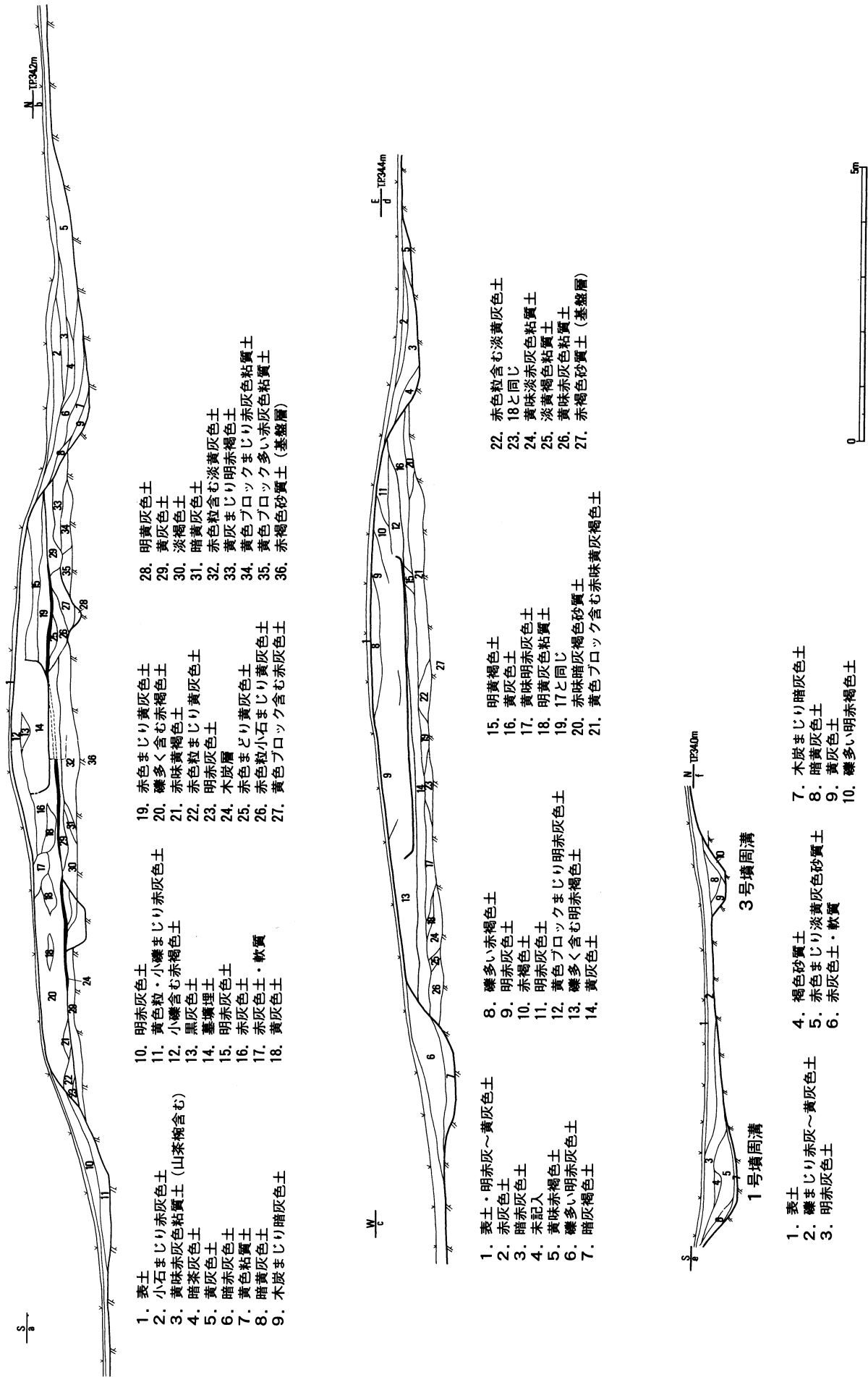


fig. 9 1号墳土層断面および1・3号墳間土層断面図 (1:100)

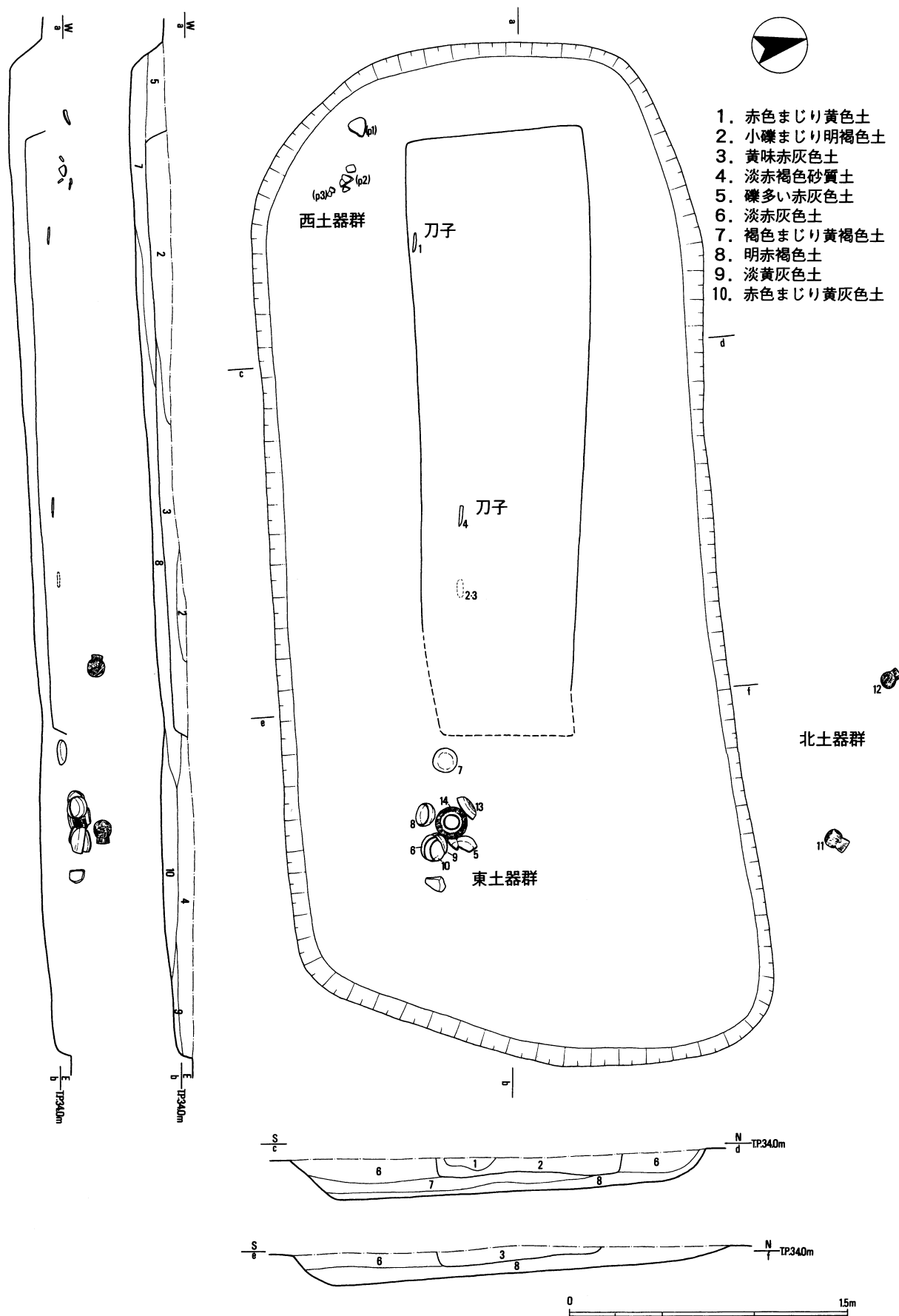


fig. 10 1号墳埋葬施設平面・断面・立面図 (1:30)

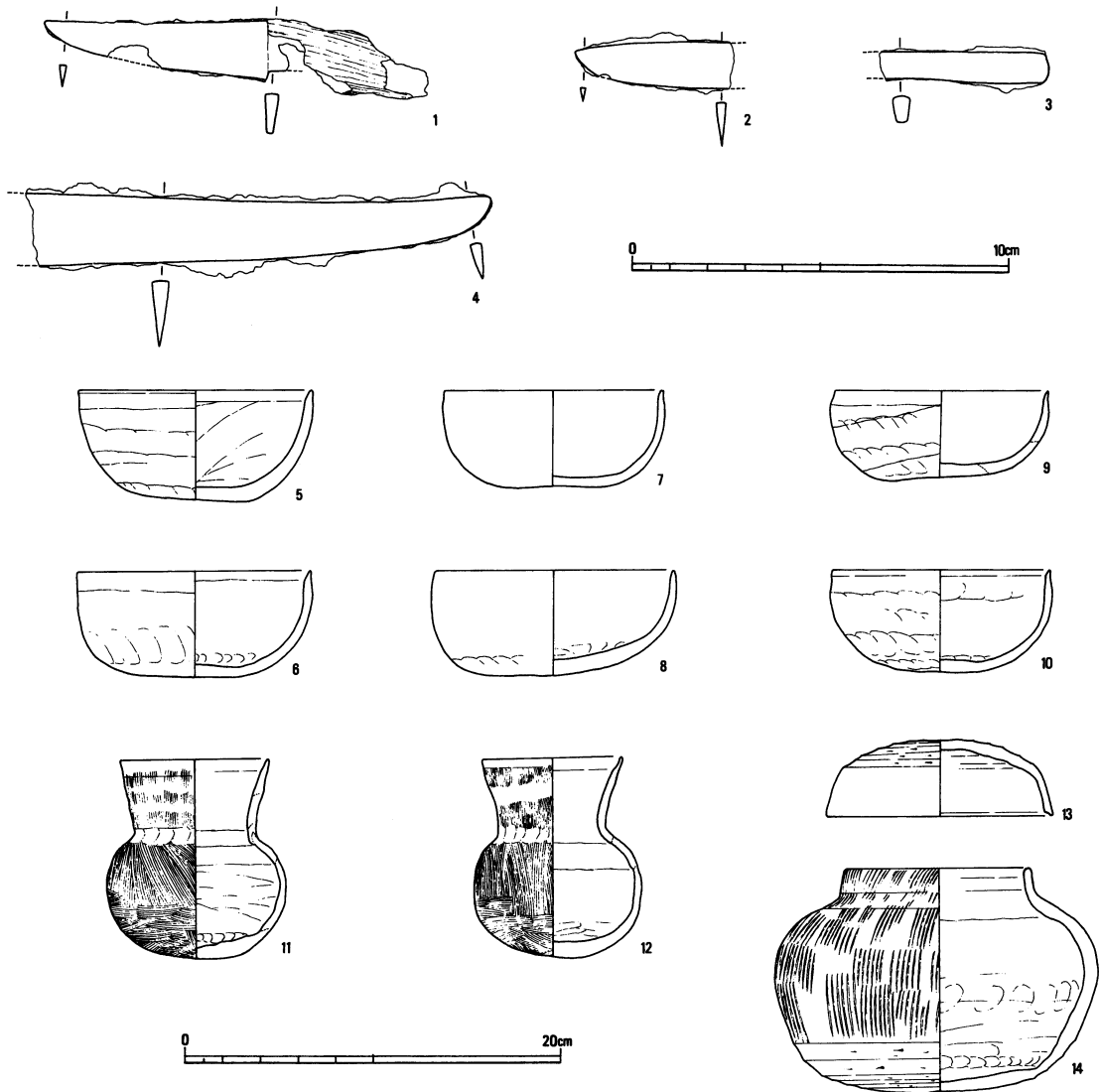


fig. 11 1号墳埋葬施設関連出土遺物（1～4は1：2, 他は1：4）

いておよそ0.7m盛土している。盛土は周溝として認められる遺構の掘削によって行われたと見てよいであろう。

盛土は赤褐色砂質土および黄灰色砂質土を中心におよそ0.7m認められた。盛土の方法としては順次平行に積み上げていくものであり、叩き締めは認められなかった。盛土内には土師器・須恵器が破片となって多く出土しているが、埋葬施設内の土器とは時期的な隔りがあるようで、下部遺構に関した遺物と見做すのが妥当である。盛土の下には炭化物層が薄く堆積しており、さらにその下には黄灰色砂質土層が認められた。石組墓4はこの黄灰色砂質土層を切り込んでおり、土壙墓1は黄灰色砂質土層の下にあたる。しかし、埋土の関係からこの黄灰色砂質土層が旧表土に相当するものと考えられ、土壙墓

1の埋土は同質の土を用いているために判別不可能であったものと考えられる。

周溝 調査前には周溝に相当するものはほとんど確認できなかったが、標高が高い北側を中心に馬蹄形に巡る周溝が存在していることが判明した。周溝外側のラインは不明確で、周溝とその外側とを明確に区画する意識はないようである。北側の最も深いところで墳頂部から約1.7mあり、東西にむかって次第に浅くなっている。周溝断面はU字形である。埋土下層部分から須恵器甕（fig.15-26）が各所にちらばって出土しているが、所属時期が埋葬施設とは異なるため、後述する下部遺構に伴うものと考えられる。

なお、埋土中層にあたる淡黄灰色粘質土からは中世の陶器碗（山茶碗）が2個体分出土している。陶

器碗は明確な掘形もなく出土しており、中世墓などではないものと考えられる。このことからこの層以上は中世以降の堆積であることがわかる。

2. 埋葬施設

墳頂部に1基の埋葬施設を確認した。墓壙は墳頂部にての検出が極めて困難であったため、墳頂部から約0.5mほど掘削してから検出を行った。

墓壙は東西約5.5m、南北約2.4mで、いびつな長方形を呈している。内部に長軸約3.2m、短軸約0.9mの木棺痕跡があった。土層断面の形態から組合せ式木棺と想定される。木棺痕跡内は黄色粘質土であった。

3. 出土遺物 (fig.11)

1号墳では、埋葬施設以外からの出土遺物が比較的多いものの、それらは埋葬施設の時期とは異なったものが中心となっている。そのため、これらの遺物は後述する1号墳下部遺構との関連で考える必要があるため、ここでは埋葬施設に直接関連する遺物についてのみ触れることとする。埋葬施設と関連しない遺物は次節で触れる。

埋葬施設に伴う遺物

埋葬施設に伴う遺物には、刀子および土器類があ

る。墓壙内の棺外東木口側からは土師器と須恵器がまとまって出土した。刀剣類および玉類は出土しなかった。なお、埋葬施設に据えるかたちで土器を伴っているのは1号墳のみである。

鉄器 木棺痕跡内の南側板相当部近くで、刀子が3個体分出土した。最も東にある1点(4)はやや大形で、切先が外側に開いている。調査時の不手際で、柄部を欠損してしまった。後の2点(1~3)は、小形のものである。

須恵器 確実に埋葬施設に伴うのは蓋と短頸壺である(13・14)。形態からは田辺昭三氏による編年⁽⁹⁾(以下、田辺編年)のMT15型式に併行すると考えられる。

土師器 土師器は、埋葬施設内から出土した碗と墓壙上面から出土した小形壺がある。碗は6点、小形壺は2点出土している。

4. 古墳の時期

出土土器類から、1号墳埋葬施設の時期は田辺編年のMT15型式と考えられる。当古墳群中で最も新しい古墳である。

2. 1号墳下部遺構の調査

1号墳の盛土を除去した段階で幾つかの遺構を検出した。埋葬施設が2基とピットが数基である。これらの遺構は1号墳の盛土下部に認められた黄灰色系土の下部にて検出されたもので、1号墳よりも時期的に古いものである。

黄灰色系土の上部からは土師器・須恵器の破片が数点認められた。これらは時期的には田辺編年のTK208型式に併行するものであり、1号墳と同一時期とするにはやや時期的な隔たりが大きい。

1. 土壙墓1

土壙墓1は1号墳墳丘内の東側やや北寄りに位置する。長軸2.8m以上、短軸約0.8mの細長い掘形で、木口部分は丸みを帯びている。主軸は北西-南東である。土壙断面形は逆台形を呈している。土壙埋土は淡茶灰色粘質土の単一層である。木棺痕跡は認められず、遺物も出土しなかった。

2. 土壙墓2

1号墳周溝の外側に接している。形態からみて、土壙墓と考えてよいであろう。南側は1号墳周溝によって破壊されている。幅は約幅約0.8m、残存長約1.4mである。遺物は出土しなかった。

3. 石組墓4

石組墓4は1号墳墳丘内の東側やや南寄りに位置する。長軸約1.3m、短軸約0.6mで、主軸は北東-南西方向である。土壙埋土は土壙墓1と同様、淡茶灰色粘質土である。底面には5cm内外の小礫を長軸約0.68m、短軸約0.24mの長方形に敷いており、棺台に相当するものかと思われる。土壙長側面には拳大よりやや小さい礫を内側の面を揃えるように並べている。土壙短側面には長側面に用いたのと同様の礫を乱雑につめており、この部分については面を揃えるようなことは行っていない。このような形

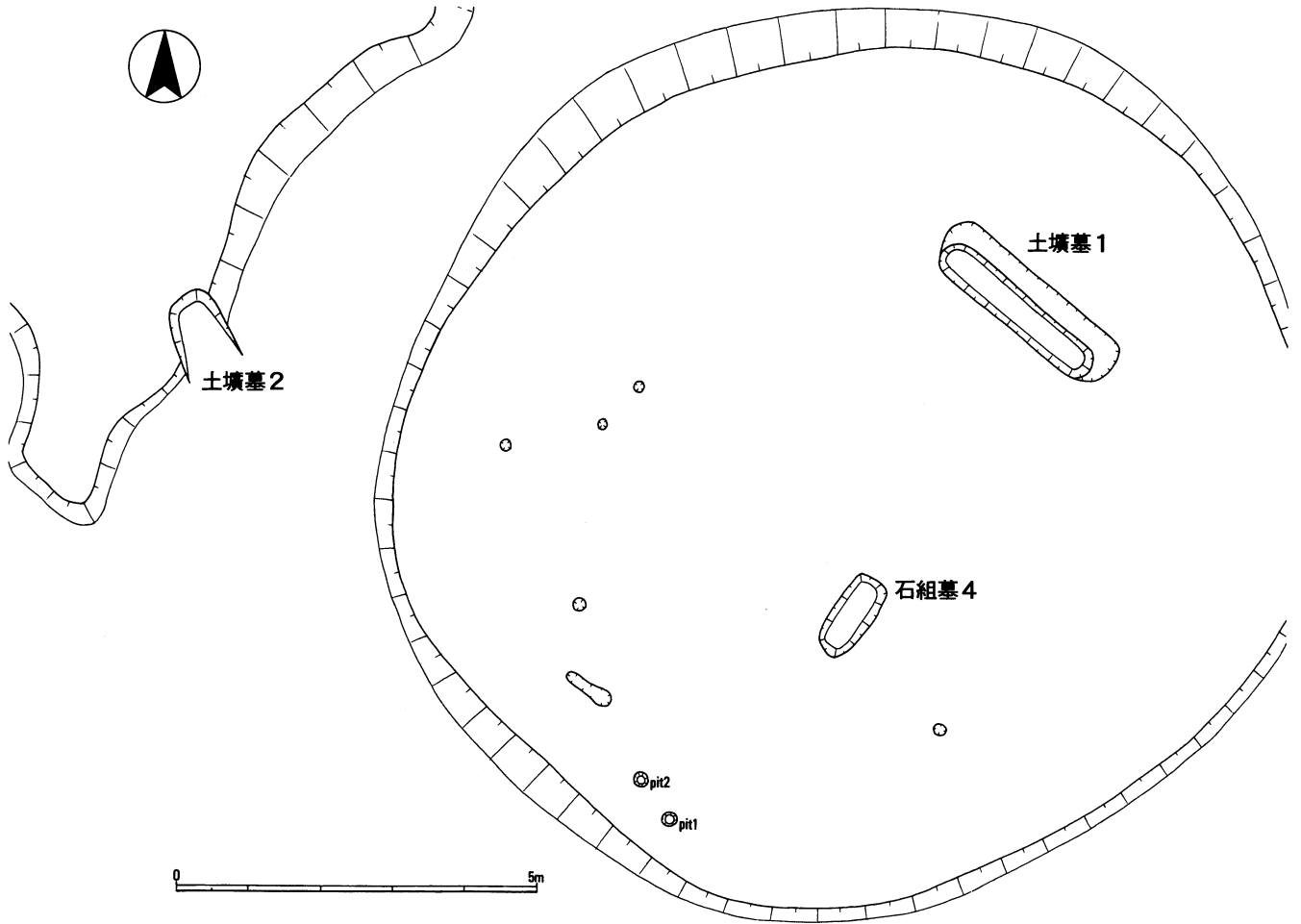


fig.12 1号墳下部遺構および周辺平面図 (1:100)

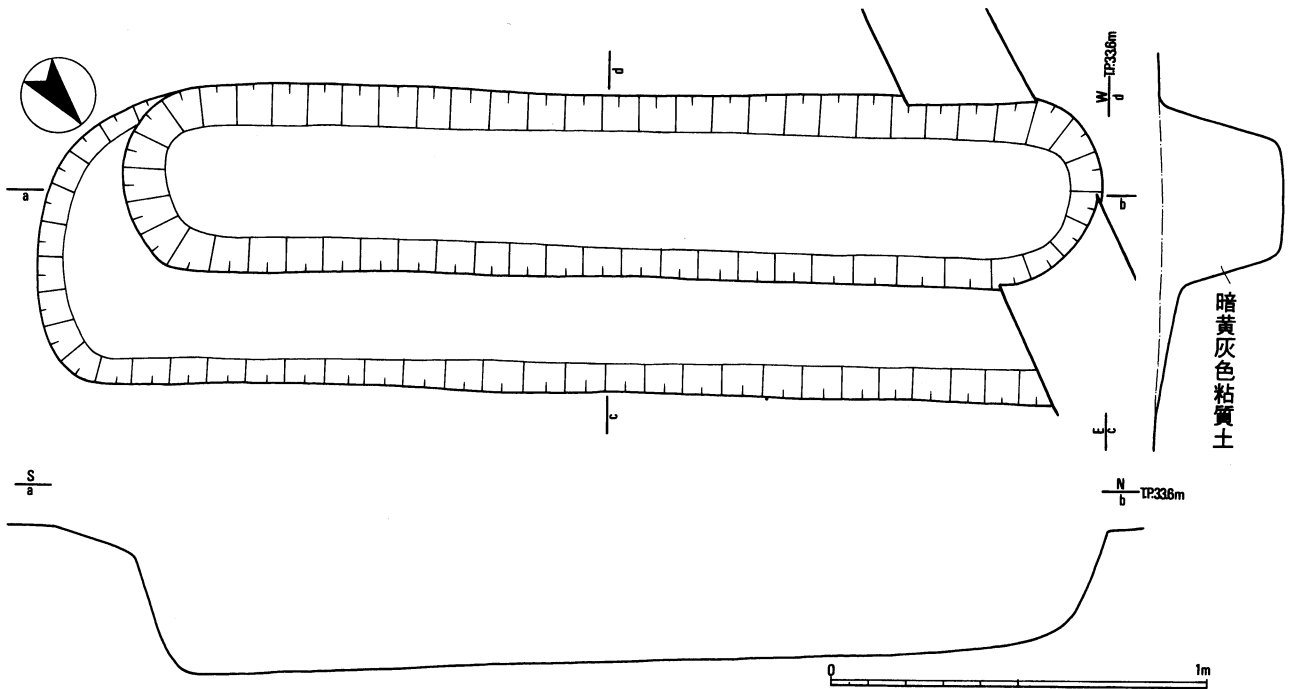


fig.13 土壙墓1平面・断面図 (1:20)

態からは一見石室状を呈しているように見えるが、天井部に礫は一切認められなかった。そのため、「石室」とするよりは、「広義の石組墓」と捉えるべきであろう。出土遺物は全くなく、厳密な時期は不明である。

4. ピットおよびその他の遺構

ピットは1号墳墳丘内の南側やや西寄りに位置する。埋土は炭混じりの淡茶灰色であった。これらのピットのうち2基については極めて明瞭なもので、そのうちの1基（ピット1）には土師器を中心に完形土器を含む数点の土器が掘形内に認められた。須恵器甕の破片がこの付近から出土し、それは周溝内から出土した体部と接合した。

5. 出土遺物 (fig.15)

先述のように、下部遺構に相当する時期の遺物は1号墳墳丘盛土や周溝埋土およびピット1から多く出土している。しかし、遺構に伴うものはピット1出土土器のみである。須恵器および土師器があり、鉄製品はない。

須恵器 須恵器には甕1点・甗2点と短頸壺1点および器台がある。甕は1号墳の周溝埋土を中心に広く散乱していたものであるため、当初は1号墳の墳丘上にあったものが時間の経過とともに散らばったものかと考えた。しかし、1号墳の盛土内からもこの土器の破片が出土したため、1号墳築造以前の遺物と考えるに至った。甗(22)はピット1付近および1号墳西側周溝埋土内から出土している。短頸壺(25)も1号墳西側周溝埋土からの出土であるが、1号墳埋葬施設内出土の短頸壺とは形式的な違いがあり、やはり1号墳に伴うものとするべきではなからう。器台は1・2号墳周溝内から出土したものである。形式的には田辺編年のTK208型式の範疇に含まれるものであることから1・2号墳に伴うとは考えられず、また、3号墳からはこの土器の破片が出土していないため、1号墳下部遺構に伴うものと考えた。甗は田辺編年のTK208型式に併行するものとみてよからう。甕はTK208～TK23型式の幅を考える必要がある。

土師器 ピット1内からは高坏2点と小形甕1点が出土した。また、1号墳西周溝から高坏および小

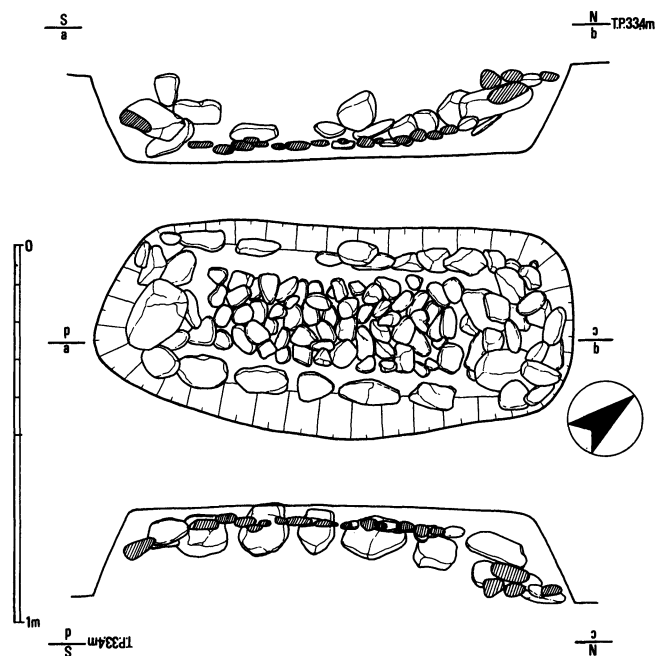


fig. 14 石組墓4平面・断面図 (1:20)

形壺が出土している(15～17)。ピット1出土高坏は、安濃町平田35号墳出土のものとの類似性から、田辺編年のTK208型式併行のものと考えられる。1号墳西周溝の高坏(15～16)も1号墳に伴うものとは考えにくく、形態の特徴から、新しく見積もっても布留期古段階である。すなわち、ピット1出土の高坏よりもかなり古いと言える。1号墳周溝出土のものであるが、同一地点からまとまって出土しており、位置関係から土壙2に伴う可能性があろう。これらのことから、下部遺構にも時期的な隔たりのあることがわかる。

6. 下部遺構の時期

下部遺構の時期を示すと考えられる遺物では、15・16の高坏が最も古く古墳時代前期前葉頃(布留古段階)で、最も新しい須恵器壺(25)が古墳時代中期後葉(田辺編年のTK23型式)以前であろう。埋葬施設もこの時期内に収まるものと考えられる。これらの土器からは、古墳時代前期前葉あたりからこの地が「葬地」として利用されていたことが考えられ、古墳群の形成を知る上で、極めて興味深い。また、ピット1・2はこの付近が埋葬地ではなく何らかの祭祀が行われた地であることを示唆するものであり、極めて興味深いといえる。

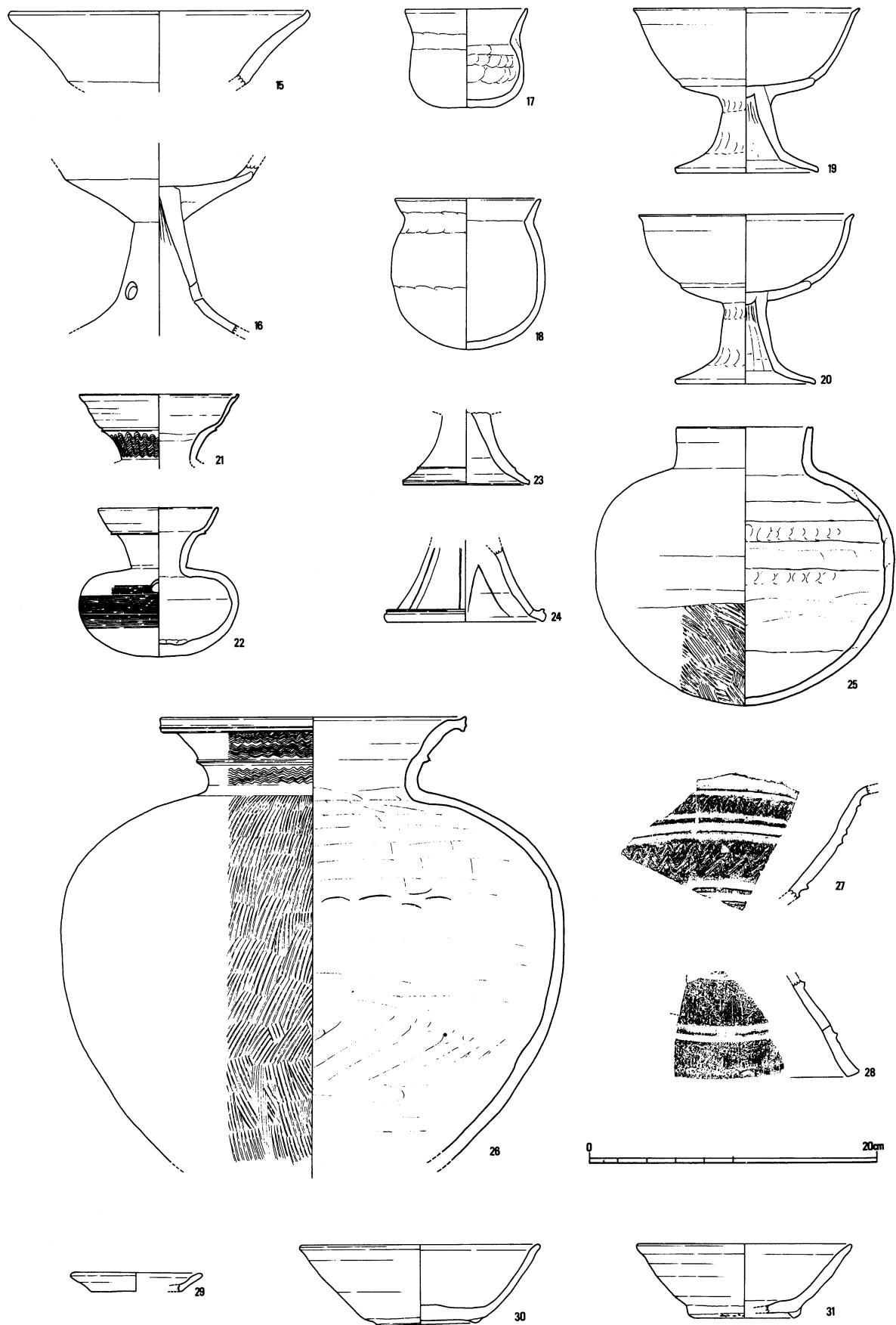


fig. 15 1号墳周溝・下部遺構他 出土土器 (1:4)

3. 2号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

2号墳は1号墳と同様、尾根稜線上から南へやや下がったところに位置している。調査前の墳頂部の標高は約35.5mであった。調査前にはおよそ13mの円墳と考えられ、調査の結果、約11mの円墳であることが判明した。

墳丘 墳丘は基盤層の削り出しと盛土によって構成されているが、基盤層の削り出しは墳丘南側で0.8m、北側で0.5mであり、1号墳と比べて基盤層の削り出しがあまり顕著ではない。盛土は赤褐色砂質土を中心とし、黄灰色砂質土はあまり認められなかった。盛土の方法は標高が下がる南側ではまず墳丘外

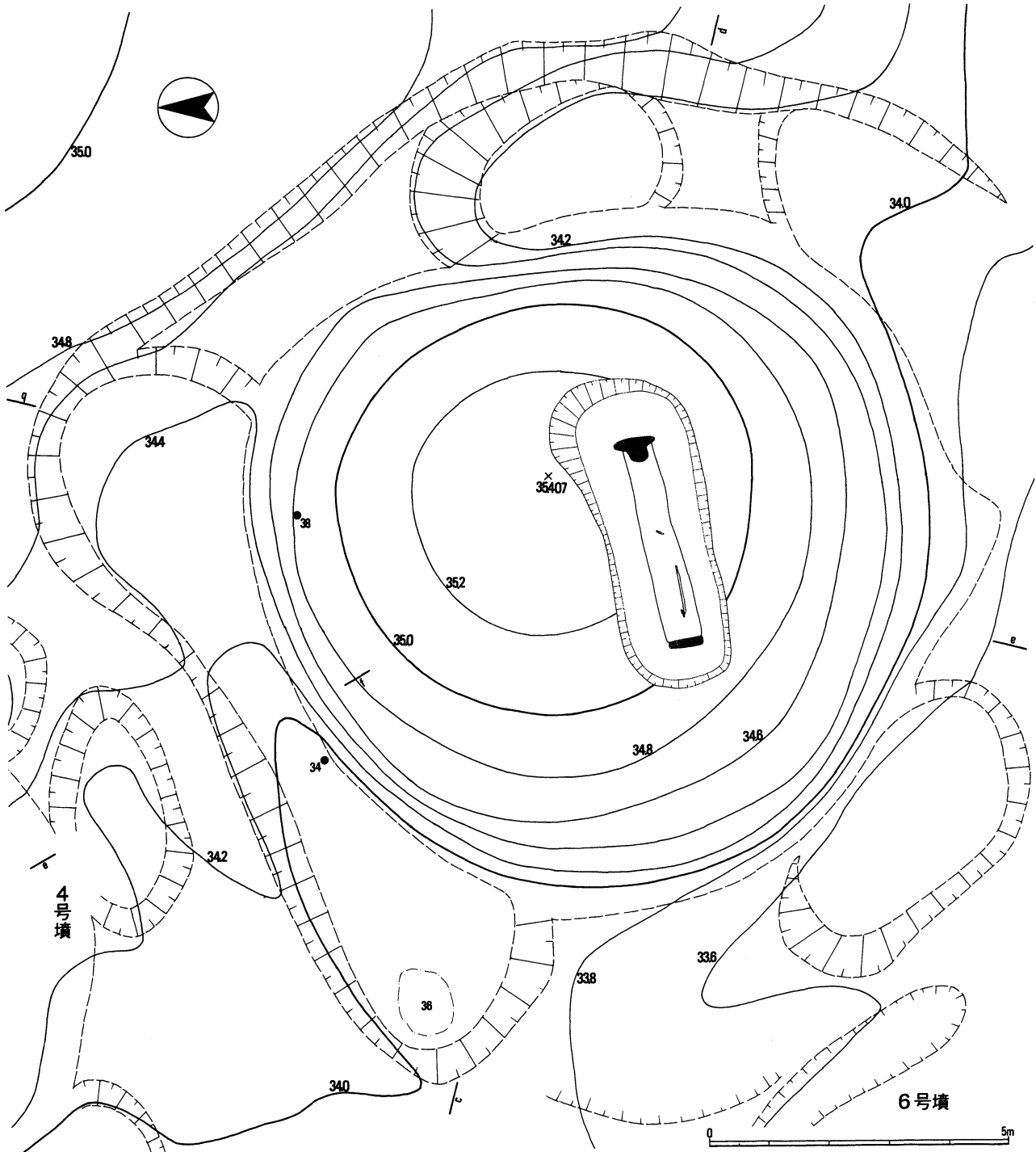
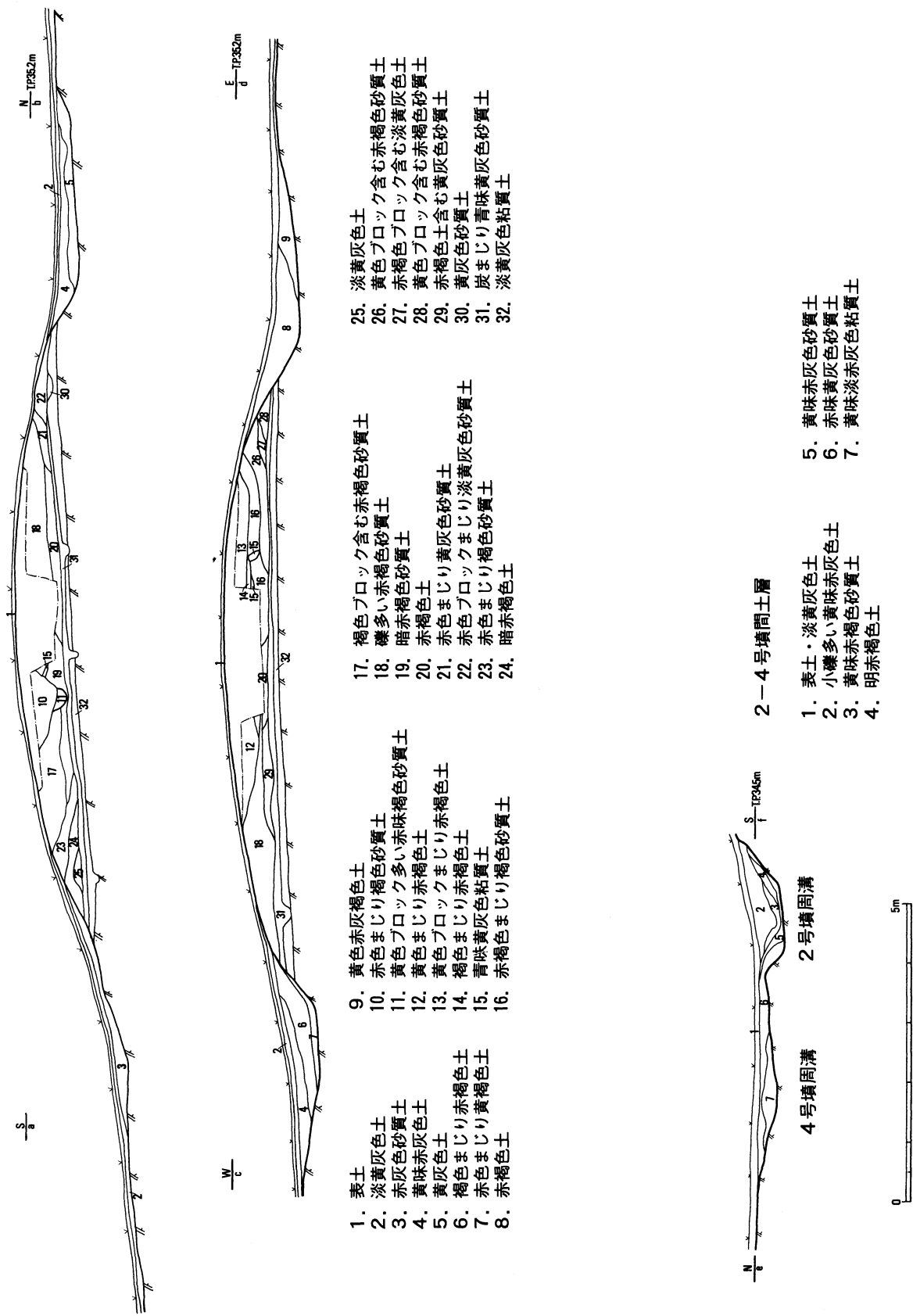


fig. 16 2号墳平面図 (1 : 100)



- 1. 表土
- 2. 淡黄灰色土
- 3. 赤灰色砂質土
- 4. 黄味赤灰色土
- 5. 黄灰色土
- 6. 褐色まじり赤褐色土
- 7. 赤色まじり黄褐色土
- 8. 赤褐色土
- 9. 黄色赤灰褐色土
- 10. 赤色まじり褐色砂質土
- 11. 黄色ブロック多い赤味褐色砂質土
- 12. 黄色まじり赤褐色土
- 13. 黄色ブロックまじり赤褐色土
- 14. 褐色まじり赤褐色土
- 15. 青味黄灰色粘質土
- 16. 赤褐色まじり褐色砂質土
- 17. 褐色ブロック含む赤褐色砂質土
- 18. 礫多い赤褐色砂質土
- 19. 暗赤褐色砂質土
- 20. 赤褐色土
- 21. 赤色まじり黄灰色砂質土
- 22. 赤色ブロックまじり淡黄灰色砂質土
- 23. 赤色まじり褐色砂質土
- 24. 暗赤褐色土
- 25. 淡黄灰色土
- 26. 黄色ブロック含む赤褐色砂質土
- 27. 赤褐色ブロック含む淡黄灰色土
- 28. 黄色ブロック含む赤褐色砂質土
- 29. 赤褐色土含む黄灰色砂質土
- 30. 黄灰色砂質土
- 31. 炭まじり青味黄灰色砂質土
- 32. 淡黄灰色粘質土

2-4号填間土層

- 1. 表土・淡黄灰色土
- 2. 小礫多い黄味赤灰色土
- 3. 黄味赤褐色砂質土
- 4. 明赤褐色土
- 5. 黄味赤灰色砂質土
- 6. 赤味黄灰色砂質土
- 7. 黄味淡赤灰色粘質土

2号填周溝

4号填周溝

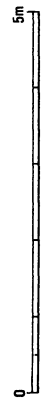


fig. 17 2号填土層断面および2・4号間土層断面図 (1:100)

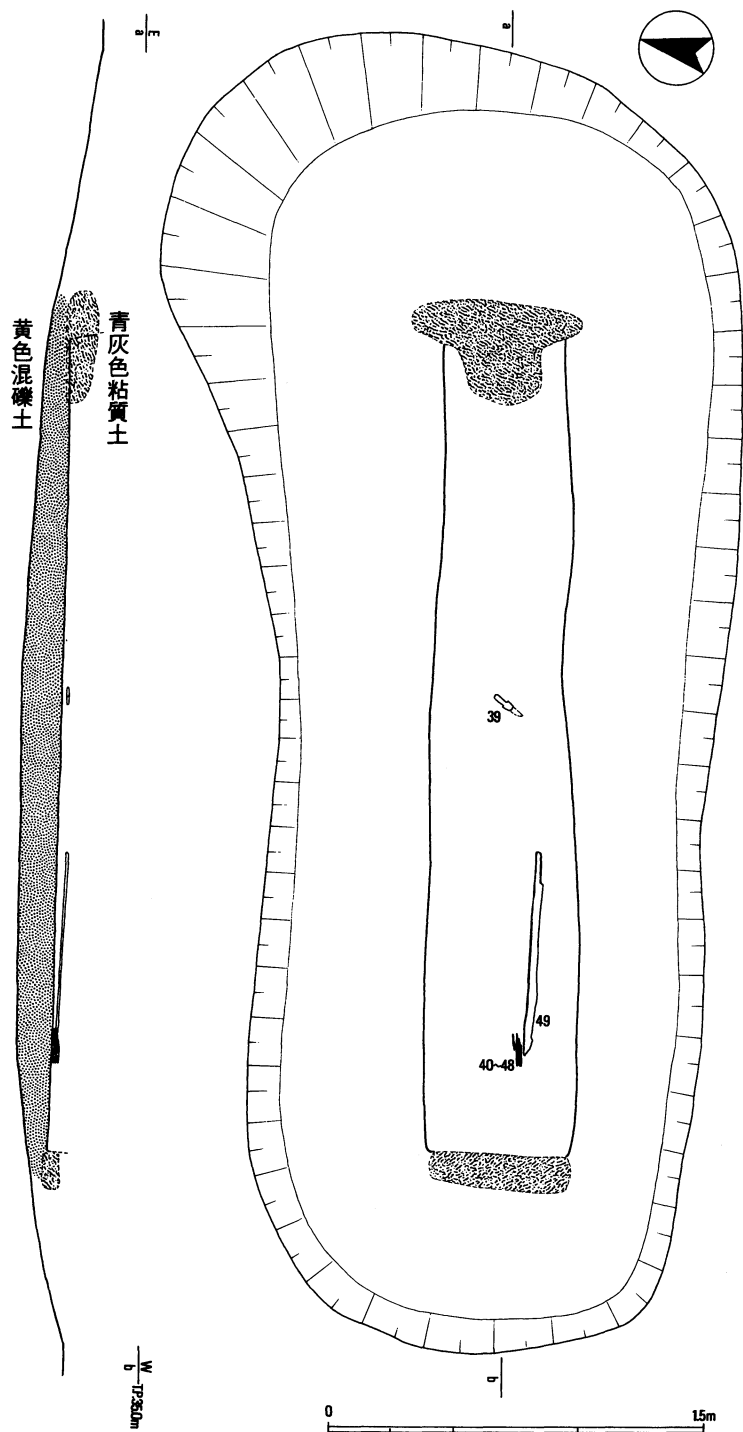


fig. 18 2号墳埋葬施設平面・立面図 (1:30)

縁部に盛り上げることが顕著に確認できたが、標高の高い北側ではあまり明確でなかった。

1号墳と同様、盛土下には黄灰色砂質土が認められた。この層は上部ほど青味が強く粘土質であったため、調査時にはこの面にも埋葬施設がある可能性を想定した (fig.19)。この面で検出した土壌 1・2は、土壌周囲に粘土がとりまくもので、埋葬施設

の可能性はあるが、内部からの出土遺物は皆無であった。土壌分析結果によれば、この遺構は埋葬施設の可能性が高いものと考えられる。この層上面では須恵器大甕の破片が中央から北・西方向にかけて広く散乱した状態で出土するとともに、焼土・炭も認められた。この須恵器 (P.L. 32) は口縁部を欠き、正確な所属時期は不明であるものの、体部に認められる調整手法からは2号墳埋葬施設の時期と大きく隔たるものではないものと考えられる。したがって、土壌 1・2とともに、2号墳築造に先立っての何らかの祭祀が行われたとみるのが妥当であり、2基の土壌も2号墳の築造時期に相当するものであろう。

なお、黄灰色砂質土下にはピット状のものが認められたが、1号墳下部ピット1のように明確なものではない。1号墳下部におけるピット 1・2以外のピットと同様なものである。

周溝 周溝は標高の高い北側部分を中心に認められ、南側では途切れている。また、北から東にかけての2か所と西側の1か所では周溝の底面が高くなっており、一見陸橋状を呈する。この状況は北側の1箇所について最も顕著であり、通路か何かの意味を有するものかも知れない。

4号墳に近接する北西方向の周溝は4号墳の周溝に対応して屈曲している状況が確認される。このことから2号墳は4号墳よりも後出する古墳であることがいえよう。

周溝内からは北側を中心に須恵器・土師器類が出土している。西側陸橋状部北からは須恵器壺 (fig.20-36) が碎片となって

出土したが、これがこの地点で破碎されたのか本来墳丘上にあったものが転落したのかは不明である。

2. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央やや南寄りに1基確認できた。墓壇は墳丘上面では確認することができず、およそ0.5m削り込んで検出を行った。一応墓壇らしいラインは引けるものの、土層断面にみるように明確な

掘形が果たして存在するものかどうかは怪しいものである。

棺の痕跡は比較的明瞭で、割竹形木棺と考えられる。棺の長さは約3.2m、幅約5.6mと推定される。棺の両木口には淡青灰色砂質土をつめており、棺底には黄色砂質土を敷いている状況が確認された。木口部分の淡青灰色砂質土の状況から、この棺は後述する3号墳の割竹形木棺の形態とは異なり、木口板が側板の中に入るものと考えられる。

埋葬施設に伴う遺物は棺内のみで認められた。棺内西側から鉄刀1本・鉄鏃9本、棺内中央には刀子1本がそれぞれ出土した。鉄刀・鉄鏃は錆が著しく、鉄鏃にいたっては完全に癒着している。棺内の土はふるいがけをしたが、玉類は認められなかった。

3. 出土遺物 (fig.20)

須恵器・土師器・鉄器がある。埋葬施設に伴った土器類はなかった。

須恵器 墳丘上および周溝から出土したものに、坏身・坏蓋・高坏・壺・小形壺がある。37の壺は、2号墳の南4mほど離れたところから出土したものであるが、残存が良好であることから2号墳から転落したものとするのが妥当であろう。これらの須恵器は色調が淡青灰色系でよく類似しているものである。全体として、田辺編年のTK47型式に併行するものと考えられる。

黄灰色砂質土上から出土したものには、甕がある(PL. 32)。全体の形態が不明で、所属時期はわからないが、先述のように、2号墳とあまり隔たらない時期を想定するのが妥当であろう。

土師器 墳丘斜面から出土した甕がある(38)。

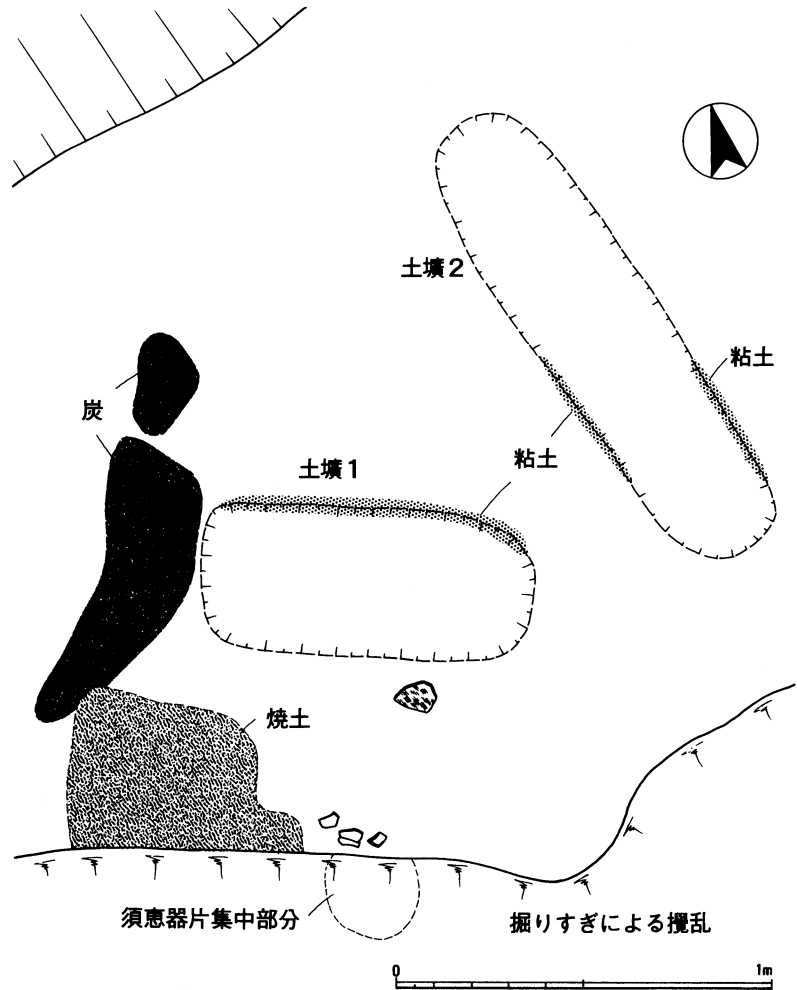


fig. 19 2号墳下部 土壌・焼土・木炭・土器検出・出土状況平面図 (1:20)

出土した地点は墳丘上ではあるものの、黄灰色砂質土にくい込んだ状態であったため、埋葬施設構築以前のものである可能性もある。

鉄器 鉄鏃・鉄刀・刀子がある(39~49)。

鉄鏃は錆がひどく、全体が癒着している。現状では9本が確認でき、全て長頸鏃である。刃部の形態には、確認できるものでは三角形~小柳葉形のものがあり、片刃形のものも存在するようである。

鉄刀は長さ約78cmである。基部には2箇所の目釘穴がある。また、鏃本孔も持っている。木質は茎部に良好で、刃部にも少し認められる。錆が激しい。

4. 古墳の時期

2号墳の時期は、出土須恵器から田辺編年のTK47型式併行と考えられる。

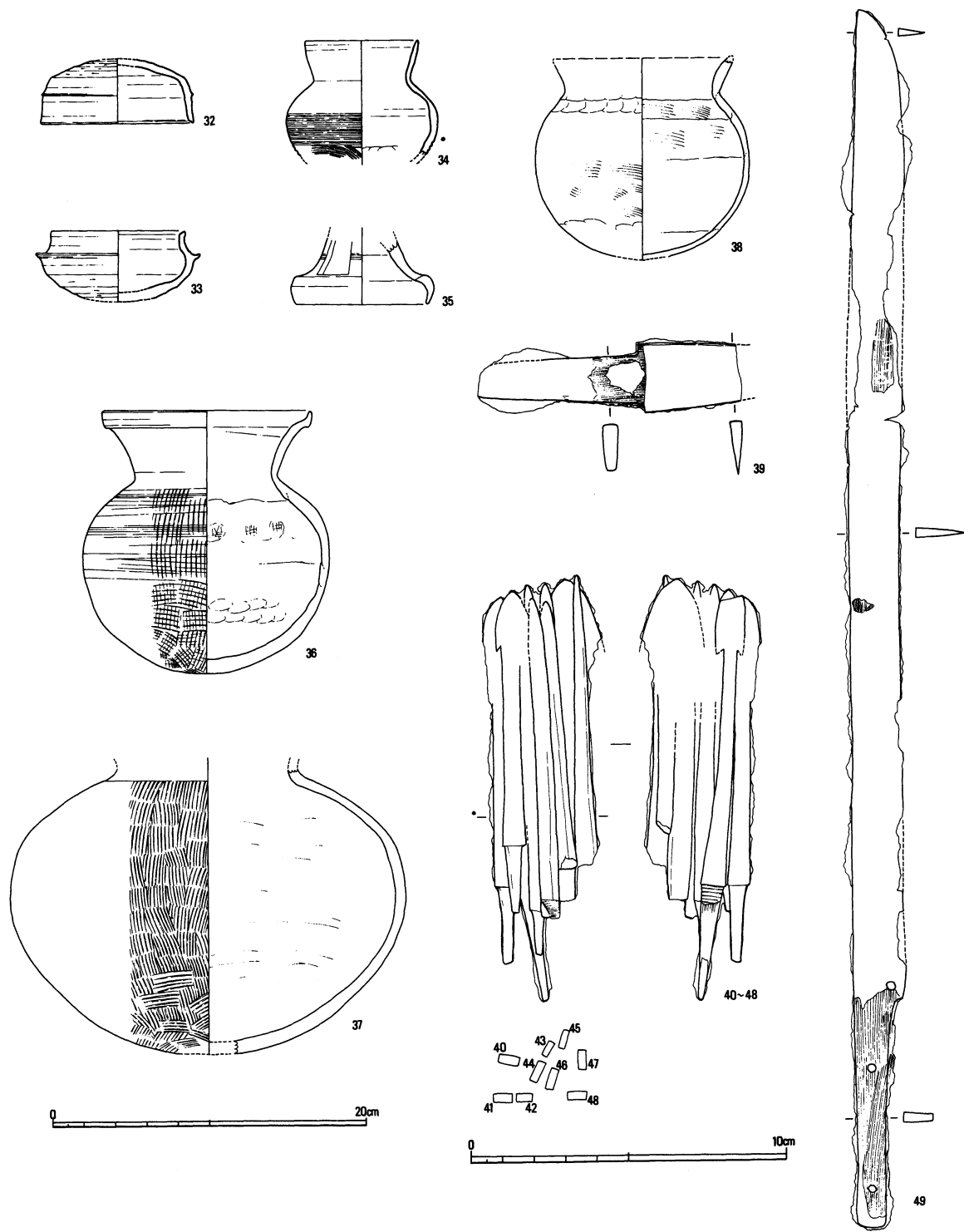


fig. 20 2号墳出土遺物 (39~48は1:2、他は1:4)

4. 3号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

3号墳は南北約11m、東西約10mの方墳である。標高約34mの尾根稜線上に位置し、調査前の墳頂部の標高は約34.6mである。墳丘の約1/3は調査区外にあたる。

墳丘 墳丘は基盤層削り出しと盛土によって構成されており、盛土の厚さは最大約0.6mである。盛土は基盤層の赤褐色土を主体とし、墳丘の東西端には黄灰色砂質土も用いられている。1・2号墳にて認められた旧表土に相当する層は認められなかった。また、墳丘下部遺構も存在していない。

周溝 周溝は断面逆台形を呈し、墳丘の周囲を途切れることなく巡っているものと考えられる。周溝底は比較的安定しており、凹凸は少ない。

周溝内からは鉄鉾、須恵器壺・樽形甕、土師器が出土している。これらの出土遺物は樽形甕を除く大部分が周溝埋没初期の土層で周溝の墳丘側を中心に堆積していた墳丘崩落土と考えられる土層中から出土している。したがって周溝出土遺物の大部分は本来墳丘上にあったものが転落したものと考えられる。樽形甕についても周溝埋土の中層からの出土であるため、墳丘からの転落であると考えるのが最も妥当

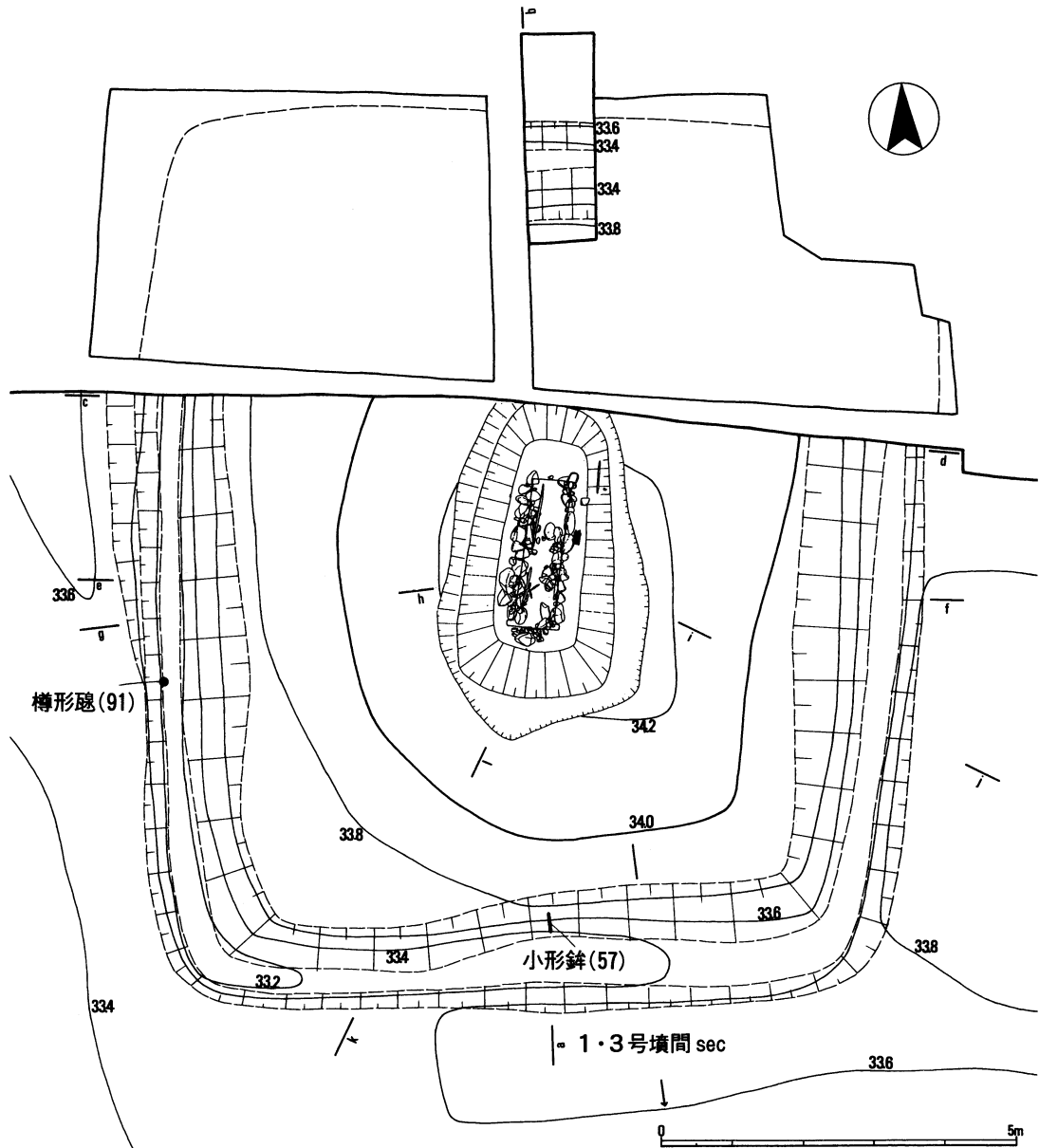


fig:21 3号墳平面図 (1:100)

であろう。

2. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央部に1基認められた。埋葬施設の掘形は墳丘上面にて明確に判断でき、上部埋土は赤褐色砂質土であった。

埋葬施設の掘形は南北方向に長い隅丸長方形のや

や楕円気味な形を呈しており、長軸約4.2m、短軸約2.3mである。短辺は南側の方がやや長い。掘形中央に幅約0.55m、長さ約2.1mの割竹形木棺の痕跡が認められた。この木棺は木口板が側板よりも外側に張り出す形態であることが確認できた。木棺は南木口側が北側よりもやや幅広く、深さも南木口側

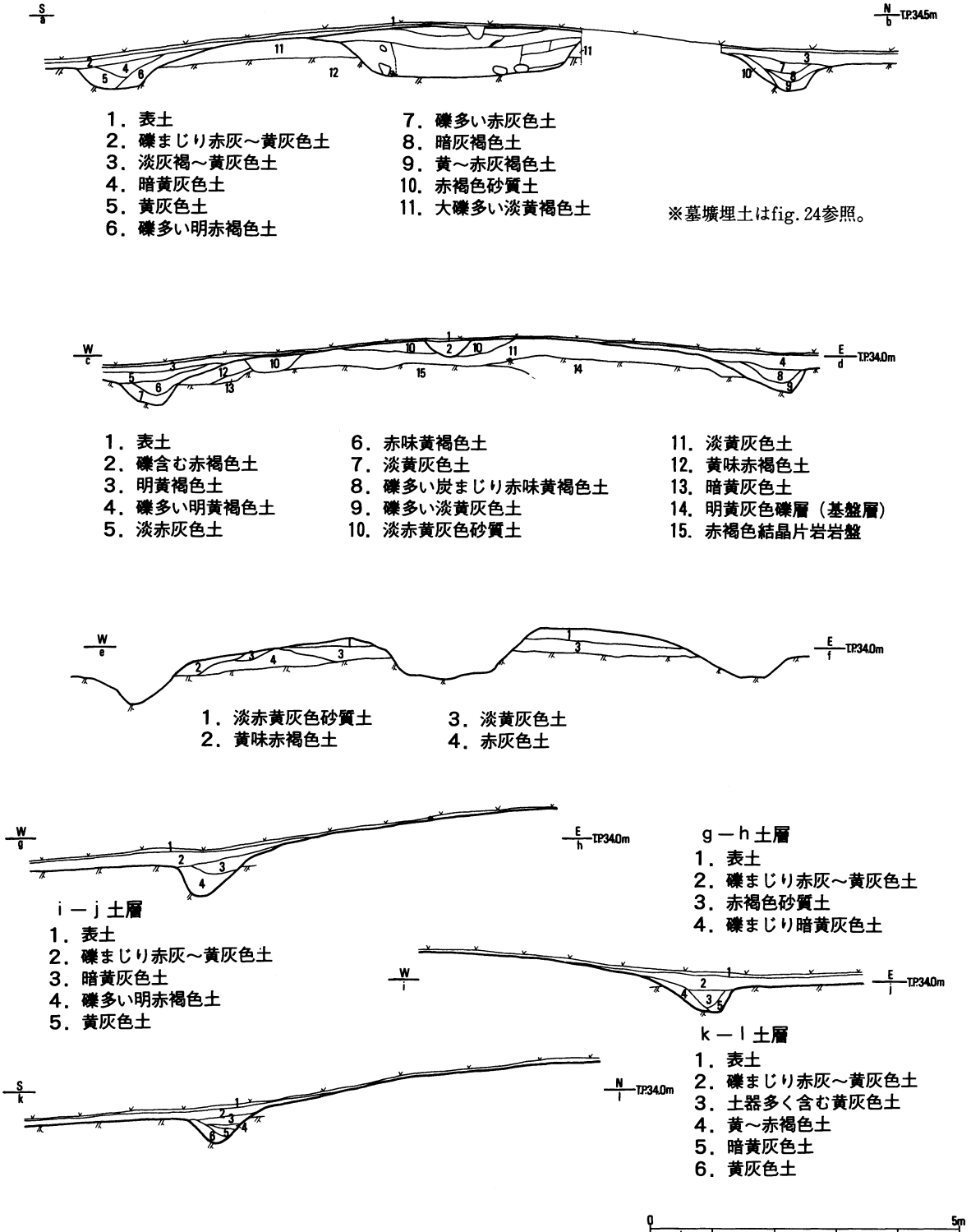


fig. 22 3号墳墳丘および周溝土層断面図 (1:100)

が深いものである。南木口外面には黄灰色の粘土が巻かれていたが、北側木口にはそのようなものは存在しなかった。

木棺側板部の外側を中心に礫が認められた。礫は底面と北木口側には認められなかった。木棺内の調査中に礫の出土がなかったため、木棺上部にも礫は用いられていなかったと考えてよい。したがって礫郭のようなものではないといえる。礫は南木口側に近づくほど大きなものを用いている。なお、南木口には大礫の下に5 cm内外の小礫を詰めていた。

木棺内には鉄刀1本、剣1本、蛇行剣1本、蕨手刀子1点、刀子2点、曲茎刀子（後述）1点などの鉄製品のほか、勾玉1点、白玉数点などの装身具が認められた。鉄刀は切っ先を南側に向けるものであるが、剣類はそれを北側に向けていた。蕨手刀子はその他の鉄製品類よりも出土レベルが若干高いがその意味するところは不明である。勾玉・白玉は棺内南端近くから出土した。勾玉は東側の礫の隙間から出土しており、位置的には首飾りかどうか若干疑問となる。これら玉類が被葬者の身につけていたものとすればこの被葬者は南枕で埋葬されたことになる。

なお、鉄刀の鏢に相当する位置から釘状の鉄製品が2点出土した。2点とも中央に木質が認められ、板状の木を貫通させていたものと思われる。しかし、これを釘とするには出土点数があまりにも少ないため用途については不明とせざるを得ない。

木棺外の掘形内にも副葬品が認められた。鉄剣1本、鉄鎌1点、鉄鏃14本である。これらは木棺の外部に認められた礫の上面に薄く土を覆った後に据えられたものと考えられ、この高さで埋葬時に何らかの行為が行われたことを示す。鉄剣と鉄鎌は掘形東の北端に寄せられており、鉄鏃は掘形東の中央に位置する。鉄鏃の先端は揃って出土した。鉄鎌は刃を上に向けて出土しており、鉄剣と同じ位置から出土している。

なお、埋葬施設の埋土最上層を中心に須恵器大甕・高坏、土師器高坏などの土器類が破碎されたと思われる状態で見出された状態で見出された。特に須恵器大甕はかなり細かい破片となっており、意図的な破碎であるものと考えられる。なお、須恵器大甕は埋葬施設最上層のみでなく墳丘全体に散乱していたが、

その出土が多いのは埋葬施設上であった。

3. 出土遺物 (fig.26~29)

須恵器 墳丘上および周溝内から出土しており、埋葬施設内からは出土していない。ただし、墳丘上のものには墓壙上面からの出土のものを含んでいる。

墳丘上のものには、高坏 (88・89)・大甕 (92) がある。周溝出土のものには坏身 (87)、コップ形のもの (86)、壺 (90)、樽形甕 (91) がある。坏身・高坏・壺・甕およびコップ形のは、大きくは田辺編年のTK216型式併行に相当しようが、樽形甕はTK208型式と見做すのが妥当であろう。

土師器 土師器には、高坏がある (81~85)。墓壙上面からの出土が顕著で、先述の須恵器高坏や大甕と同じように墓壙上祭祀として用いられたものと考えられる。口縁端部を若干つまみ上げるもので、脚部は挿入して接合するものである。高坏は5個体分以上存在するようである。

鉄刀 墓壙内から1本出土している (61)。長さ93cmの長大なものである。茎部分には、2箇所が目釘穴がある。茎尻は抉るように面をとる。関は片関で直角である。刀身部には木質の痕跡がある。

鉄剣 蛇行剣1本を含めて3本出土している。蛇行剣 (58) は、長さ34.5cmである。茎部は剣身に近

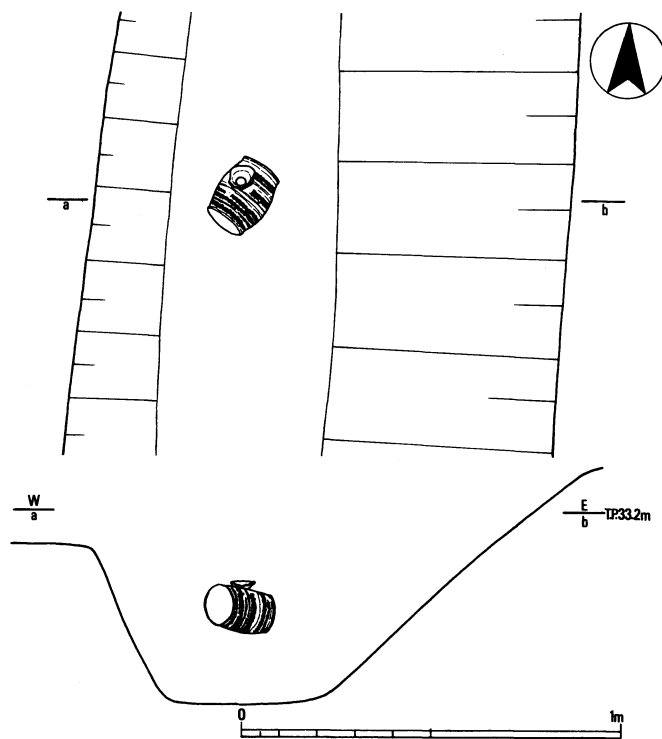


fig. 23 3号墳西周溝内樽形甕出土状況図 (1 : 20)

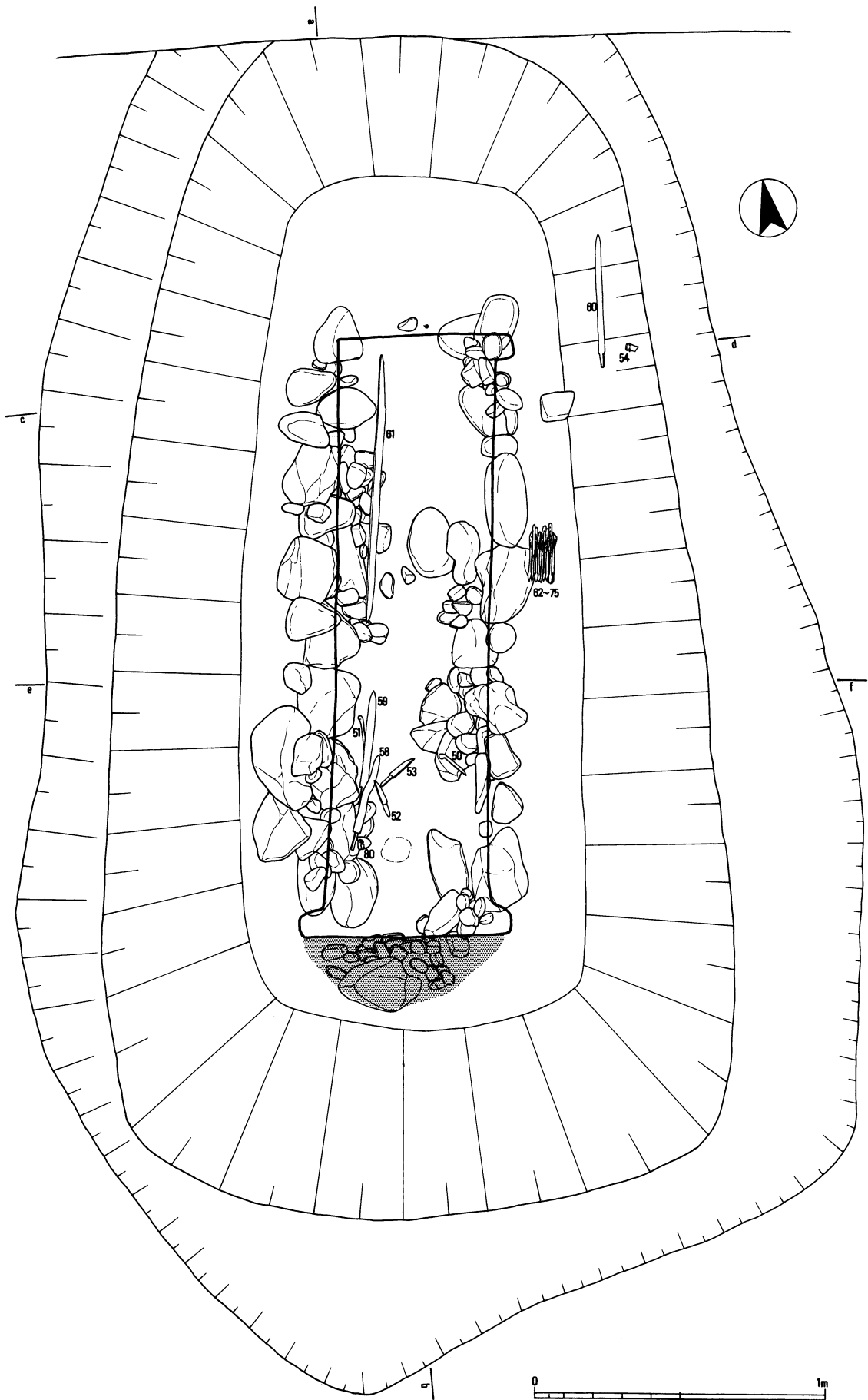
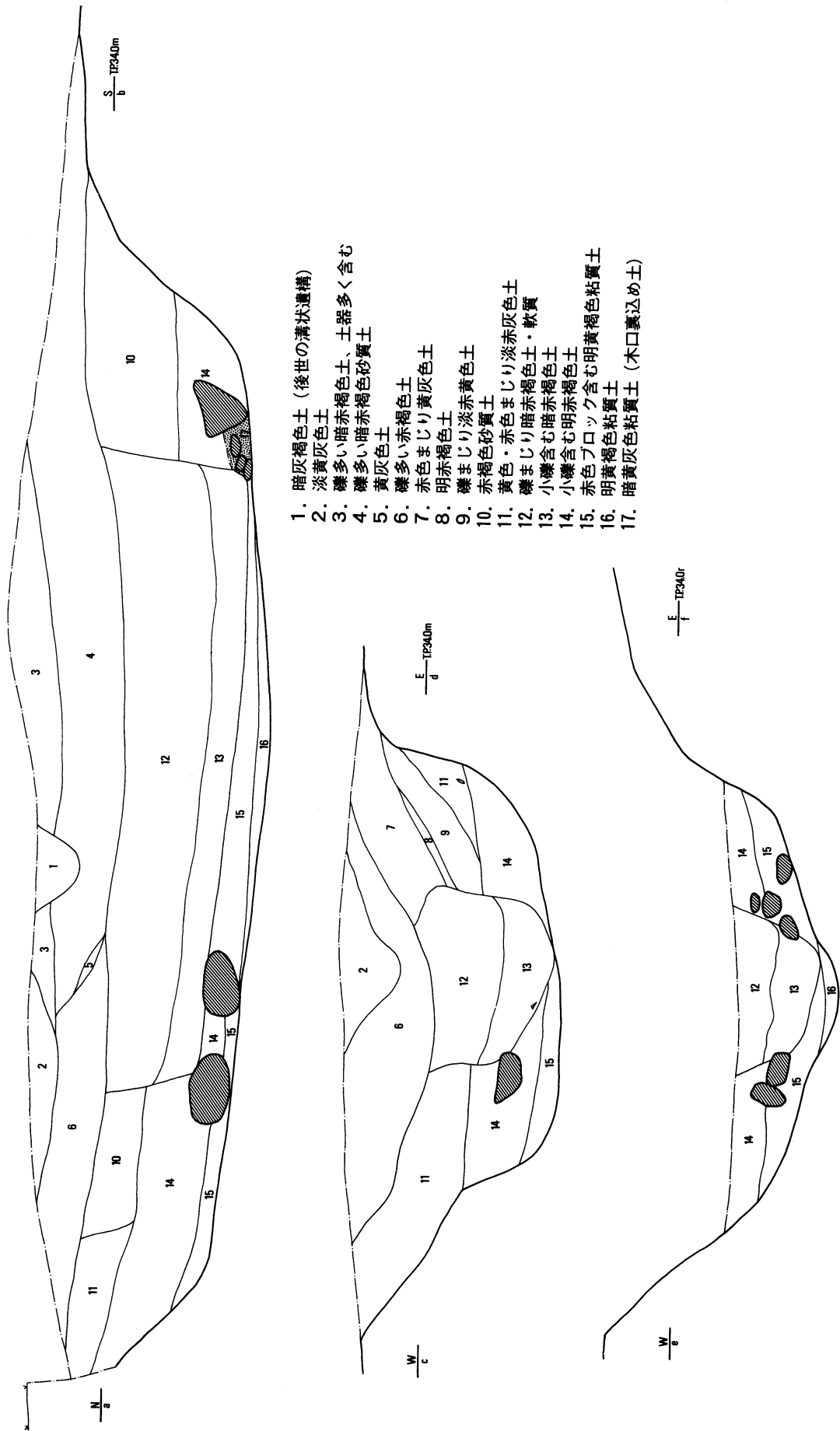


fig. 24 3号墳埋葬施設平面図
(1 : 20)



1. 暗灰褐色土 (後世の溝状遺構)
 2. 淡黄灰色土
 3. 礫多い暗赤褐色土、土器多く含む
 4. 礫多い暗赤褐色砂質土
 5. 黄灰色土
 6. 礫多い赤褐色土
 7. 赤色まじり黄灰色土
 8. 明赤褐色土
 9. 礫まじり淡赤黄色土
 10. 赤褐色砂質土
 11. 黄色・赤色まじり淡赤灰色土
 12. 礫まじり暗赤褐色土・軟質
 13. 小礫含む暗赤褐色土
 14. 小礫含む明赤褐色土
 15. 赤色ブロック含む明黄褐色粘質土
 16. 明黄褐色粘質土
 17. 暗黄灰色粘質土 (木口裏込め土)

fig. 25 3号墳埋葬施設土層断面図 (1:20)

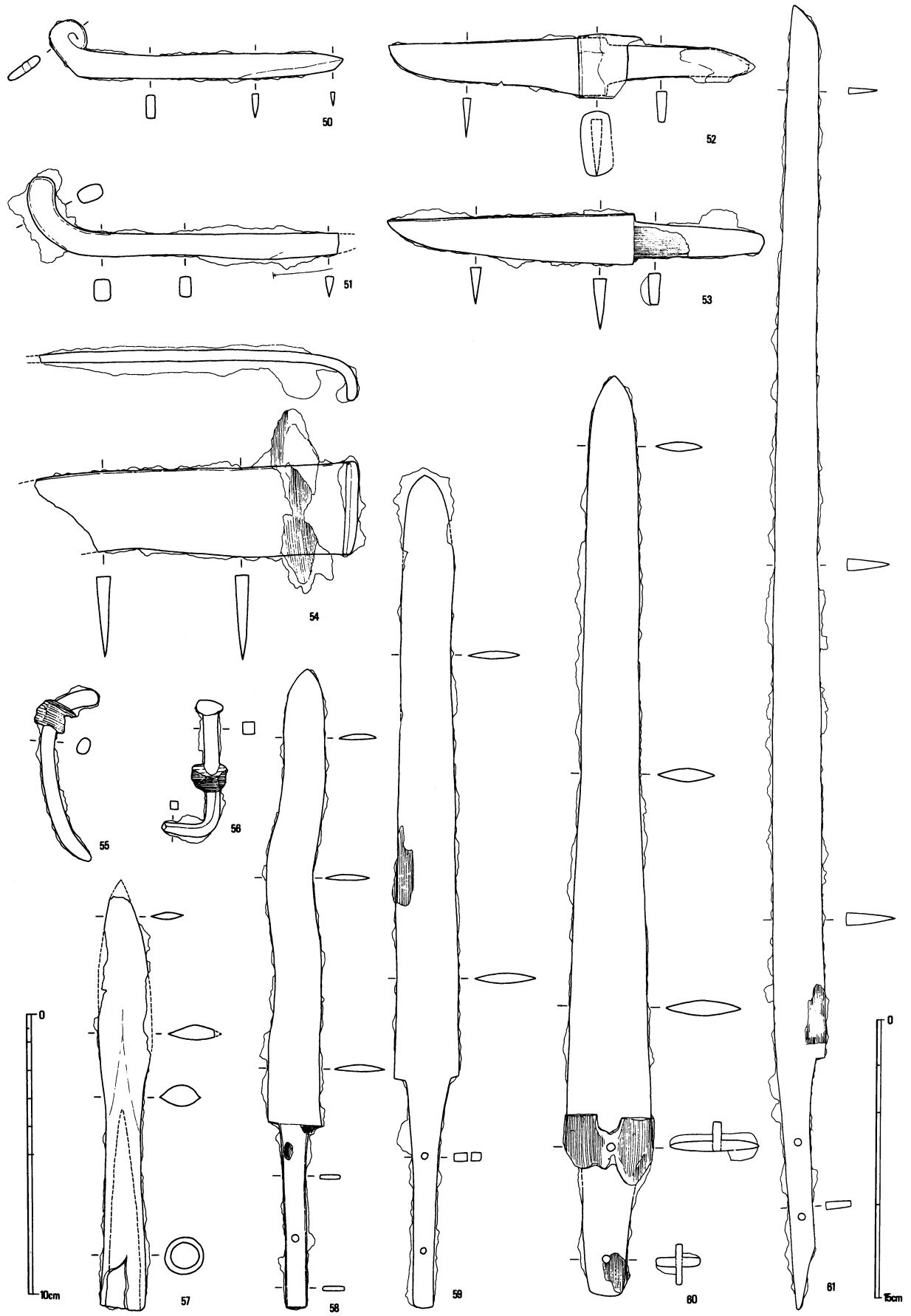


fig. 26 3号墳出土武器・工具その他 (50~56は1:2、57~60は1:3、61は1:4)

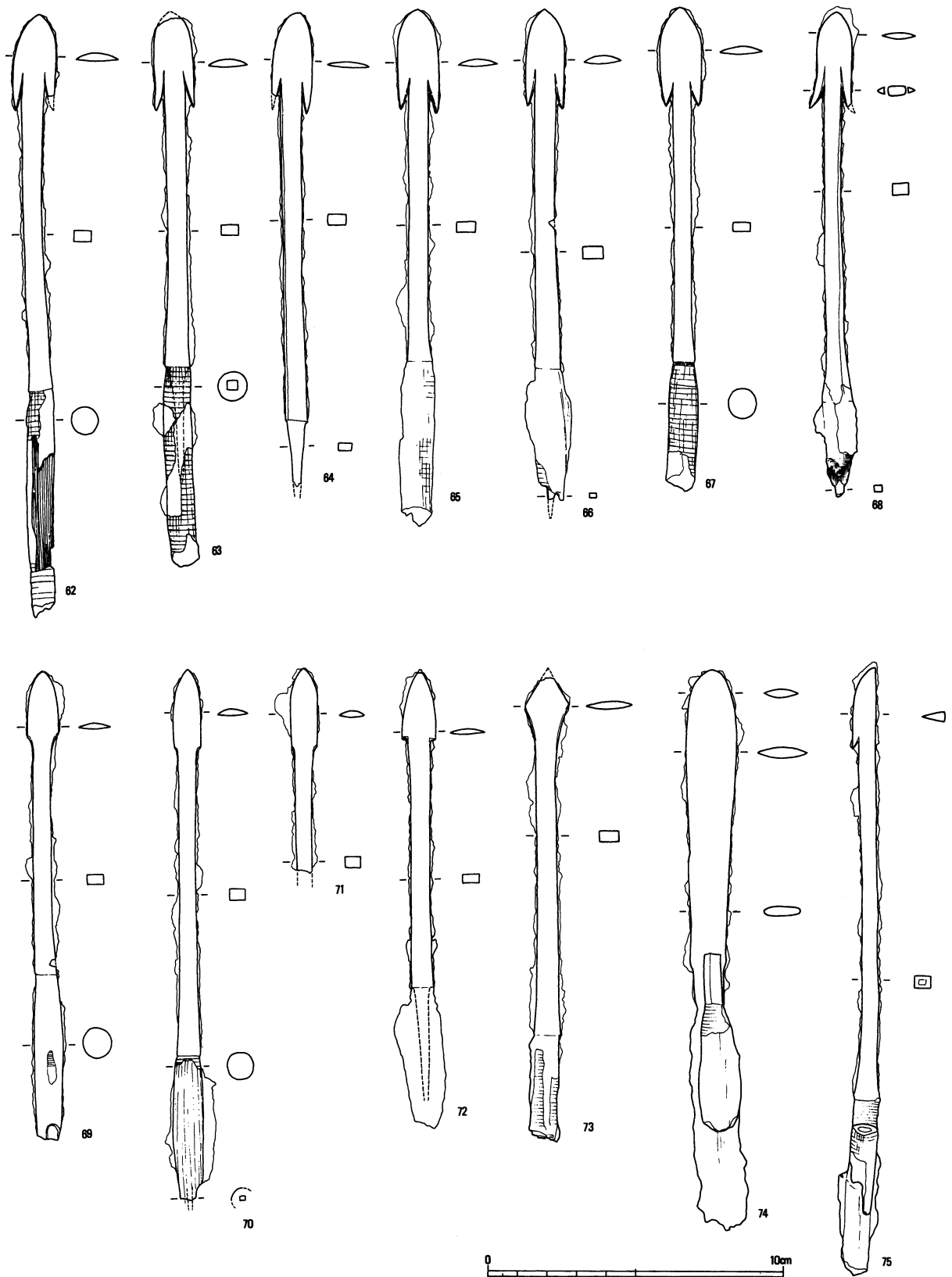


fig. 27 3号墳出土鉄鏃（1：2）

い方は太く、茎尻ほど細くなっている。茎部の目釘穴は1箇所を確認したのみであるが、錆がひどい部分（図面の茎部断面をとった部分）にもう1箇所存

在する可能性もある。関は角関であるが、やや斜めになっている。茎部には木質の痕跡がある。

棺内から出土した剣（59）は、長さ44.6cmである。

茎部には2箇所の目釘穴がある。関は直角であるが両方の関は一直線上にない。刃部には木質の痕跡がある。

棺外から出土した剣(60)は、長さ49.3cmである。茎部には2箇所に目釘が残存している。3号墳を含

めた他の鉄剣に比べ、茎部が短いのが特徴である。関部分には木質が良く残っており、関本体の形態を窺うことができない。

鉄鉢 周溝内から出土している(57・fig.21参照)。残存長14.8cmで小形のものである。

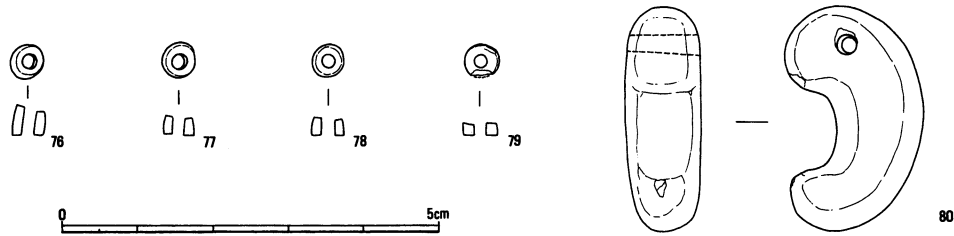


fig. 28 3号墳出土玉額(1:1)

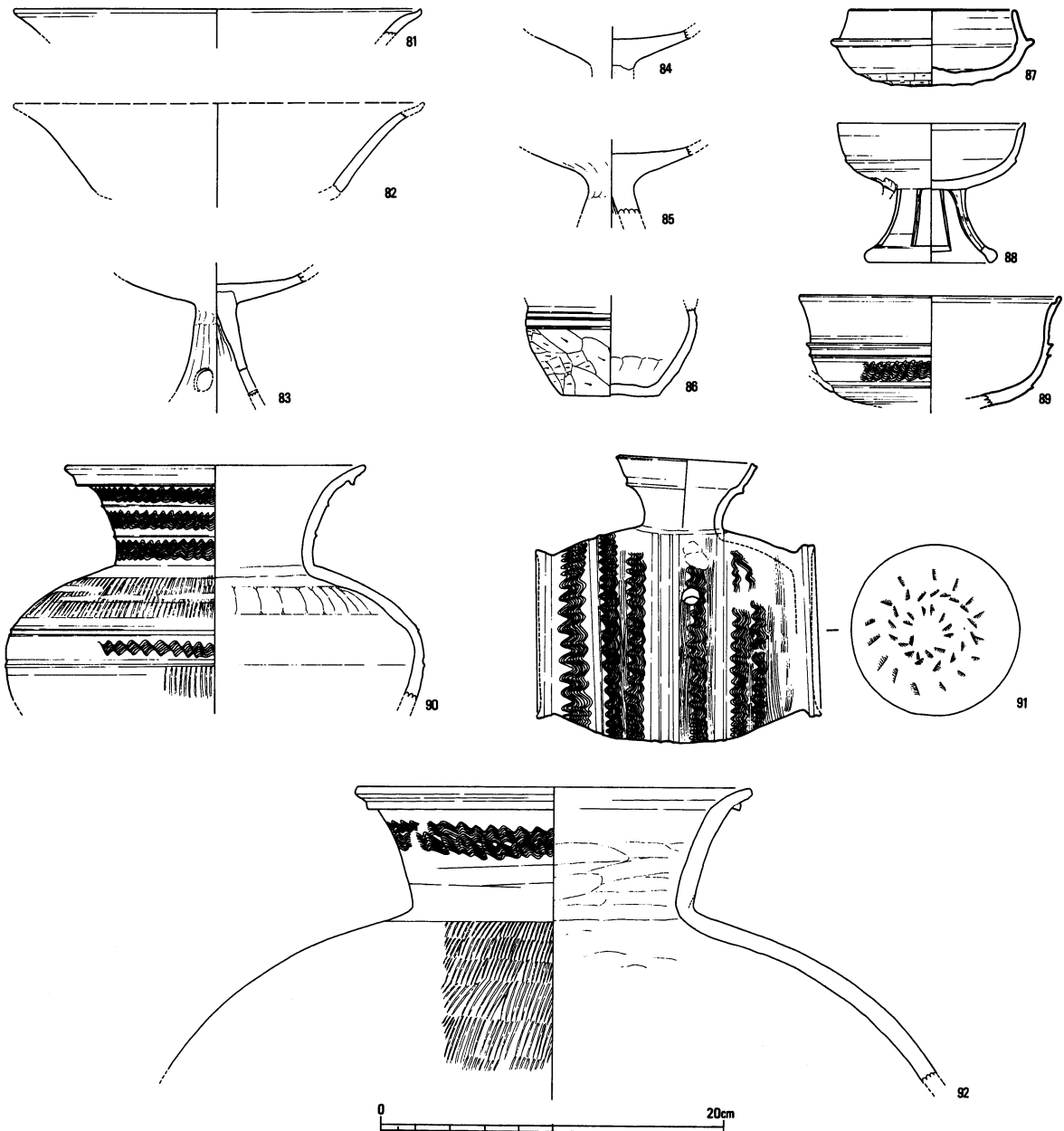


fig. 29 3号墳出土土器(1:4)

刀子 刀子 は合計4点出土している。蕨手刀子1点(50)、曲茎刀子1点(51)を含む。曲茎刀子は京都府小池8号墳⁽⁴⁾出土のものに類似する。三重県内では、大山田村高猿6号墳⁽⁵⁾に類例がある。

鉄鎌 木棺外の剣(60)と同じ位置から出土した(54)。先端は調査中の不注意で欠損してしまった。付け根の部分には縦方向に木質が残っている。先端を上にして出土しており、把手を付けた状態で剣と並べて供えたものと思われる。

鉄鎌 3号墳からは合計14本の鉄鎌が出土した(62~75)。1本の短茎鎌(74)を除けば、全て長頸

鎌の部類にはいる。鎌身部の形状は、短茎鎌は柳葉形、長頸鎌には三角形~小柳葉形・圭頭形・片刃形がある。主体は三角形~小柳葉形で、7本ある。

玉類 白玉(76~79)および勾玉(80)がある。白玉はいわゆるグリーンタフ製のものと考えられる。勾玉は目瑠製である。白玉は現場では5個確認していたが、不注意で1個失ってしまった。

4. 古墳の時期

3号墳からは田辺編年のTK216型式からTK208型式古段階までの須恵器が認められる。このことから古墳の築造年代はTK208型式古段階と考えられる。

5. 4号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

4号墳は尾根稜線上に位置する。調査前の墳頂部は標高約34.6mで、西側に若干の段差が認められた

ため古墳と判断したものである。墳丘は径約12mかと思われた。

調査の結果、1辺約9mの円墳と考えられた。概

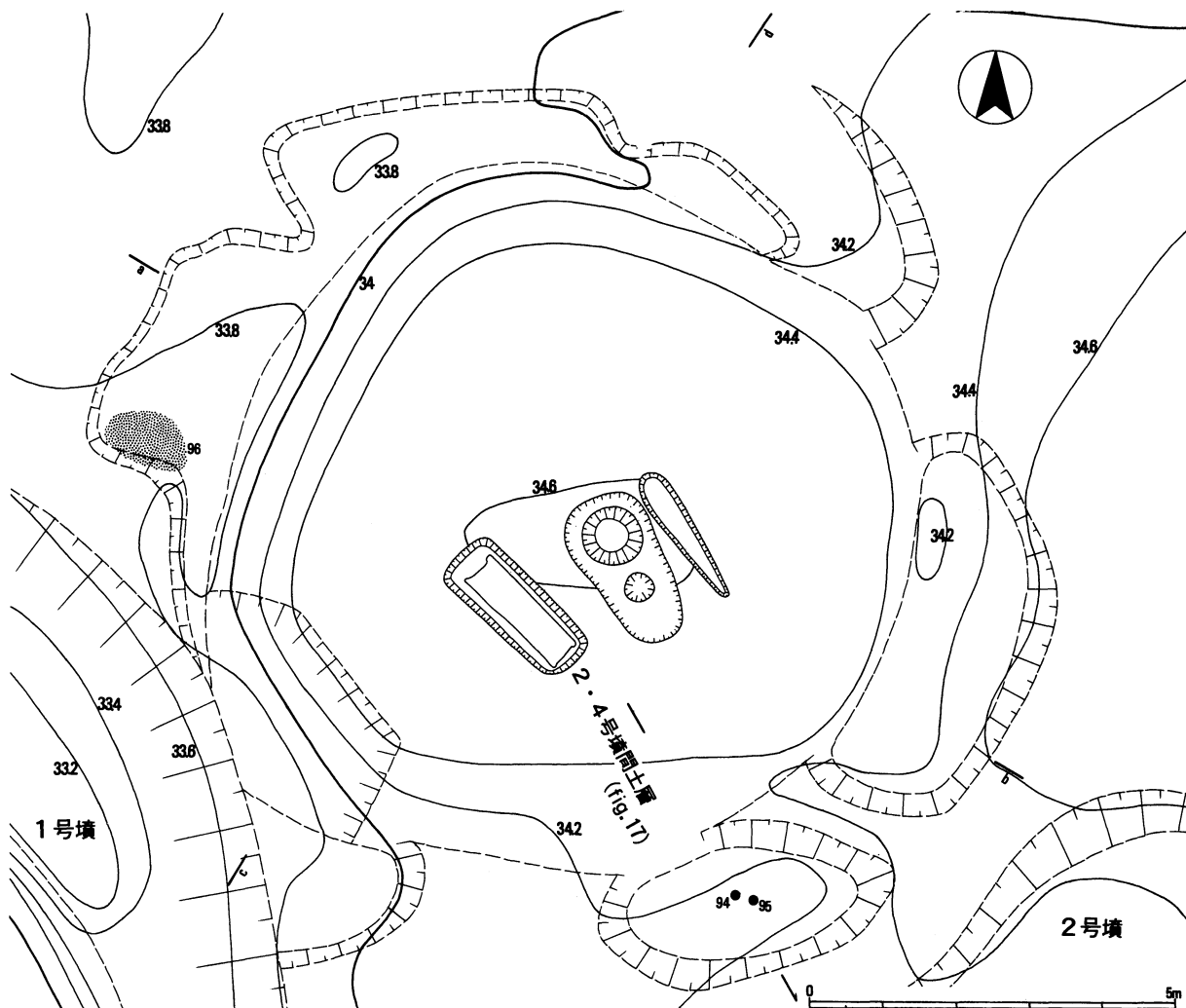


fig. 30 4号墳平面図(1:100)

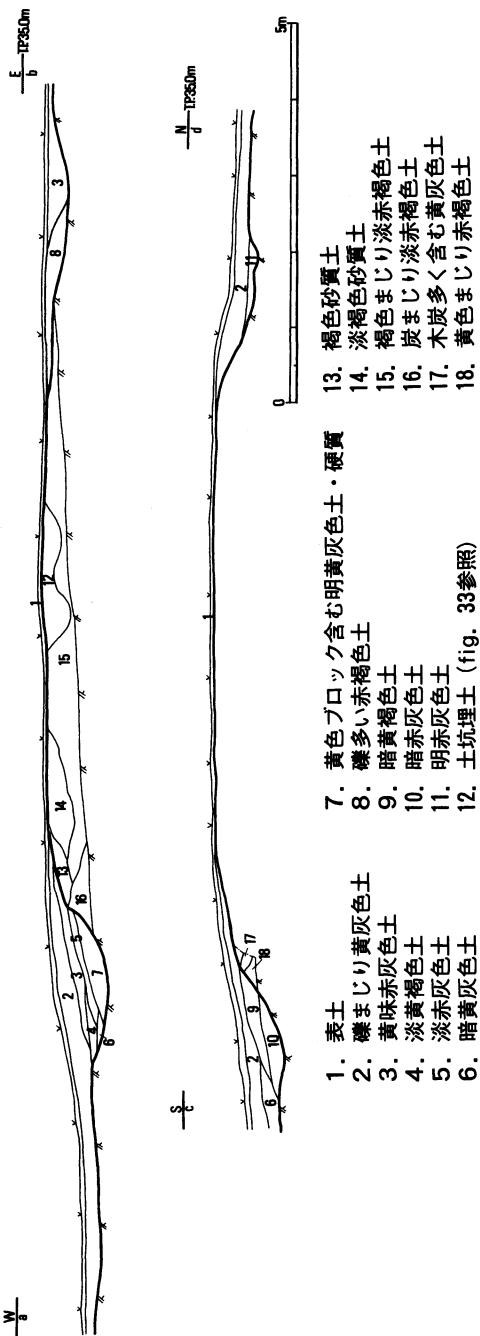


fig. 31 4号墳墳丘および周溝土層断面図 (1:100)

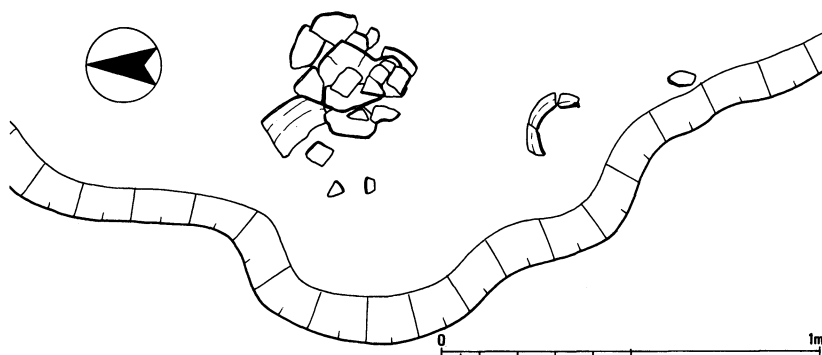


fig. 32 4号墳西周溝内土器出土状況 (1:20)

報の時点では方墳の可能性を最も大きく考えたが、墳丘の基底線が一定しておらず、かなりいびつな形状であることや、隣接する2号墳との墳丘構築手法の類似から、不整形な円墳と考えるのが最も妥当であろう。

墳丘 墳丘は基盤層の削り出しと盛土によって構成されている。しかし、標高の高い東側には明確な盛土は確認できない。これは後世の削平によるものである可能性が最も高いのであろう。盛土は黄灰色砂質土層と赤灰色砂質土によって構成されており、1号墳と同様、盛土の下には薄い木炭層が認められた。なお、墳丘の南西隅は1号墳の周溝によって削り取られていた。

周溝 周溝は墳丘の外周を均一に巡るものではなく、部分的に深くなったり浅くなったりしている。特に東側では2か所が陸橋状になっており、この点で2号墳と類似した状況が見出される。周溝は南側には明確に認められない。しかし、1号墳の周溝が重なる部分では周溝のつづきと思われる落ち込みが確認でき、南側にも陸橋状の部分が存在すると見做すことも可能である。南東に相当する周溝は、先述のように、2号墳の周溝が迂回して破壊をさけている状況が認められる。このことから、4号墳が2号墳に先行することは確実である。西側周溝の上層からは土師器甕が1個体出土している (fig.32)。また、東側南の陸橋状部分の西に相当するところからは須恵器蓋・坏がそれぞれ1個体出土した。

2. 埋葬施設

埋葬施設はそれらしきものが2基確認できた。埋葬施設1は墳丘の中央やや東寄りにある。削平を受けて基底部のみが残ったものようで深さ約0.1m

確認できたにとどまる。長さ約1.0m、幅約0.45mの船底状のものである。底面には淡青灰色の粘質土を敷いていた。出土遺物は全く確認できなかった。

埋葬施設2は墳丘の中央から南西方向にずれたところに位置する。墓壙は長さ約2.2m、幅約0.85mと小形で、その中に長さ約1.7m、幅約0.45mの組合

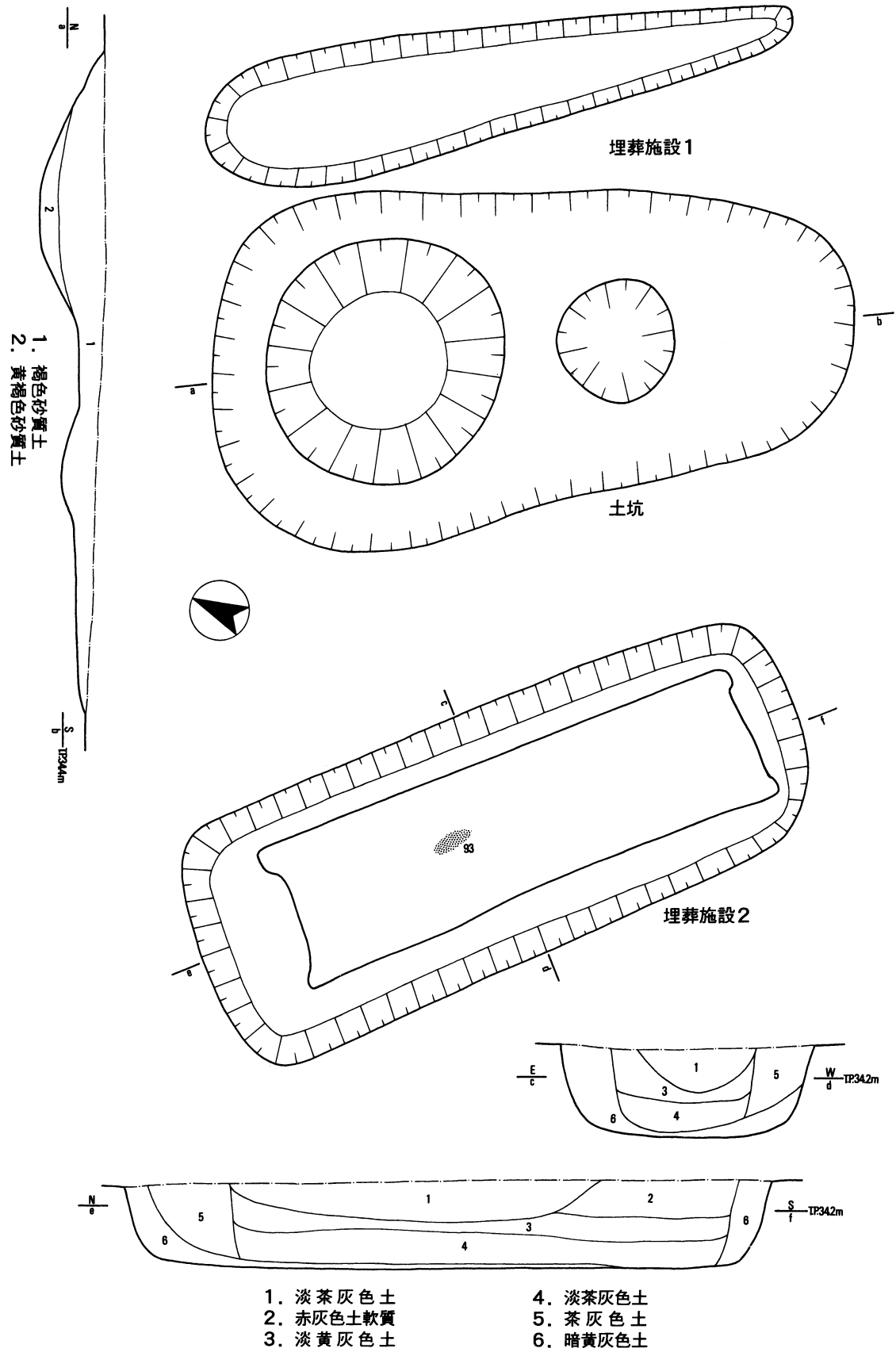


fig. 33 4号墳埋葬施設他 平面・土層断面図 (1 : 20)

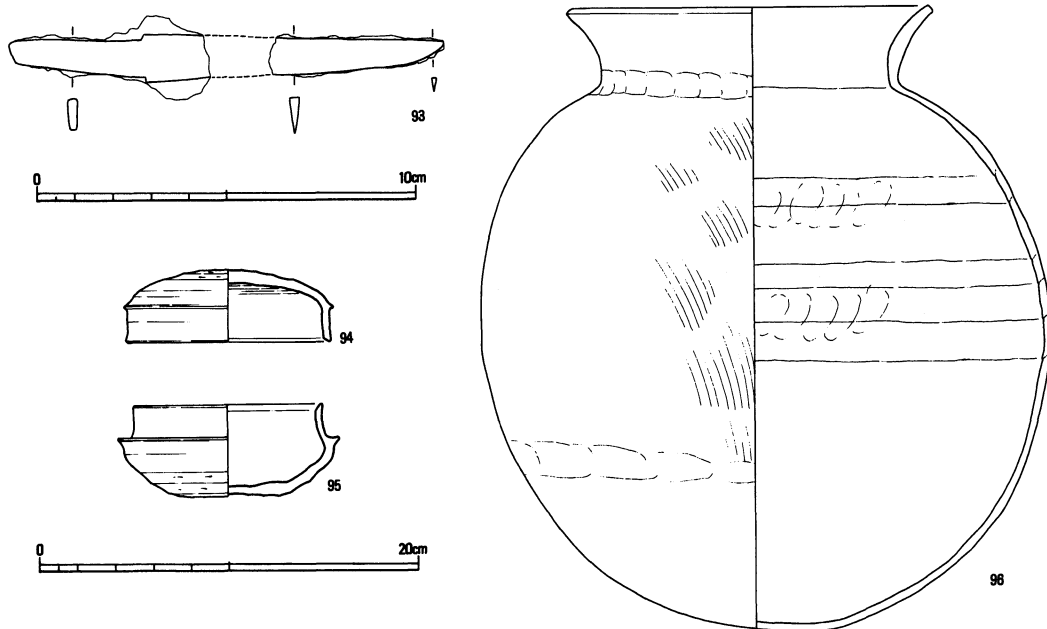


fig.34 4号墳出土遺物 (93は1:2、他は1:4)

式木棺の痕跡を確認した。木棺痕跡の中央あたりから刀子1点が出土した。この埋葬施設はレベル的には先述の木炭層のさらに下から確認できたものであり、埋土は1号墳下部遺構に存在していた石組墓4と類似している。このことから当埋葬施設は4号墳に直接伴うものではなく、4号墳構築以前に造られた埋葬施設である可能性を考える必要がある。

3. 出土遺物 (fig.34)

4号墳出土の遺物には、鉄製品では刀子、土器類では須恵器・土師器がある。

刀子 刀子は埋葬施設2から1点出土した (93・fig.33参照)。中央部は欠損している。

須恵器 須恵器には坏身・坏蓋がある (94・95)。これ以外に坏身かと思われる破片が1個体分ある。両者とも焼成は極めて軟質で、色調も淡青色系統でよく似ている。田辺編年のTK23型式に併行するものと見做せよう。

土師器 土師器には、西側周溝から出土した甕 (96) がある。表面はかなり剥離していて調整がよく判らないが、外面には単位の粗いハケメが施されている。

4. 古墳の時期

4号墳の時期は、出土した須恵器から田辺編年のTK23型式併行と考えられる。

6. 5号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

墳丘5号墳は丘陵尾根稜線上からかなり南へ下がった地点に構築されている。調査前の標高は約32.8mである。調査前の測量時点では若干の高まりが認められたため、古墳と判断したが、かなり怪しいものであった。

調査の結果、1辺約9.5mの方墳であることが確認できた。墳丘の南側約1/3は調査区外である。墳丘は盛土と基盤層削り出しによって構築されているが、盛土はほとんど認められない。4号墳と同様

後世の削平と見做すのが妥当であろう。

周溝 周溝は、外側の掘削は明瞭であるものの、墳丘側はかなり不鮮明であり、3号墳の周溝とは様相が異なっている。周溝は南側ほど掘削規模が浅く、墳丘南端には巡らしていないものと考えられる。周溝内からは須恵器坏身と須恵器壺がそれぞれ1点ずつ出土した。須恵器坏身は1号墳の調査中に出土した破片と接合しており、1号墳の構築にあったって5号墳を若干削平したのと考えられる。

2. 埋葬施設

埋葬施設は確実なもの1基、不明確なもの1基を確認した。それぞれは平行して構築されている。

埋葬施設1 埋葬施設1は北側に位置するものである。長さ約3.9m、幅約1mの掘形内に長さ約2.6m、幅約0.5mの組合式木棺痕跡が認められた。主軸はほぼ東西方向を向く。掘形内には大きいもので約0.4mの礫を置いているが、3号墳のように棺の側板の周囲を密に詰めるものではなく、まばらである。棺の両木口上部に相当する位置からは礫が認められ、意識的に置いたものと考えられる。

棺内からは鉄剣1本、刀子1点、鉄鏃17本が出土した。装身具類は一切認められなかった。剣は切っ先を西に向けていた。鉄鏃は棺内の中央から西にか

けて認められる。鉄鏃には、鉄剣の刃の北に接して出土したもの、中央部にかたまって出土したもの、散乱した状態で出土したもの、の3者があり、前2者は棺内に据えられたもの、後者は棺の上に置かれていたものと考えられよう。刃の方向は鉄剣の脇から出土したものを除いて東を向いているものが多い。

なお、棺外の北側西寄りからは鉄鏃が3本まとまって出土した。これらは刃を西に向けていた。この3本の鉄鏃はそれぞれ刃部の形態が異なるものであった。

埋葬施設2 埋葬施設2は埋葬施設1の南側に隣接して存在している。墓壙は長さ約3.5m、幅約1.2mの長楕円形である。墓壙内からは遺物は全く出土しなかったが、墓壙の南側に接して鉄刀1本、鉄鏃3本が出土した。これらの遺物は現表土直下から出

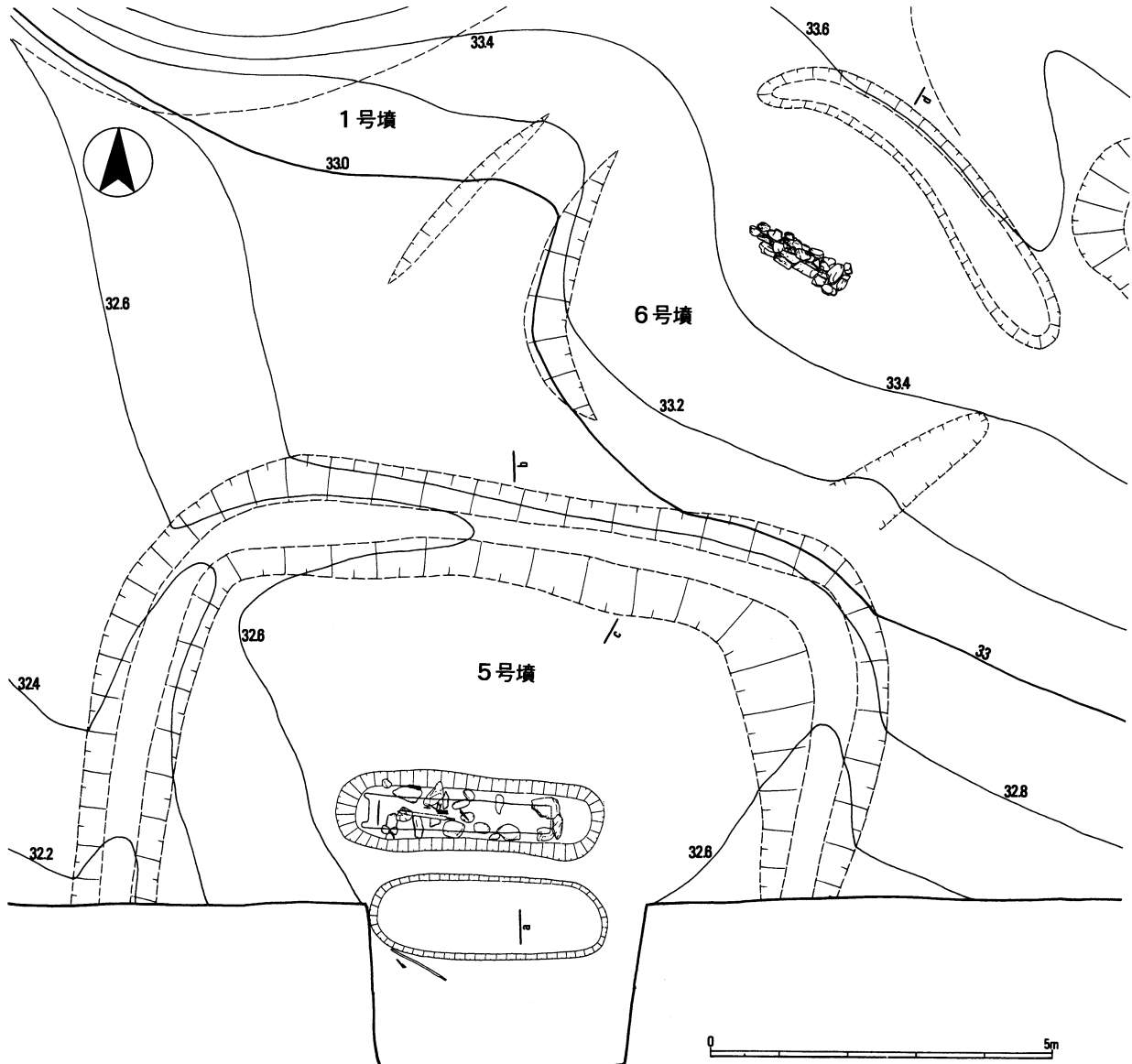


fig. 35 5・6号墳平面図 (1:100)

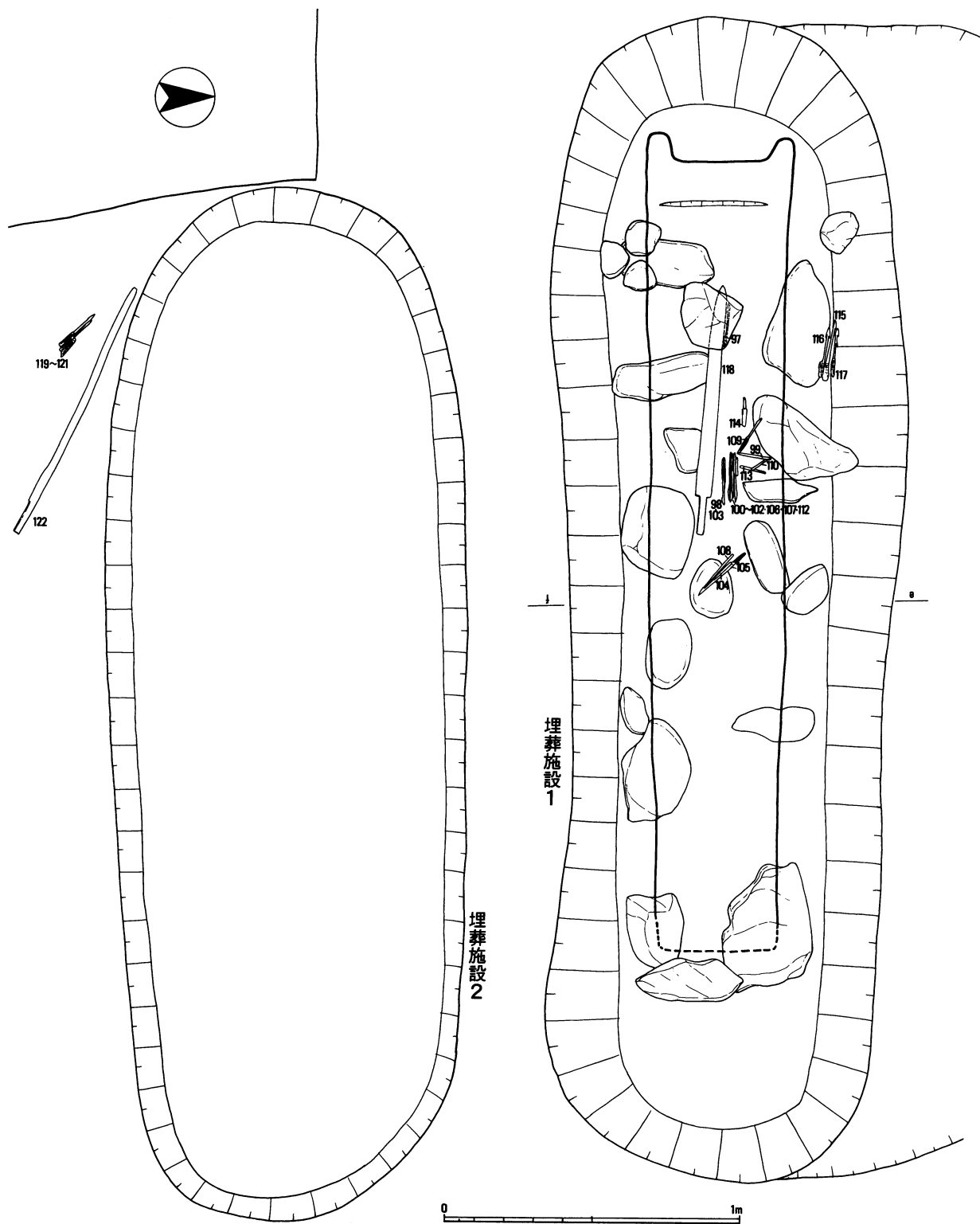


fig. 36 5号墳埋葬施設平面図 (1:20)

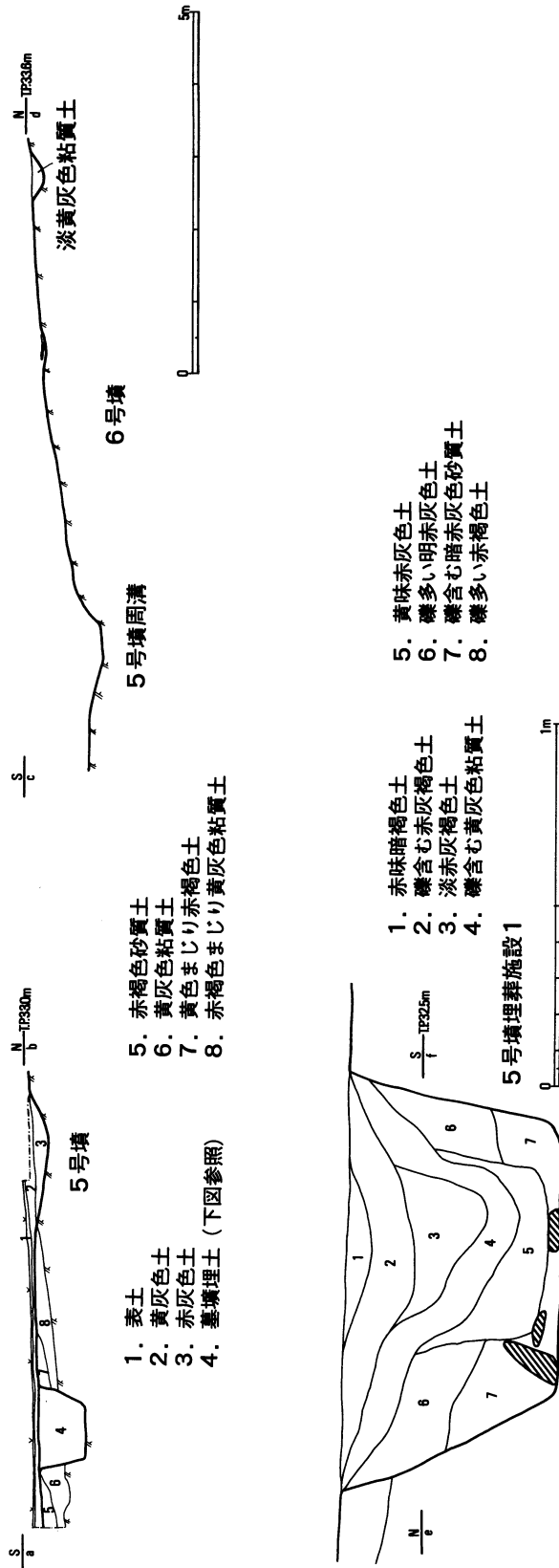


fig. 37 5・6号墳墳丘周溝断面および5号北側埋葬施設土層断面図

(墳丘断面 1:100、埋葬施設 1:20)

土したもので、開壘時に動いてしまっている可能性が高い。この遺物出土状況からは埋葬施設2は開壘時にかなり削平されているものと考えられる。このことから、5号墳は当初明確な墳丘を有していたものと考えられよう。

3. 出土遺物 (fig.38~39)

埋葬施設内から出土した鉄器類と周溝から出土した須恵器2点が出土している。

埋葬施設1に伴う遺物 鉄剣1本・刀子1点・鉄鏃20本がある。

鉄剣 鉄剣(118)は長さ82cmの長大なものである。茎部には2箇所の目釘穴がある。

刀子 刀子(114)は残存長11.5cmである。日常で使用していたものらしく、かなり擦り減っている。

鉄鏃 鉄鏃は、17本は棺内から(97~113)、3本は棺外から(115~117)出土した。棺内出土の鉄鏃は全て片刃形のものであるが、棺外出土のものは三角形~小柳葉形・片刃形・腸挟りを持つ三角形の3形態が認められる。111は茎部の木質が良く残っており、矢柄への装着方法がわかる。

埋葬施設2に伴う遺物 鉄刀1本・鉄鏃3本がある。

鉄刀 鉄刀(122)は残存長95cmの長大なものである。地表近くに埋まっていたためか、中央やや下で折れ曲がっている。茎部には木質が残り、2箇所の目釘穴が認められる。

鉄鏃 鉄鏃(119~121)は、全て関の丸い三角形~小柳葉形を呈するものである。

須恵器 須恵器には坏身(123)および壺(124)がある。周溝内から出土したもので、どちらの埋葬施設に伴うものかは不明である。壺は遽かも知れない。田辺編年のTK208型式新段階からTK23型式併行と考えられる。

4. 古墳の時期

5号墳の時期は、周溝内から出土した須恵器から田辺編年のTK208型式からTK23型式併行かと考えられる。鉄鏃の形態からも、3号墳よりは後出するものと考えられよう。

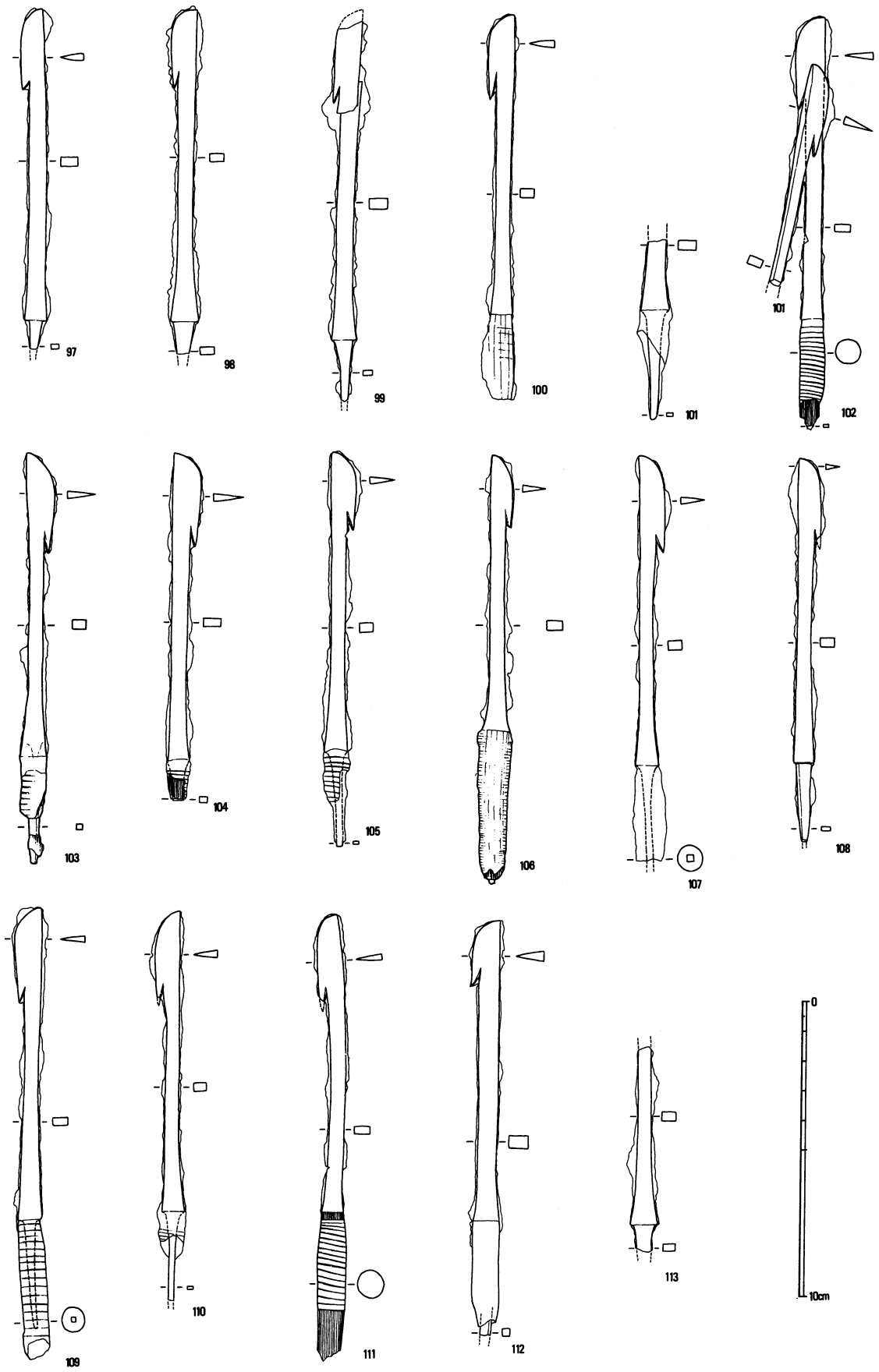


fig. 38 5号墳埋葬施設1出土鉄鎌 (1 : 2)

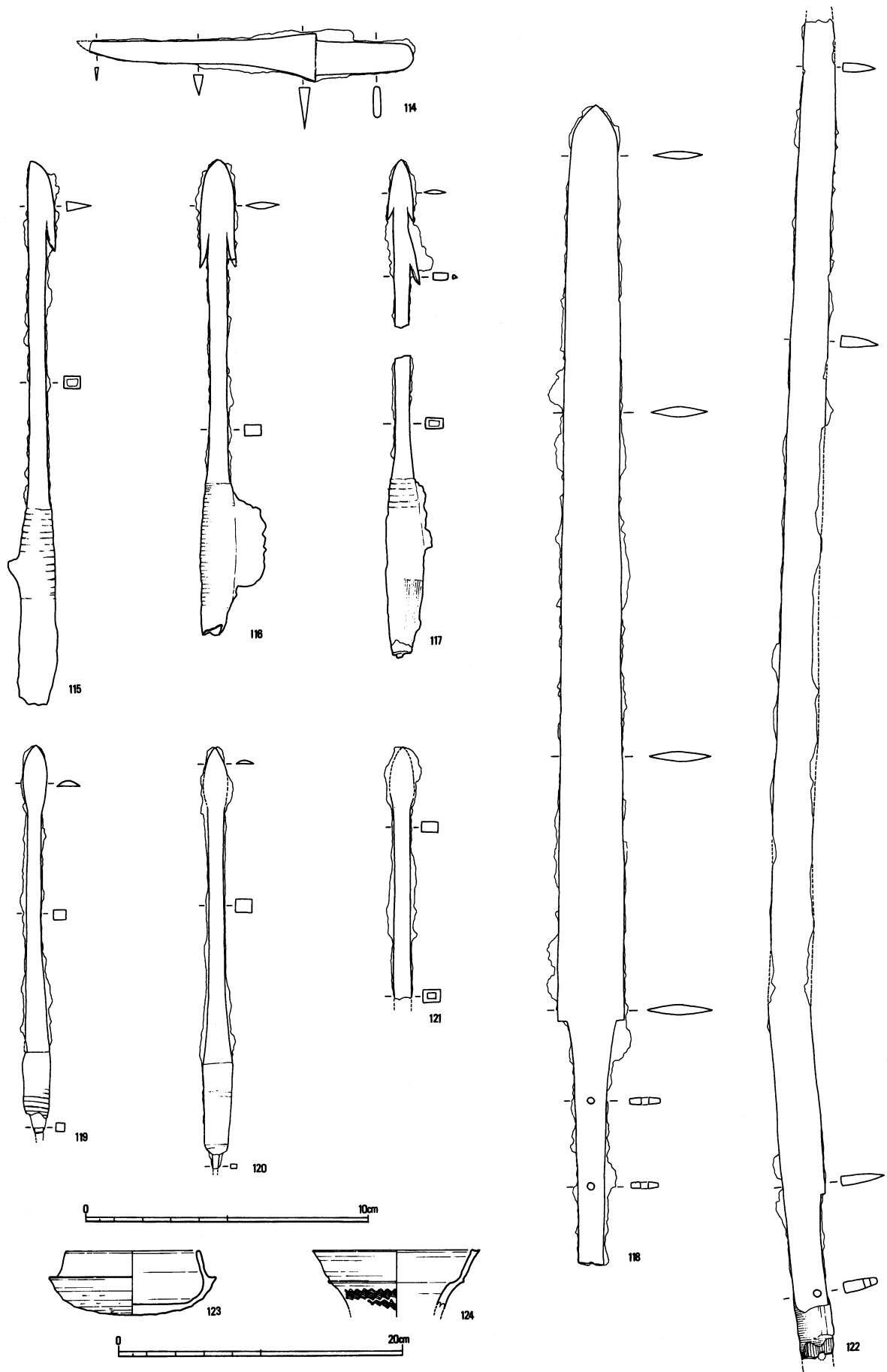


fig. 39 5号墳埋葬施設1・2他出土遺物 (114~117、119~121は1:2、他は1:4)

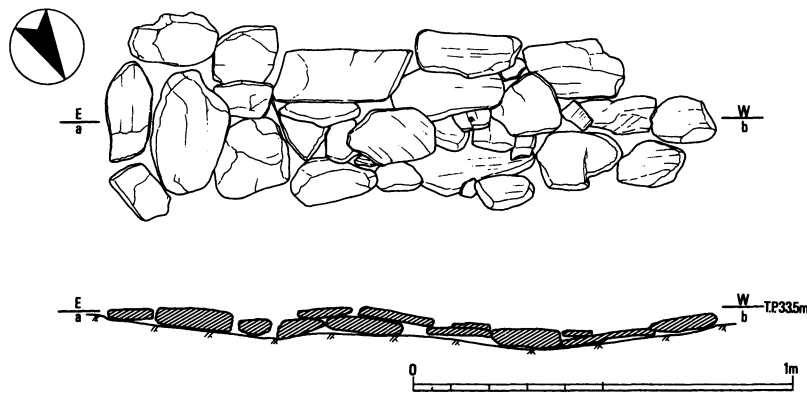


fig.40 6号墳埋葬施設平面・断面図 (1:20)

7. 6号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

墳丘 6号墳は南北約6.5m、東西約6.5mの方墳と考えられる。墳丘は削平を受け、盛土は全く残っていない。周溝は北・東・西側に認められ、それぞれの辺の交点に当たる部分は開口部状になっている。これは遺構基盤層の削平状況を加味しても、辺の交点部分が他よりも浅くなっていることと見做される。

周溝 周溝は、北側および東側は深さ約0.2mの浅いものであり、西側のみ墳丘削り出し状で深さ約0.4mである。墳丘の南は5号墳周溝に接しているようである。5号墳の周溝と切り合い関係はないようである。

2. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘の中央やや北寄りで1基確認できた (fig.40)。削平のため基底部分のみ残存してい

たが、石組のものであることが確認できた。主軸は東西方向である。長軸約1.65m、短軸の東側約0.55m、西側約0.4mである。用いている石は全て結晶片岩の偏平なものである。検出したものは全て敷かれた状態であり、立てられた石は認められなかった。石組の下には若干の掘り込みが認められたが浅く、石組の構築に伴うものと考えられる。

3. 出土遺物

6号墳に伴う遺物は全く確認できなかった。

4. 古墳の時期

6号墳の時期は出土遺物が全くないので不明と言わざるを得ない。5号墳と隣接していることから、田辺編年のTK208型式～TK23型式にかけての時期を考えるのが妥当であろう。

8. 7号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

墳丘 7号墳は調査区南西端の斜面に相当し、標高は約31mである。中央は後世の土取りによって破壊されていた。そのため、墳丘は東側の一部分しか確認できなかった。その部分から判断すると1辺約12.5mの方墳であるものと思われる。

盛土は一部のみ確認できたに止まるが、旧表土は確認できなかった。この点では3号墳と類似しているといえよう。

周溝 周溝は辺の中央やや北寄り浅くなってお

り、コーナー部分はかなり明確に掘削を行っている状況が観察された。南側コーナー部分を中心とした周溝上部埋土には礫群が認められた (fig.43) が、規則性は認められなかった。墳丘法面に石があるわけではないので、葺石とも考えにくい。

遺物は周溝内のみで、礫群内と北側コーナー部分に認められた。北側コーナー部分では土師器二重口縁壺が1個体分、周溝の底から出土した。また、S字状口縁台付甕の破片も出土している。須恵器は全く出土しなかった。

2. 埋葬施設

埋葬施設は土取りのため全く確認出来なかった。

3. 出土遺物 (fig.44)

7号墳に伴う遺物は、周溝から出土した土師器類のみである。小形壺・壺・甕がある。壺 (126~129) は二重口縁の形態であり、底部は平底である。嬉野町西野3号墳出土のものと同形態的な類似が認められる。甕 (130~131) はS字状口縁台付甕である。脚部は明瞭な折り返しが認められる。赤塚次郎氏によ

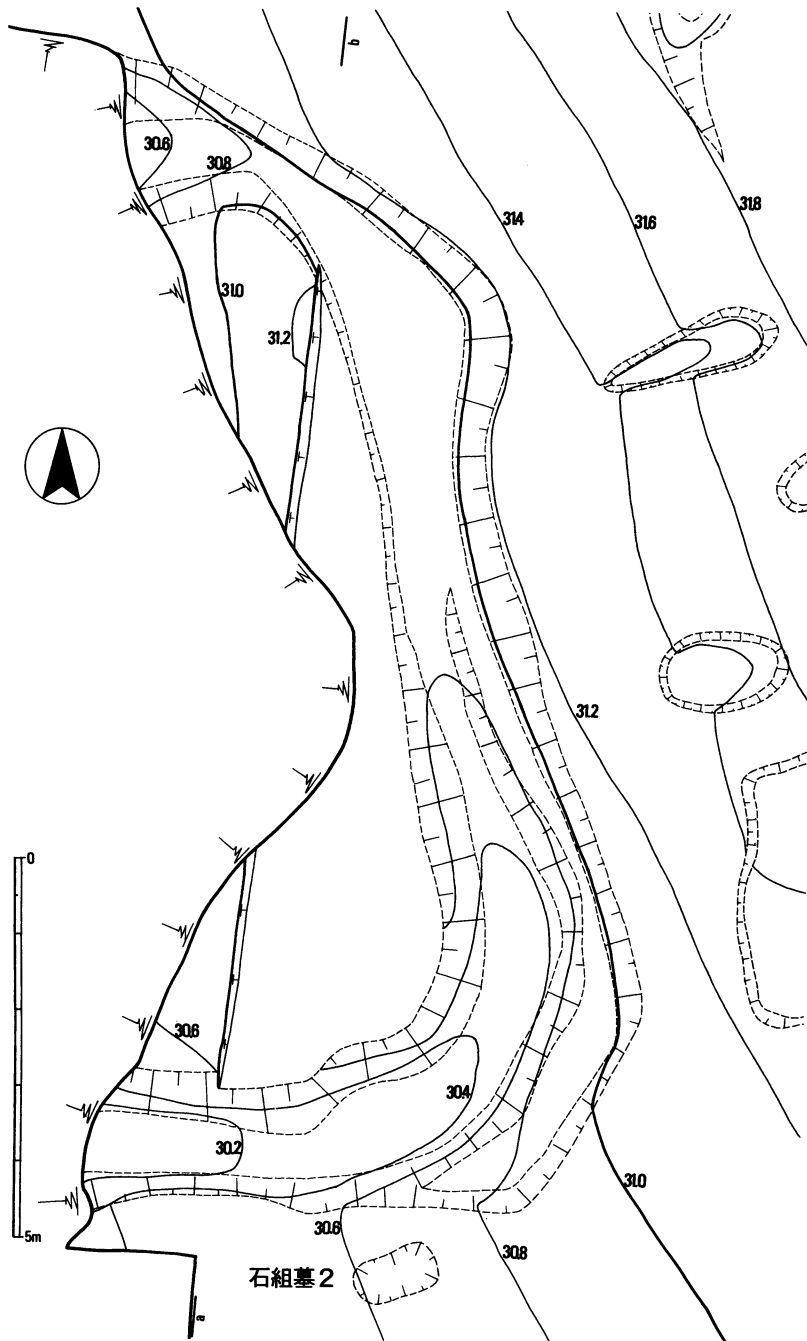


fig. 41 7号墳平面図 (1:100)

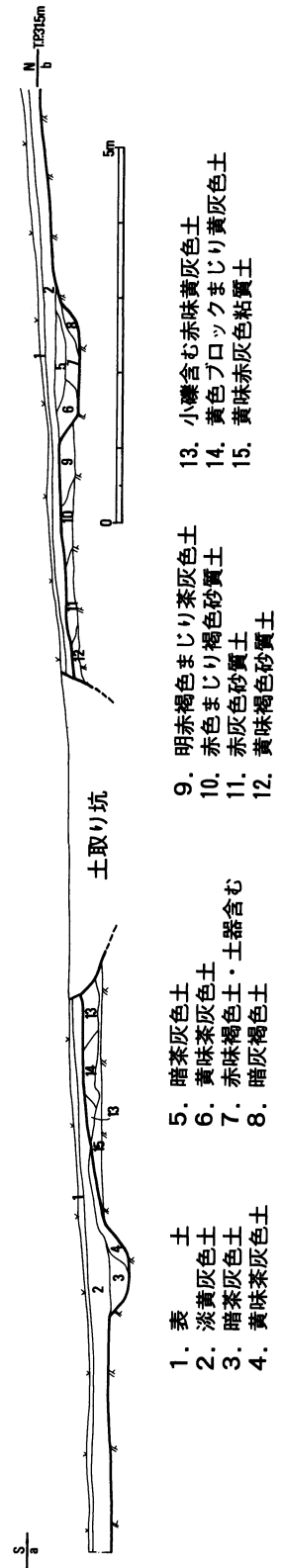


fig. 42 7号墳土層断面図

(1:100)

- | | | | |
|-----------|---------------|----------------|-------------------|
| 1. 表土 | 5. 暗茶灰色土 | 9. 明赤褐色まじり茶灰色土 | 13. 小礫含む赤味黄灰色土 |
| 2. 淡黄灰色土 | 6. 黄味茶灰色土 | 10. 赤色まじり褐色砂質土 | 14. 黄色ブロックまじり黄灰色土 |
| 3. 暗茶灰色土 | 7. 赤味褐色土・土器含む | 11. 赤灰色砂質土 | 15. 黄味赤灰色粘質土 |
| 4. 黄味茶灰色土 | 8. 暗灰褐色土 | 12. 黄味褐色砂質土 | |

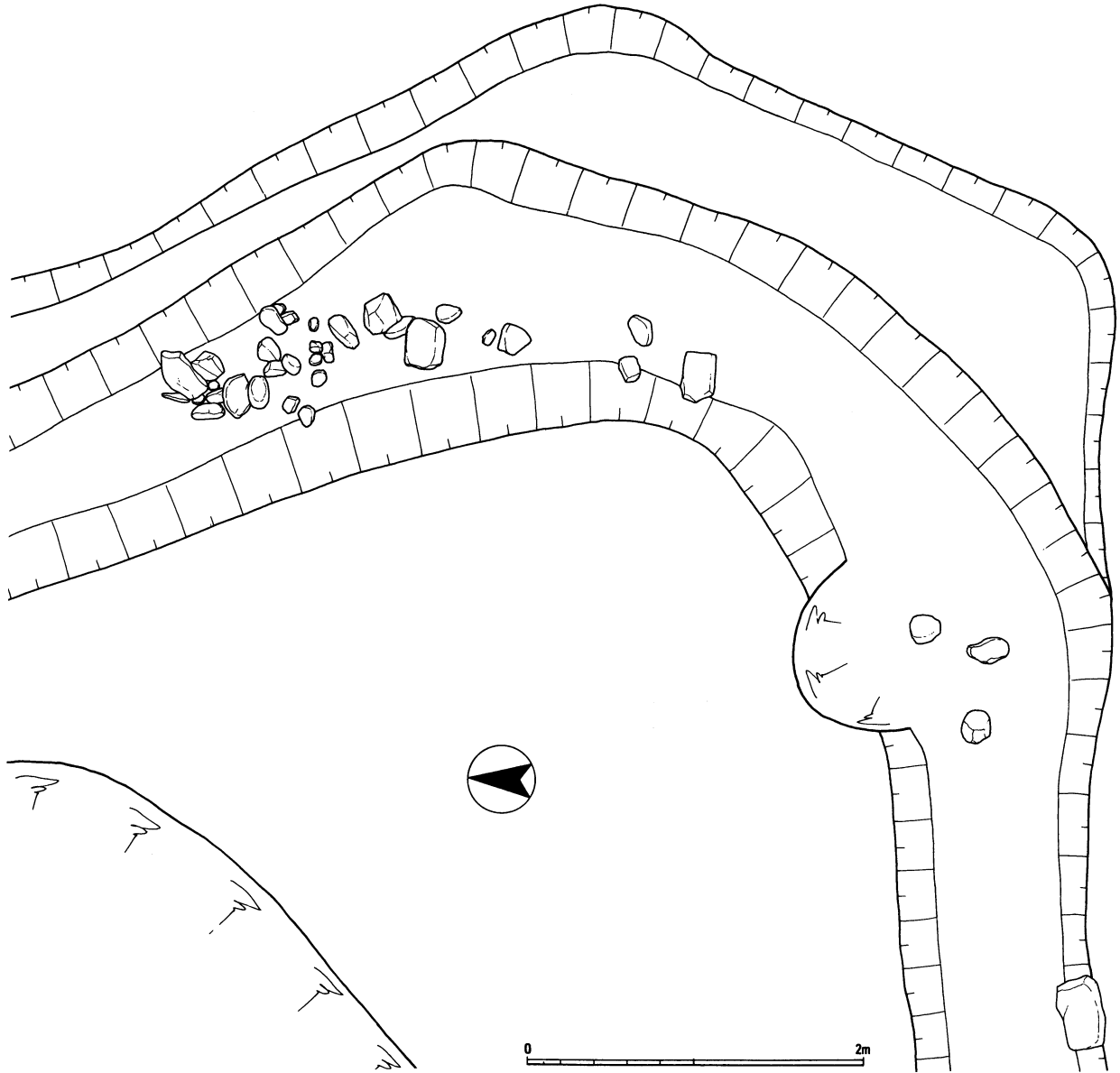


fig. 43 7号墳周溝内礫出土状況 (1:40)

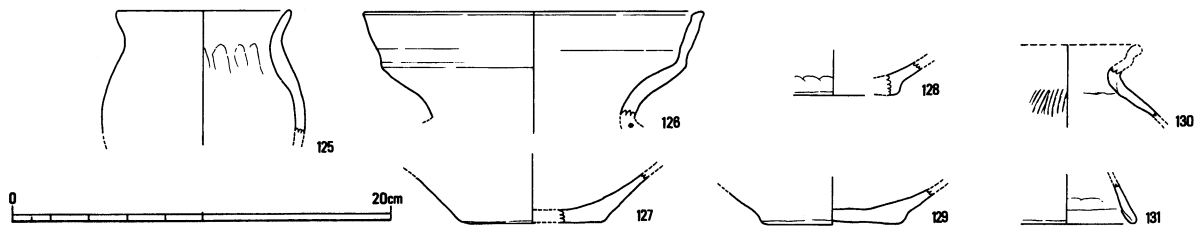


fig. 44 7号墳出土土器 (1:4)

る分類のD類の範疇で捉えられよう。

4. 古墳の時期

7号墳は、須恵器を全く伴わないことを特徴とす

る。上述の出土土師器からは、4世紀末頃～5世紀初頭の年代が考えられ、当該古墳群中で最も古い古墳であるといえる。

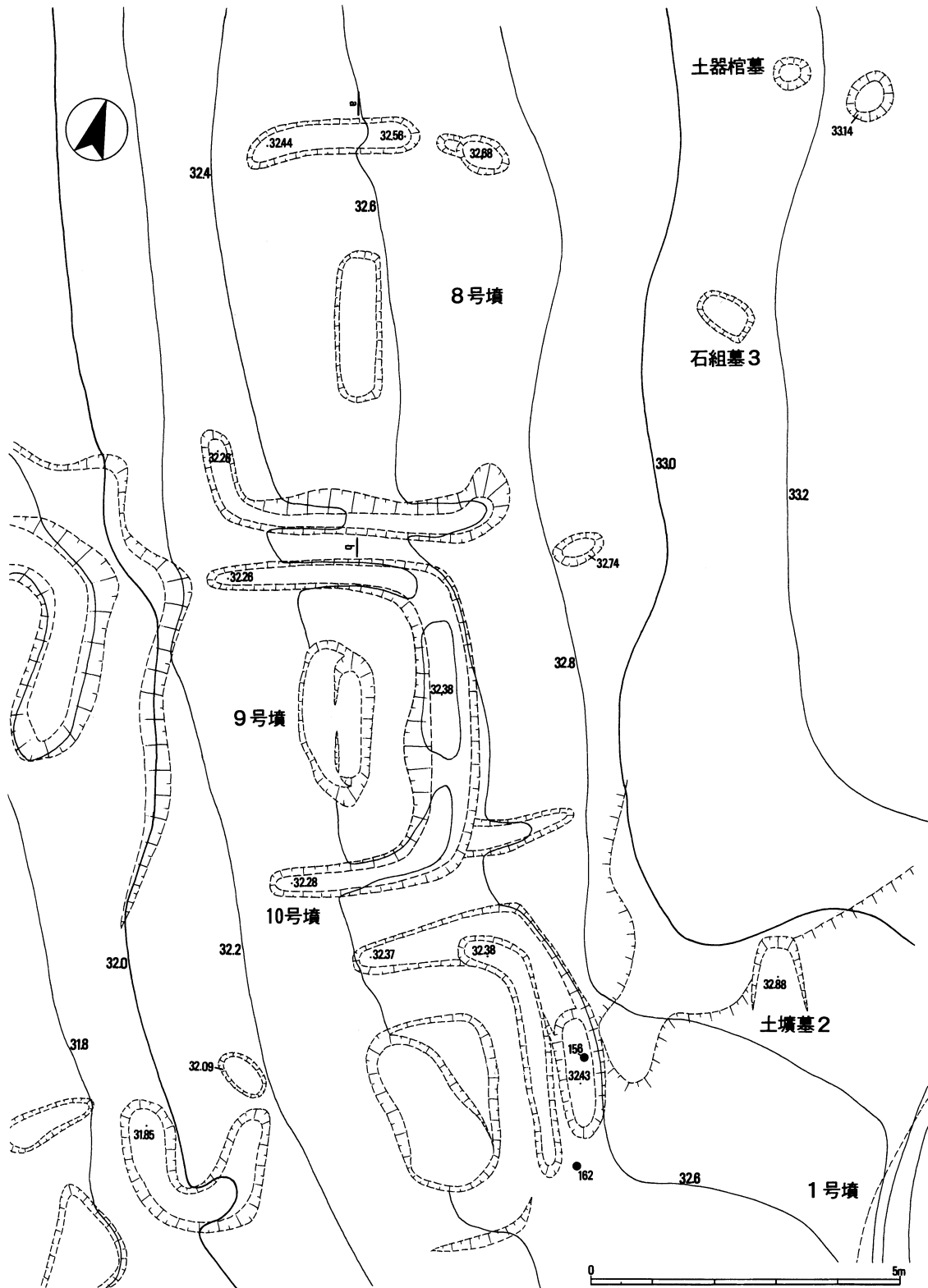


fig. 45 8～10号墳および周辺土坑群平面図（1：100）

9. 8号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

8号墳は調査区中央西寄りの斜面部に位置し、標高は約32.6mである。9・10号墳と隣接して築造さ

れている。

墳丘 墳丘は調査前には全く確認ができず、平坦な地形であったが、調査すると東西約4.5m、南北

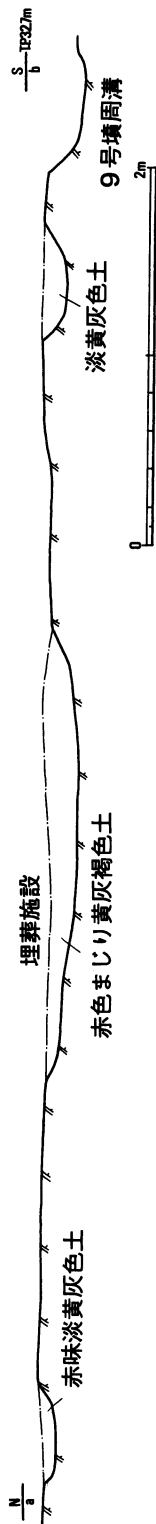


fig. 46 8号墳土層断面図
(1:40)

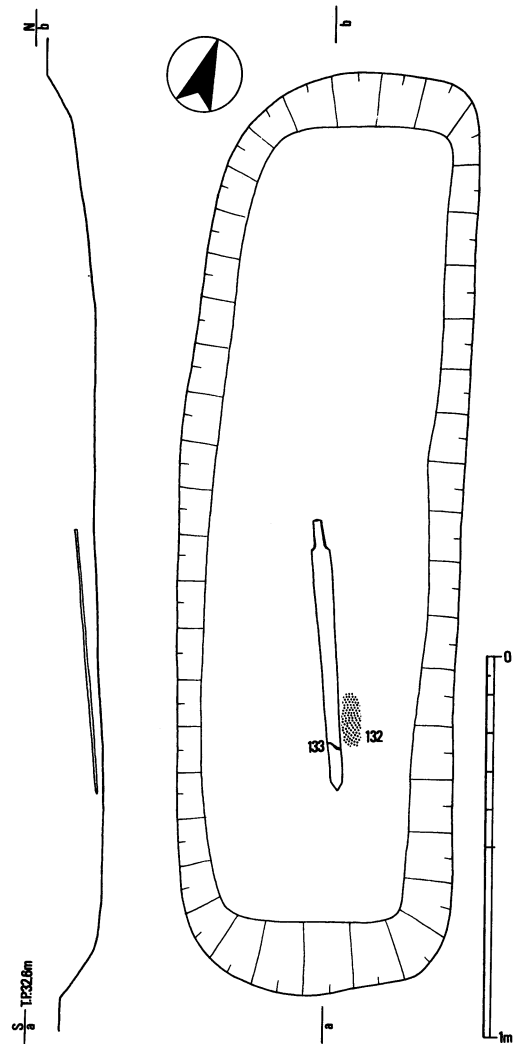


fig. 47 8号墳埋葬施設平面・立面図
(1:20)

約6mの長方形を呈した方墳であることが判明した。

盛土はほとんど認められなかったが、周溝の掘削が浅いため、それほどの高さは築かれていないものと考えられる。しかし、検出した埋葬施設の最も低いところで表土から約0.5mほどしかなく、埋葬施設を構築するには若干浅いようにも思われる。基盤層から少なくとも0.5mほどの盛土が存在していたのであろう。

周溝 周溝は北および南辺には明確に認められたものの、幅約0.5~0.8m、深さ約0.2mと極めて浅いものである。周溝底は平坦で、3号墳の状況に近い。周溝内埋土からは須恵器壺および土師器甕の破片が出土した。

2. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央に1基認められた。墓壙掘形は隅丸長方形で、上面にて確認した埋土は赤色混じり黄灰色土である。遺構確認面からおよそ0.2mで

底面に至ったため、木棺痕跡は確認できなかったが、おそらく組合式の木棺であったものと想定できる。埋葬施設中央やや南寄りから鉄剣1点と刀子1点を出土した。鉄剣は切っ先を南にむけており、茎は当初から折れていたものようで、破断面に錆が認められた。刀子は不注意から実測前に取り上げてしまったが、鉄剣の東側に置かれていたものである。

3. 出土遺物 (fig.49)

埋葬施設からは鉄剣1本・刀子1点、周溝からは須恵器・土師器が出土している。

鉄剣 鉄剣 (133) は残存長72cmである。茎部下半は当初から欠損している。茎部に1箇所、関部に2箇所の目釘穴がある。

刀子 刀子 (132) は、残存長7.9cmである。茎部

には木質が若干残る。

須恵器 壺 (135・136) がある。136は周溝から出土したものであるが、135は西へ若干離れた地点から出土したものである。しかし、調整・焼成の状況から同一個体であることはほぼ間違いない。二重口縁の形態をなし、田辺編年のTK216~208型式古段階に併行するものであろう。

土師器 甕の口縁部がある (134)。

4. 古墳の時期

8号墳は、出土須恵器からは田辺編年のTK216~208型式古段階あたりの時期に併行するものである。3号墳と近接した時期であり、3号墳との墳丘規模の差や、9・10号墳と並列されていることが極めて興味深いといえる。

10. 9号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

9号墳の立地は8号墳とほぼ同様で、8号墳の南に隣接して築造されている。標高は約32.4mである。墳丘墳丘は8号墳と同様、調査前には全く確認できなかったが、調査によって南北約5m、東西約3mの長方形を呈した方墳であることが判明した。墳丘には盛土はほとんど認められなかったが、8号墳と

同様の理由から盛土は顕著ではなかったものと見做される。

周溝 周溝は南北辺および東辺は明確に確認できたが西辺は不明瞭であるため、「コ」の字形を呈しているように見える。なお、東側周溝に接して溝状の遺構が存在しているが、それと周溝との関係は明確にし得なかった。周溝埋土は黄灰色系の砂質土で

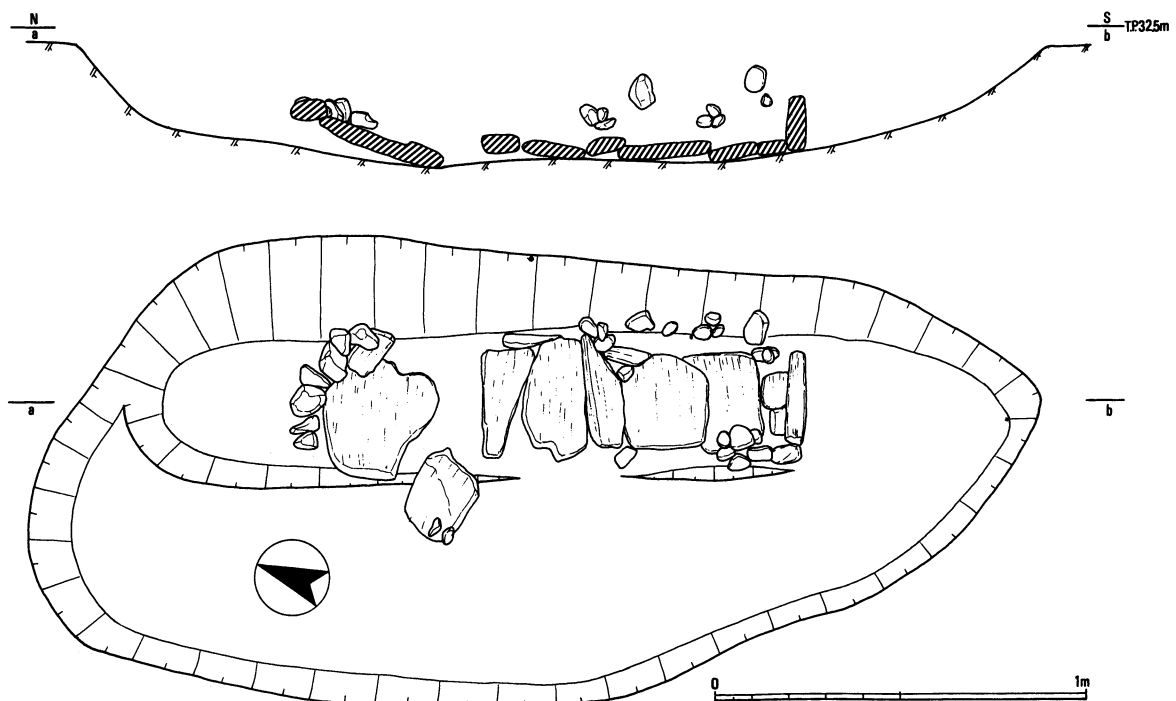


fig. 48 9号墳埋葬施設平面・立面図 (1:20)

あり、上記の溝状遺構の埋土も基本的に同質である。周溝埋土からは須恵器高坏が出土している。

2. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央部に1基確認できた。墓壙掘形は不整形な長楕円形を呈している。その東寄りにさらに1段低い掘形があり、埋葬施設はそこに築造されていた。

当埋葬施設は基本的に石組墓である。底面に結晶片岩を敷き、南木口部分にはそれを立てている状況が確認できた。また、側板に相当する部分と北木口部分には花崗岩や砂岩の小礫を用いて詰めている。埋葬施設の西側に隣接して1枚の結晶片岩が認められたが、これは本来底石として用いられていたものが雑木の根によって移動したものと考えられる。埋葬施設内からは遺物の出土はなかった。

3. 出土遺物 (fig.49)

9号墳に伴う遺物は、周溝から出土した須恵器・土師器のみである。

須恵器 高坏が2点ある(137~138)。137は脚柱部を全く欠損しているが、坏部と脚裾部の焼成・色調に全く差がなく、両者が同一個体であることは確実である。脚裾部片の外面上端は上方へ突出する状況が観察でき、これはおそらく突帯に相当するものと考えられる。これらは陶邑窯跡ではON46窯出土の遺物が最も類似し、田辺編年のTK208型式の範疇で捉えられよう。

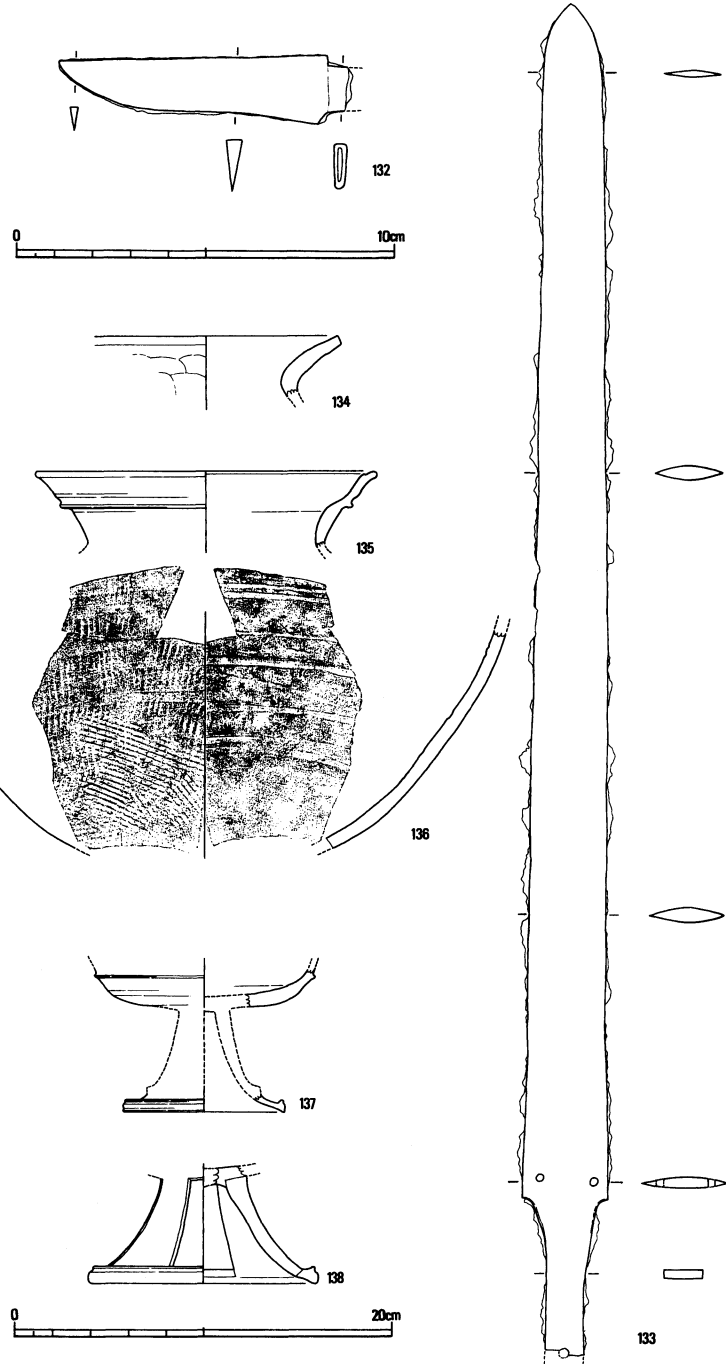


fig. 49 8・9号墳出土遺物 (132~136: 8号墳、137~138: 9号墳)
(132は1:2、他は1:4)

土師器 図示していないが、甕の口縁部がある。

4. 古墳の時期

9号墳の周溝からは少量の須恵器が出土している。田辺編年のTK208型式併行と考えられ、8号墳よりも若干後出すると考えられる。

11. 10号墳の調査

1. 墳丘および関連施設

10号墳の立地は8・9号墳とほぼ同様で、9号墳の南に隣接して築造されている。標高は約32.4mである。

墳丘 墳丘は調査前には全く認識できなかったが、調査によって南北約5m、東西約3mの長方形を呈した方墳であることが判明した。墳丘には盛土はほとんど認められなかったが、8・9号墳と同様の理由から盛土はさほど顕著ではなかったものと見做される。

周溝 周溝は東・北辺は明確であったが西南辺は不明確で、削り出しをしたのみであるものと判断した。東辺の周溝は2重になっており、後述する埋葬施設の状況から、拡張が行われたものと考えられる。両者の深さはあまり変わらないが、外側の周溝が後出するものとするのが自然であろう。外側に相当する周溝の埋土上部からは鉄製の鋤先が出土している。また、須恵器高杯の脚部が2つの周溝のちょうど中間あたりから出土している。土層からは外側の周溝埋土に相当するものではあるが、内側の時期のものとの混入である可能性もある。

2. 埋葬施設

10号墳からは3基の埋葬施設が重複して確認できた。新しいものから順に埋葬施設1・2・3として記述する。

埋葬施設1 埋葬施設1では長軸約2.8m、短軸1.6~2.0mの不正長方形の墓壇掘形に長さ約1.4m、幅約0.4mの木棺痕跡が認められた。墓壇は東側にテラス状の部分有し、そこに鉄鏃19本がまとめて置かれていた。鉄鏃は刃部が片刃形を呈するものである。木棺部分では北東隅および南西隅を青灰色の粘土を用いて留めている状況が確認できた。木棺内からは刃部が片刃形を呈する鉄鏃が2本と鉄鎌・刀子および勾玉・白玉が出土している。玉類は北側に集中しており、頭部を北に向けて埋葬したものと考えられる。

埋葬施設2 埋葬施設2は長軸約1.2m、短軸約0.55mの隅丸長方形を呈する。木棺痕跡は確認できなかった。墓壇内の東に沿って鉄刀が1本出土した。

また、埋土中からは鉄鏃の破片が出土しており、埋葬施設3に伴うものと考えられる。

埋葬施設3 埋葬施設3は長軸約2.2m、短軸約0.7mの隅丸長方形を呈する。木棺痕跡は明確に所得なかったが、埋葬施設1と同様な青灰色粘土が2本認められた。これが木棺の側板を固定するものであれば、墓壇やや西寄りに木棺を据えたものと考えられる。墓壇内中央東からは刃部が三角形~小柳葉形を呈する鉄鏃が17本まとめて置かれていた。

3. 出土遺物 (fig.51~53)

出土遺物には鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄鎌・鉄鋤などの鉄製品類、勾玉・白玉などの玉類、須恵器・土師器などの土器類がある。出土遺構別にみていく。

(1) 埋葬施設1の出土遺物

玉類 勾玉(153)と白玉(139~152)がある。3号墳と同様、勾玉は馬瑙製、白玉はグリーンタフ製と考えられる。白玉は図示した以外にも破片で2個体分以上ある。

鉄製品 刀子(154)・鉄鎌(155)・鉄鏃(157~160・163~181)がある。157~160の鉄鏃と鉄鎌は埋葬施設棺内から、その他は墓壇内から出土した。刀子は墓壇内の鉄鏃に含まれて出土した。鉄鏃は合計19本ある。片刃形のを主体とし、1本のみ三角形~小柳葉形のものがある。

(2) 埋葬施設2の出土遺物

鉄刀(199)があるのみである。鉄刀は長さ86.5cmの長大なものである。関は斜めで、基部には2箇所目釘穴がある。

(3) 埋葬施設3の出土遺物

鉄鏃(182~183)がある。合計17本出土している。刃部は全て三角形~小柳葉形の形態である。

(4) 周溝出土遺物

周溝出土遺物には、鉄鋤・須恵器・土師器がある。**鉄鋤** 鉄鋤(156)は、外側周溝から出土した。薄い鉄板を折り、装着部をさらに折り込んでいる状況が観察される。

須恵器 須恵器には、坏蓋(161)および高坏(162)がある。高坏は大部分が外側周溝から出土したものであるが、脚裾部のみ埋葬施設1から出土し

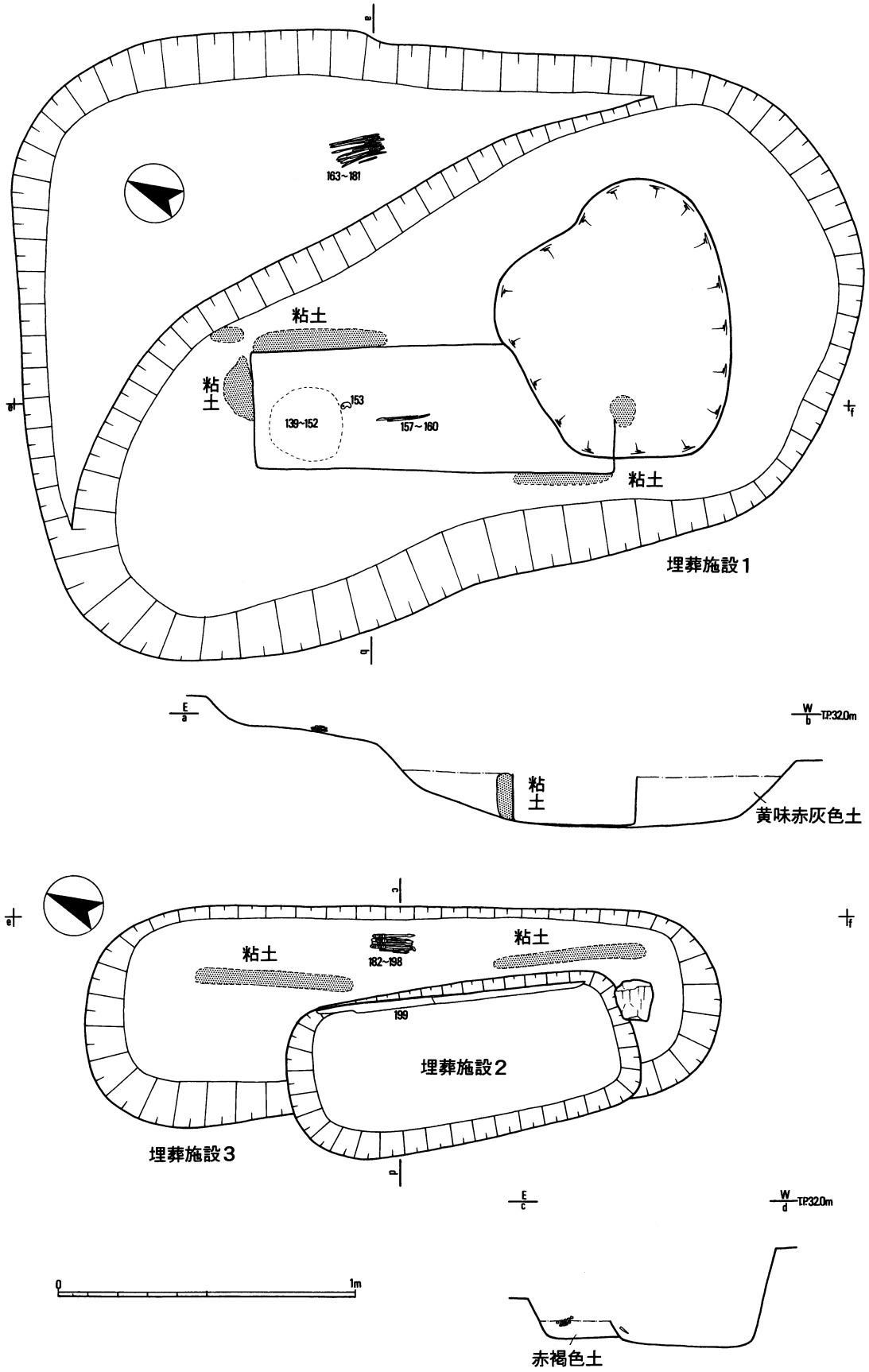


fig. 50 10号墳埋葬施設平面・断面図 (1:20、上下のポイントe、fは同一)

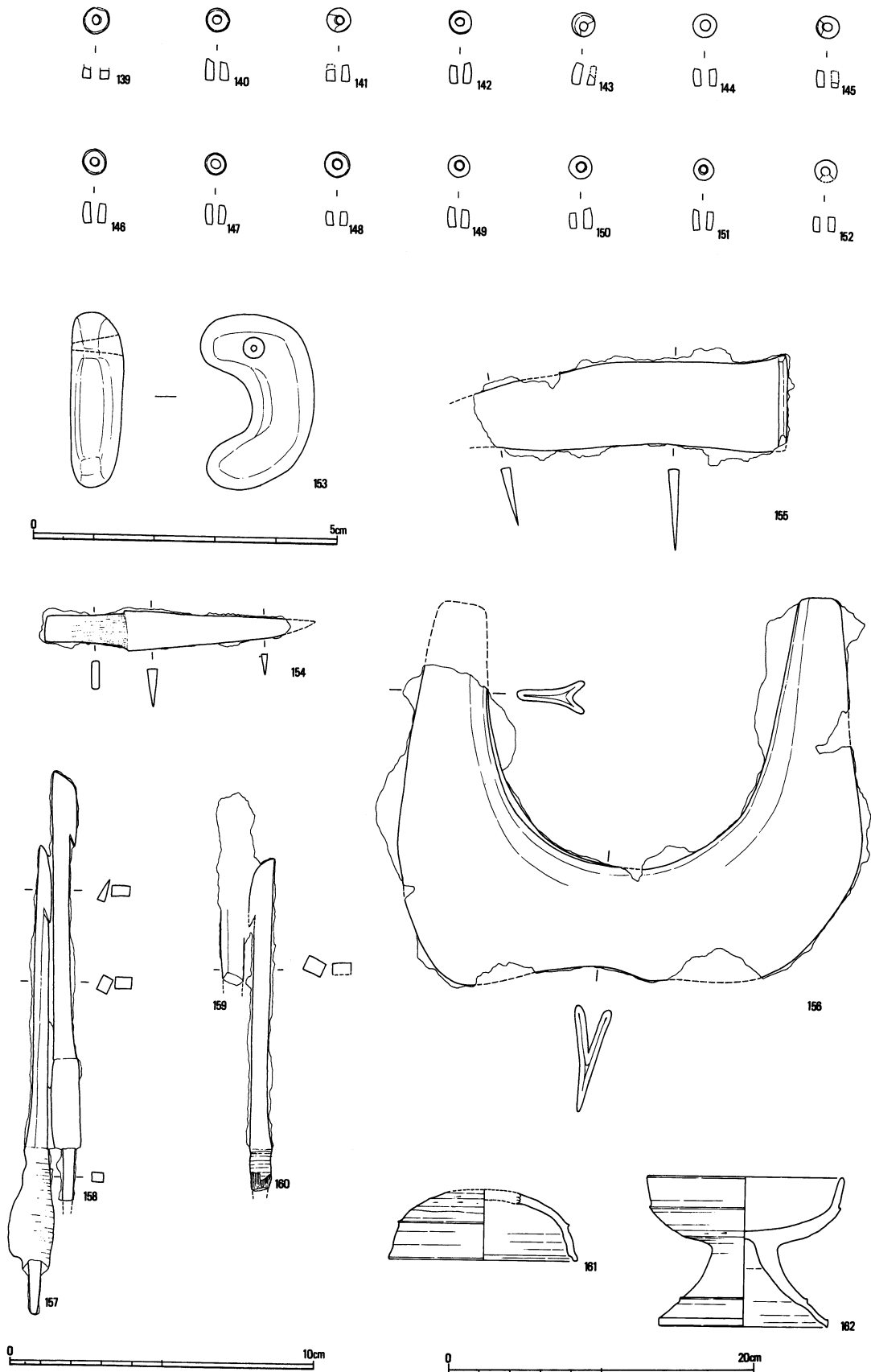


fig. 51 10号墳埋葬施設1及び周溝出土遺物 (139~153は1:1、154~160は1:2、161~162は1:4)

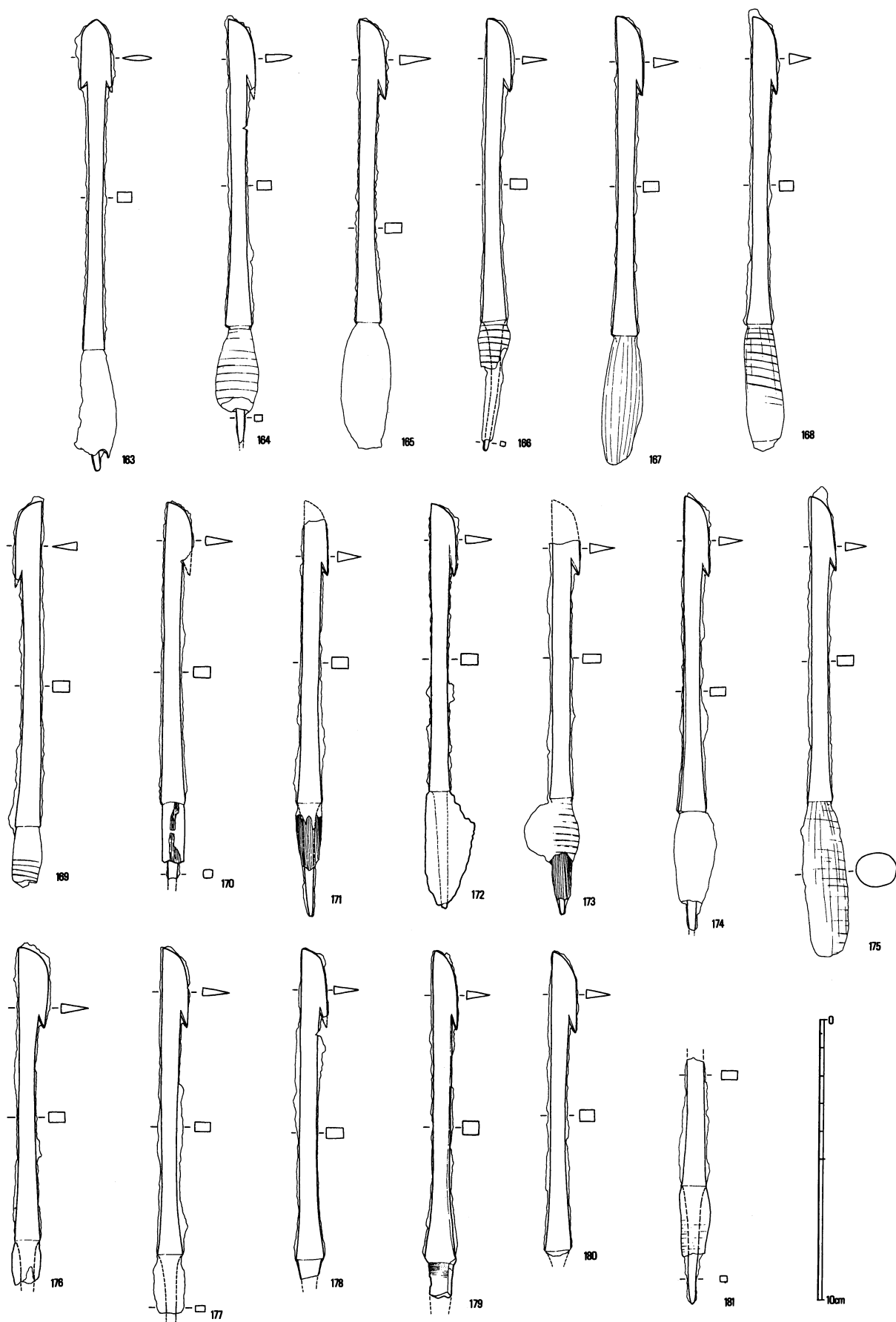


fig. 52 10号墳埋葬施設1 棺外出土鉄鏃 (1 : 2)

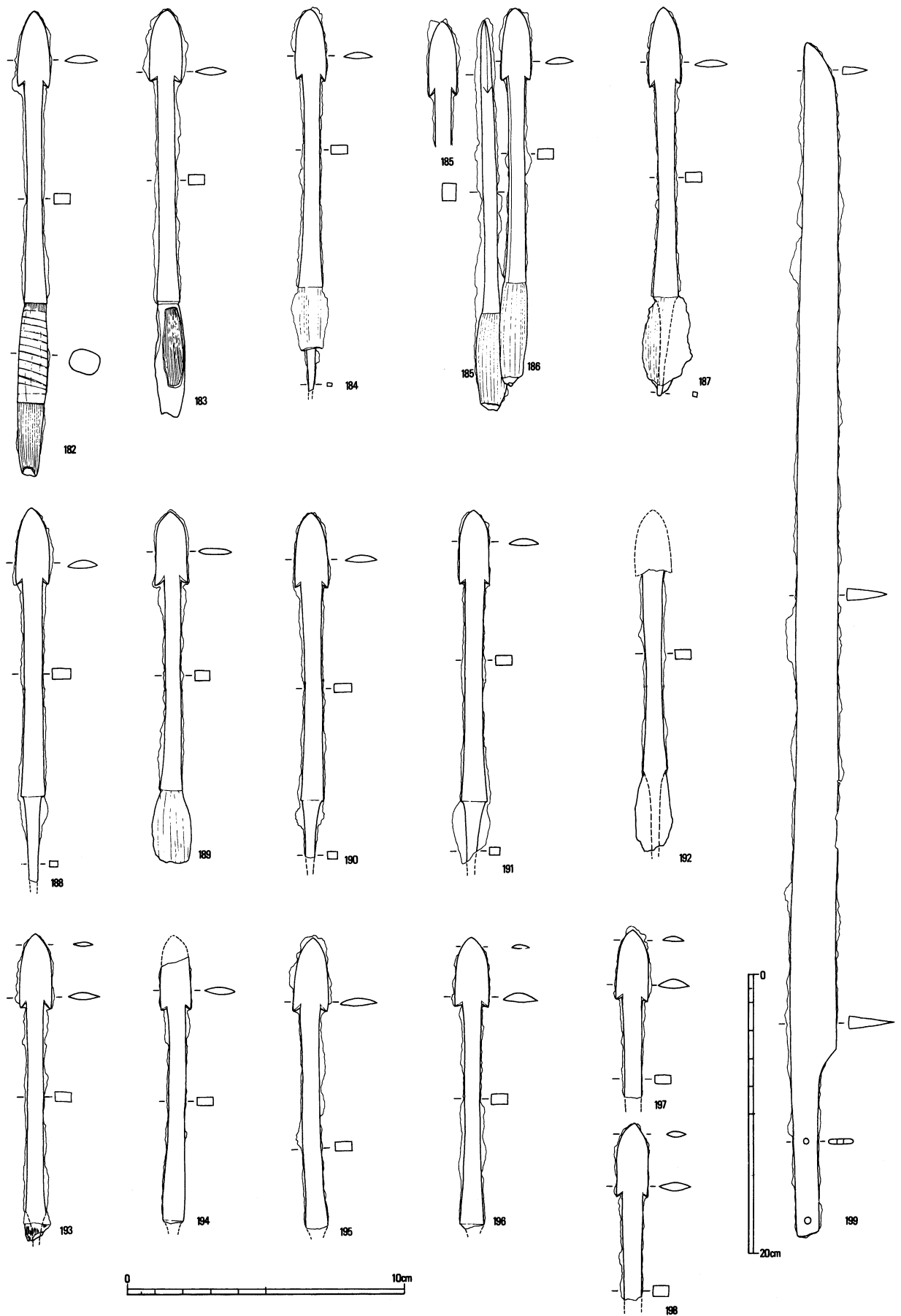


fig. 53 10号墳埋葬施設2・3出土鉄製品 (199は1:4、他は1:2)

ている。この両者は接合はしないのであるが、焼成・調整の状況から同一個体と見做されるのである。埋葬施設1内にこの土器の破片が入っていたことから、意図的なものでない限り、埋葬施設1の時期よりも古いものと考えられよう。坏蓋・高坏ともに、田辺編年のTK208型式より新しいものではない。

土師器 図示できないが、甕の破片がある。

4. 古墳の時期

10号墳の時期は周溝からは2時期、埋葬施設からは3時期あるものと考えられる。しかし伴出土器が少なく、それぞれに明確な時期を与えることが困難である。出土した高坏は田辺編年のTK208型式の新段階併行のものと思われようが、坏蓋はさらに1型式古いものである可能性がある。高坏は外側周溝出土のものであり、坏蓋は内側周溝の時期を示すものかも知れない。

12. その他の埋葬施設

古墳以外では、マウンドを伴わない埋葬施設（無墳丘墓）が認められた。石組墓3基、土器棺墓1基である。なお、これには1号墳下部遺構およびその周辺において認められたものを含んでいないので、全体としては石組墓4基、土壙墓2基、土器棺墓1基である。また土器棺墓の東で検出した小土坑や7・10号墳間において検出した土坑も埋葬施設である可能性もあろう。したがって、土壙墓についてはさらに増える可能性がある。

1. 石組墓1

石組墓1は7号墳の東に位置する。長軸約2.2m、短軸約0.5mの墓壙内に川原石を用いて石組を行っているが、石は墓壙側面を中心とし、特に南木口部分にはあまり認められない。しかも石組は底から行っているのではなく、やや浮いたような状況を呈している。石の用い方は3号墳の埋葬施設に認められたものと類似している。木棺痕跡は確認できなかった。また、出土遺物も全くなかった。

石組墓1では墓壙を含めて西側に浅い不定形な落ち込み状の遺構が認められた。この落ち込みからは遺物の出土はなかったが、礫が少量認められた。性格については不明である。

2. 石組墓2

石組墓2は7号墳の南に位置する。墓壙は調査担当者の不手際で確認できなかったが、石組よりもさほど大きく広がるものではないと考えられる。底には30～40cm大の偏平な結晶片岩を幅約0.55m、長さ約1.1mの範囲に敷いている。西側辺と北側辺には底の石敷の上に同じく結晶片岩が認められることから、

周囲を取り囲むように石が配されていたものと考えられる。出土遺物は全くない。

3. 石組墓3

石組墓3は3号墳の西方、土器棺墓に近接している。長さ約0.9m、幅約0.6mの掘形に長さ約0.8m、幅約0.5mの石組が作られている。石組は、底に40cm大の偏平な結晶片岩を2枚用い、その周囲に同じく結晶片岩を立てて囲んでいる。石組の内法は幅約0.35m、長さ約0.7mである。天井石は確認できなかったが削平によって消滅した可能性もあり、元来なかったものと即断はできない。出土遺物は全くなかった。

4. 土器棺墓

土器棺墓は3号墳の西方、石組墓3に近接している。直径約0.6mのほぼ円形の墓壙内に大形の土師器甕を棺として埋置している。甕の底から約18cmの土器内部に口縁部片をはじめとする土器上部の破片が認められ、この位置まで自然堆積したのと考えられる。土器内部には副葬品は認められなかった。なお土器の底部には5箇所の焼成後穿孔があり、棺内部の水分を排出するための工夫と考えられる。時期は甕の口縁部形態が9号墳出土の甕と類似することから、田辺編年のTK208型式あたりに併行するものと考えられる。

5. その他

7号墳と10号墳の間には、不定形な土坑がいくつか存在している。これらは全く遺物を含まず、時期は不明である。なかには土坑1～3のように楕円形もしくはそれに近い形態を呈するものもある。これ

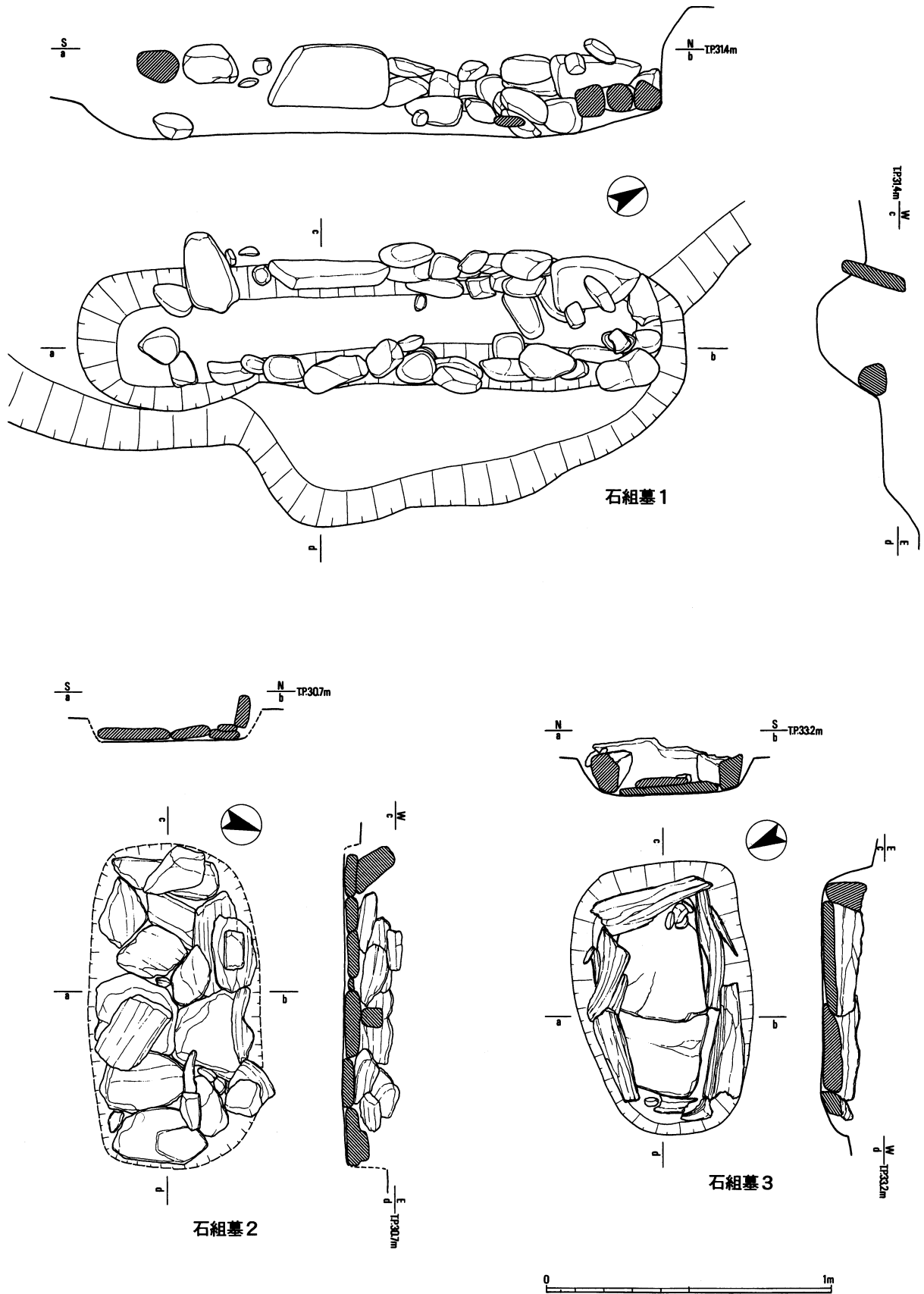


fig. 54 石組墓 1～3、平面・立面・断面図 (1:20)

らの埋土は淡黄灰色系砂質土である。古墳群中に認められる土坑であることから、土壙墓の可能性も考えられるが、断定はできない。

6. 所属時期

これらの埋葬施設からは、土器棺本体を除いて全く遺物が出土していない。したがって、所属時期を確定することはむづかしい。しかし土器棺墓についてはその形態から8号墳出土の甕との類似性が窺われ、おそらく8号墳に併行する時期のものであろう。石組墓2・3は、その形態と結晶片岩を用いているという類似性から、9号墳との時期的な接近が考えられる。

以上のことから、これらの埋葬施設は3・8～10号墳の時期にほぼ併行するものであることを類推できよう。すなわち、先述の石組墓1、土壙墓1・2と時期的に接近したものであることが想定される。

土坑群については埋葬施設の可能性が想定されるのみで時期は全く不明である。 (伊藤)

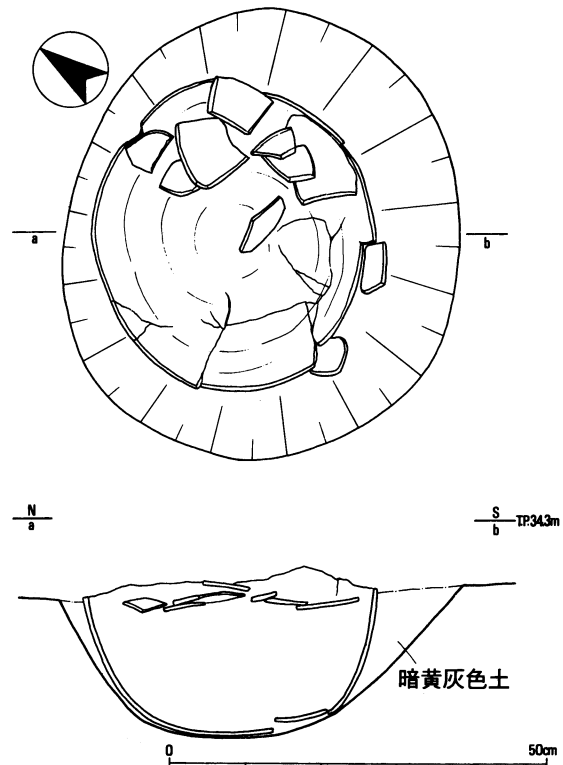


fig. 55 土器棺墓平面・断面図 (1 : 10)

(註)

- (1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I (平安学園考古学クラブ 1966) および田辺氏『須恵器大成』(角川書店 1981)
- (2) 竹内英昭ほか『平田古墳群』(安濃町遺跡調査会 1987)
- (3) 鉄鎌の形態および名称については第VI章1を参照していただきたい。
- (4) 山田邦和・江浦洋ほか『小池古墳群』(財古代学協会・平安博物館 1984)
- (5) 吉村利男「上野市喰代 高猿6号墳」(『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981)
- (6) 伊勢野久好ほか『天花寺山』(一志町・嬉野町遺跡調査会 1992)
- (7) 赤塚次郎「S字甕覚書'85」(『年報昭和60年度』(財愛知県埋蔵文化財センター 1986))

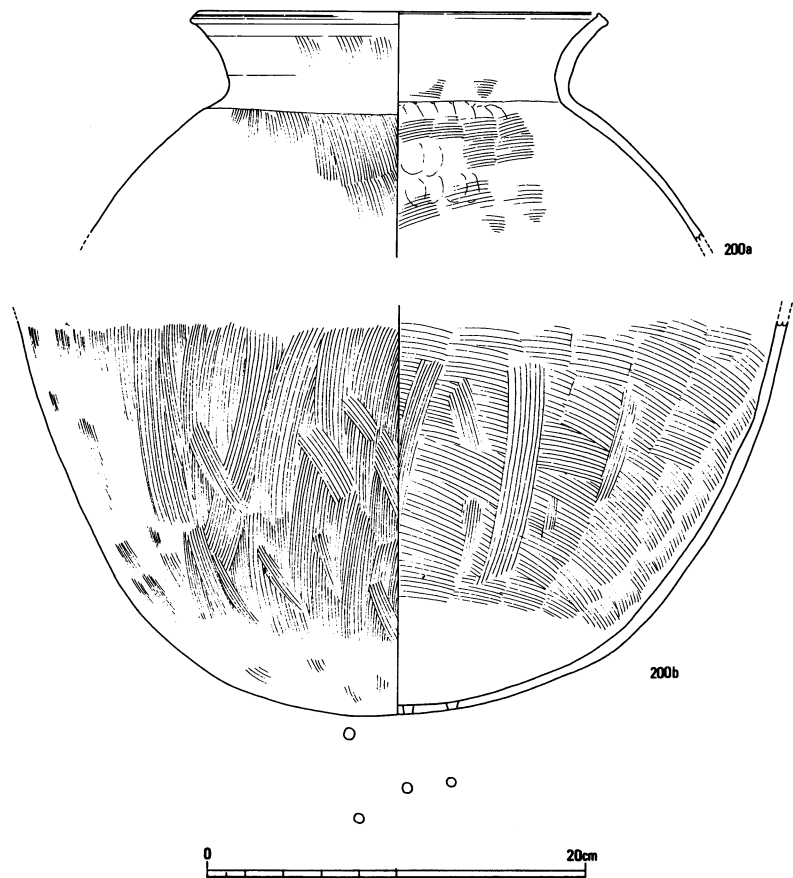


fig. 56 土器棺実測図 (1 : 4)

13. 出土土器の観察

〈凡例〉

1. 「No.」 報告書内の実測図の番号を示す。
2. 「器種」 土器の種類によって土師器・須恵器・陶器に分け、その後に器形を示した。
3. 「地区」 調査区内のグリッド名を記入した。
4. 「遺構・層名」 遺物の出土した古墳・遺構名および層名を記入した。「p」は土器の取上げ時の符号である。
5. 「法量」 (口)は口縁部径、(高)は高さ、(低)は低部径、(高台)は高台部径を示す。計測部位はその部分の最大部である。
6. 「調整・技法の特徴」 外面調整は「外：」で、内面調整は「内：」で示した。「・」でつながれているものは両者に前後関係がないものないしは不明なもので、「のち」でつながれているものは両者の前後関係を示す。
7. 「胎土」 素地の細かさによって「密・粗」を示し、混入物としての小石・その他を記入した。
8. 「焼成」 見た目の基準である。「堅緻」は須恵器・陶器類の通常の焼成状態のものについて用い、土師器類の通常の焼成のものは「良好」とした。
9. 「色調」 見た目と『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1988）との折衷によった。
10. 「残存度」 実測図に示した土器のおおよその残り具合を示した。
11. 「備考」 その他の補足的事項を記入した。
12. 「実測No.」 実測時の登録番号を示した。遺物実見の際の参考にされたい。

1号墳関係

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
5	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 5	(口) 12.5 (高) 6.0	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~4.0mmの小石、褐色	良好	淡褐	80		1-06
6	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 4	(口) 12.6 (高) 5.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡褐	100		1-04
7	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 1	(口) 12.1 (高) 5.2	外：割離 内：割離	密0.5~2.0mmの小石	軟	淡茶灰	90	ただし風化顯著	1-07
8	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 2	(口) 13.0 (高) 5.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~5.0mmの小石	やや軟	淡褐~灰褐	90		1-05
9	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 6	(口) 11.5 (高) 5.0	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	軟	淡茶灰	90	成形は粘土紐巻き上げによる	1-06
10	土師器 碗	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 3	(口) 11.8 (高) 5.7	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	100		1-03
11	土師器 小形壺	g 25	1号墳埋葬施設外北側 p 1	(口) 8.0 (高) 10.8	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5~8.0mmの小石	良好	濃褐	100	体部下半に黒斑あり。	1-10
12	土師器 小形壺	g 25	1号墳埋葬施設外北側 p 2	(口) 7.6 (高) 11.0	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	濃褐	100		1-09
13	須恵器 甕	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 7	(口) 12.2 (高) 4.3	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密0.5~8.0mmの小石	堅緻	淡青灰	100		1-01
14	須恵器 短頸壺	g 25	1号墳埋葬施設内東側 p 6	(口) 10.2 (高) 12.2	外：タタキメ・ナデのち回転ナデ 内：オサエ・ナデのち回転ナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	暗灰~淡灰	100	頸部には、焼成時に存在していた蓋の跡がある。ただし、これは13の蓋ではない。	1-2

1号墳下部遺構関係

15	土師器 高坏	g 25 h 25	1号墳埋葬施設上層周溝埋土	(口) 21.2	外：割離 内：割離	密0.5~2.0mmの小石、赤色	軟	淡赤褐~赤褐	口縁 30 (3片)	外面に黒斑あり。	1-14
16	土師器 高坏	h 25	1号墳周溝埋土	(脚柱) 3.4	外：割離 内：割離	粗0.5~4.0mmの小石、赤色	やや軟	淡褐	脚柱 100	脚部に3方向の透かしあり	1-13
17	土師器 小形壺	g 23	1号墳周溝埋土	(口) 8.6 (高) 6.9	外：ナデのちヨコナデ 内：オサエのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰~淡褐	40	胎土はマーブル状。	1-12
18	土師器 小形甕	e 25	1号墳墳丘下 p1t1 p5	(口) 10.3 (高) 16.6	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~4.0mmの小石	やや軟	淡褐~暗褐	80		1-17
19	土師器 高坏	e 25	1号墳墳丘下 p1t1 p3	(口) 16.4 (高) 11.5 (脚柱) 10.2	外：割離 内：脚部はソポリメのちケズリ	密0.5~4.0mmの小石、褐色	軟	淡褐	坏部 50 脚部 95		1-16
20	土師器 高坏	e 25	1号墳墳丘下 p1t1 p1	(口) 10.1 (高) 11.9 (脚柱) 10.1	外：割離・ナデの墳跡 内：脚部はソポリメのちケズリ	密0.5~4.0mmの小石	やや軟	淡褐~赤褐	坏部 80 脚部 100		1-15
21	須恵器 壺?	e22 f24 d26	1号墳墳丘盛土内	(口) 11.5	外：回転ナデのち波状文 内：ナデのち回転ナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	茶灰断面 濃茶灰	口縁 60		1-18
22	須恵器 甕	g23 e25	1号墳周溝埋土墳丘盛土	(口) 8.6 (高) 10.4	外：回転ナデ・カキメ 内：ナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	灰断面 紫灰	体部 100		1-11
23	須恵器 高坏	f 26	1号墳盛土	(脚柱) 8.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密0.5~8.0mmの小石	やや軟	淡灰	脚柱 80		1-21
24	須恵器 高坏	e 23	1号墳棺裏土	(脚柱) 11.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密0.5~8.0mmの小石	堅緻	灰~暗灰	脚部 20	脚部内面にヘラ記号あり。	1-22
25	須恵器 短頸壺	g 23	1号墳周溝埋土	(口) 9.8 (高) 19.5	外：タタキメのち回転ナデ 内：オサエ・ナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	暗灰	口縁 90 体部 70		1-20
26	須恵器 甕	c 25~ 125	1号墳周溝埋土墳丘盛土	(口) 21.6	外：タタキメのちハケメ・回転ナデのち波状文 内：タタキメのちナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	茶灰~暗灰 内面青灰	口縁 40 体部 40	1号墳の各所に散乱していた。	1-19
27	須恵器 器台	f 28	2号墳周溝埋土	(口) -	外：回転ナデのち波状文 内：回転ナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	暗灰	受部 10	内面に自然釉	1-26
28	須恵器 器台	f 24	1・3号墳棺裏土	(脚柱) -	外：回転ナデのち波状文のち穿孔 内：回転ナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	暗灰	脚部 10	外面に自然釉	同一個体 1-27
29	陶器 小皿	f 26	1号墳周溝埋土	(口) 9.3 (高) 1.3	外：クロコナデのち糸切り 内：クロコナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁 25	山皿	1-24
30	陶器 碗	f 26	1号墳周溝埋土	(口) 17.0 (高) 5.5 (高台) 7.3	外：クロコナデのち糸切り のち貼り付け高台 内：クロコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡灰	90	山茶碗 瀬美産?	1-23
31	陶器 碗	f 26	1号墳周溝黒土	(口) 15.2 (高) 5.2 (高台) 8.0	外：クロコナデのち糸切り のち貼り付け高台 内：クロコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡灰	口縁 25	山茶碗 瀬美産? 高台に靱殻痕。	1-25

2号墳関係

32	須恵器 坏蓋	d 29	2号墳周溝埋土	(口) 10.0	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密0.5~1.0mmの小石(多)	堅緻	淡青灰	口縁 20	33と同質の胎土	2-1
33	須恵器 坏身	d 31 e 31	2号墳棺赤褐色埋土	(口) 8.8	外：回転ナデのち回転ケズリ 内：回転ナデ	密0.5~1.0mmの小石(多)	堅緻	淡青灰	口縁 10 受部 20	32と同質の胎土	2-2

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No
34	須恵器 小形壺	g29	2号墳 周溝黄灰色土	(口) 7.6	外: タタキメのち回転ナデ・カキメ 内: タタキメのち回転ナデ	密0.5~2.0mmの 小石	堅緻	淡灰~ 暗灰	口縁 90		2-3
35	須恵器 高坏	h26 g28	2号墳 密黄灰色土	(脚裾) 9.2	外: 回転ナデのち穿孔 内: 回転ナデ	密0.5~2.0mmの 小石	堅緻	淡灰	脚裾 25 (2片)		2-6
36	須恵器 壺	e~g28 c25	2号墳 周溝埋土	(口) 13.6 (高) 16.7	外: タタキメのち回転ナデ・ タタキメ 内: オサエ・ナ デ・タタキメのち回転ナデ	粗0.5~2.0mmの 小石、赤色 粒	堅緻	淡灰	80	32・33と同質の胎土	2-5
37	須恵器 壺	c29	黄灰色土	(体部) 25.2	外: タタキメのち回転ナデ 内: ナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石	堅緻	淡青灰	体部 30	出土位置からみて、2号墳 に伴うものと考えられる。	2-7
38	土師器 甕	g30	2号墳 墳丘黄灰色土	(口) 11.5 (推定)	外: 剝離(ハケメ) 内: 剝離(ハケメ)	密0.5~2.0mm の 小石	良好	淡褐~ 淡赤褐	体部 90	墳丘下部に伴うものである かも知れない。	2-4

3号墳関係

81	土師器 高坏	k23	3号墳周溝 黄灰色土	(口) 24.0 (推定)	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密0.5~2.0mm の 小石	やや軟	赤褐	口縁 5未測		3-9
82	土師器 高坏	k25	3号墳 墳丘表土	(坏下部) 14.2	外: 剝離 内: 剝離	密0.5~1.0mm の 小石	やや軟	褐~ 赤褐	口縁 20		3-8
83	土師器 高坏	j23	3号墳堀 黄灰色土	(脚柱) 2.4	外: 脚部にハケメ・坏部は 剝離 内: 脚部はシボリメ・ 坏部は剝離	密0.5~2.0mm の 小石、赤色 粒	やや軟	赤褐~ 淡褐	脚柱 100	脚柱には3方向に透かしあ り。	3-3
84	土師器 高坏	f24	3号墳周溝 赤褐色土	(脚柱) 2.4	外: 剝離 内: 剝離	粗0.5~2.0mm の 小石	やや軟	赤褐	坏下部 40		3-4
85	土師器 高坏	k24	3号墳 埋葬施設上	(脚柱) 2.6	外: 剝離 内: 脚部はシボ リメ・坏部剝離	密0.5~8.0mm の 小石	やや軟	淡褐	坏下部 40		3-7
86	須恵器 小碗?	J23 h21 i23	3号墳 周溝埋土	(底) 5.9	外: 回転による凹線のちラ ンダムなケズリ 内: ナデ	密0.5~2.0mm の 小石	堅緻	淡灰~ 暗灰	底 25		3-6
87	須恵器 坏身	h23	3号墳周溝 土層黄褐色 土	(口) 10.0 (高) 4.4	外: 回転ナデのち回転ケズ リ 内: 回転ナデ	密0.5~6.0mm の 小石、黒色 粒	堅緻	灰	口縁 30	外面のケズリは途切れ気味 である。	3-5
88	須恵器 高坏	i24, 25 k24, 25 j24	3号墳周溝 ・墳丘上・ 埋葬施設上	(口) 11.1 (高) 8.2 (脚裾) 7.8	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	白灰	坏部40 脚部50	脚部に4方透かし 透かし切断部の内外面は面 取りをする。坏部下に耳か 何かの痕跡。	3-2
89	須恵器 高坏	i24 j23 k23	3号墳周溝 埋土	(口) 15.7	外: 回転ナデ・ナデのち波 状文 内: 回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石	堅緻	暗青灰 断面薄 茶灰	坏上部 30	坏部下に把手か何かの痕跡。	3-1
90	須恵器 壺	i23 i24	3号墳周溝 埋土上層	(口) 18.0	外: タタキメのち回転ナ デのち波状文 内: オサエ・ ナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石	堅緻	淡赤褐	口縁 80		3-10
91	須恵器 樽形罐	j23	3号墳周溝 黄灰色土	(口) 8.4 (体部長) 16.8	外: 回転ナデ・カキメのち 波状文・刻み目文 内: ナデのち回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石、黒色 の 吹き出しあ り	堅緻	暗灰	口縁 60 体部 100	外面に自然釉 小口部の両面に施文あり。	3-12
92	須恵器 大甕	j23~25 k24・25	3号墳墳丘 上	(口) 23.2	外: タタキメのちヨコナ デのち波状文 内: タタキ メ磨しのちナデ	密0.5~2.0mm の 小石	やや軟	淡灰~ 淡茶灰	口縁 40	体部片は接合できないもの が多数ある。	3-13

4号墳関係

94	須恵器 坏蓋	h29	4号墳周溝 黄灰色土	(口) 11.2 (高) 3.8	外: 回転ナデのち回転ケズ リ 内: 回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石 白色 粘土	やや軟	淡緑灰	坏上部 70	残存状況はかなり脆い	4-2
95	須恵器 坏身	h29	4号墳周溝 黄灰色土	(口) 10.3 (高) 4.9	外: 回転ナデのち回転ケズ リ 内: 回転ナデ	密0.5~2.0mm の 小石 白色 粘土	やや軟	暗青灰	坏下部 口縁 60	残存状況はかなり脆い	4-3
96	土師器 甕	i26	4号墳周溝 黄灰色土	(口) 19.4 (高) 33.0	外: ハケメ痕・剝離 内: オサエ・剝離	粗0.5~8.0mm の 小石	やや軟	淡黄灰	口縁 90 体部 75		4-1

5号墳関係

123	須恵器 坏身	c25	5号墳周溝 赤黄灰色土	(口) 9.9 (高) 4.6	外: 回転ナデのち回転ケズ リ 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	淡青灰	口縁 10 体部 60	e261号墳周出土の破片が 接合した。	5-1
124	須恵器 壺?	c26	5号墳周溝 黄灰色土	(口) 12.2	外: 回転ナデのち波状文 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	暗灰	口縁 30	内面に自然釉	5-2

7号墳関係

125	土師器 小形壺	cd19 c20	7号墳周溝	(口) 9.3	外: 剝離 内: オサエ痕・剝離	粗0.5~4.0mm の 小石	軟	赤褐	頸部 30		7-3
126	土師器 二重口縁壺	f19	7号墳周溝	(口) 18.2	外: 剝離 内: 剝離	粗0.5~8.0mm の 小石	やや軟	淡褐~ 暗褐	口縁 30	127と同一個体	7-1
127	土師器 二重口縁壺	f19	7号墳周溝	(底) 7.8	外: 剝離 内: 剝離	粗0.5~8.0mm の 小石	やや軟	淡褐~ 黒褐	底 30	126と同一個体	7-2
128	土師器 壺	c19	7号墳南周 溝	(底) -	外: オサエ・ナデ 内: 不明	密0.5~8.0mm の 小石、赤色 粒	やや軟	淡褐 暗褐	底 10未測		7-4
129	土師器 壺	c19	7号墳東周 溝	(底) 7.6	外: 剝離 内: 剝離	密0.5~2.0mm の 小石、褐色 粒	堅緻	淡茶灰	口縁 25		7-7
130	土師器 台付甕	c19	7号墳南周 溝	(口) -	外: ハケメ痕・剝離 内: 剝離	密0.5~1.0mm の 小石、褐色 粒	軟	褐	口縁10未測	S字状口縁台付甕	7-5
131	土師器 台付甕	c19	7号墳東周 溝	(台裾)-	外: 剝離 内: 剝離	密0.5~1.0mm の 小石	軟	濃褐	脚台裾 10	S字状口縁台付甕	7-6

8号墳関係

134	土師器 甕	i20	3号墳北周 溝	(口) -	外: オサエ痕・剝離 内: 剝離	密0.5~1.0mm の 小石	軟	淡褐	口縁 5未測		8-1
135	須恵器 壺	g20	黄灰色土	(口) 18.2	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	淡灰	口縁 12	136と同一個体	8-3
136	須恵器 壺	h21	3号墳南周 溝		外: タタキメ 内: ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	淡灰	体部下半20	135と同一個体	8-2

9号墳関係

137	須恵器 高坏	g21	9号墳南・ 東周溝	(脚裾) 8.7	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密0.5~8.0mm の 小石、チャ ート	堅緻	淡灰	脚裾 30 坏下部 20		9-2 9-3
138	須恵器 高坏	g21	9号墳南・ 東周溝	(脚裾) 11.4	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石	堅緻	灰	脚部 12	脚部に4方透かし	9-1

10号墳関係

161	須恵器 坏蓋	f i22 h24 g23	黄灰色土	(口) 12.5	外: 回転ナデのち回転ケズ リ 内: 回転ナデ	密0.5~1.0mm の 小石(少)	堅緻	淡灰	口縁 25 (2片)	出土位置から10号墳に伴 うものと考えた。	10-3
162	須恵器 高坏	d f22 e30	10号墳周溝 埋葬施設内	(口) 13.0	外: 回転ナデ・回転ケズ リのち回転ナデ 内: 回転ナデ	密0.5~8.0mm の 小石	堅緻	暗灰~ 淡茶灰	坏部 40 脚部 25	脚部は上部と接合しない が、同一個体である。	10-1 10-2

土器棺

200	土師器 甕	j22	土器棺	(口) 22.2	外: ハケメのちヨコナ デ 内: オサエのちハケメのち ヨコナデ	密0.5~8.0mm の 小石	良好	明橙褐 ~黄灰	口縁 30 体部下半 100	底部に焼成後の穿孔が5箇 所ある。	11-1 11-2
-----	-------	-----	-----	----------	---	-----------------------	----	------------	-------------------	----------------------	--------------

IV. 縄文時代の遺物

調査区内からは、チャートを中心とした縄文時代に属すると考えられる石器が少量出土している。これらは古墳の調査中に出土したものである。当該時期の遺構および土器は認められなかった。(伊藤)

石匙 (1) 現存値で長さ1.15cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、チャート製。表裏面とも一次面を残し、挟り部以外は細かな浅い調整加工である。

二次加工痕有剥片 (2) 長さ3.1cm、幅3.4cm、厚さ0.9cm、チャート製。幅広の剥片を素材とし、腹面右側縁に細かな調整を施す。剥片末端の節理面の縁辺に使用痕が残る。

使用痕有剥片 (3) 長さ3.4cm、幅1.45cm、厚さ0.7cm、チャート製。縦長剥片の左側縁及び末端縁に微小剥離が残る。

剥片 (4) 長さ2.6cm、幅1.75cm、厚さ0.3cm、サ

ヌカイト製。背面には石核の素材となった剥片の腹面の一部を中央に残し、上下端からの浅く奥に延びる剥離痕を留める。腹面にはバルブが発達しない。

核 (5・6) 5は長さ2.85cm、幅2.1cm、厚さ1.05cm、チャート製。正面は上方から剥離を行った後、打面を90° 転位して剥離が為されている。かなり剥離作業が進行しており、いわば残核である。裏面では剥片剥離作業は行われていない。6は長さ3.35cm、幅4.65cm、厚さ1.2cm、チャート製。正面には中央に上方からの剥離痕を留める。裏面には正面での剥離作業に伴うと思われる打面縁調整がみられる。裏面の剥離方向は正面と90° 違えており、剥離痕の重複関係から裏面での剥離作業が正面に先立って行われていることが分かる。(久保勝正)

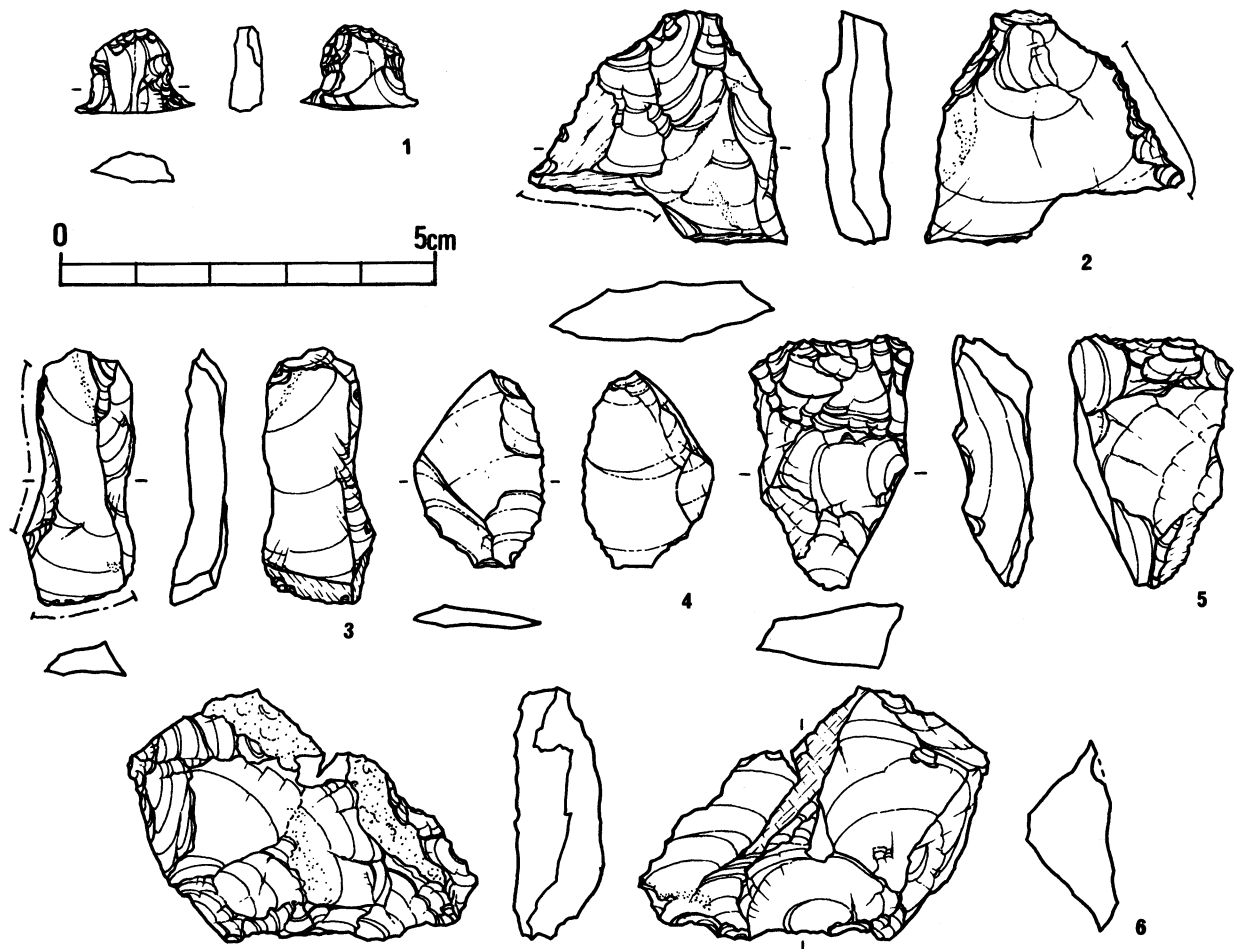


fig. 57 縄文時代石器実測図 (1 : 1)

V. 調査試料の科学分析

1. 落合古墳群他出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

初期須恵器の産地推定法が提案されている。それによると、地元には窯跡がある場合には大阪陶邑群と地元群との間の2群間判別分析で、地元には窯跡がない場合には、新しい時期の窯の須恵器をもって代替させ、大阪陶邑群と代替地元群との間の2群間判別分析で産地推定ができる。

落合古墳群から出土した須恵器にはTK216型式からTK47型式にわたるものが認められる。この時期には、落合古墳群周辺では窯跡は発見されていない。そこで、久居窯群、徳居窯群、原窯群を代替地元群とし、それに、可能性のある大阪陶邑群・猿投窯群を加えて、6つの母集団のいずれに帰属するかを判断する判別分析を試みた。

試料はすべて、表面を研磨したのち、100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は10tの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mm錠剤試料として、波長分散型の蛍光X線分析装置でNa、K、Fe、Rb、Srの6元素を定量分析した。分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1で標準化された値で表示された。

分析値はtab. 4にまとめられている。また、6母集団からのマハラノビスの汎距離の2乗値をK、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算した結果がtab. 5にまとめられている。母集団への帰属条件は $D^2_{(X)} \leq 10$ である。(X)は母集団名である。徳居群に対してこの条件を満足する試料は一つもない。したがって、徳居群産は一つもないということである。次に、久居群に対してはNo. 1が帰属条件を満足するが、他の試料は満足しない。しかし、No. 1は大阪陶邑群からの距離がはるかに近く、久居群産であ

る可能性は少ない。そうすると、久居群産の可能性をもつものがなくなることになる。原群についてはNo. 1・5・11・12の4点が帰属条件を満足させるが、いずれの試料も同時に大阪陶邑群からの距離が近く、大阪陶邑群産の可能性の方が高い。No. 11のみは大阪陶邑群からも原群からも等距離にあり、どちらに帰属するかは判断できない。したがって、積極的に地元産と判断できるものは一つもないことになる。

猿投群に対して帰属条件を満足するのはNo. 3・9の2試料である。しかし、両試料とも大阪陶邑群への距離はさらに近い。したがって、No. 3・9とも大阪陶邑群産の可能性の方が大きい。そうすると、No. 2・7・8の3点を除いて他の試料は全て大阪陶邑群産の可能性をもつことになる。No. 2・7・8の3点はどの母集団にも帰属せず、産地不明となる。

念のため、全試料のRb-Sr分布図をfig. 6に示しておく。ほとんどの試料は大阪陶邑領域内に分布していることがわかる。No. 2は大阪陶邑領域の右側にずれて分布するのに対し、No. 7・8の2点は左下端部に分布する。No. 7・8の2点は全因子で類似していることはtab. 4からわかる。この2点は産地不明であるが、同一生産地の製品である可能性が高い。

(註)

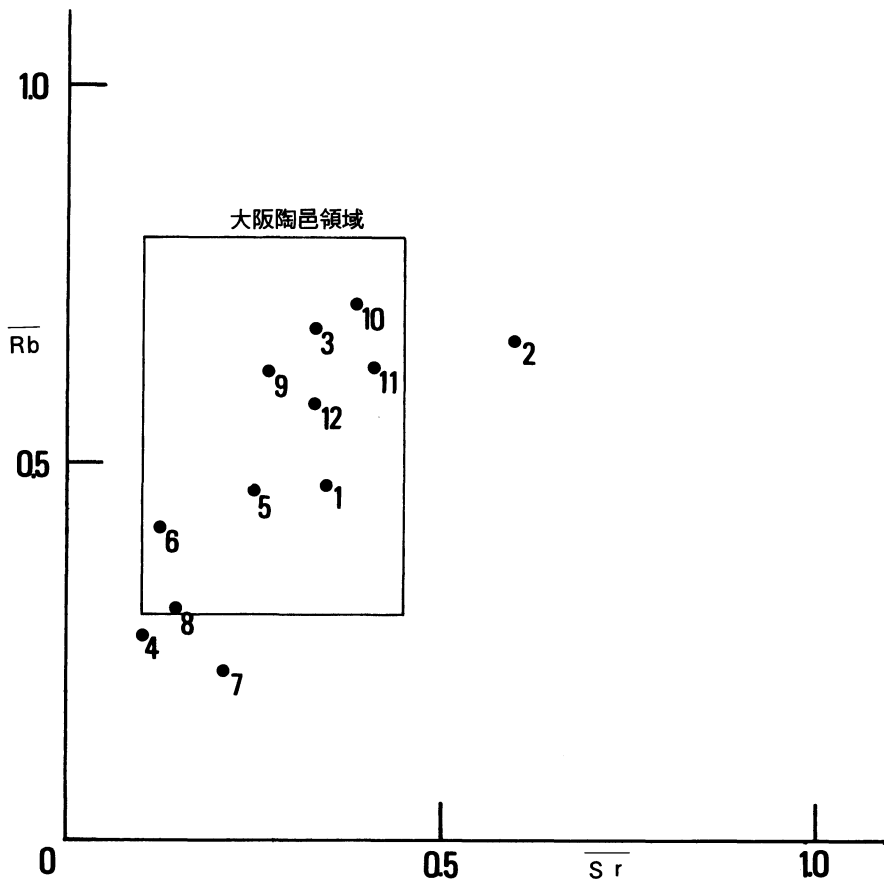
弥三郎新畑A古墳の試料は松阪市教育委員会編『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』(1990)の187番(分析番号11)・138番(分析番号12)の試料である。大足遺跡の試料は平成元年度に三重県埋蔵文化財センターが調査したものである。

No.	報告No.	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
1	25	短頸壺	0.454	0.170	2.55	0.469	0.348	0.204	落合1号
2	26	甕	0.643	0.297	1.96	0.659	0.595	0.406	落合1号
3	36	壺	0.524	0.110	2.86	0.676	0.333	0.237	落合2号
4	37	壺	0.251	0.024	2.96	0.271	0.101	0.028	落合2号
5	PL.32下	甕	0.441	0.066	2.68	0.456	0.248	0.117	落合2号
6	89	高坏	0.309	0.014	2.66	0.415	0.125	0.040	落合3号
7	90	壺	0.244	0.097	2.58	0.225	0.212	0.083	落合3号
8	92	甕	0.238	0.063	2.69	0.313	0.148	0.067	落合3号
9	136	壺	0.486	0.078	2.29	0.616	0.271	0.266	落合8号
10		甕	0.573	0.145	2.09	0.712	0.385	0.189	大足遺跡
11		壺	0.504	0.123	1.91	0.627	0.408	0.357	弥三郎A
12		甕	0.471	0.119	2.27	0.580	0.328	0.271	弥三郎A

tab. 4 胎土分析値（分析値はJG-1による標準化値である）

No.	大阪陶邑	猿投	久居	徳居	原	推定産地
1	2.5	29	9.6	24	7.0	大阪陶邑、原、久居
2	18	132	78	260	52	不明
3	2.3	8.5	27	26	14	大阪陶邑、原
4	10	24	43	80	22	大阪陶邑
5	1.9	12	24	45	6.2	大阪陶邑、猿投
6	6.6	12	23	83	29	大阪陶邑
7	15	43	25	77	17	不明
8	13	24	23	154	21	不明
9	1.8	2.6	20	18	16	大阪陶邑、猿投
10	3.7	18	36	41	14	大阪陶邑
11	4.4	40	60	104	4.1	原、大阪陶邑
12	0.77	12	15	17	5.3	大阪陶邑、原

tab. 5 産地推定の結果



tab. 6 Rb-Srの分布

2. 落合古墳群における遺構内土壌のリン・カルシウム分析

三重県農業技術センター 原 正之

1. 目的

盗掘などの後世における遺構内土壌の攪乱がなく、また遺構面の深度が深く、雨水の進入や後世の耕作などによる影響を受けていない古墳の遺構内土壌においては、埋葬された人体由来のリン・カルシウムが土壌中に周辺土壌よりも高濃度で残存することがわかっている。本試験では発掘中の落合古墳群の遺構内土壌についてリン・カルシウム分析を行い、人体埋葬位置の推定を行うことを目的とする。

2. 試験方法

5か所の埋葬部と1か所の石組墓について出土面(埋葬棺底面)土壌を各図中に示したように一定間隔に採取し、風乾後篩別し、分析に供した。

- ・リンの分析；乾式灰化後、塩酸で抽出し、アスコルビン酸法で分析した。
- ・カルシウムの分析；乾式灰化後、塩酸で抽出し、原子吸光法で分析した。

地点No.	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P - Blank	T-Ca - Blank
1	30.3	66.8	-	-
2	50.8	64.1	21.4	0
3	51.5	64.6	22.1	0
4	64.2	53.0	34.8	0
5	51.3	65.5	21.9	0
6	53.1	69.0	23.7	1.6
7	45.0	59.7	15.6	0
8	57.5	69.3	28.1	1.9
9	41.6	77.9	12.2	10.5
10	23.1	80.8	0	13.4
11	36.5	68.0	7.1	0.6
12	43.9	72.2	14.5	4.8
13	26.6	76.5	0	9.1
14	28.4	68.0	-	-

備考；地点No 1、No14の平均をBlank値とした。

tab. 7 土壙墓1の分析結果

遺溝内 地点No.	中央部		左側		右側	
	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)
1	50.1	84.4				
2	37.4	63.9	45.7	71.9	38.4	84.3
3	92.6	39.7				
4	80.3	51.3	51.1	64.9	35.8	91.5
5	64.6	86.5				
6	55.0	68.8	45.0	51.0	46.3	82.7
7	76.4	70.2				
8	102.3	87.1	47.1	69.9		
9	55.4	77.2			31.0	81.9
10	73.0	60.3				
11	64.4	57.2	45.0	33.8	51.1	42.6
12	57.8	34.2				
13	45.5	32.0	43.8	97.1	62.4	33.5
14	79.1	76.6				
15	66.7	55.6	45.0	38.1	61.2	52.3
16	25.4	53.3	81.6	72.7	28.2	54.8
17	32.3	44.7	24.5	44.7		

tab. 9 2号墳埋葬施設の分析結果

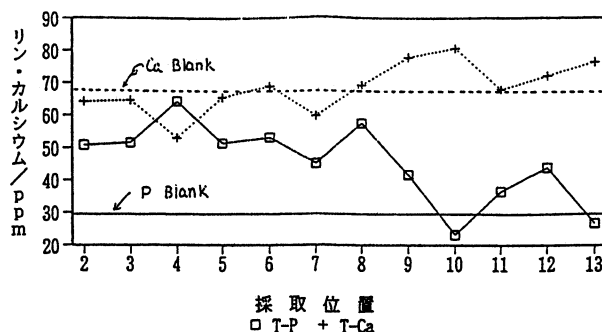
3. 結果および考察

a. 土壙墓1

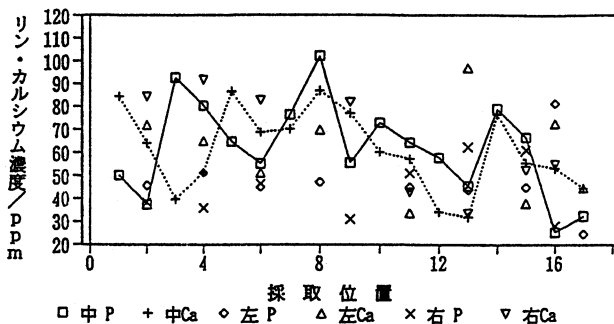
土壙墓1の結果についてはtab. 7・8に示した通りである。遺構内土壌のBlankとしてNo.1とNo.14の地点の平均値を用い、各地点の測定値から差し引いて人為的な影響について検討したところ、リンについては地点No.2~9までがやや高かったが、カルシウムについてはこの区間の濃度は同時代地層中の濃度とほぼ同濃度であり、リンの高濃度領域とは一致しなかった。このため、同遺構における人体埋葬位置の推定には至らなかった。

b. 2号墳埋葬施設

2号墳埋葬施設の結果については、tab. 9・10に示した。この遺構の場合埋棺部周辺土壌中 (No.35~39)の濃度が高く、埋棺部の土質と異なっていたものと考えられるため、Blank値を差し引いた値としての検討は行わなかった。しかし、埋棺部の人体の影響を受けていないと考えられる端部のリンおよびカルシウムの平均濃度は両成分とも40~50ppm程度



tab. 8 土壙墓1におけるP・Caの濃度分布



tab. 10 2号墳埋葬施設におけるP・Caの濃度分布

であり、この値を埋棺部の Blank 値と考えると、リンについては中心部のNo.3~10の間が、カルシウムについてはNo.5~9の区間が他の地点に比べ高い値を示したことから、明確ではないが、この区間では人体あるいはその他の人為的な影響が加えられたものと考えられた。

c. 2号墳下部遺構土壌1・2

土壌1の分析結果についてはtab.11・12に示した。土壌1では中央部の中央部のNo.2・4・5の各地点がリン・カルシウムとも高い値を示し、人体の埋葬による影響であるものと考えられた。

土壌2の分析結果についてはtab.13・14に示した。土壌2ではリンについてはNo.5~8が、カルシウムについてはNo.5~9の各地点が他の地点に比べ高い値を示したが、No.9の地点についてはリンは低かった。

地点No.	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P -Blank	T-Ca -Blank
Blank	32.9	65.2	-	-
1	33.2	69.2	0.3	4.0
2	60.5	81.6	27.6	16.4
3	32.2	67.9	-0.7	2.7
4	52.9	83.6	20.0	18.4
5	47.8	74.2	14.9	9.0
6	32.4	66.3	-0.5	1.1
左 2	46.3	62.1	13.4	-3.1
右 2	39.5	82.3	6.6	17.1
左 5	30.8	69.5	-2.1	4.3
右 5	50.5	80.3	17.6	15.1

tab. 11 2号墳下部土壌1の分析結果

地点No.	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P -Blank	T-Ca -Blank
Blank	12.7	27.8	-	-
1	6.9	46.1	-5.8	18.2
2	9.2	54.1	-3.5	26.3
3	6.9	46.0	-5.8	18.2
4	6.9	39.9	-5.8	12.1
5	23.1	501.0	10.4	473.2
6	39.3	74.4	26.6	46.6
7	30.3	42.0	17.3	14.2
8	20.8	60.2	8.1	32.4
9	4.6	163.7	-8.1	135.9

tab. 13 2号墳下部土壌2の分析結果

地点No.	中央部		左側		右側	
	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)
1	16.6	80.0				
2	8.1	80.8				
3	3.9	63.7	18.5	102.0	22.2	84.9
4	13.6	63.3				
5	17.1	68.0				
6	3.9	63.7	24.5	150.5	17.6	74.1
7	9.7	72.3				
8	3.2	68.2				
9	4.4	69.7	22.6	80.7	37.2	73.1
10	6.7	69.7				
11	12.2	76.5				
12	15.2	72.3	20.1	89.3	19.9	72.7
13	14.8	72.4				
14	6.5	61.3				
15	20.3	76.5	13.6	85.0	18.7	68.8
16	12.5	105.4				
17	16.2	72.3				
18	22.2	76.5	17.1	89.3	18.0	79.1
19	15.5	76.5				
20	15.0	76.5				
21	16.6	85.9	20.3	87.6	17.8	90.9
Blank	16.5	70.5	(BlankはNo.36~No.45の平均)			

tab. 15 3号墳埋葬施設の分析結果

この結果No.5~8の区間においては埋葬人体による影響があったものと推察された。

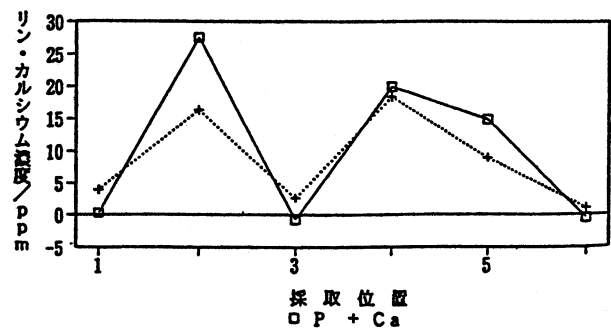
d. 3号墳および4号墳埋葬施設2

3号墳の分析結果についてはtab.15・16に示した。3号墳では各地点ともリンおよびカルシウム濃度は、ほぼBlank土壌の濃度と同程度であり、埋葬人体による影響は全く認められなかった。

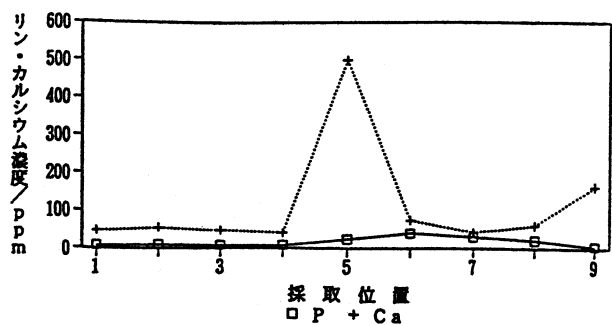
4号墳の分析結果についてはtab.17・18に示した。4号墳でも3号墳と同様にリンについては各地点ともBlankと同程度であったが、カルシウムについてはNo.4・6・7の各地点で高い値を示した。しかし、同地点のリンは低く、カルシウムが高かったのが人体の影響によるものかどうかについては判定が難しい。

e. 石組墓3

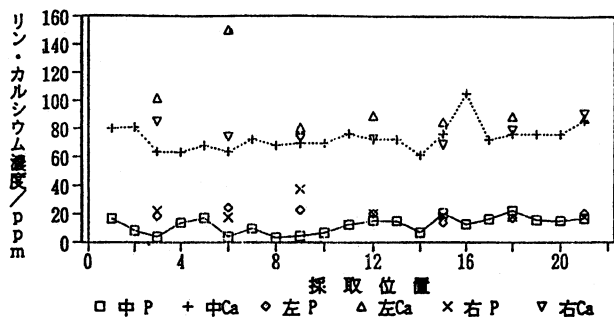
石組墓3内土壌2点の内No.3についてはリン・カ



tab. 12 2号墳下部土壌1におけるP・Caの濃度分布



tab. 14 2号墳下部土壌におけるP・Caの濃度分布



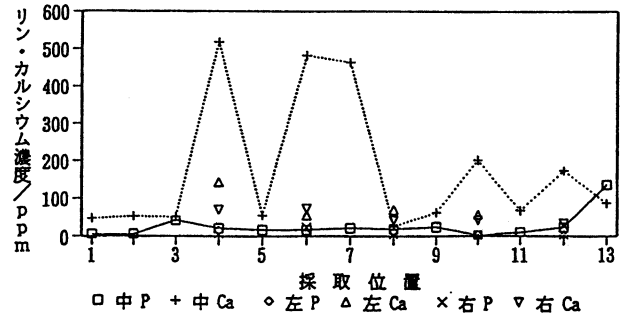
tab. 16 3号墳埋葬施設におけるP・Caの濃度分布

地点No.	中央部		左側		右側	
	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)	T-P (ppm)	T-Ca (ppm)
1	4.6	46.0				
2	4.6	52.1				
3	41.6	50.1				
4	20.8	518.9	13.9	143.4	4.6	69.1
5	16.2	54.1				
6	16.2	483.0	4.6	54.1	23.1	71.3
7	20.8	465.1				
8	18.5	25.1	9.5	68.4	3.6	40.4
9	23.1	60.7				
10	2.3	202.2	2.1	55.5	3.6	40.4
11	9.2	66.3				
12	23.1	173.8	2.2	21.9	2.2	32.3
13	136.3	86.6				
Blank	28.9	81.5				

tab. 17 4号墳埋葬施設2の分析結果

ルシウムとも周辺土壌に比べ4～5倍の高い濃度を示し、明らかに人為的な影響を受けているものと考えられた。しかし、同じく遺構内土壌であるNo.2についてはほぼ周辺土壌の濃度と同じであった。

以上の結果、2号墳関係については3か所とも人体の埋葬に伴うと考えられるリン・カルシウム濃度が高い地点が遺構内においてある程度連続的に見られたが、その他の遺構については明確な結果は得ら



tab. 18 4号墳埋葬施設2におけるP・Caの濃度分布

れなかった。これは土壌の採集地点、遺構の出土深度、雨水および地下水などの諸条件により、土壌中の両成分が流亡したことがその原因と考えられる。

(補注)

3号墳の土壌採集地点は、鉄刀および兼手刀子が出土した時点でっており、棺底からはおよそ15～20cmの開きがあったことを明記しておく。また、土壌サンプルの篩掛け時にこちら側の手落ちがあった可能性もあることを指摘しておく。(伊藤)

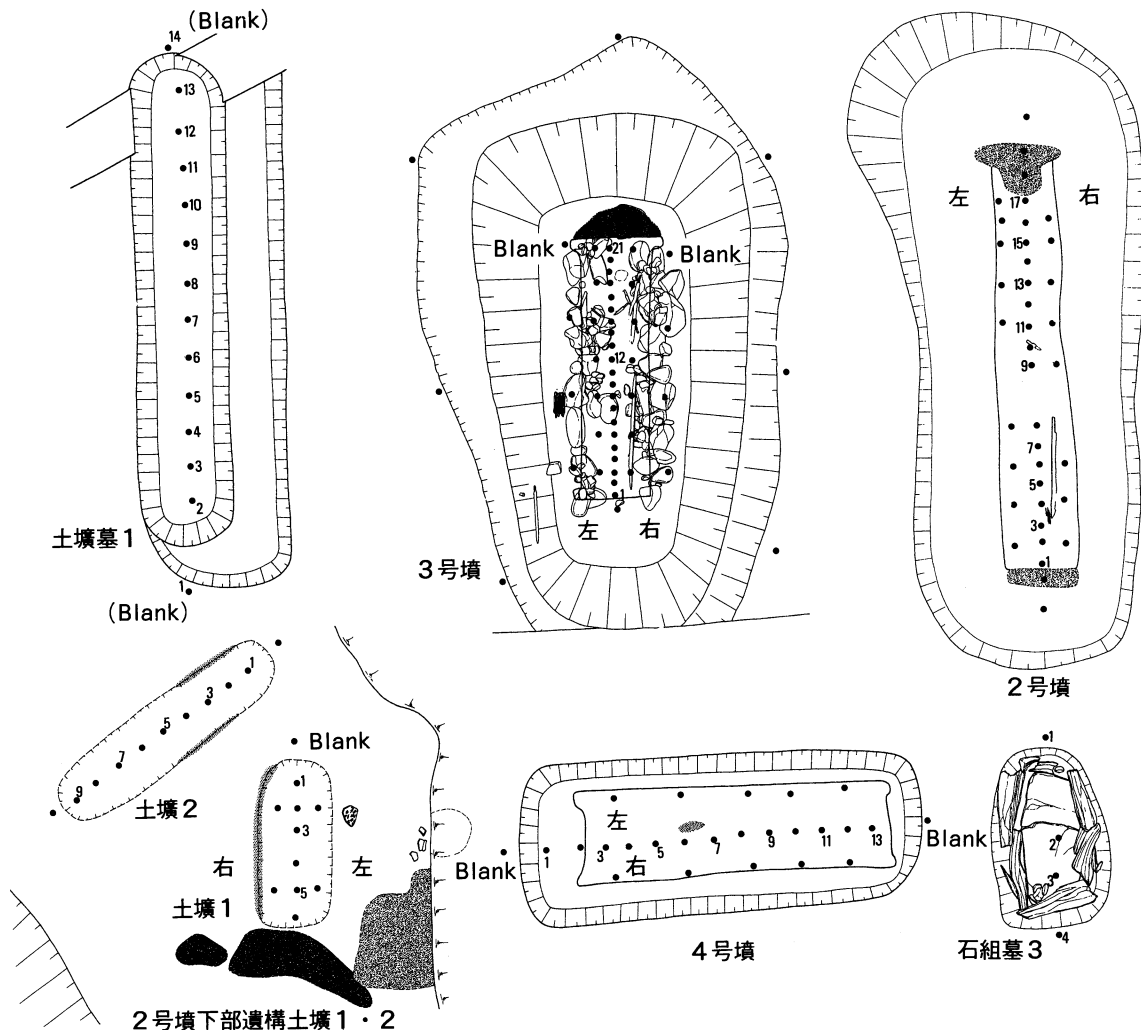


fig. 58 土壌サンプル採集地点概念図 (縮尺不同)

Ⅵ. 調査のまとめと検討

今回の調査によって落合古墳群の一端が明らかになった。総括的な検討は今後の課題とし、調査によって得た知見から、出土遺物に関する問題と落合古墳

群の状況から見た初期群集墳のあり方の2点を中心に若干の検討を加え、結語にかえたい。

1. 出土遺物に関する若干の検討

a. 鉄製品類

鉄刀

刀類は2号墳から1本、3号墳から1本、5号墳から1本、10号墳埋葬施設3から1本出土しており、合計4本認められる。茎部の目釘穴は2箇所ないしは3箇所存在している傾向にあり、目釘穴は複数が基本であることが指摘できる。

2号墳の鉄刀には銚本孔がある。臼杵勲氏によると、銚本孔を有する鉄刀は6世紀初頭に出現するという⁽¹⁾。2号墳が田辺編年のTK47型式併行期であることは、臼杵氏が提示した資料中の最も古い部類にあたることになる。

鉄剣類

剣類は3号墳から3本、5号墳から1本、8号墳から1本、それぞれ出土している。これらの古墳は田辺編年のTK208型式を中心とし、5号墳はそれより若干新しい可能性もあるものの、1・2号墳に伴わないことから比較的古い古墳に伴うものであることが当古墳群からも指摘できる。

8号墳の鉄剣には、鉄刀の銚本孔に類似した位置に2箇所の孔を持つものである。鉄刀の銚本孔について、臼杵勲氏は装飾付大刀との関係から儀仗的な性格が強いものと考えられている。機能的には鉄刀の銚本孔と同義と解釈できようが、鉄剣に銚本孔が存在する例は管見に及ばない。また、鉄剣の例とはいえ、銚本孔を持つ鉄刀の出現が6世紀初頭であるという指摘に対しても、再考の余地があることを示唆しよう。銚本孔を持つ刀剣類について、「儀仗的な性格」以外の可能性も含めて検討する必要があるだろう。

蛇行剣は、県内での類例は今のところない。分布の詳細については既に楠元哲夫氏を中心に触れられており、現状では近畿・南九州を中心とした分布の

ようである。時期的には古墳時代中期を中心としている点から、かなり短い期間に意味を持ったものようである。「蛇行」という形態から連想するのはやはり「蛇」であり、当該時期の「蛇」に関する検討を民俗学的あるいは東洋史学的観点からの考察も含めて考えるべきものと思われるが、浅学の筆者には現状では成し得ない。

刀子類

刀子類は1号墳から3点、2号墳から1点、3号墳から4点、4号墳埋葬施設2から1点、5号墳から1点、8号墳から1点、10号墳埋葬施設1から1点、それぞれ出土している。比較的多くの埋葬施設に伴うものといえ、当該古墳群中では、一般的な鉄器のようである。

その中で3号墳の刀子類は他と比べて様相を異にする。3号墳では、通常の刀子の他に、蕨手刀子の範疇に含まれるものと茎尻が屈曲する刀子とが存在している。茎尻が屈曲する刀子を詳しく観察すると、刃部と茎部との明確な境を平面的に観察することはできず、断面長方形の鉄素地を鍛えることによって刃をつくり出しているものであろうと考えられる。この点では蕨手刀子と共通する。茎部は刃の付く方とは逆側にゆるい「L」字形に折り返しており、蕨手刀子がそれをさらに巻き込むものであることと相違する。

このことから、茎尻が屈曲する刀子は、基本的には蕨手刀子の製作方法と共通したものであることがいえよう。しかし蕨手刀子とは、素地の厚さが違う点で決定的に異なるものである。蕨手刀子の形態の特徴からは、茎尻を巻き込んだ後、さらに鍛えているかものと考えられる。したがって、刃の装着はその後であるものと考えられる。それに対し、茎尻が

屈曲する刀子は、茎尻を屈曲させた後にさらに鍛えたような状況を観察することはできない。したがって、茎尻の屈曲と刃の装着との間に「鍛える」という1工程が欠如していることが指摘できるのではないだろうか。

以上のことから、茎尻を屈曲させる刀子を蕨手刀子の系統に含めることは可能であろうが、蕨手刀子とは明らかに工程の違いが存在するようであることを重視して、名称も蕨手刀子とすべきではないと考える。当報告では「曲茎刀子」と仮称しておく。

さて、蕨手刀子は県内に類例をみることはできないが、曲茎刀子は大山田村高猿6号墳⁽³⁾にみることができる (fig.59)。また、県外でも京都府小池8号墳⁽⁴⁾・京都府中山古墳⁽⁵⁾・徳島県宝幢寺3号墳⁽⁶⁾・山口県朝田第11号墳 (横穴墓⁽⁷⁾)・福岡県老司古墳⁽⁸⁾・同県池の上D3・4石蓋土壙墓⁽⁹⁾など各地にみるることができる。時期的には5世紀代と言われる古墳を中心としている傾向にある。分布と時期的な意義を見出すためにはさらに詳しい分析が必要である。

鉄鏃

当古墳群中で最も出土量の多いのが鉄鏃である。3・10-3・10-1・5-1・5-2・2号墳に認められ、総数は86本である。当古墳群の鉄鏃は3号墳の一例 (74) を除いて、全て長頸鏃の類に属するものである。

鉄鏃の編年については田中晋作氏⁽¹⁰⁾および杉山秀宏氏⁽¹¹⁾によって検討されている。分類に関しては杉山氏が詳細に行っており、頸部の形状の大部分について

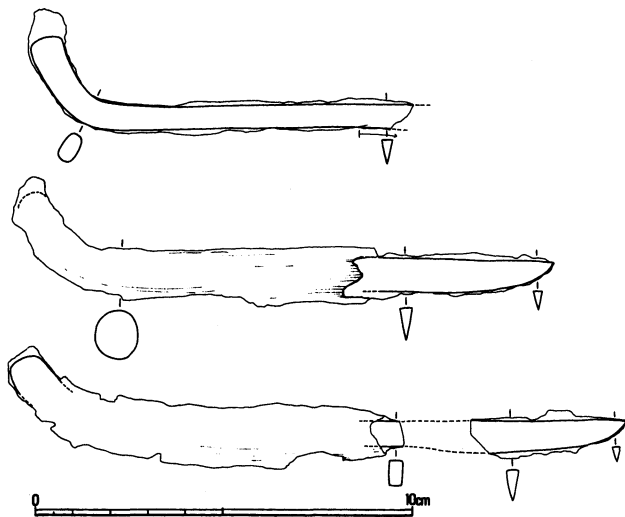


fig. 59 高猿6号墳出土刀子 (1 : 2)

は杉山氏のものに準拠していく。ただし、刃部形状および頸部形状のうち逆刺の分類方法については今一つ明確ではない。特に刃部の形状には、落合古墳群に限らず「柳葉形」とも「長三角形」ともつかないものが多く存在する。そのため、ここでは短頸鏃の部類に含めることのできるものについてのみ「柳葉形」の名称を用い、短頸鏃のものうちそれに類したものは刃部の形態分類としては「三角形～小柳葉形」として一括し、刃部関部の形態によって3類に細分しておく (fig.60)。なお、頸部の関部は杉山氏のいう「角関」ないしは「台形関」であるが、木質の残存が比較的良好いため、確定はできない。

この分類図でいう有逆刺A cは、逆刺が頸部に対

短頸鏃	柳葉形		
	長	有逆刺 A	
頸部	小柳葉形	有逆刺 B	
	柳葉形	無逆刺	
	圭頭形		
鏃	片刃形		

fig. 60 落合古墳群出土の鉄鏃分類図 (1 : 3)

古墳-No.	刃形	全長	刃部長	頸部長	基部長	断面		登録No.
						頸	茎	
3-62	有逆刺Aa2	20.0?	3.3	10.9	7.2?	長方	-	3-31
3-63	有逆刺Aa1	18.8?	3.3?	10.0	6.8?	長方	正方	3-34
3-64	有逆刺Aa2	16.0+	3.4	11.6	2.2+	長方	長方	3-29
3-65	有逆刺Aa2	17.5?	3.5	9.6	5.5?	長方		3-26
3-66	有逆刺Aa2	16.6+	3.4	10.2	4.3+	長方		3-25
3-67	有逆刺Aa2	16.5?	3.4	9.6	4.4?	長方		3-30
3-68	有逆刺Aa1	16.4+	3.3	11.4	3.3+	長方	長方	3-21
3-69	無逆刺a	16.0+	2.2	8.1	5.6?	長方		3-27
3-70	無逆刺a	18.0+	2.7	10.4	4.8+	長方	長方	3-32
3-71	無逆刺a	6.9+	2.6	4.2		長方		3-33
3-72	有逆刺Ac	15.6	2.4?	8.5	4.7?	長方		3-28
3-73	圭頭形	16.0+	1.4?	11.0	3.5+	長方		3-23
3-74	柳葉形	18.8?	3.0?	8.3?	7.5?	楕円		3-24
3-75	片刃形	20.6?	2.3	12.0	6.2	長方		3-22
5-97	片刃形	11.5+	2.7	8.0	1.0+	長方	長方	5-3
5-98	片刃形	11.7+	2.6	8.4	1.1+	長方	長方	5-7
5-99	片刃形	13.0+	3.3?	8.6?	2.0+	長方	長方	5-16
5-100	片刃形	13.1?	2.8	8.2	2.9?	長方		5-6
5-101	片刃形	13.6+	3.0	7.7+	3.7+	長方	長方	5-11、12
5-102	片刃形	14.0+	3.1	7.8	3.7+	長方	長方	5-11
5-103	片刃形	13.9+	3.4	7.6	3.6+	長方	正方	5-20
5-104	片刃形	11.8+	3.2	8.1	1.3+	長方	長方	5-14
5-105	片刃形	13.4+	2.6	8.1	3.2+	長方	長方	5-13
5-106	片刃形	14.6+	2.4	7.6	5.2+	長方		5-19
5-107	片刃形	13.7+	3.4	7.8	3.2+	長方	正方	5-10
5-108	片刃形	12.9+	3.0?	7.9	2.7+	長方	長方	5-15
5-109	片刃形	15.3?	3.3	7.8	4.8?	長方	正方	5-5
5-110	片刃形	13.3+	3.1?	7.7	3.0+	長方	長方	5-9
5-111	片刃形	15.0?	3.2?	7.6	5.2?	長方		5-8
5-112	片刃形	14.1+	2.3	8.5	3.9+	長方		5-4
5-113	?	7.0+		6.0+	0.9+	長方		5-17
5-115	片刃形	19.2?	3.1	10.0	6.9?	長方		5-21
5-116	有逆刺Aa1	16.7?	3.8	8.9	5.3?	長方		5-22
5-117	有逆刺B	16.6+	2.1	8.6+	6.3+	長方		5-23
5-119	有逆刺b	13.7+	2.3	8.4	2.9+	長方	正方	5-24
5-120	無逆刺b	14.8+	1.9	9.0	3.7	長方	長方	5-25
5-121	有逆刺b	8.9+	2.1	6.8		長方		5-26
10-157	片刃形	15.4	2.5	7.9	5.5	長方		10-37
10-158	片刃形	14.1+	2.4	7.5	4.6+	長方		10-37

古墳-No.	刃形	全長	刃部長	頸部長	基部長	断面		登録No.
						頸	茎	
10-159	?	6.0+				長方		10-38
10-160	片刃形	10.9+	2.5?	7.5?	1.9+	長方		10-38
10-163	有逆刺Ab	16.1+	2.5	9.6	4.4+	長方		10-29
10-164	片刃形	15.2+	2.3?	8.9	4.2+	長方		10-30
10-165	片刃形	15.3+	2.3	8.2	4.5?	長方		10-31
10-166	片刃形	15.5	2.6	8.6	4.7	長方	長方	10-25
10-167	片刃形	16.0?	2.8	9.0	4.5?	長方		10-26
10-168	片刃形	15.5?	2.8	8.7	4.5?	長方		10-27
10-169	片刃形	13.7+	3.1?	9.1	2.1+	長方		10-28
10-170	片刃形	13.5+	2.6?	8.6	2.7+	長方	正方	10-32
10-171	片刃形	14.2+	2.6?	8.6	4.1	長方		10-21
10-172	片刃形	14.4+	2.5	8.8	4.2+	長方		10-58
10-173	片刃形	13.3+	1.2+	8.6	4.2	長方		10-22
10-174	片刃形	15.5+	2.8	8.8	4.3+	長方		10-18
10-175	片刃形	16.4?	2.7	8.7	5.5?	長方		10-24
10-176	片刃形	12.0+	2.9	8.1	1.5+	長方		10-33
10-177	片刃形	13.0+	2.9	8.7	2.1+	長方		10-20
10-178	片刃形	11.8+	2.7?	8.9	0.7+	長方		10-23
10-179	片刃形	12.5+	2.8	8.9	1.4+	長方		10-42
10-180	片刃形	10.9+	2.9	8.4	0.2+	長方		10-19
10-181	?	8.7+		4.5+	4.3+	長方	長方	10-34
10-182	有逆刺Ab	16.8?	2.8	8.0	6.3?	長方		10-48
10-183	有逆刺Ab	14.7?	2.6	8.2	4.1?	長方		10-55
10-184	有逆刺Ab	13.8+	2.6	7.7	3.7+	長方	長方	10-34
10-185	有逆刺Ab	14.1?	2.7	8.4	3.5?	長方		10-40
10-186	有逆刺Ab	13.7?	2.6	7.5	3.7?	長方		10-40
10-187	有逆刺Ab	14.0+	2.8	7.9	3.6+	長方	長方	10-44
10-188	有逆刺Ab	13.5+	2.7	7.9	3.1+	長方	長方	10-43
10-189	有逆刺Ab	12.7+	2.6	7.8	2.7+	長方		10-41
10-190	有逆刺Ab	12.5+	2.7	8.0	2.1+	長方		10-46
10-191	有逆刺Ab	12.7+	2.7	8.0	2.2+	長方	長方	10-47
10-192	有逆刺Ab?	10.1+		7.7?	2.7+	長方		10-56
10-193	有逆刺Ab	11.1+	2.7	7.8	1.0+	長方		10-49
10-194	有逆刺Ab	9.6+	2.6+	7.9		長方		10-54
10-195	有逆刺Ab	10.6+	2.7+	8.2		長方		10-50
10-196	有逆刺Ab	10.5+	2.5	8.1	0.1+	長方		10-51
10-197	有逆刺Ab	6.1+	2.6	3.7+		長方		10-52
10-198	有逆刺Ab	6.4+	2.7	3.9+		長方		10-53

*全長・刃部長・頸部長・基部長の数値は全てcmである。
 *+のある数値は、原形はその数値よりも長いことを示す。
 *?のある数値は、その数値が確定できないことを示す。

tab. 19 落合古墳群出土鉄鏃計測表

して直角となり、逆刺の役目は果たすと考えられるのでここに含めた。しかし、無逆刺 a としたものとは型式学的には型式差に相当するもののようにも考えることができる。したがって、別な視点からは両者は同じ分類枠内（形態内）の差と見做すことも可能である。

では、当古墳群中における各古墳の鉄鏃の形態を見てみよう。3号墳では短頸鏃が1点のみ認められ、他は全て長頸鏃である。有逆刺 A a 2 の長頸鏃が約半数を占めるものの、有逆刺 A a 1・A c、無逆刺 a、および圭頭形、片刃形のものがあり、混在している状況が認められる。5号墳埋葬施設1では片刃形が圧倒的に多く、埋葬施設棺外にある一群に有逆刺 A a 2、有逆刺 B、片刃形の3形態が存在している。10号墳埋葬施設1では1点の有逆刺 A b のほか片刃形である。埋葬施設3では有逆刺 A b のみである。

さて、当古墳群中で最も古く埋置された鉄鏃群は、出土した土器等から3号墳のものとするのが妥当である。そして、同様の理由から、最も新しく埋置された鏃群は2号墳のものと考えられる。10号墳のものに関しては、埋葬施設3のものの方が、埋葬施設1のものより古く埋置されたものである。この関係と鉄鏃の形態変化との関係とを比較すると、有逆刺 A a は、片刃形よりも古い時期に盛行するものであるといえる。また、3号墳からは無逆刺 a が3本で片刃形が1本のみであることから、5号墳の埋葬施設1は埋葬施設2に後出するものである可能性も考えられる。

最も古相を呈すると考えられる3号墳の鉄鏃群は、当該古墳群中の他の古墳の鉄鏃群と比較しても形態的なばらつきが顕著である。当該古墳の初現的な存在であるため、鉄鏃入手経路が安定しておらず、「寄せ集め」の状況となったものと考えられる。その意味で、5号墳および10号墳の各埋葬施設の鉄鏃群は、かなり安定した状況を示すといえよう。

形態的な検討からは、以上のようなことが観察される。では次に、鉄鏃の法量から分析してみよう。鉄鏃の計測は、全長・鏃身部・頸部・基部の各部位を求めたものである（tab.19）。それぞれの鏃身部形態を基準とした鏃身部長と頸部長の平均値を求め

てみると、以下のことを読み取ることができよう。3号墳では、柳葉形短頸鏃と片刃形長頸鏃を除いたものは、鏃身部長には違いがあるものの、頸部長は8.1～11.4cmの間に収まり、有逆刺 A a の頸部長は平均するとおよそ10.5cmである。しかし、有逆刺 A a の頸部長には最大2cmの開きがあり、あまり一定しているとはいえない。5号墳埋葬施設1では、棺外出土の3点を除いて、鏃身部長は3.0cm前後、頸部長は8.0cm前後に集約する。5号墳棺内出土の鉄鏃の場合、頸部長は最大1cmの開きが認められ、3号墳と比べればよくまとまっているといえる。10号墳埋葬施設1では、1点の有逆刺 A b を除いて鏃身部長は2.7cm、頸部長は8.7cmに平均される。頸部長は最大1.9cmの開きである。10号墳埋葬施設3では、頸部長の平均は7.9cmであり、最大0.9cmの開きがある。最も均一な一群であるといえる。

10号墳では、層位的には埋葬施設1より3の方が古いのであるが、頸部長を見ると、埋葬施設1の鏃群の方が長く、3号墳の鉄鏃に近い状況が観察される。そうすると、層位的な結果からは、3号墳で比較的長かった頸部が5号墳埋葬施設1および10号墳埋葬施設3の段階で短くなり、10号墳埋葬施設1では若干また長くなるという結果になる。

これらの結果から、鉄鏃の法量の差に関して、鉄素材の違い、製作時期の違い、などの理由を想定できよう。生産者側が鉄素材を手に入れる経緯、また需要者側が鉄製品を手に入れる経緯を追求していくことによってこの問題は解決するかも知れない。

b. 土器類

須恵器

須恵器は7号墳を除く各古墳および1号墳下部遺構から多く出土している。時期的には田辺編年のTK216型式からTK208型式相当のものが多く、TK23～47型式のものが若干とMT15型式の範疇と考えられるものがある。

これまで伊勢で出土するTK216～208型式の、いわゆる「初期須恵器」とされる一群については、和泉陶邑窯からの搬入品と考えられるものがほとんどであった。しかし、当古墳群中の須恵器については、例えば3号墳出土の高坏（88）は陶邑産の可能性が窺えるものの、それ以外は恐らく陶邑産ではないも

のと考えられる⁹³。その大部分が東海地域、特に地元伊勢で製作されたものである可能性を考える必要がある。県内では今のところ初期須恵器窯は確認されていないが、今後存在が確認される可能性も充分であろう。三辻利一氏による胎土分析結果を見ると、3号墳出土の壺(90)と大甕(92)は、陶邑窯のみならず、県内諸窯や猿投窯の元素構成とも異なるものである。これらが南伊勢のいずれかの窯から供給されたものである可能性は高いと見るべきであろう。

なお、伊勢の古墳から出土する初期須恵器は、安濃町平田35号墳⁹⁴・松阪市八重田16号墳⁹⁵・同市弥三郎新畑A古墳⁹⁶・明和町神前山1号墳⁹⁷に次いで5例目である。これらは平田35号墳を除いて南伊勢に偏る傾向にあるが、それが本来的なあり方を示すものかどうかは今後の検討課題である。

また、落合古墳群のうち、特に3・8号墳の須恵器はこれら他の古墳と比較しても若干古手である。重要なのは1古墳単独で初期須恵器が用いられているのではなく、古墳群という単位で初期須恵器が用いられていることである。その意義は鉄製品の動向とも関連させて考えねばならないが、落合古墳群の性格の一端を示すものであろう。

落合古墳群出土の須恵器は伊勢湾西岸地域における初期須恵器の新事例という意義にとどまらず、全国的な初期須恵器窯の拡散状況ないしは初期須恵器の分布状況を追求していくうえでも重要な意味を持つものと理解される。

2. 落合古墳群の展開と初期群集墳

1. 古墳群の展開

落合古墳群は、実年代ではおよそ4世紀末あるいは5世紀初頭から古墳の造営が開始され、6世紀前葉の時期に終焉する古墳群である。しかし出土遺物の状況からは、後述するように「葬地」としては古墳自体の造営開始よりもさらに遡るであろうことが想定される。

この動向を、古墳の形態や副葬品、あるいは埋葬施設の状況などによって、I～IV期に区分できる。

土師器

土師器類も各古墳から数点ずつ出土している。しかし、副葬品として土師器が用いられているのは1号墳に限られる。

土師器類で最も問題となるのは、1号墳周溝出土の高坏(15・16)であろう。この高坏は、3号墳出土のもの(81～85)に近い形態を呈するものではあるが、脚柱内面にヘラケズリを施さないことと、坏部と脚柱部の接合の特徴から、3号墳のものよりも先行することは確実である。形態的な特徴からは、布留期古段階⁹⁸に併行するものと考えるのが妥当であろう。

次に、7号墳出土の土器の編年的位置付けを考えてみよう。7号墳の時期を考える上で最も参考となるのがS字状口縁台付甕(130・131)である。残念ながら口縁部を欠損しているが、体部外面のハケメは比較的粗いことと、脚台部の折り返しが認められることが観察できる。このことから、赤塚次郎氏による分類⁹⁹のD類、安達厚三氏の分類¹⁰⁰のIV類に相当するものと考えることができる。

なお、7号墳の出土土器がおおよそ布留期中段階～新段階併行のものであることを考えると、1号墳周溝付近に7号墳よりも先行する埋葬施設が存在していたことが考えられる。出土位置からは、土壙墓2が相当するかと考えられるが、全く消滅してしまった埋葬施設が存在していた可能性もある。いずれにしても当該地に古墳時代前期の集落が存在していた形跡が全くない以上、埋葬地としての利用が布留期古段階に遡ると考えるのが妥当であろう。

以下、これら各期の状況をみてみよう。

I期—発生—

落合古墳群の発生は、古墳としては7号墳にはじまる。時期的には布留期新段階併行で、4世紀末ないしは5世紀初頭と考えられる。古墳は丘陵尾根稜線上の最高所ではなく、やや下がったところに占地する。古墳群の初現となる古墳が最高所に占地しない例は、県内では松阪市常光坊谷古墳群にも認めることができる。これは古墳群造営集団の集落の位置

と関係するものかも知れないが、横穴式石室を主体とする群集墳との比較とも絡めて興味深い意味を有している可能性がある。

なお、1号墳周溝から出土した土師器高坏（15～16）は7号墳の時期をさらに遡るもので、布留期古段階と見做される。7号墳に先行する土壙墓に伴うものか、あるいは墓域利用のための何らかの行為を行った時点のものと考えられる。調査ではその時期の埋葬施設を確定はできなかったが、出土位置から土壙墓2がそれに相当する可能性がある。

また、石組墓1・2は、7号墳に近接して築造されているものである。9号墳の埋葬施設との類似から7号墳よりも時期的に下る可能性もあるが、7号墳に接近して築造されていることを重視して当該期の築造と考える方が妥当であろう。

Ⅱ期—盛行—

落合古墳群の盛行期は、3号墳築造にはじまる。

時期的には田辺編年のTK208型式併行期前後で、5世紀中葉と考えられる。3号墳は、丘陵尾根の最も良好な位置に占地しており、最も古い7号墳があまり良い占地とはいえないことと対照的である。3号墳と前後して8～10号墳が築造され、若干遅れて5号墳が築造される。5号墳との位置的な関係と9号墳との埋葬施設形態の類似から、6号墳は5号墳にやや先行するものとするのが妥当であろう。これらの古墳は全て方墳である。

古墳の位置関係からは、この時期の古墳は3号墳・8～10号墳・5・6号墳の3単位群が存在していたと考えられる。土壙墓1・石組墓4は、その占地場所から、これらの単位群のいずれにも含まれない一群を形成すると考えられる。石組墓3・土器棺墓は3号墳と8号墳のちょうど中間にあたり、これもやはりこれらで一群をなすものとするべきであろう。したがってⅡ期には合計5つの単位群が存在すると考

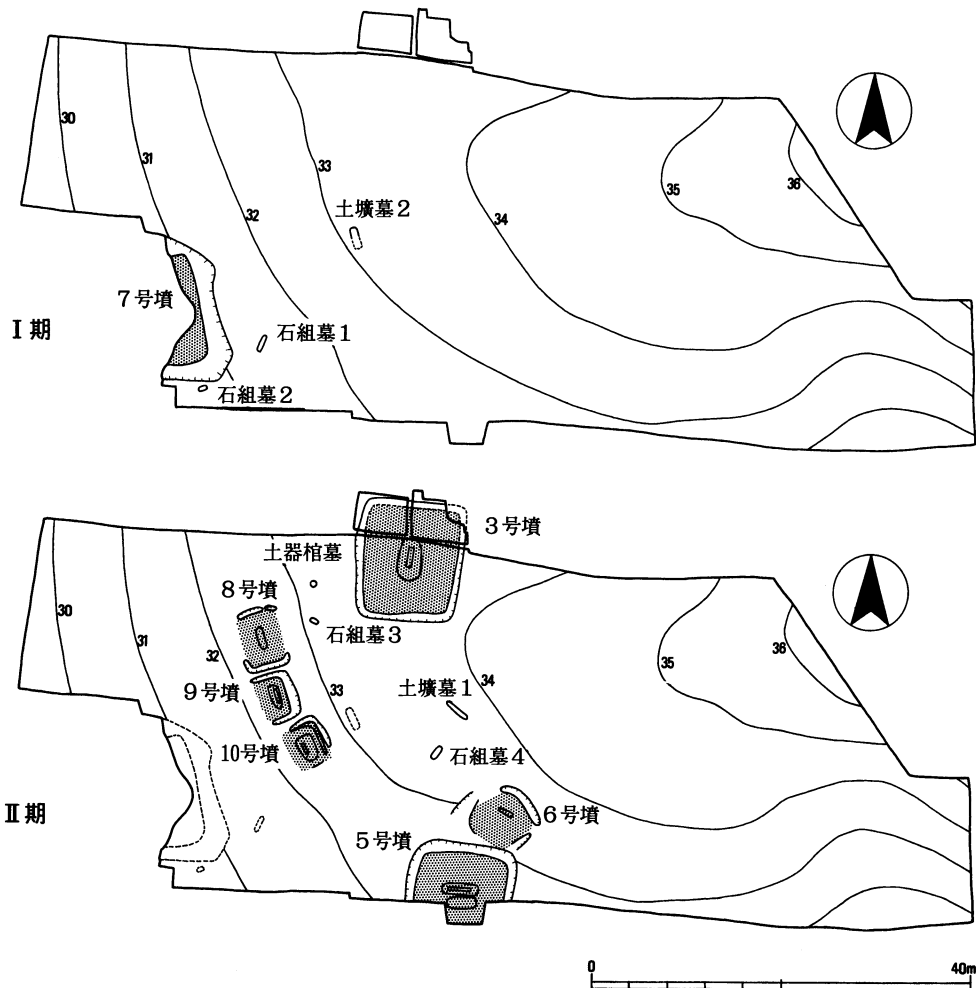


fig. 61 古墳および無墳丘墓の変遷(1) (1 : 800)

えられるのである。

なお、3号墳の近くに石組墓3・土器棺墓が占地している状況は、I期の7号墳周辺の状況とよく似ている。石組墓3・土器棺墓は、3号墳に関連して築かれた可能性も考えられる。

5・6号墳の単位群は、それぞれ3号墳の墳丘規模よりも著しく劣る。各埋葬施設単位の副葬品内容も3号墳のものとは明らかに異なる。同様なことは3号墳と8～10号墳との関係についても指摘できる。II期は3号墳を中心として構成されていると見なしてよいであろう。

なお、3号墳・8～10号墳および5・6号墳に囲まれたところは土壙墓や石組墓は存在するものの、基本的には空間地として存在しているように思われる。この点については後述する。

この時期には、埋葬施設に多くの鉄製品が副葬されているという特徴がある。そのなかで3号墳の鉄

製品は質・量ともに他を凌いでいる。鉄刀・鉄剣・鉄鏃および玉類を全て揃えているのは3号墳のみであり、その他のものは鉄刀をもたなかったり鉄鏃のみであったりする。10号墳は、3基の埋葬施設に収められていた遺物を全て併せれば比較的揃っているといえるが、それぞれ単独では副葬品には偏りが認められる。同じことは5号墳埋葬施設1・2の関係にも言える。

Ⅲ期—衰退—

落合古墳群の衰退期として把握できるのは、2・4号墳築造期である。田辺編年のTK23～47型式併行期で、5世紀後葉と考えられる。両者とも円墳である。

この2基の古墳は並列して築造されている。位置関係からは、2号墳が先述の5・6号墳の系列、4号墳が先述の3号墳の系列である可能性がある。また、この2基の古墳には土器型式では時期差がある

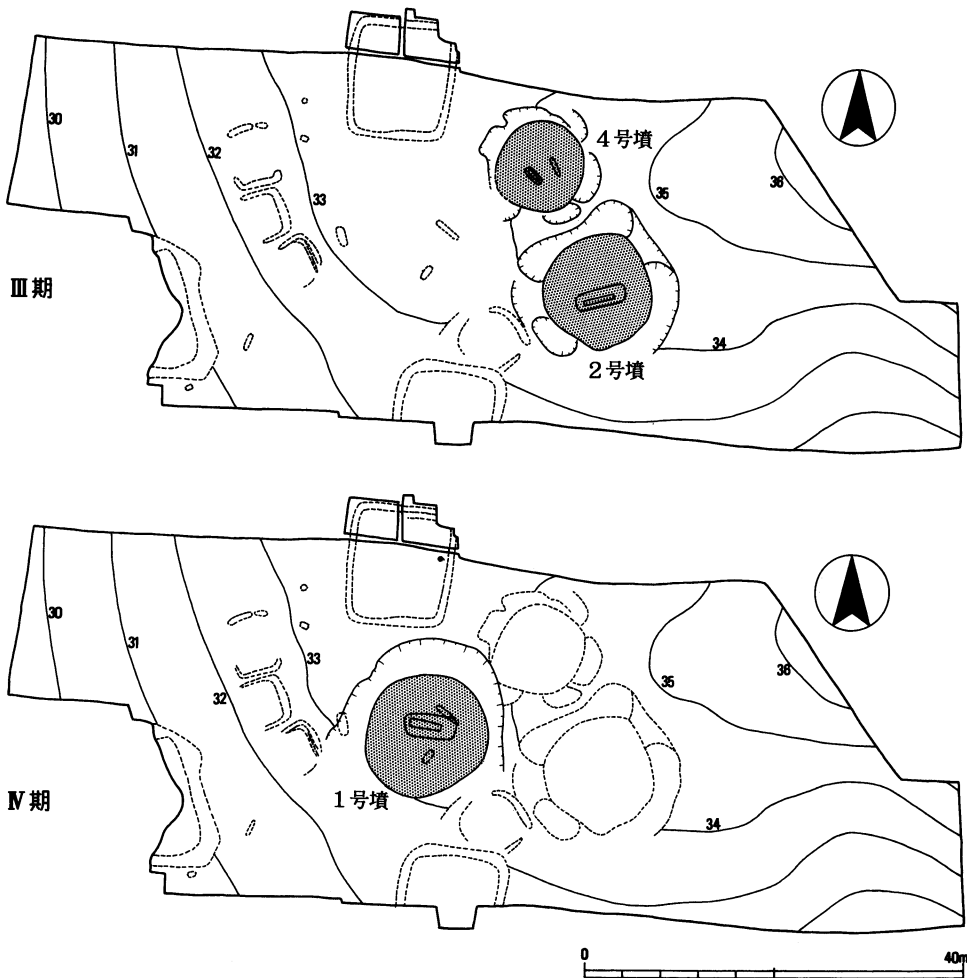


fig. 62 古墳および無墳丘墓の変遷(2) (1:800)

ものの、周溝の掘削時に一部陸橋状のものを残す点や掘削の行い方などが良く似ており、同一の系統と見なすのが妥当であろう。いずれにせよ、Ⅱ期には6基の古墳を造営しているながら、この時期には2基しか認められない。古墳群としては衰退に向かっていくと考えられよう。

Ⅱ期までの古墳が全て方墳の形態をなしていたのに対し、Ⅲ期以降は円墳の形態となる。これは墳形の変化のみならず、落合古墳群の群構成が変化する背景の一端を示したものと考える必要がある。

ただし、Ⅱ期に認められた「空地」は、この時期に至っても継続しており、その機能が存在していたことを物語る。

2号墳下部で認められた土壙・土器の散乱・焼土や炭の存在は、この段階以前には認められないものである。この段階に至って、全く別儀の祭祀形態が現れたものとも考えることもできよう。

副葬品では、4号墳は判然としないものの、2号墳では鉄刀・鉄鏃を有し、「盛行期」の名残を窺う

ことができる。

Ⅳ期一終焉一

落合古墳群は1号墳の造営をもって終焉する。1号墳は出土土器からは田辺編年のMT15型式併行と考えられる。

Ⅲ期までは存在していた「空地」を利用して築造されている。また、1号墳の造営によって、4号墳の周溝および墳丘の一部削平が行われている。さらに、6号墳の削平も1号墳に伴ったものである可能性もある。このように、1号墳は前代までの「秩序」を乱すようなかたちで造営されているといえる。また、副葬品には刀子を除いて鉄製武器類を全く欠くことも2・4号墳以前からの伝統とは異なる事項である。

以上、落合古墳群の形成期をⅠ～Ⅳ期に区分し、それぞれ「発生」「盛行」「衰退」「終焉」という性格を考えた。いうまでもなく、これらはそれぞれに独自の意義を有しているのである。以下、この4時期のなかで、特に問題となるⅠ期とⅣ期を検討して

古墳名	外形	規模(m)	時期	鏡	勾玉	管玉	小・白玉	耳環	甲	冑	剣	蛇行剣	刀	鉾	鎗	鏃	刀子	鏃	鏃	斧	鋤	鍬	須臾器	土師器	
落合7号	方	12	4c末?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		壺・甕	
落合3号	方	11	5c中		1		4+α				2	1	1	1		14	4	1						壺・甕 高坏	高坏・甕
落合8号	方	6	5c中								1						1							壺	甕
落合10-3	方	5	5c中													17								高坏	甕
落合10-2	方		5c中									1									1				
落合10-1	方		5c中		1		16+α									23	1	1							
落合5-1	方	10	5c後								1					20	1								坏 壺?
落合5-2	方		5c後										1			3+α									
落合2号	円	11	5c末										1			9	1							坏・壺	甕
落合4号	円	9	5c末										1											坏	甕
落合1号	円	13	6c初														3							坏・壺	碗
八重田1	円	24	4c後	1	1	3					1					13			1	1	3				
八重田8	円?	24	4c末	1							2		1												甕
八重田16	方	16	5c中				35		1	1			2	1	2	43			2			円・形	壺・坏 高坏	壺・高坏	
八重田19	方	10	5c後								1					15			2	1				壺・坏	
弥三郎新畑A	方	16	5c中								1		2	1		18+α	6					1		壺・甕	高坏
平田35号	方	12	5c中～後				51				2					30	2	1			2	1		壺・坏 器台	高坏
高塚6-1	方	18	5c後	1				1			2		2	2	2	5+α	6							坏	

tab. 20 落合古墳群他の古墳に伴う遺物一覧 *?は、攪乱のため不明なもの

みよう。

2. I・II期における問題点

(1) 落合古墳群I期一発生期一にかかると問題

落合古墳群は、古墳としては7号墳の造営に始まるものの、土壙墓・石組墓などその他の単独の埋葬施設を含めると、さらに遡る可能性がある。埋葬施設こそ明確にできなかったものの、1号墳周溝から出土した土師器高坏は布留式古段階に相当するものである。当地に当該時期の集落の存在を想定することは不可能である。したがって、「葬地」としての利用が布留式古段階から始まると考えるのが妥当であろう。すなわち、落合古墳群は古墳の築造をもって古墳群の形成が始まるのではなく、土壙墓が先行する可能性が想定できるのである。

仮にその想定が誤りであったとしても、7号墳および3号墳周辺に存在する土壙墓・石組墓の類は、古墳と併行する時期に古墳以外の埋葬施設が設けられたことを示すものと考えるのが妥当であろう。無論、これらは古墳が土壙墓・石組墓より優位であることを否定するものではない。

(2) 落合古墳群II期一盛行期一にかかると問題

落合古墳群の盛行期は、群構成の多様性や副葬品の豊富さからみても、II期と考えて不都合なかならう。しかし、田辺編年のTK208型式併行期を中心とした時期に盛行する古墳群は決して多いとはいえ、その意味するところを慎重に考慮せねばならないであろう。

まず、古墳中に認められる副葬品の状況から観察してみよう。全時期を通じた古墳の副葬品について一覧表としてまとめたのがtab.20である。この表で判るように、落合古墳群では副葬品は3号墳が最も多種多様である。また、3号墳とそれ以外の古墳との副葬品を比較すると、鋤先を除けば、3号墳に副葬されている遺物のうちのいずれかを他の古墳が有しているという状況が観察できる。例えば、5号墳埋葬施設1は、3号墳にはない長大な鉄剣を有しているものの、玉類や・鉄刀・鎌などを欠落している。10号墳埋葬施設1は玉類や鉄鎌・鎌は有しているものの、鉄剣・鉄刀が全く認められない。8号墳では、長大な鉄剣を有しているがそれ以外では刀子のみで

ある。

この状況からは、各古墳単位で見た場合、3号墳という中心的な古墳がほぼ全ての鉄器類・玉類を持ち、それ以外の古墳はいずれかのみを有することしかできない状況があったのではないかとこの想定ができる。しかし、これはあくまでも各古墳を単独で比較した場合の想定であり、別な解釈も可能なのである。具体的な内容については後述する。

では次に、他の古墳群中における副葬品のあり方と落合3号墳とを比較してみよう。

3号墳は、埴輪・甲冑・鏡などの遺物を全く持たないという特徴がある。八重田16号墳が、甲冑や埴輪を有し、鉄鎌を43本も副葬されている状況と比較すれば、その差は明らかである。ただし、八重田16号墳には鉄剣類が一切含まれていないという事実があり、落合3号墳との単純な比較は不可能かも知れない。平田35号墳と落合3号墳とでは、鉄鎌の本数

寺沢知子氏の分類

- A型 (鏡)・刀・剣・甲冑→馬具・刀子・鉄鎌・農工具
- B型 刀または剣・(刀子)・鉄鎌・農工具
- C型 刀または剣か刀子か鉄鎌のいずれか
- D型 なし

伊藤雅文氏の分類

甲群

- A類 鏡を有する。
- B類 玉類などの装身具を有する。
- C類 鏡や装身具を持たない。

乙群

- 1類 甲冑・刀や剣などの大型武器・馬具などを複数有する。
- 2類 上記遺物群のうちいずれか一つを有する
- 3類 鉄鎌・農工具・小形鉄製品のうち少なくとも一つを有する。
- 4類 上記遺物群を持たない。

tab.21 寺沢氏・伊藤氏の副葬品類型

は平田35号墳が勝るものの、鉄剣・鉄刀・刀子の量は落合3号墳が勝っている。平田35号墳も当該時期には単独墳に近い状態であり、直接的には比較できないかも知れない。同様なことは弥三郎新畑A古墳についてもいえる。なお、これら伊勢地域におけるいわゆる初期群集墳の意義については機会があれば別稿で検討することとし、小稿では省略する。

さて、いわゆる初期群集墳における副葬品の組合せから見た検討はすでにいくつかなされているが、ここでは寺沢知子氏および伊藤雅文氏によって示された分類案を提示しておく (tab.21)。

寺沢・伊藤両氏の分類は、大和における初期群集墳の状況から導き出されたものである。したがって畿内周辺地域の群集墳である当古墳群の状況をそのまま当てはめることはできないが、寺沢氏の武器類の類型に伊藤氏の装身具類の類型を合わせたものが当該古墳群の状況を最も端的に表すものとなろう。すなわち、落合古墳群においては3号墳が寺沢氏のいうA型墳ないしはB型墳の上位、伊藤氏のいうB1類にほぼ相当し、他の古墳で3号墳と同じ分類に相当するものはない。

このように、落合古墳群Ⅱ期の状況は、寺沢氏のいう「A型墳は同時期に各群に1基しか見られない」という指摘にほぼ合致するといえる。

3. 群構成が示すもの

さて、寺沢氏はA型墳に対し、「中央政権と直結した首長」と評価し、同時期に存在するB～D型墳は「従属する」「家長」とされ、その関係には「強固なヒエラルヒーが見られる」とされる。伊藤氏も「個々の初期の群集墳の地域内の社会的な位置がかなり多様なものであること」から、初期群集墳の成立要因に「畿内政権」とのかかわりと群集墳造営集団の背景にある「小集団」内部の事情に求めている。両氏の精緻な研究に対しそれを検証するだけの能力は持ち合わせていないが、落合古墳群の事例から古墳群築造の契機や継続の意味に関して若干の検討を行ってみる。

(1) Ⅱ期一盛行期一のあり方

Ⅱ期には、前述のように6基の古墳と4基の無墳丘墓が4基存在している。これらは立地からは無墳

丘墓を含めて合計5単位群の存在が指摘できる。丘陵端部の緩斜面部に形成された同一古墳群である以上、これら全てが一群として把握されねばならないことは勿論であるが、8～10号墳のあり方に端的に示されるように、この古墳群のなかでさらに細分された一群が抽出できることを示す。すなわち、周囲に石組墓・土器棺墓を配している可能性はあるものの、古墳としては単独で立地する3号墳、3号墳の規模には匹敵しないがその他のものよりは規模は明らかに大きい5号墳を中心とする一群、ほぼ同規模のもので並列される8～10号墳の一群に区分して考える必要がある。また、無墳丘墓の状況も石組墓3・土器棺墓と、土壙墓1・石組墓4とに分類することができる。

注目されるのは石組墓4の南に存在している2基のピット (ピット1・2) である。これは出土遺物から確実にⅡ期に含められるものである。ピット1は直径20cmにも満たない小さなものでありながら完形の土器類がまとまって出土しており、何らかの祭祀的な意味を有していると考えるのが妥当であろう。一方、この付近は墓が全く認められないところで、先述のように、Ⅳ期に到ってその状態が崩れるまで維持している。8～10号墳および5・6号墳がそれぞれ接近して築造されていることと併せて、ここに埋葬施設を構築しない何らかの意味を考える必要がある。そうすると、Ⅱ期の古墳および無墳丘墓がこの空間を取り巻くように立地していることが判明してくるのである。

このことから、落合古墳群のⅡ期 (Ⅰ期～Ⅲ期までの範囲に拡大して解釈することが可能かもしれない) では、「規制」とまではいかににしても、何らかの「約束」のもとに古墳および無墳丘墓が築造されていたと考えられるのである。10号墳という極めて小さな墳丘に3基もの埋葬施設が存在していることも、古墳の築造すなわち葬地の占有に何らかの制限が存在していた可能性を示唆する。これらのことは、古墳および無墳丘墓が、その造営箇所の中央に空間地を保つことを条件として構築されていることを示す。すなわち、ある一定の「まつり」を行う必要にある集団が古墳造営に携わっていたことを示すものと考えられよう。

先述の副葬品を、各单位群での保有状況として再度見てみよう。8～10号墳の単位群・5～6号墳の単位群ともに鉄刀・鉄剣・鉄鏃を有していることがわかる。また、6号墳および5号墳埋葬施設2の残存が悪いことから、これらの埋葬施設に玉類が存在していた可能性も想定できる。すなわち、古墳の規模・埋葬施設の形態などに群単位で歴然とした差は存在するものの、群単位としての副葬品所有状況には、数・内容の差こそあれ、それぞれに3号墳と同じ内容のものを有しているであろうことが指摘できるのである。

3号墳が当該期の中心的な古墳であることは確実であろうが、以上の検討結果からは、各古墳間の質的な差異以上に、各单位群が重要な意味をもって群集墳を形成していることが判明しよう。このように考えた場合、無墳丘墓についても短絡に従属的な埋葬施設であるとすることはできず、各古墳とは全く別義の意味を有したのものとして独立的に存在しているものと見做せる余地もあろう。

(2) Ⅲ期—衰退期—のあり方

Ⅲ期に該当する古墳は2・4号墳の2基である。Ⅱ期に6基の古墳を造営した集団は、この段階には2基造営するにとどまっている。墳丘規模を見ると、若干後出する2号墳の方が大きい。副葬品の内容は4号墳埋葬施設1が削平された状態のため比較できないが、2号墳は鉄刀・鉄鏃・刀子を有しているが、寺沢氏の分類ではB型墳、伊藤氏の分類ではC2類であり、前代の3号墳と同じ位置付けを与えることはできない。墳丘規模の差はあるが、強いていえば前代の5号墳と同じような副葬品内容である。墳丘規模からのみの指摘とはなるが、4号墳埋葬施設1が2号墳以上に豊富な副葬品内容であった可能性も低いであろう。これらのことから、Ⅱ期の中心となっていた3号墳の系統は、Ⅲ期には存在していないと考えるべきである。

Ⅲ期の古墳占地に関して注意せねばならないのは、2・4号墳は周溝の重なりこそないものの極めて近接していることと、2号墳は前代の6号墳ともかなり近接していること、さらに前代の空間地には進出していないことである。この立地状況から、2・4号墳はこの2基で一群をなしていたものと考えべ

きであろうし、前代の5・6号墳の一群と接するように位置することはそれらの系統上にある可能性をも示唆する。そのように考えると、4号墳と3号墳との間が比較的広く開いていることが意味を持つてくる。空間地を保っていることとともに、前代の中心となっていた3号墳に対する何らかの考慮が働いたと解釈できる。

Ⅲ期の大きな特徴は、墳形がそれまでの方墳から円墳へと変化していることである。群集墳を構成する古墳の墳形が円墳へと変化する意義は、後の後期群集墳との絡みから検証する必要のある課題であると考えられる。すなわち、Ⅲ期に認められる変化は後に後期群集墳としての発展が可能かどうかを考える上でも重要と思われるが、落合古墳群では続くⅣ期をもって終焉する以上、後期群集墳としての発展のための要素を具備することができなかつたと見なさざるを得ない。

また、2号墳下部に認められた祭祀形態はそれまでには認められなかつたものである。この段階が前代までと変わって群集墳内部における祭祀性までも変化する時期であることを示す要素といえよう。

これらのことから、Ⅲ期は墳形の変化という転換を迎えた段階であり、今後の群集墳の展開が可能かどうかを決定する上で極めて重要な時期であったとすることができる。Ⅲ期は、結果的に構成が縮小し、副葬品の内容もあまり豊富とはいえない。さらに祭祀形態には若干の変化があるものの、前代までの古墳築造に関した秩序を守ろうとする意識も存在しているのである。このことは、墳形の変化あるいは祭祀性の変化という大きな展開に対し、落合古墳群は新たな要素を付加しつつも、前代の秩序を基本的に踏襲したことを示す。このような状況のもと、Ⅳ期での終焉を迎えるのである。

(3) Ⅳ期—消滅期—のあり方

Ⅳ期に築造される古墳は1号墳のみである。前述のように、空間地を利用した占地であり、これまでの秩序はこの段階に至って崩壊する。古墳の築造は2・4号墳の東にでも可能であるのにこの位置に占地した意味には、「葬地」の範囲が限定されていたという理由の他に、群集墳の構造そのものの変質があった可能性があるであろう。

前代までの古墳が、それぞれ接しながら占地しつつも周溝を切り合うような状況は基本的には観察されない。6号墳と5号墳の関係のみ若干その可能性を有しているが、6号墳の墳丘が8～10号墳と同様なものであることから南西方向の周溝は本来有していないものと考えられる。それに対し1号墳は、4号墳の墳丘・周溝を一部削平しているし、6号墳を削平している可能性もある。また、周溝の掘削によって土壙墓2が半壊している。これらは前代までの基本的なあり方と全く相反するもので、Ⅳ期において群集墳の性格が変質したことを意味しよう。

1号墳の副葬品は鉄製品は刀子類のみであり、鉄刀・鉄剣類を有していた前代までと大きく異なる。墳丘そのものは結果的に当古墳群中で最も大きいものであるが、副葬品の内容は全く貧弱になったと言わざるを得ない。したがって、前前代の3号墳はおろか、前代の2号墳からの系統であるとも考え難い。これまでの集団関係が崩壊したと評価してもよからう。

この展開は、まさにⅢ期での動向如何に関わっていたと考えられるのである。Ⅲ期で保守的なあり方を示すに止まった結果、Ⅳ期で終焉せざるを得なくなったとも考えられるのである。

4. 群構成から見た落合古墳群造営集団の評価

以上、各期における群構成と古墳・無墳丘墓の占地の問題を見てきた。最後に、落合古墳群の評価について検討する。

Ⅰ期に1基の古墳と石組墓・土壙墓が造営された落合古墳群は、Ⅱ期には中心となる古墳1基を含めて6基の古墳と石組墓・土壙墓・土器棺墓が造営され、最大の盛行期を迎えた。しかし、Ⅲ期には2基の古墳が造営されるにとどまり、Ⅳ期に1基の古墳が造営されて終わりを迎えた。

この間、「葬地」の中央には広く空間地があり、ピットが掘られ、完形の土器が用いられるなど何らかの「まつり」が行われていたと考えられる。この空間地はⅢ期までは継続して何らかの機能を果たしていたのであろうが、Ⅳ期にはこの地に古墳が占地して消滅する。

これらの事例から、落合古墳群の造営に当たって

は、伊藤氏の指摘のように古墳造営集団の内部に何らかの内部的事情をみることはできる。しかし、寺沢氏の指摘のひとつである古墳造営集団のなかの強固なヒエラルヒーの存在については、落合古墳群に関してそのままあてはめることはできないと考えざるを得ない。もちろん、古墳単位の格差は存在すると考えるべきであるし、古墳を造営できない集団の存在も充分想定し得るから、何らかの階層差がこの時代に存在していたことは予想される。ただし、この問題を検討する以前の段階として、後期群集墳の展開以前に相当するいわゆる初期群集墳を築造し得た集団の基本的性格を考えておく必要があると考えるのである。上述した落合古墳群に関して認められた、あるいは想定することができた事例をもとに、この点について若干の私見を提示しておきたい。

Ⅱ期における古墳および無墳丘墓は、3号墳を中心として、何らかの契約関係によって成立した一集団を表しているといえよう。これらの古墳は田辺編年によるTK208型式併行前後に築造されており、埋葬施設は10号墳の3基と土壙墓類の4基を含めて合計13基認められる。土器型式ではほとんど時間差を認めることはできない。また、これらが大きく5単位群に区分できることは、古墳・無墳丘墓の占地に関して、何らかの「約束」が存在していることを示す。土器棺墓や石組墓3・4など小形のものの子供用のものとも考えることもできようが、以上のような視点から、これらが1家族のものとも考えるよりは複数家族の集団によって築造されたと見るべきであろう。

落合古墳群に認められる状況が、1家族の葬地としてのあり方でなく1集団のあり方であるならば、初期群集墳の造営とはまさに集団単位によってはじめて具現される行為であろう。すなわち、その集団の中心となる存在こそあれ、それのみでは成立し得ない状況が現実ではなかろうか。Ⅲ期以降、Ⅱ期の3号墳と同等な評価を与えることができる古墳が存在しないという事実は、まさに3号墳が、一見突出したあり方とはいえ、群集墳造営集団内部での相対的に上位なあり方をⅡ期においてのみ示していたことでしかないことを示すものであろう。また、3号墳が絶対的に突出した存在であり、強い階層差が生

じているのであれば、継続するⅢ期以降にそのような存在が認められる必要もあるのである。

したがって、あくまでも落合古墳群に限定されたことかも知れないが、一群集墳内の階層差をあまり強調することは群集墳の本質を追求する上ではかえって逆効果となる可能性があると考えるのである。関川尚功氏による「群集墳の発生などの問題に関してはその主体はあくまでも首長層の側より家父長層の側にあるものと考えられる」という指摘は、「家父長層」を「一集団」と読み代えることによって極めて重要なものになるものではあるが、一集団とそのさらなる上部権力（首長層と換言できるかも知れない）との間には、一集団側の努力にもかかわらずさらに大きな隔絶があったものとする。この時期における地方の群集墳の発生に関わる意義とは、ある1集団が集団としての葬地を獲得し、集団の存在を対外的に表現できるかどうかにあったのではないだろうか。この点をふまえた上で後期群集墳との性格上の違いや背景の違いを考える必要がある。落合古墳群の場合、Ⅲ期に訪れた転換期にうまく乗ることが出来なかったため後続して造墓活動をなしえなかったであろう。

なお、寺沢・伊藤両氏によって指摘された「中央権（畿内政権）」との直接的な関連についても、落合古墳群を見る限り積極的に裏付けることはできない。無論、3号墳で認められた蕨手刀子や蛇行剣など、いわゆる変わった遺物は存在しているが、それが伊藤氏の言う「中央とのつながりを示す遺物」なのかどうか判断できない。そもそも今後確認例が増加する可能性の極めて高いいわゆる初期群集墳がそれぞれ直接的に中央と結びついてきたかどうかを決定するためには多くの解決すべき問題が存在している。寺沢・伊藤両氏の指摘は、大和ないしは畿内という地域における初期群集墳のあり方として、あるいは多様なあり方を示す初期群集墳のなかのひとつのパターンとして評価すべきものなのである。

両氏の理論はきわめて高い評価が付されるべきものであるが、それを即畿外の状況に当てはめることは慎重でなければならないであろう。今回検討した落合古墳群については、地域的な上部権力と関連したものと考えられ、それを通して間接的に中央政権と関わっているとしておく。無論、現状では落合古墳群の直接的な上部権力が何であるのかを示すことはできないが、近隣地域、特に現在の伊勢市内にそれが存在する可能性も大きいであろう。

また、今回の調査で確認した群集墳内の単位群や「空間地」が落合古墳群以外でも確認されるのであれば、初期群集墳の存在意義の1条件としてこのような「まつり」場的なものが必要であったことが一般論として成り立つかも知れない。例えば京都府上人ヶ平古墳群にも落合古墳群と類似した空間地が存在している。部分的には「密集」しつつ、ある部分では「空間」を保っているという性格の背後に、初期群集墳の一成立条件が内在している可能性もあろう。これは現状ではあくまでも予察の域をでないため、事例の増加を待ちたい。

以上、落合古墳群の調査によって得られたことからいくつかの検討を行った。5世紀代あるいは4世紀代に初現を見る群集墳は、今後の開発の進展あるいは研究の進展によって類例は確実に増加するであろう。畿内地域における群集墳の研究に加え畿内地域以外での検討も今後進展させる必要がある。畿内周辺地域における群集墳の状況は、単純に言えば畿内ほどの複雑な背景を有していないため、畿内地域以上に群集墳の本来のあり方を素直に表現している可能性もあろう。落合古墳群がそのための一助となり、古墳時代の研究が進化し、さらには人間が墓を設けることの本質を解明することができるのであれば、結果的に消滅してしまった当古墳群も決して無意味な存在ではなくなる。 (伊藤)

(註)

- (1) 白杵勲「籾本孔を持つ鉄刀について」(『考古学研究』第31巻第2号 1984)
- (2) 楠元哲夫・朴美子ほか「北原古墳」(大字陀町役場 1986)
- (3) 吉村利男「上野市喰代 高猿6号墳」(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981)
- (4) 山田邦和・江浦洋ほか「京都府中郡大宮町 小池古墳群」(財古代学協会・平安博物館 1984)
- (5) 中村孝行ほか「中山古墳発掘調査概報」(『京都府綾部市文化財調査報告』綾部市教育委員会1983)
- (6) 菅原康夫・小笠原賢ほか「中内遺跡」(徳島県教育委員会 1981)
- (7) 山本源太郎・大坪憲一ほか「朝田墳墓群」VI (山口県教育委員会 1983)
- (8) 吉留秀敏・山口譲治・渡辺芳郎ほか「老司古墳」(福岡市教育委員会 1989)
- (9) 橋口達也ほか「池の上墳墓群」(甘木市教育委員会 1979)
- (10) 田中晋作「副葬品による編年-武器を中心に-」(『季刊考古学』第10号 雄山閣1985)
- (11) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館1988)
- (12) 藤原学氏および植野浩三氏のご教示によるところが多である。なお、藤原氏は近著で落合古墳群の須恵器について所見を述べられている(同氏「伊勢湾西岸における古墳時代須恵器生産の動向」『紀伊半島の文化史的研究』関西大学文学部考古学研究室 1992)。このなかで3号墳出土の樽形甕(91)について「胎土の中に白色の物質が混入されており、「白色針条物質」ではないかとされている。しかし、筆者の観察によればこの物質は確かに図示した螺旋状に刻み目を施している面には多く認められるものの、その他の部位には認めることが出来ないように思われる。また、この面は自然釉が厚く付着している反対側にあたる。筆者の観察不足かもしれないが、これらのことから、焼成時あるいはその前にこの部分に付着した何か他の物質である可能性もあるのではないだろうか。
- (13) 竹内英昭ほか「平田古墳群」(安濃町遺跡調査会 1987)
- (14) 下村登良男ほか「八重田古墳群発掘調査報告書」(松阪市教育委員会 1981)
- (15) 下村登良男・西田尚史・福田昭「中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書」(松阪市教育委員会 1991)
- (16) 下村登良男ほか「神前山1号墳発掘調査報告書」(明和町教育委員会 1973)
- (17) 安達厚三・木下正史両氏による編年他をまとめた柳本照男氏の時期区分による。安達・木下「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60号第2巻 1974)および柳本「副葬品の種類と編年-土師器・須恵器」(『古墳時代の研究』8 雄山閣 1991)
- (18) 赤塚次郎「廻間遺跡」(財愛知県埋蔵文化財センター 1990)
- (19) 註(17)安達・木下氏文献
- (20) 註(14)文献
- (21) 註(13)文献
- (22) 註(15)文献
- (23) 寺沢知子「初期群集墳の一様相」(『考古学と古代史』同志社大学 1982)
- (24) 伊藤雅文「初期群集墳論再考~大和を中心として~」(『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館1988)
- (25) 関川尚功「群集墳をめぐる諸問題~大和を中心として~」(『桜井市外縁山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所 1978)
- (26) これまでは、「初期群集墳」と「後期群集墳」との質的差異を見出すことに主眼が置かれていたように思われる。しかし造墓活動が積極的かつ盛んな古墳時代を検討するためには、両者の類似性を見出していく必要もあるのではないだろうか。
- (27) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府遺跡調査概報」第32・35・40冊(1989・1989・1990)

P L A T E



全景（西から）



1・2・4号墳付近近景（西から）

P.L. 2

調査後風景



全景（西から）



1号墳周辺（西から）



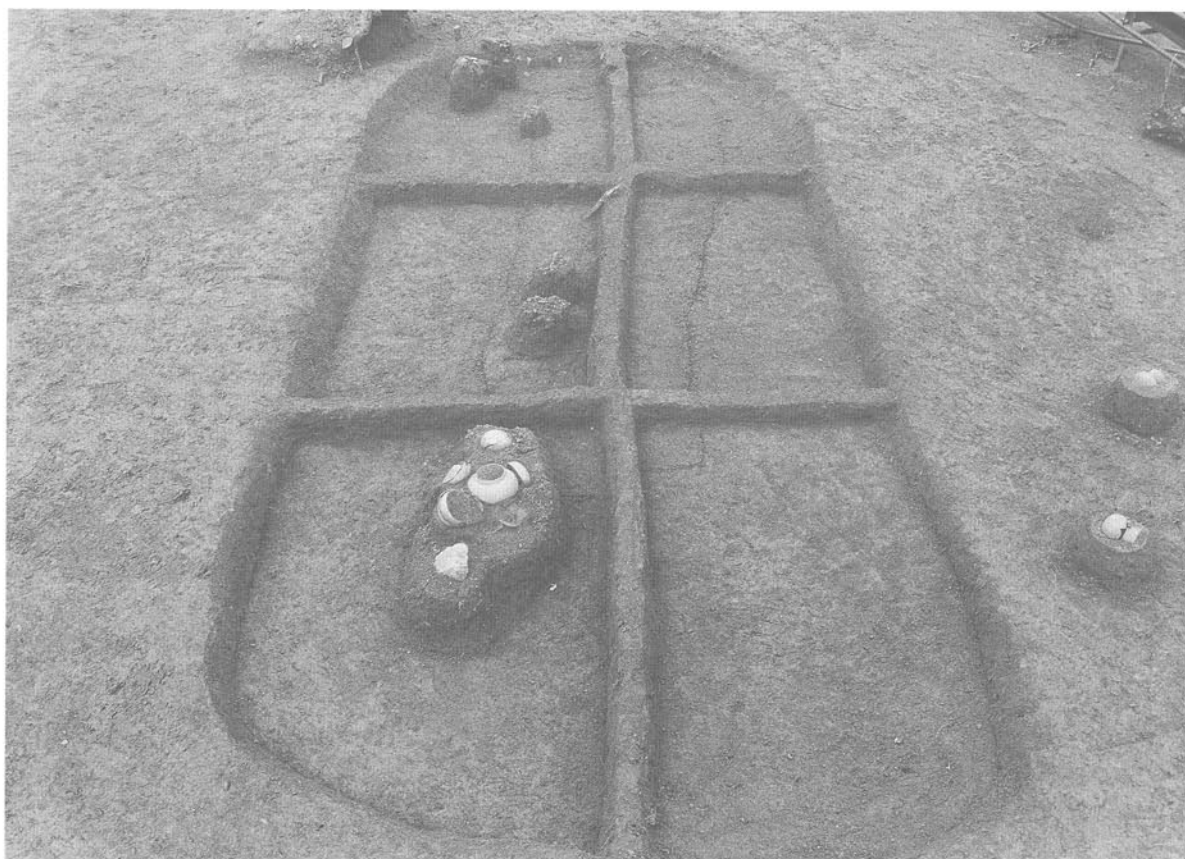
全景（南から）



墳丘北側周溝土層（東から）

P L. 4

1号墳
埋葬施設



全景（西から）



埋葬施設内土器出土状況（南から）



1号墳盛土と下部遺構（石組墓4）との関係（南から）



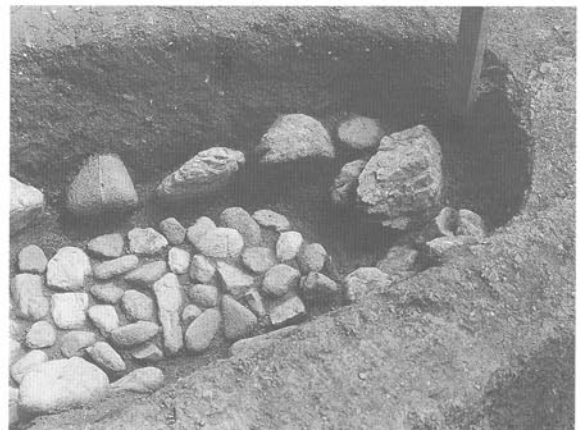
ピットおよび石組墓4（西から）



石組墓4 (西から)



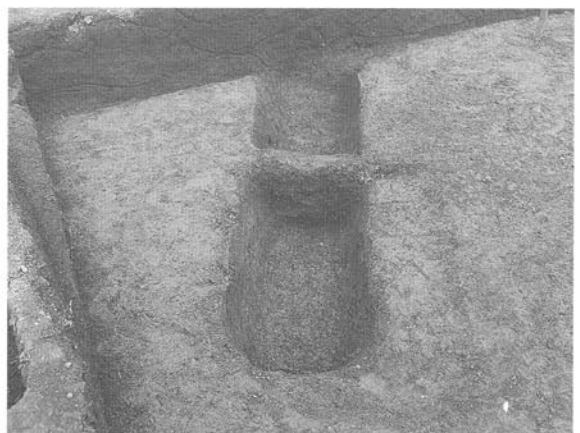
石組墓4南 (北から)



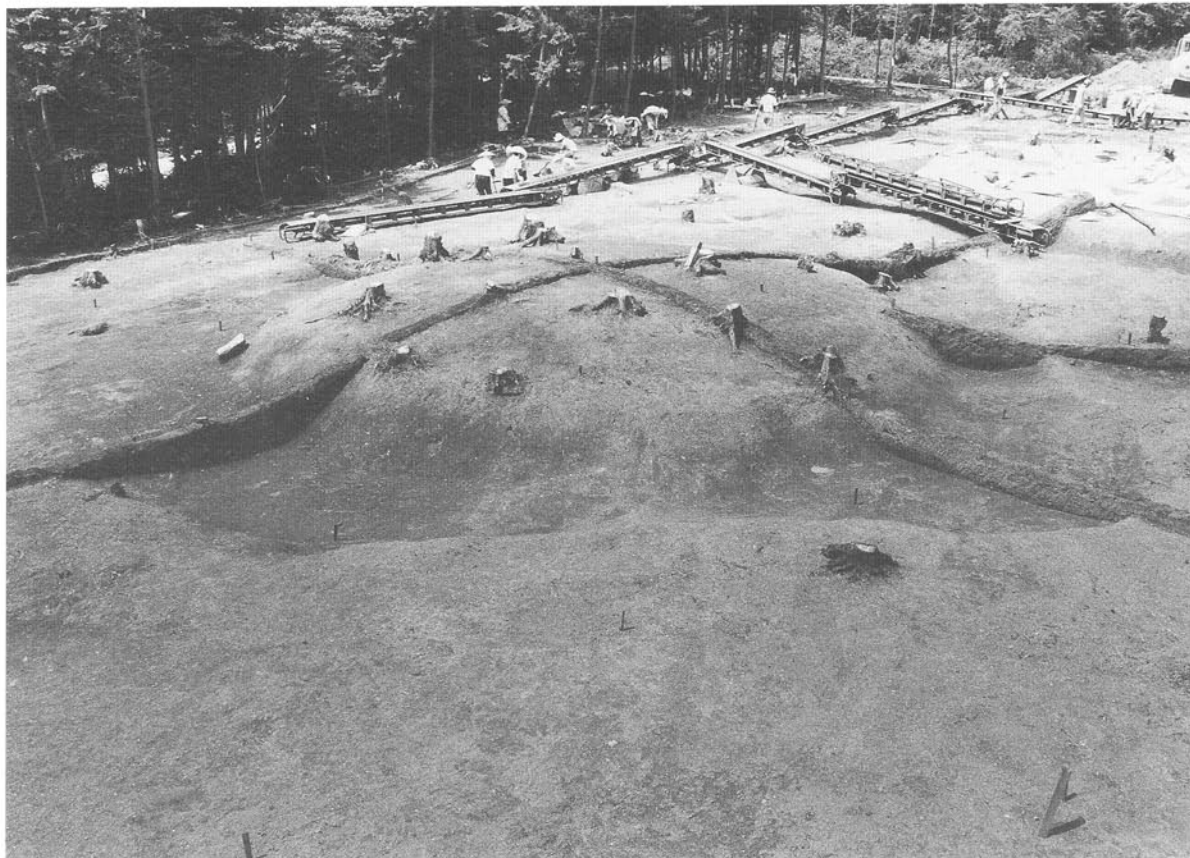
石組墓4北 (南から)



ピット1断ちわり状況 (東から)



土壙墓1 (東から)



全景（北から）



土層（南東から）

PL. 8

2号墳
埋葬施設



全景（北から）



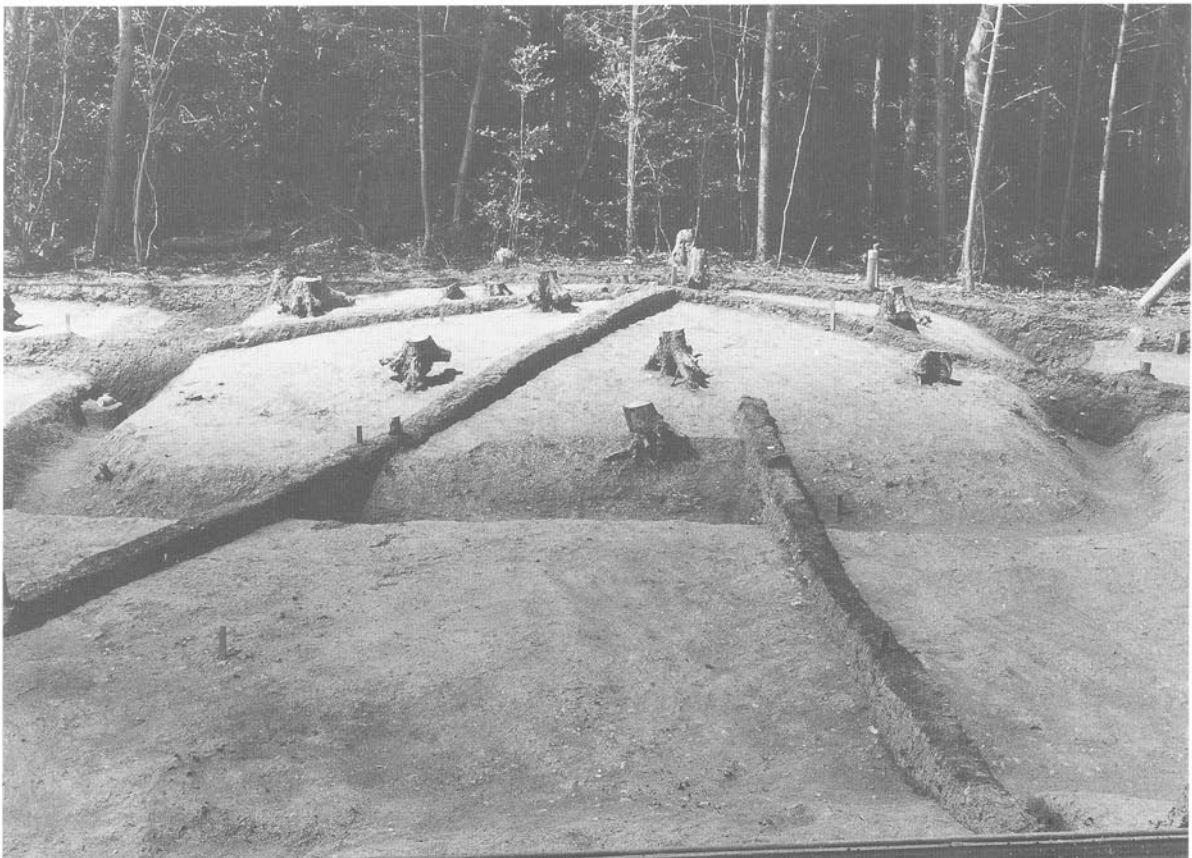
鉄器類出土状況（西から）



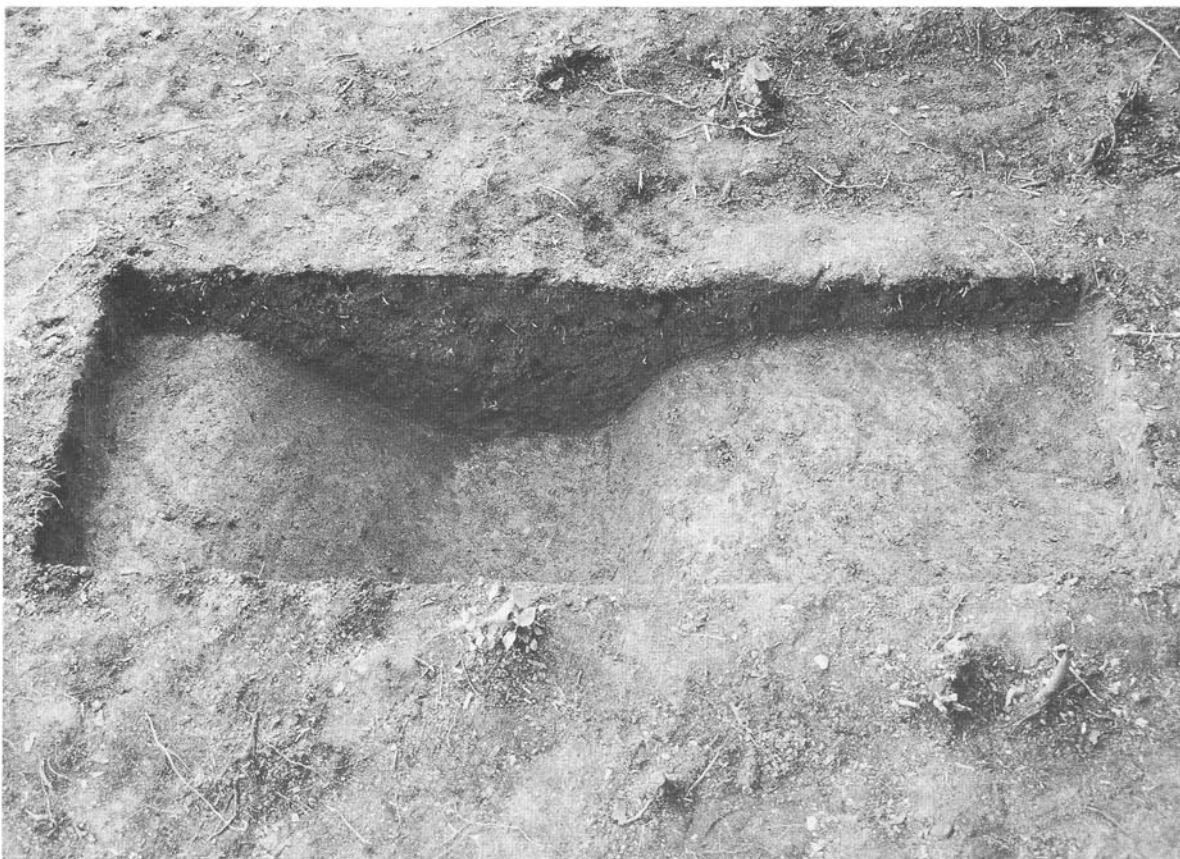
埋葬施設土層（東から）



全景（西から）



全景（南から）



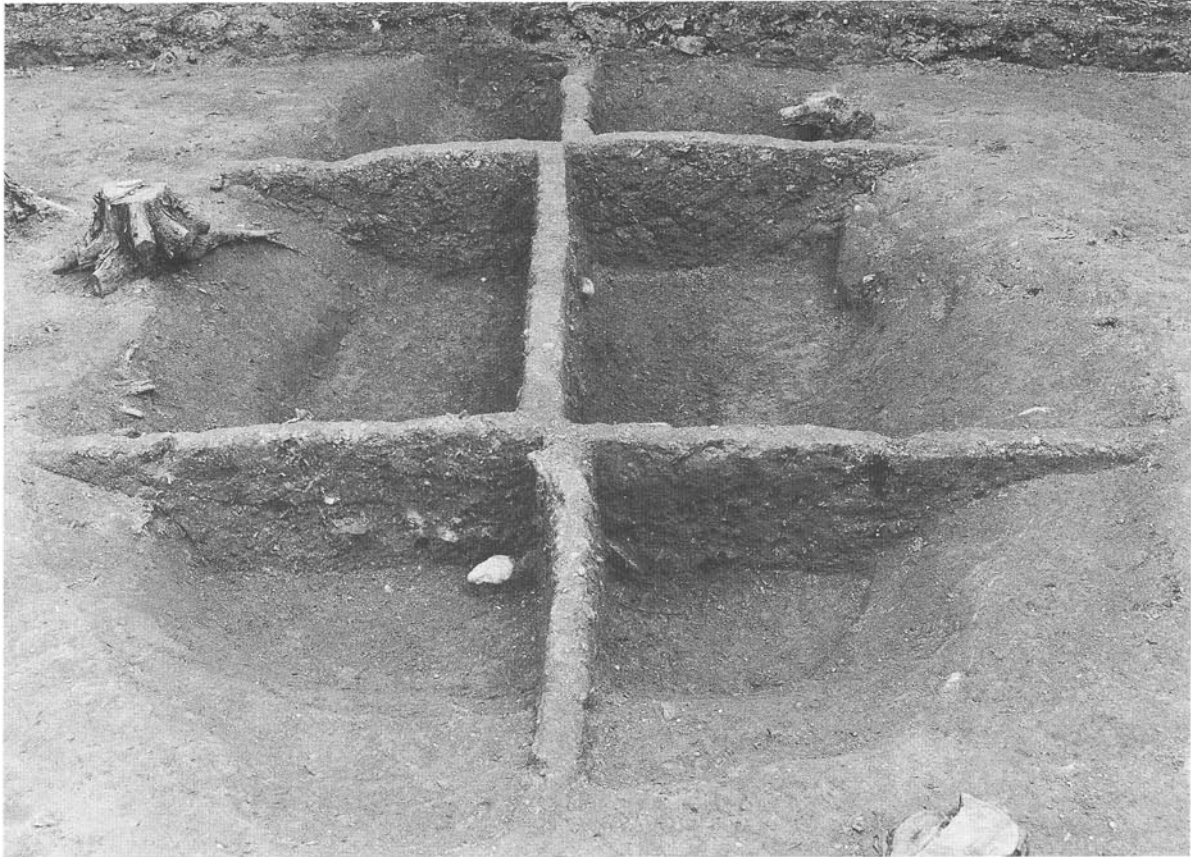
北周溝トレンチ (東から)



西側周溝土層および樽形甕 (南から)



西側周溝樽形甕出土状況 (南から)



上部土層 (南から)



下部土層 (南から)



上部埋土掘削後（南から）



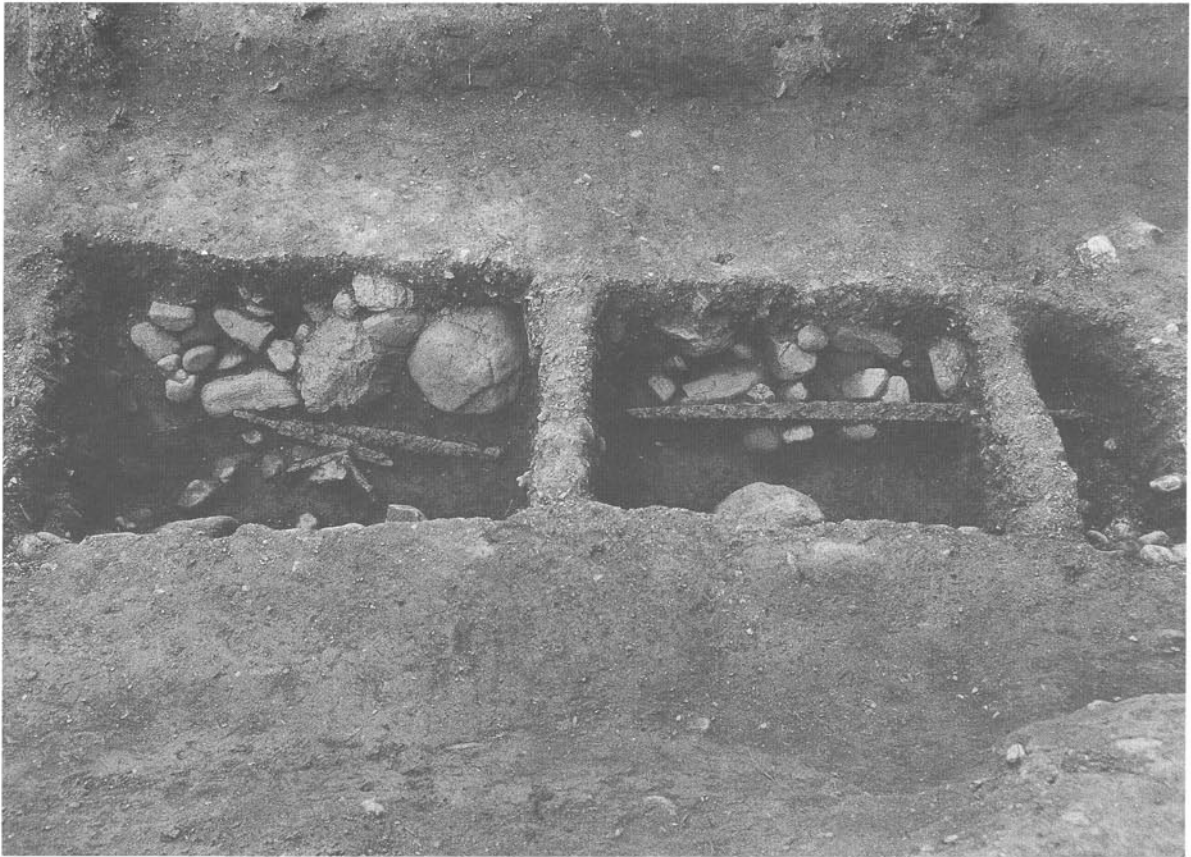
刀・剣・蕨手刀子出土状況（西から）



下部埋土掘削後（南から）



棺側の礫および鍬群出土状況（南から）



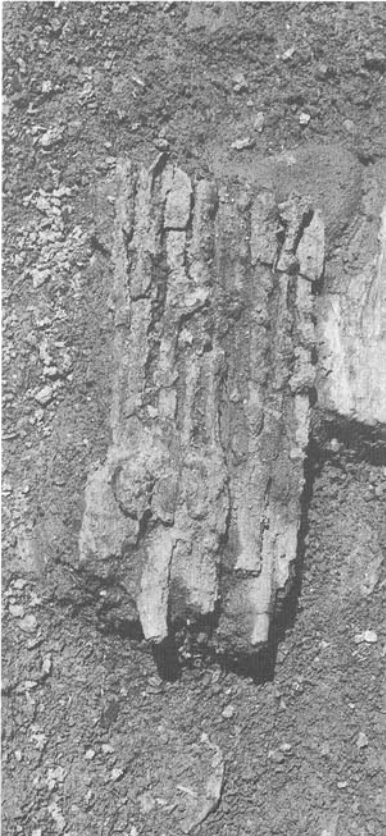
棺内部（東から）



棺内南側（南から）



棺内南側曲茎刀子・勾玉出土状況（南から）



鏃群出土状況（北から）



南側木口部分の裏込め状況（北から）

P L. 16

4号墳
墳丘



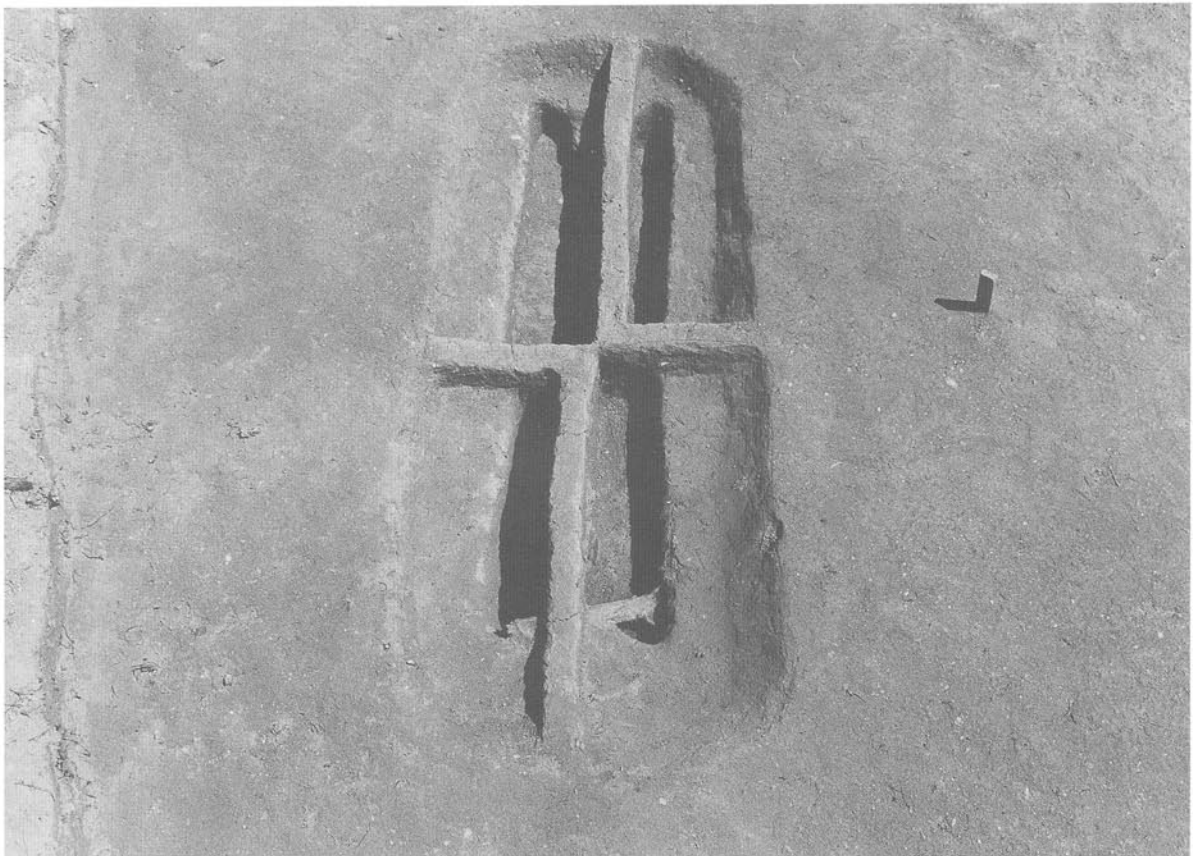
全景 (東から)



近景 (北東から)



西側周溝内土器出土状況（北西から）



埋葬施設2（北西から）



墳丘全景（北から）



埋葬施設1（西から）



棺内西側（東から）



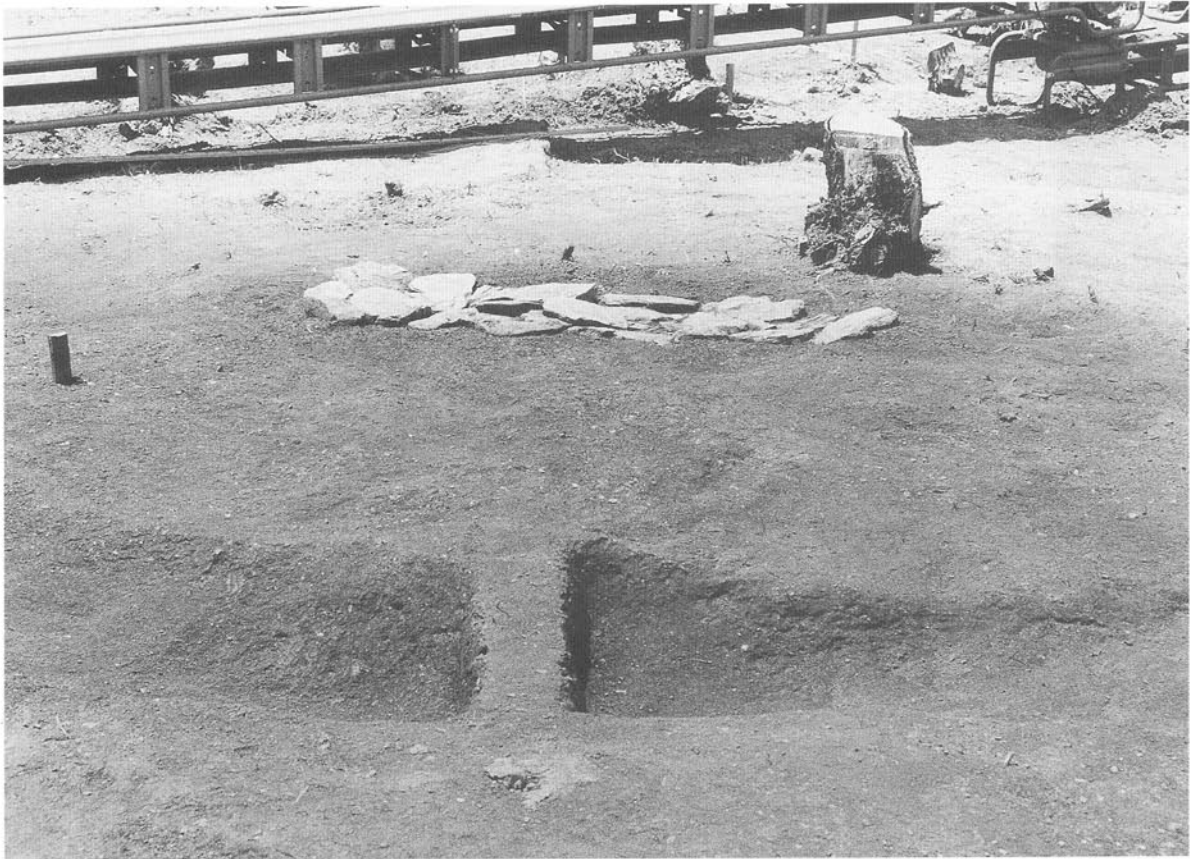
棺外出土鉄鏃（西から）



土層断面（西から）

P L. 20

6号墳



全景（北から）



埋葬施設（北から）



全景（上空から）



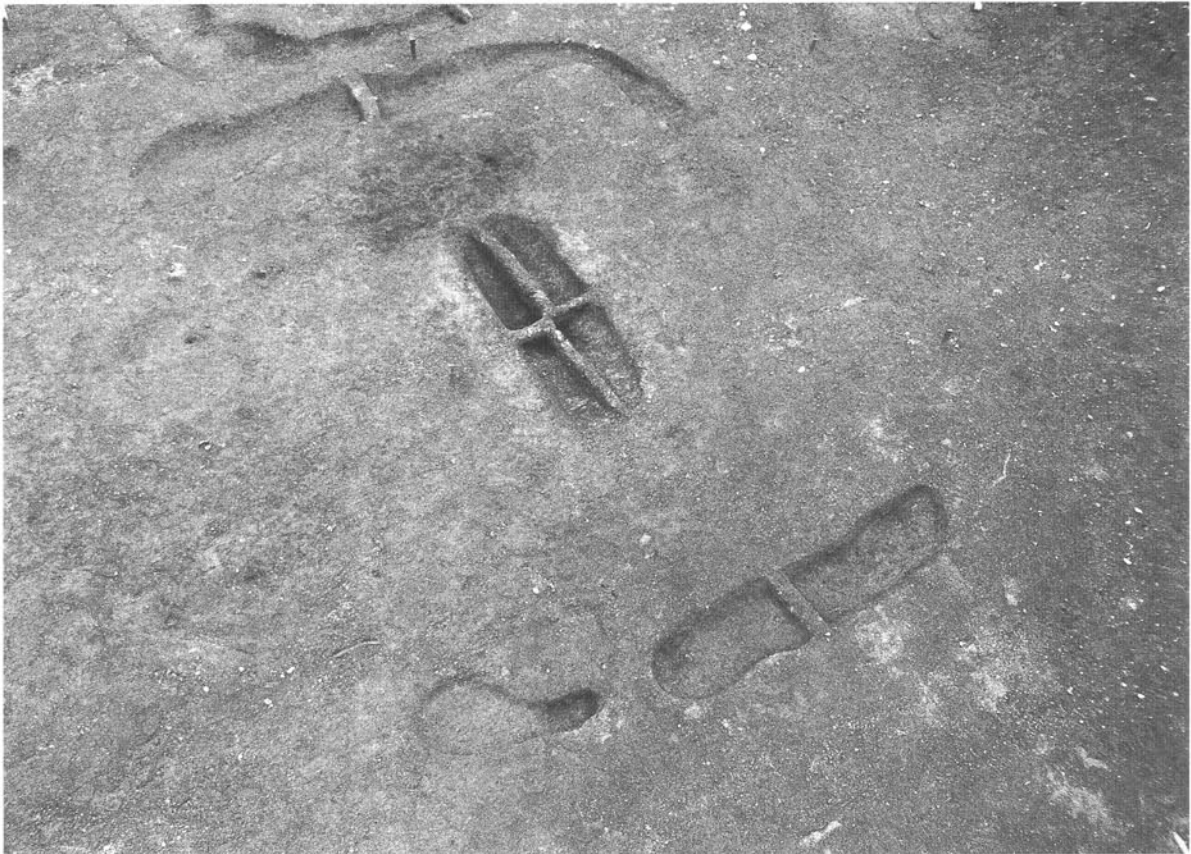
全景（東から）



周溝内磔出土状況（南から）

P L. 22

8号墳



全景 (南から)



埋葬施設 (南から)



8～10号墳全景（西から）



9号墳全景（北から）



全景（西から）



全景（北から）



全景（北から）



埋葬施設1全景（西から）

P L.26

10号墳 埋葬施設1



棺内北側勾玉、鉄鏝出土状況（西から）



鉄鏝出土状況（西から）



埋葬施設2・3 (東から)



埋葬施設2・3 刀・鉄鎌出土状況 (東から)



埋葬施設3 鉄鎌出土状況 (西から) ※中段写真の下部



全景 (南から)



石組墓3 (西から)



土器棺墓 (南から)

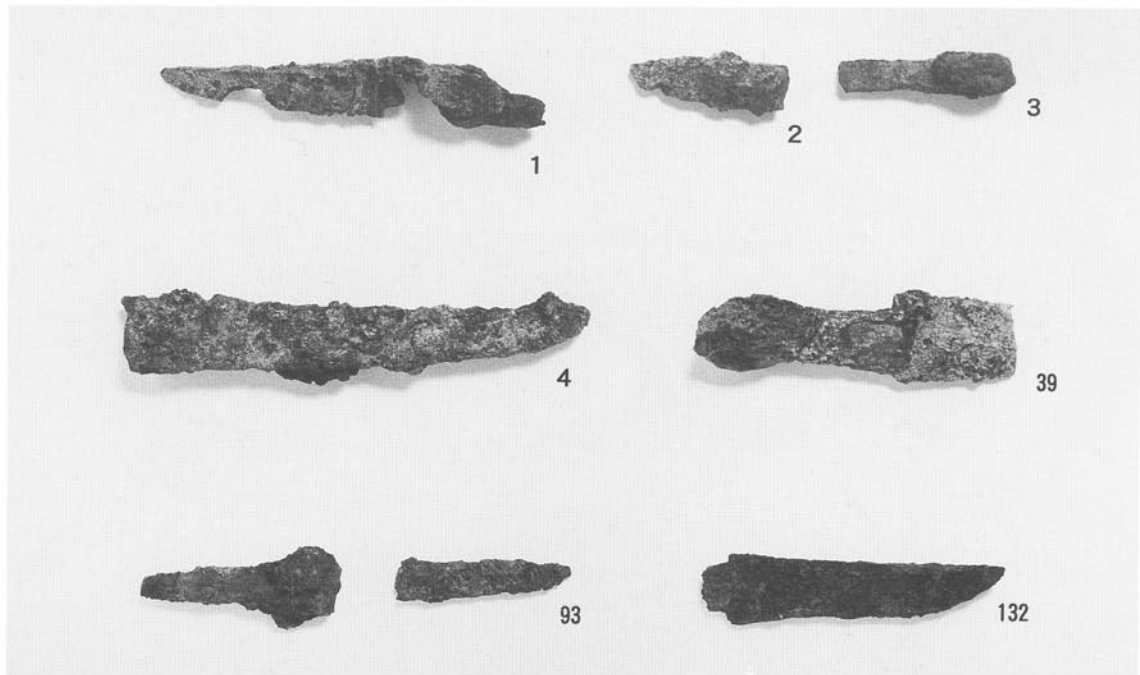
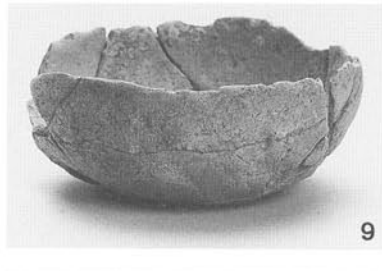
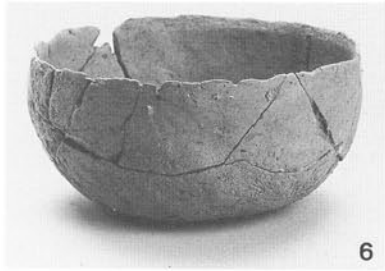


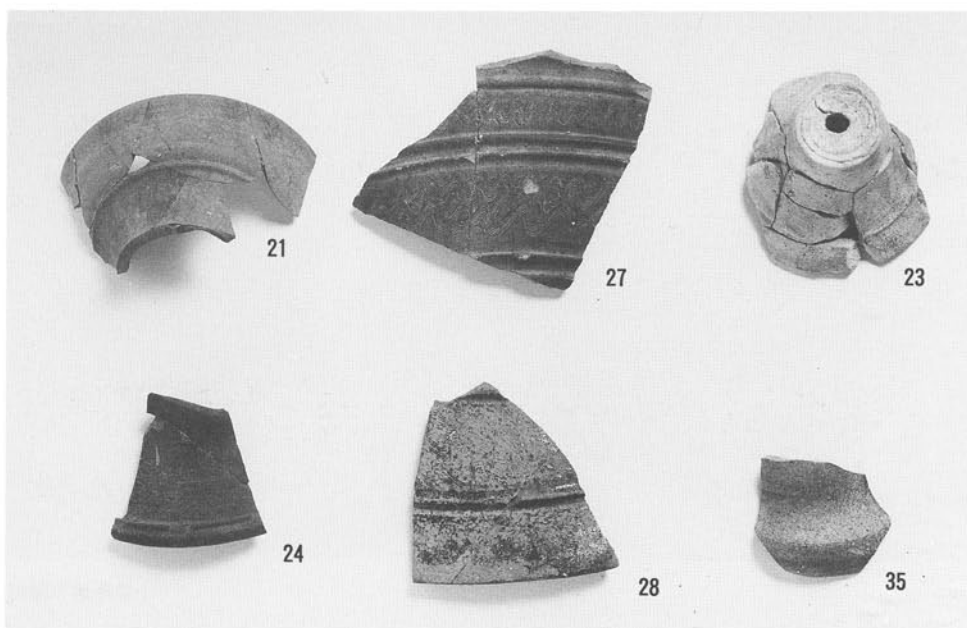
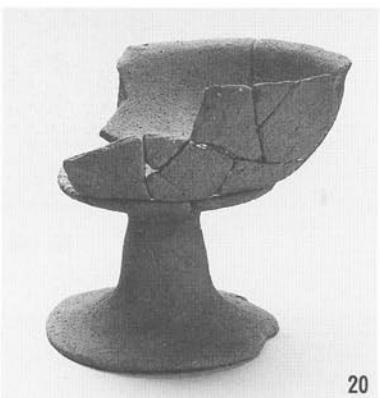
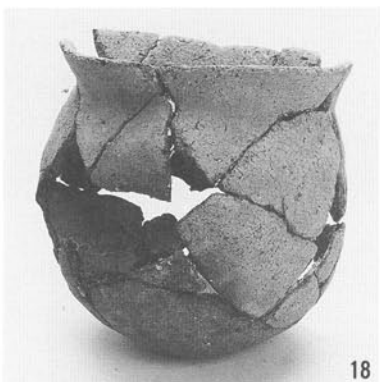
石組墓 1 (南から)

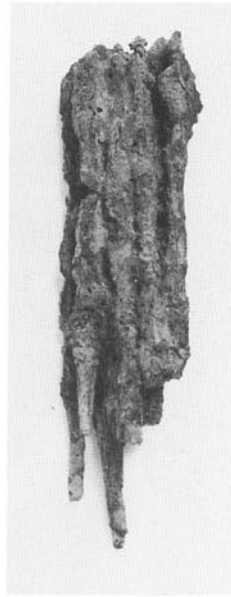
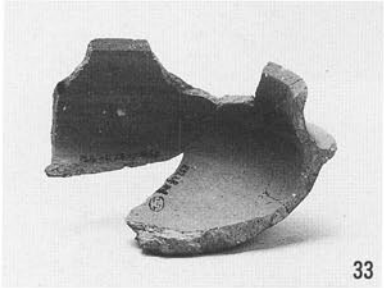
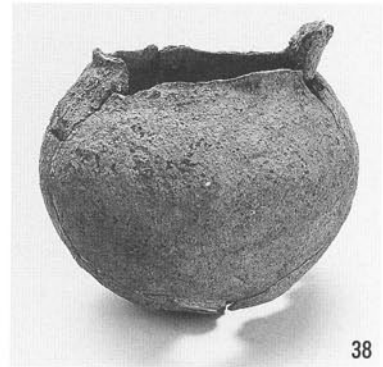
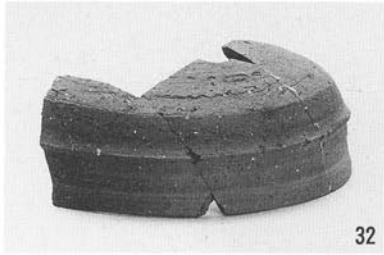


石組墓 2 (南から)

1号墳出土土器および1、2、4、8号墳出土鉄器



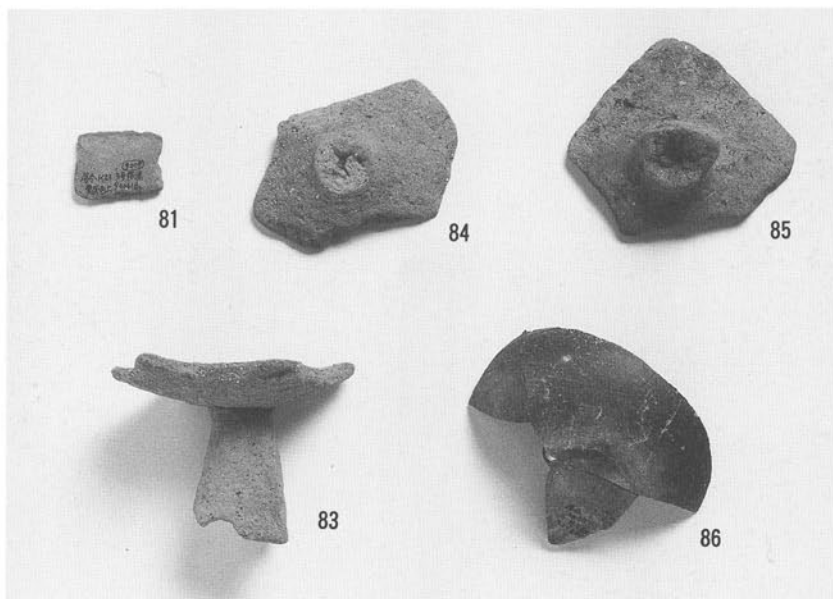


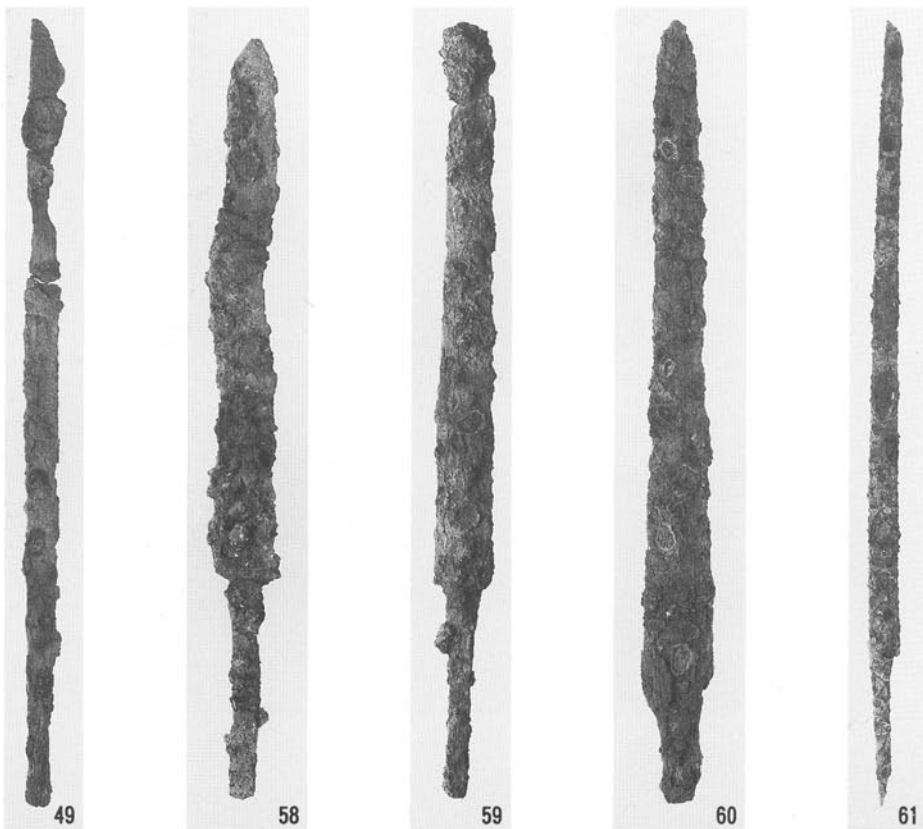
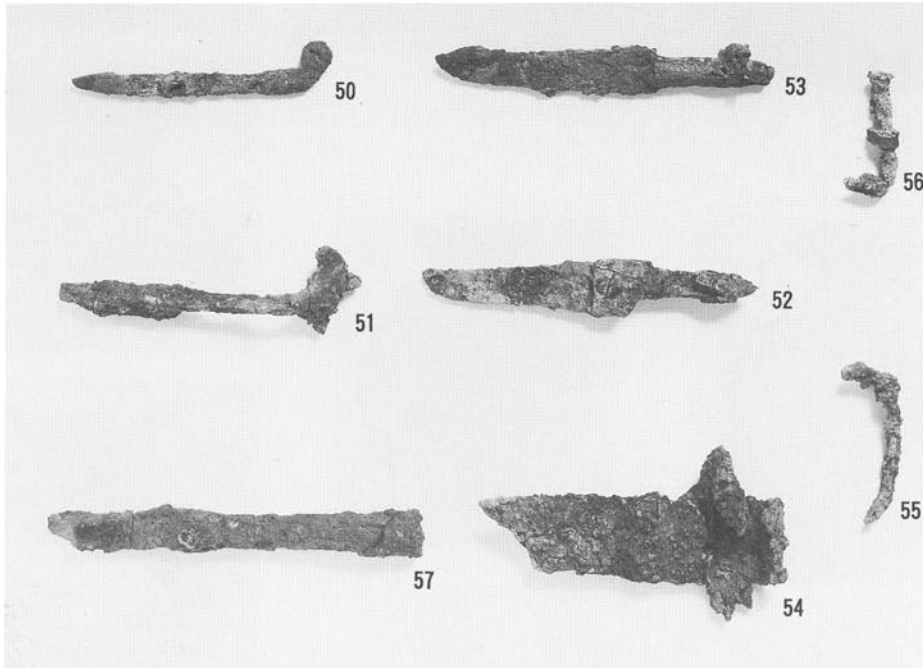
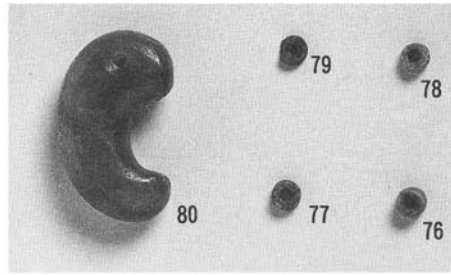


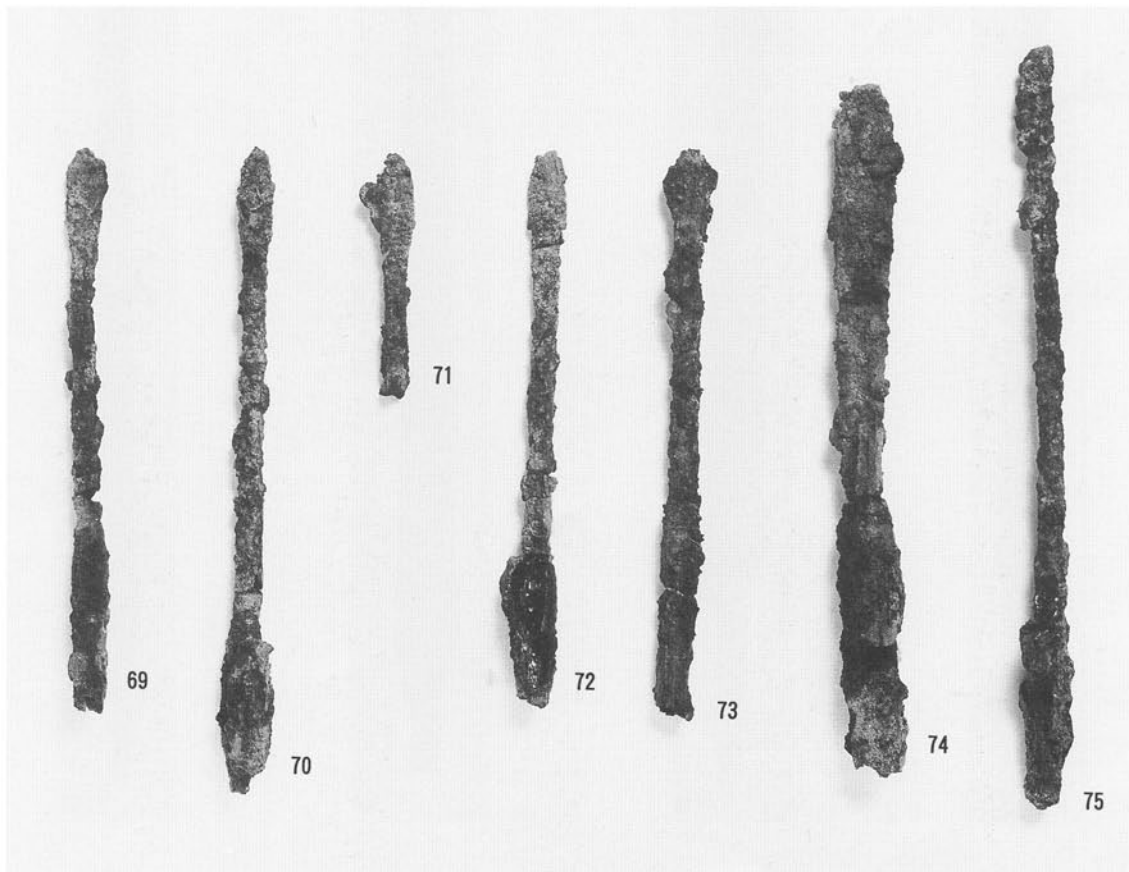
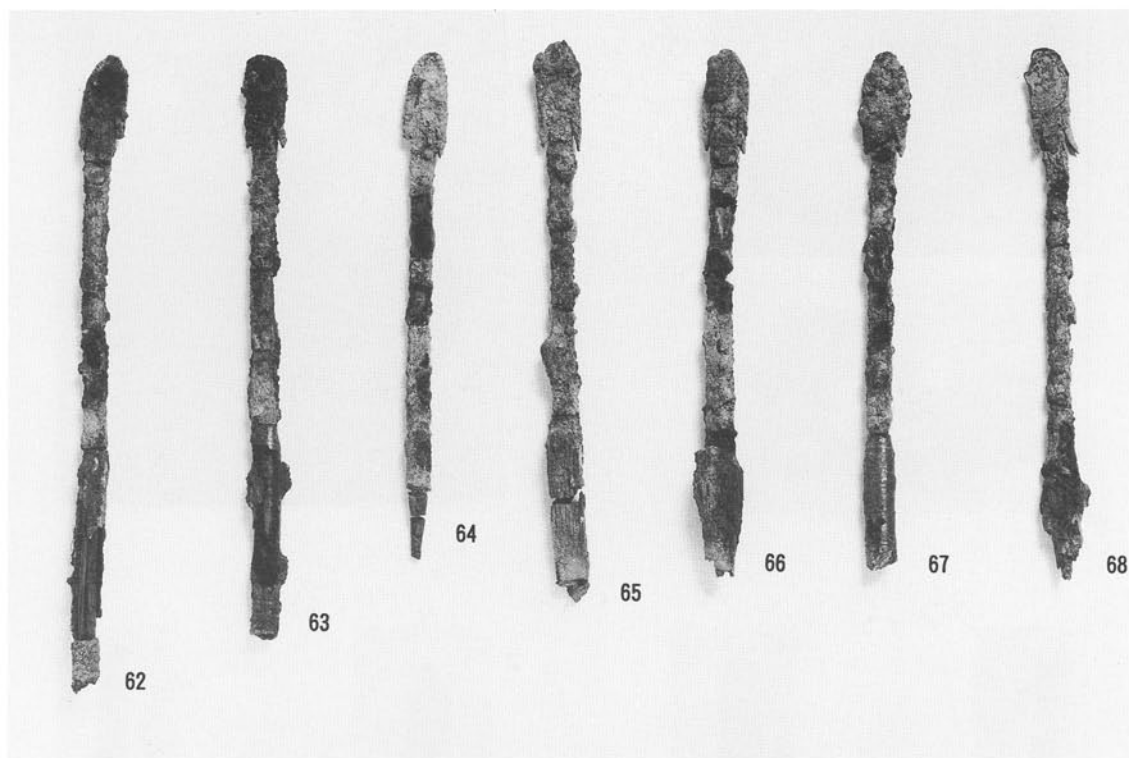
40~48



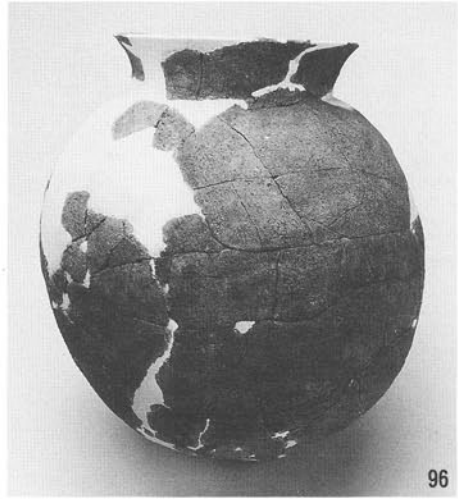
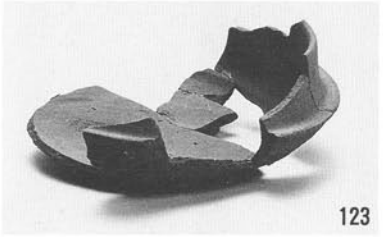
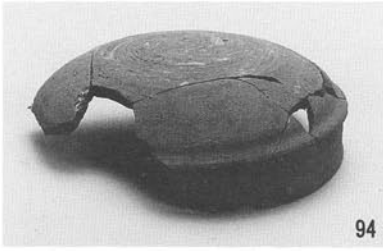
2号墳下部出土須恵器甕

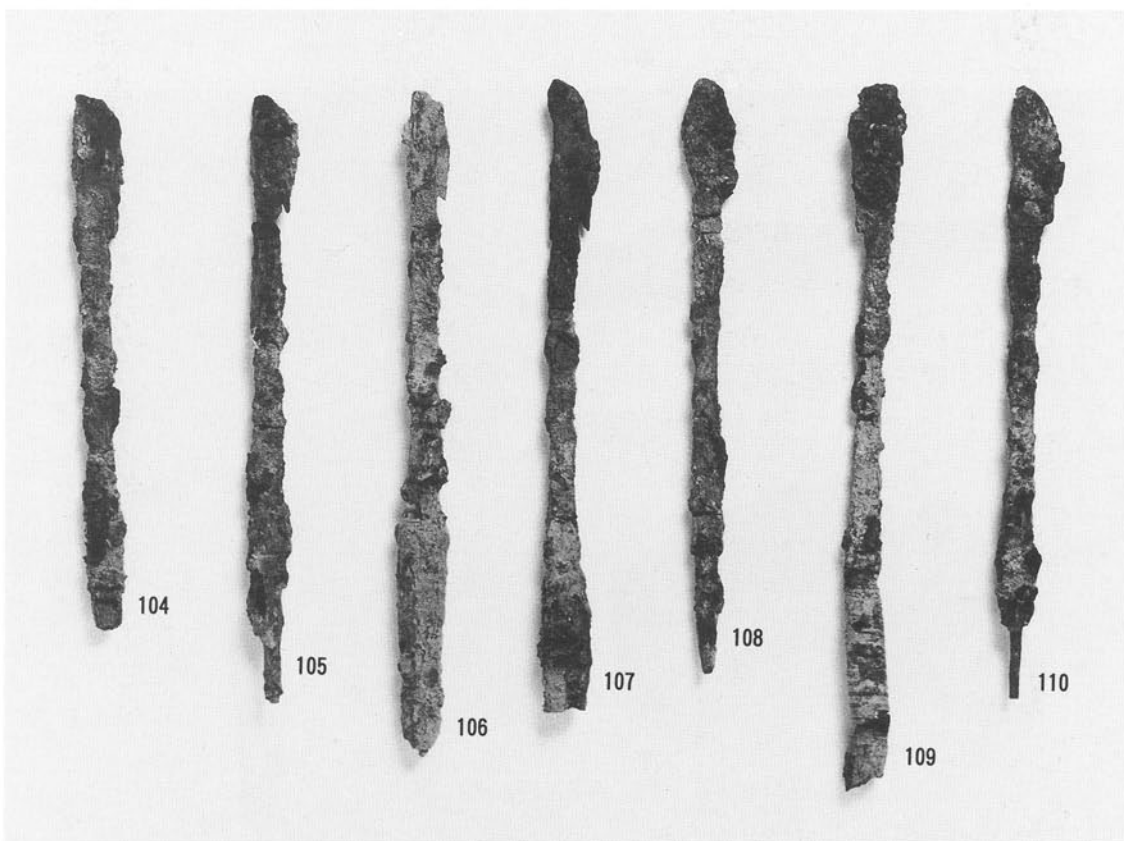
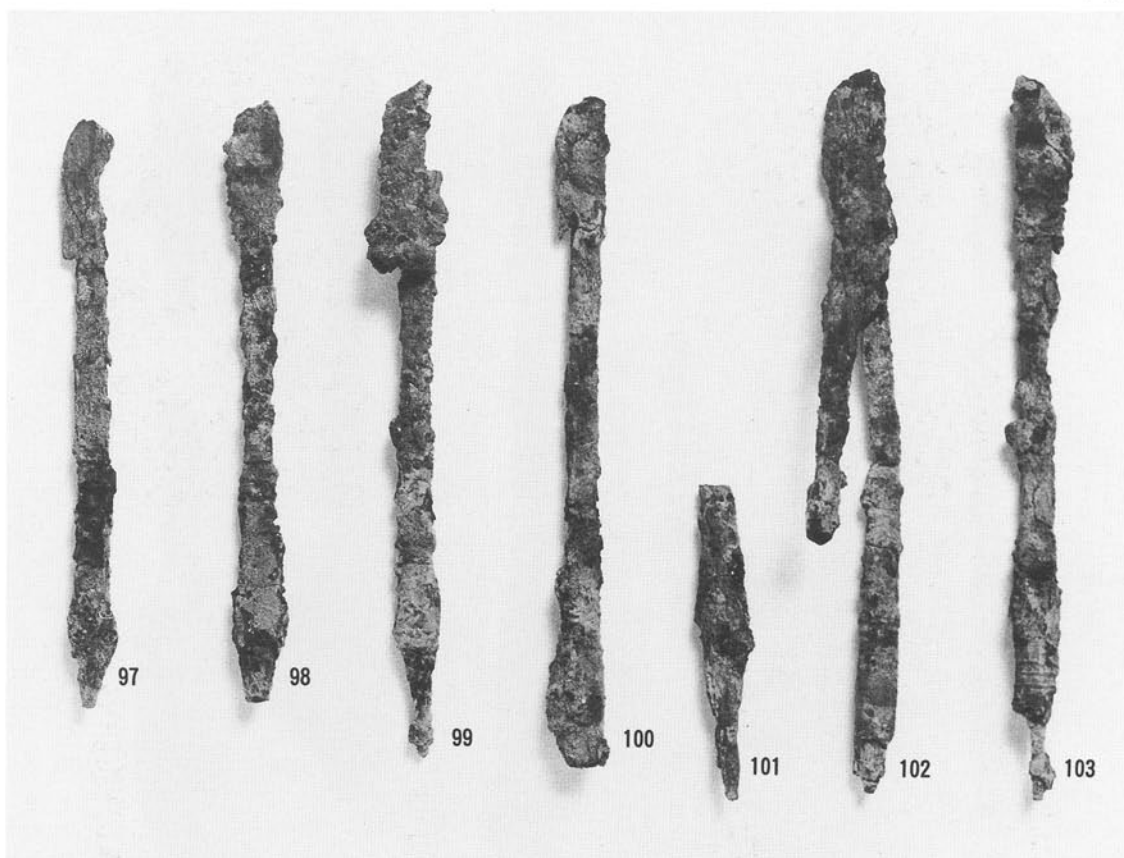


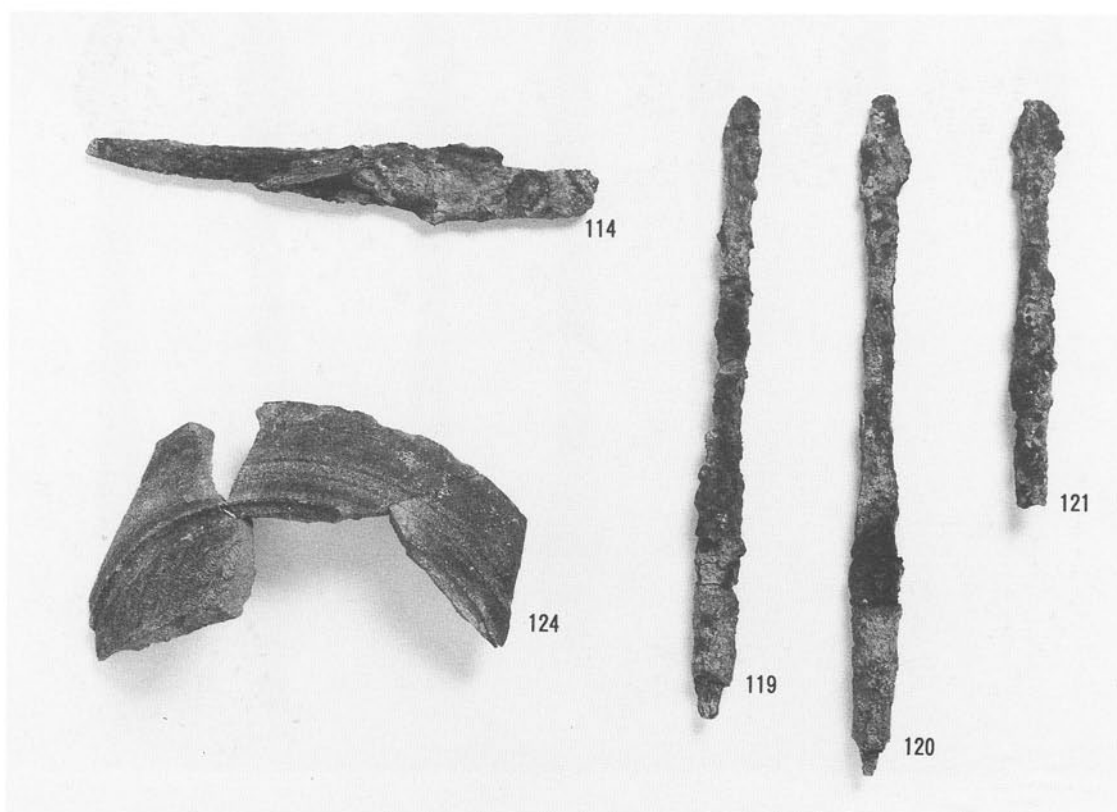
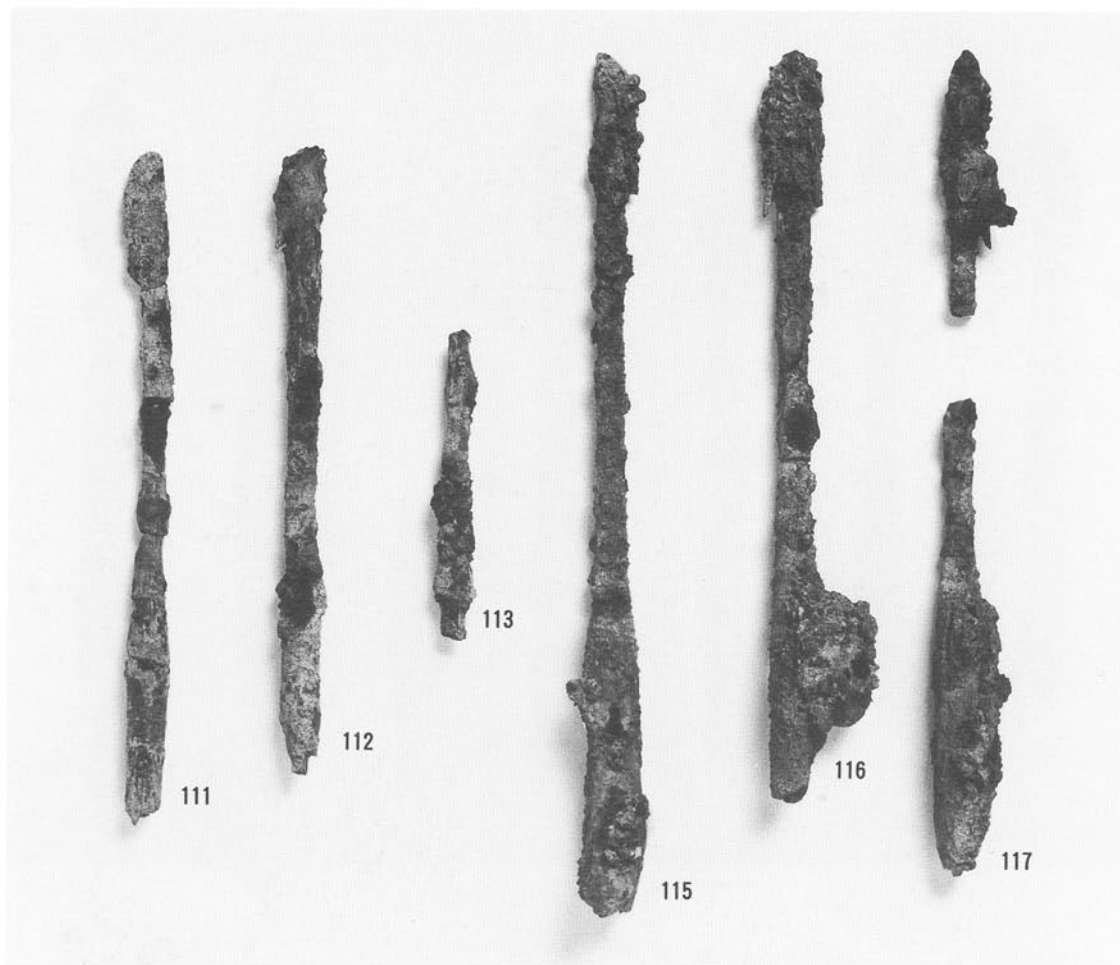


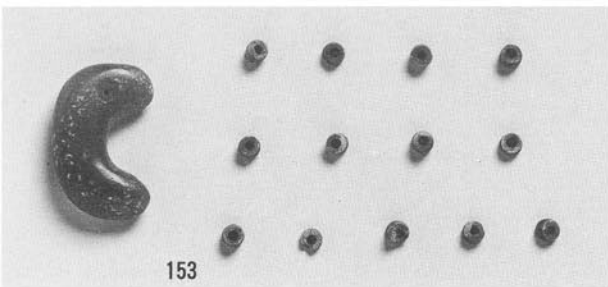
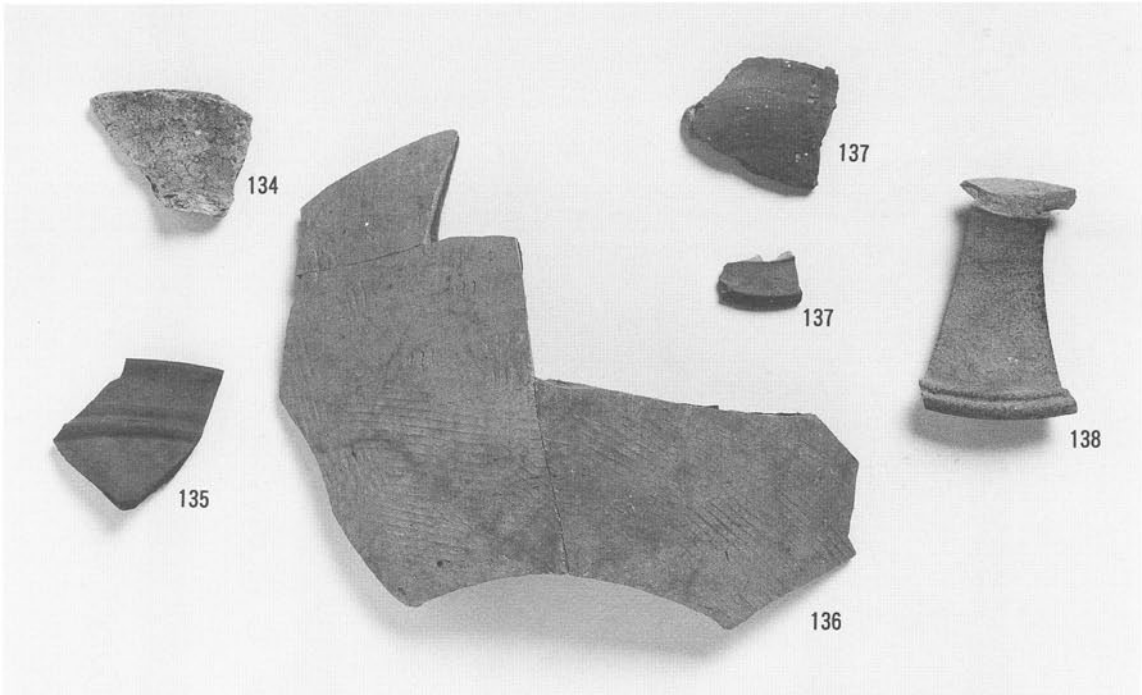
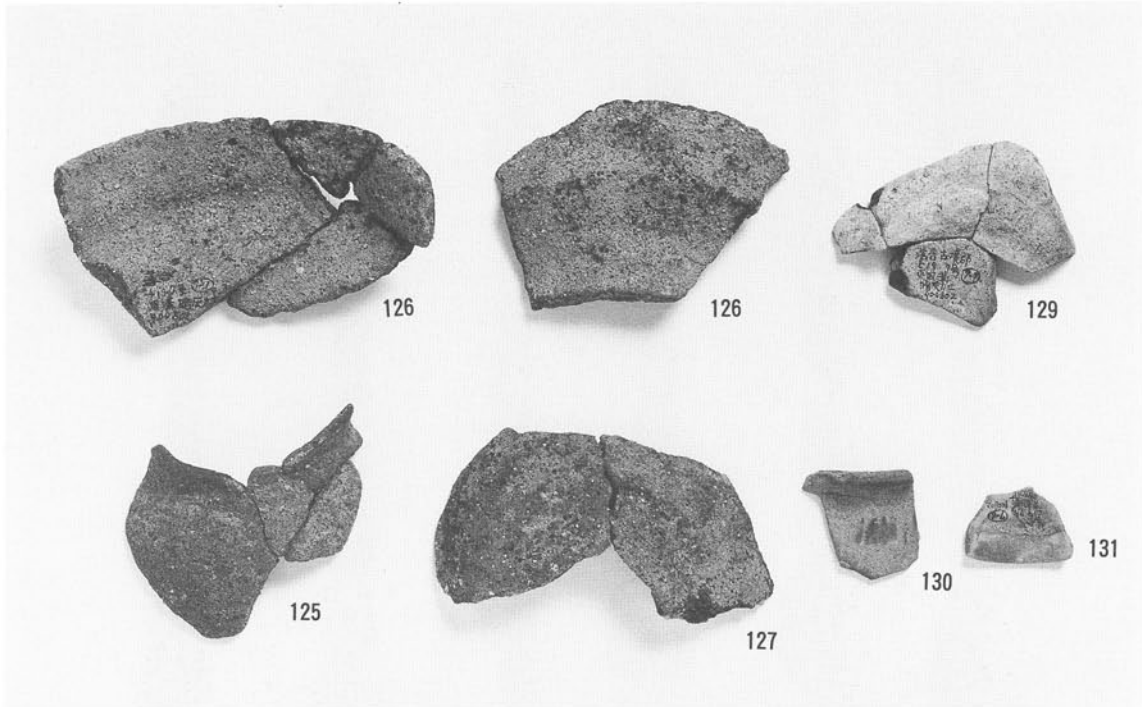


4・5号墳出土土器および5・8・10号墳出土鉄器

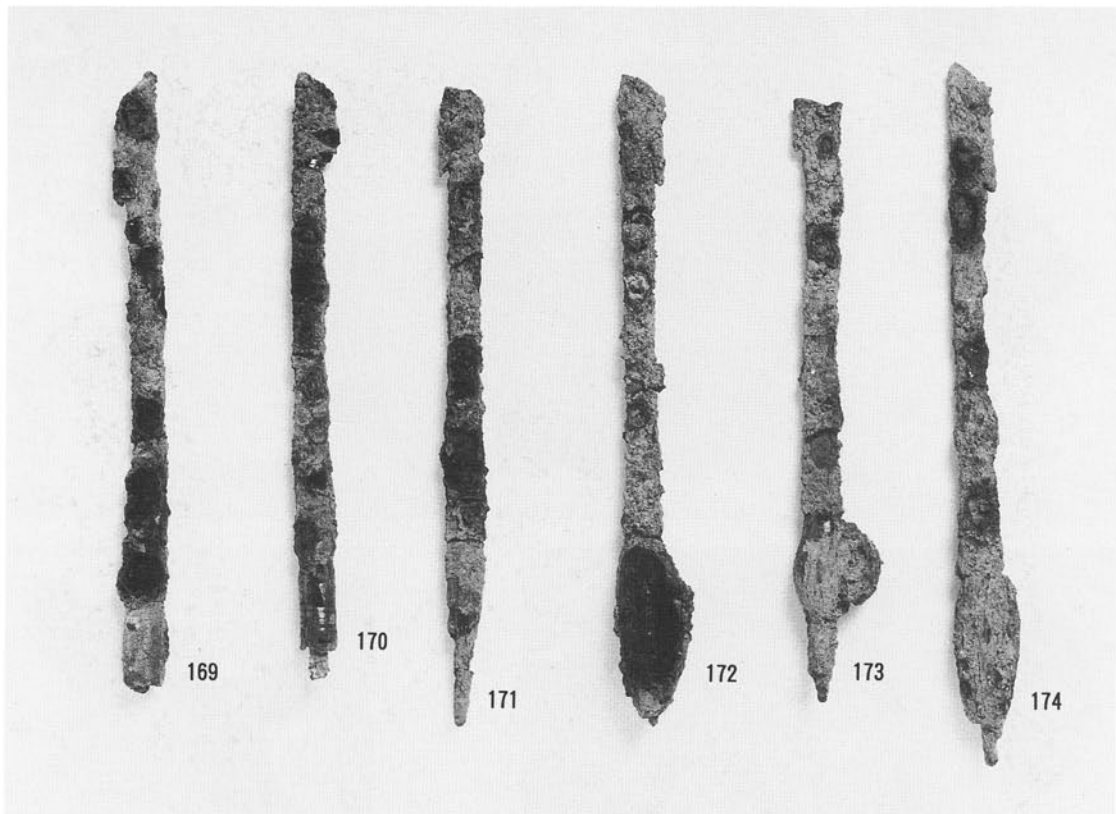


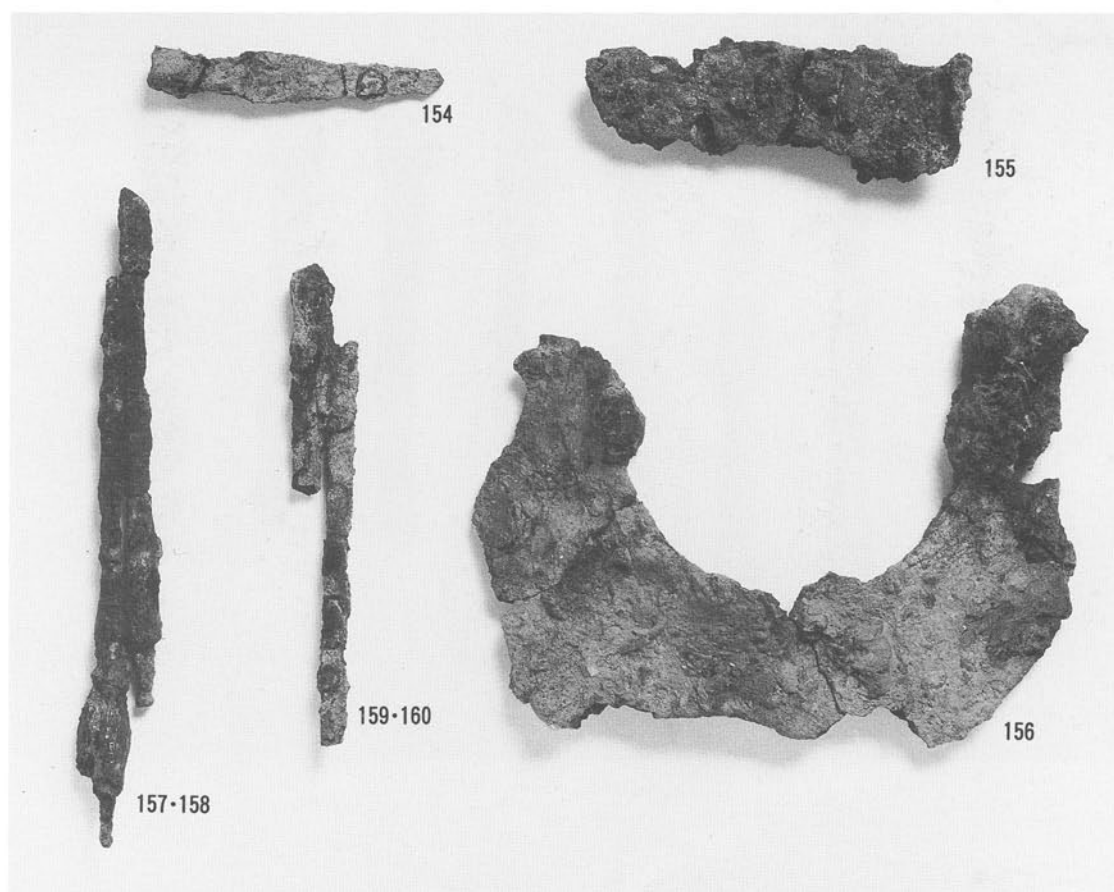
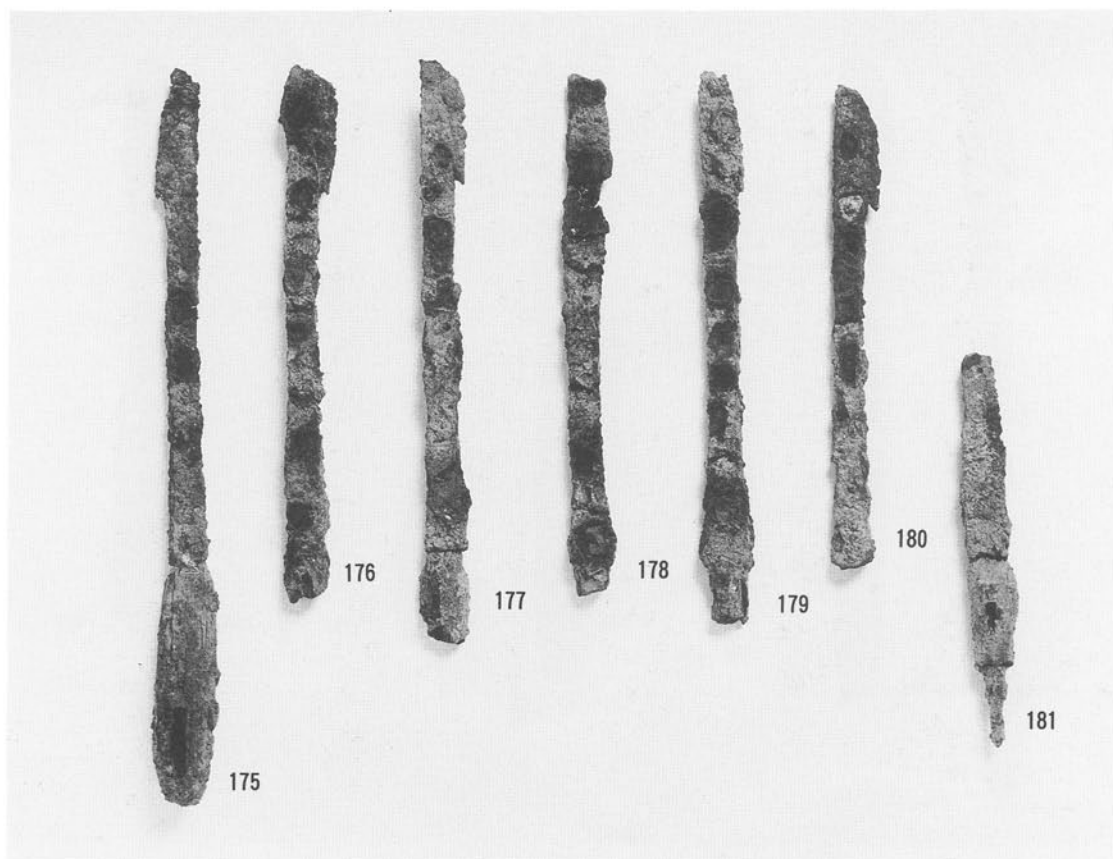


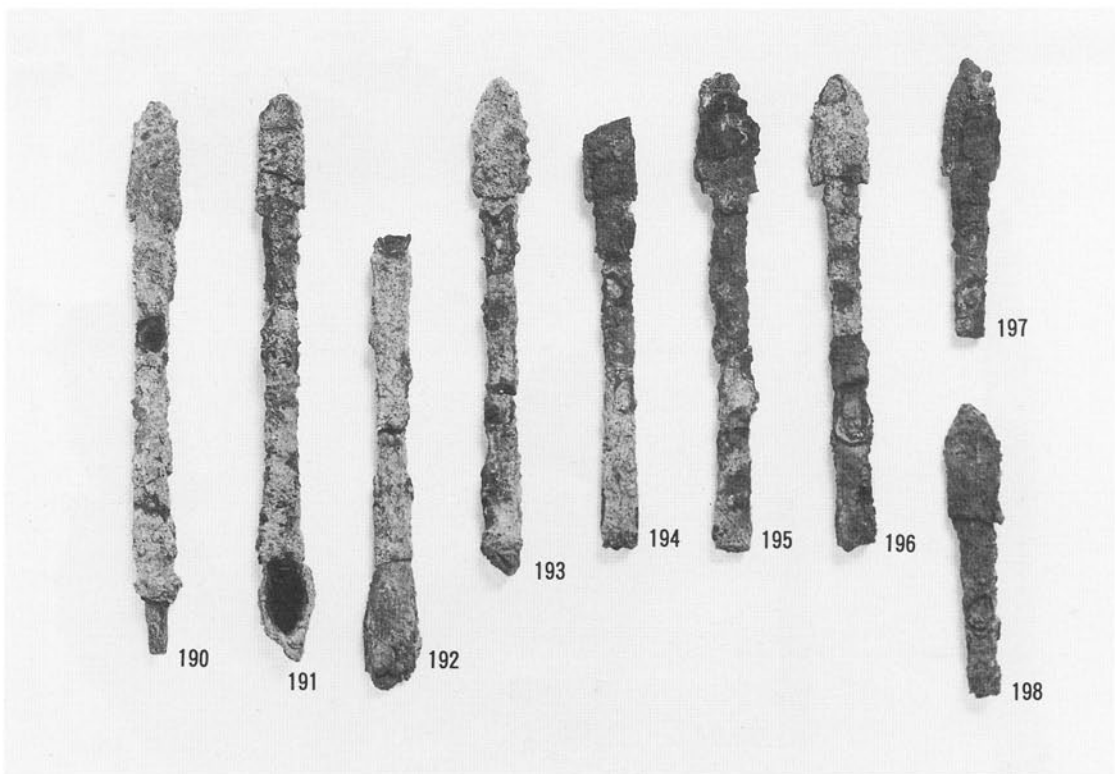
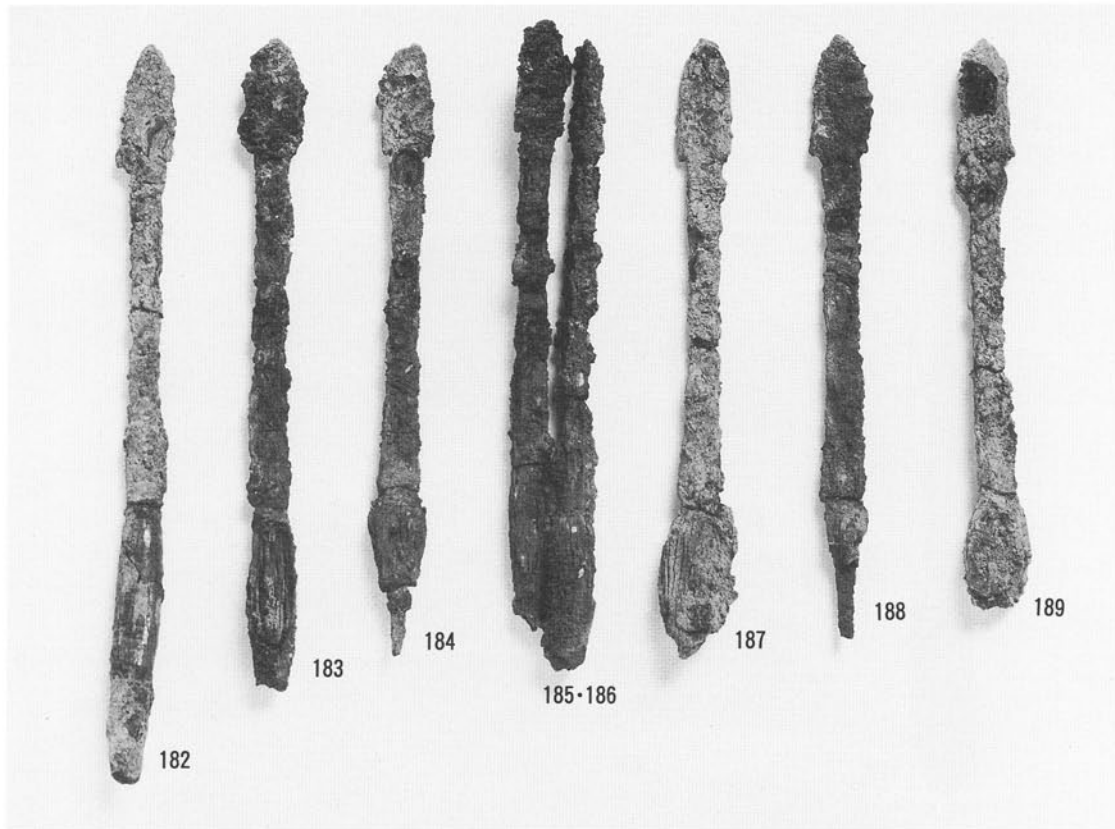




10号墳埋葬施設1出土鉄鏃







平成4(1992)年12月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告101-7

近畿自動車道（勢和～伊勢）

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第7分冊 ——

落合古墳群

1992（平成4）年12月

編集 三重県教育委員会

発行 三重県埋蔵文化財センター

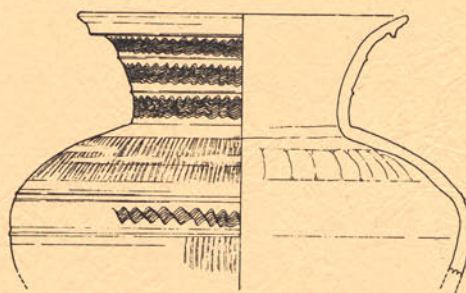
印刷 光出版印刷株式会社

The Report of Excavation
At The Kinki—Highway (from SEIWA to ISE)
of MIE Pref. JAPAN
vol. 7

OCHIAI Kofun Period Cemetery
—Ancient Burial Mounds—

Contents

- Chapter 1.** Progress of research
2. Surrounding
3. Excavation report—Kofun Period
4. Excavation report—Jomon Period
5. Scientific investigations
6. Conclusion



1992.12

Archaeological Research Center
of MIE Prefecture, JAPAN